

# 國學院大學学術情報リポジトリ

## 中国博物館学史の研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 彭, 露, Peng, Lu メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00002475">https://doi.org/10.57529/00002475</a>

國學院大學博士学位申請論文

# 中国博物館学史の研究

文学研究科史学専攻博物館学コース

平成 30 年度 博士課程後期入学

ホウロ  
PENG LU

184307

指導教員：青木 豊

令和 2 年 9 月

# 中国博物館学史の研究

## 目次

はじめに	1
序章 本研究の定義付・先行研究・目的と問題点の所在	4
第一節 本研究の定義付	4
1、博物館と博物館学	4
2、博物館史と博物館学史	4
3、近代的博物館	4
4、理論博物館学・博物館論・博物館学思想	5
5、博物館実践学・応用博物館学	5
第二節 中国博物館学史の先行研究	5
1、著書	6
2、論文集成	8
3、学術論文	9
第三節 本研究の目的	11
第四節 本研究の問題点の所在	12
第一章 中国博物館学史研究の歴史	16
第一節 「博物館」「博物館学」について	16
1、中国での博物館の定義の発展	16
2、中国での博物館学の定義の発展	21
第二節 博物館学の構築について	22
1、博物館学の構築の定義	22
2、博物館学の構築の標識	23
小結	24
第二章 中国博物館学の時代区分	27
第一節 既往の時代区分について	27
第二節 時代区分の提唱	30
1、揺籃期（1841~1904年）	30
2、確立期（第一次発展期 1905~34年）	33
3、構築期（第二次発展期 1935~48年）	35
4、変革期（第三次発展期 1949~65年）	36
5、迷走期（1966~77年）	39
6、中興期（第四次発展期 1978~89年）	41
小結	44

第三章 中国博物館学の前夜史	54
第一節 時代的背景	54
1、清時期	54
2、民国時期	56
第二節 国内の環境	57
第三節 国際的環境	61
第四節 中国における博物館学の展開状況	65
1、中国博物館学の濫觴	65
2、中国博物館学の構築の濫觴	67
小結	73
第四章 中国博物館学の揺籃期における受容と形成	
—日本の博物館学が中国へ与えた影響—	77
第一節 19世紀後半期における中国博物館学	
の揺籃期・博物館理論編	78
1、清時代末期における日本の博物館に関する紹介	78
2、戊戌の変法における博物館学意識	87
第二節 19世紀後半期における中国博物館学	
の揺籃期・博物館編	95
1、揺籃期に設立予定された博物館及び相当施設	95
2、揺籃期に設立された博物館及び相当施設	102
小結	121
第五章 中国の博物館学へ及ぼした日本の博物館学	
の影響の拡大	135
第一節 20世紀前半期における中国博物館学	
の確立期・博物館理論編	135
1、張謇の博物館論	135
2、天民の学校博物館論	142
3、新文化運動における博物館理論	146
第二節 20世紀前半期における中国博物館学	
の確立期・博物館編	154
1、張謇と南通博物苑	154
2、徐樹人と泰安博物館	156
3、国立歴史博物館	158
4、嚴智怡と天津博物院	161
5、故宮博物院	164
小結	170
第六章 日本の博物館学の影響と消長	

— 中国博物館学の変遷 —	178
第一節 日本の博物館学の影響の消長	178
1、費畊雨・費鴻年による『博物館学概論』	178
2、陳端志による『博物館学通論』	192
第二節 中国における博物館学の展開状況	192
1、中国における博物館の展開状況	193
2、中国博物館学に関する刊行物の出版状況	197
小結	220
第七章 1949年以前の中国博物館学に対する評価と	
中国の博物館と博物館学の現状	227
第一節 1949年以前の中国博物館学に対する評価	227
1、1949年以前の中国博物館学の成果	228
2、1949年以前の中国博物館学に対する評価	233
第二節 中国における博物館の現状	238
1、博物館数	239
2、分布	240
3、種類	240
4、博物館における新たな動向	241
第三節 中国における博物館学の現状	244
1、理念	244
2、研究方向	246
3、大学教育	249
4、法規	252
5、国際交流	254
小結	254
結章	260
おわりに	268
附録 中国博物館学史の年表	269



## はじめに

中国は、日本や西洋との往来が清朝末期頃から日増しに盛んになっていった。中国では、西洋の近代思想の受容に伴い、近代的博物館は、西洋の宣教師によって中国へ齎された。なお、中国は、洋務運動・戊戌の変法・光緒新政・辛亥革命・五四運動それぞれの社会の変革期においてを経過し、博物館に関する思想を受け入れていた。博物館思想の受け入れに伴い、当時の中国社会においても博物館学に関する研究の必要性は顕著になった。

一方、この時期の日本は、近代的国家を目指し積極的に邁進し、西洋の文明と技術を取り入れた。先進の技術と制度を輸入することにより、日本は経済力と軍事力が飛躍的に向上していた。このように、近代的西洋文明化によって、日本は伝統的な思想から近代的な思想への転換開が開始された。同時期の中国も、西洋の技術に関心を寄せていたところから、中国にとって日本における近代的博物館は、蒸気機関などの西洋科学技術と社会契約などの近代思想を広める場所として設置する必要性があったのである。

そのために、中国の有識者らは、日本の博物館学を学び始めた。最初には、日本に関する見聞録と渡日者の日記等で日本の博覧会と博物館の存在と内容を知った。1900年代に入ると、中国人の日本への留学が流行した。留学経験のある有識者らは、中国に帰国した後、博物館論を論述しながら博物館を設立し、中国博物館学を確立していった。その中で、張謇・嚴智怡などの代表的な博物館学研究者が次々に出現した。

1905年に創設が開始された南通博物苑や1912年に成立した国立歴史博物館筹备処および1925年に開館した故宫博物院などは、当該期の代表的な博物館として、中国の博物館学の発展にとって、画期的な意義を持っていた。また、当該期の中国博物館学の学術的特徴は、博物館が社会教育の役割を重視している点に注目した。

さらに、1935年に中国における最初の博物館組織である中国博物館協会が発足し、中国博物館学は新たな時期に入った。1936～43年までの間、中国博物館学界で出版された単行本は5種を数えた。費畊雨と費鴻年が著した『博物館学概論』（1936）、陳端志が上梓した『博物館学通論』（1936）・『博物館』（1937）・荊三林が出版した『博物館学大綱』（1941）・曾昭燏と李済が著述した『博物館』（1943）の5冊である。上記した単行本は、当該期の中国博物館学に関する研究の具体的な成果として、中国の博物館学研究にとって、重要な意義があったことは事実である。これらの単著の中では、費畊雨と費鴻年による『博物館学概論』は、日本の先駆的博物館学研

究者の棚橋源太郎が著した『眼に訴える教育機関』を模倣したものであった。一方、陳端志が上梓した『博物館学通論』は、『博物館学概論』との相似度が高いから、同じく『眼に訴える教育機関』を模倣している可能性もあると考えられる。

しかし、日中戦争の勃発によって、中国博物館学の発展は、大きな影響を受けた。動乱の最中にあった中国は、博物館学の発展に対して、平和な社会環境が保持できなかった。当該期の中国博物館学の発展は、主に博物館資料の保存に専従した。さらに、日中戦争によって、当然の結果として中国博物館学は日本の博物館学を学ぶことを一時的に中断せざるを得ない状況に陥った。

中国博物館学史に関する研究は、1980年代頃から本格的に展開し始めた。なお、現段階では、中国博物館学史に関する研究は、飛躍的に向上しているが、色々な問題点を露呈する状態になっている。この中で、中国では博物館学を独立の学問とする観点は、近年益々増長しているのが現状である。しかし、まだまだ中国における近代的博物館学の発展に対して研究の余白は多く、発展空間が大きいところから更なる仔細な研究が必要とされよう。

中国における博物館学は、歴史的には若い学域であるが今後さらに必要となる学であると筆者は考えている。

本論文では、中国での博物館学の発展期を明確にし、さらに中国博物館学は、日本博物館学に如何なる影響を受けたかを明確にすることである。中国では、清朝末期から、近代的博物館意識を受け始めた。当該期には、西洋と日本の博覧会と博物館が中国へ大きな影響を与えたことは上述した通りである。

さらに、中国博物館学界は、1930年代に入ると西洋と日本の博物館論を導入し、さらに日本の博物館学通論的な著書を輸入した。中国博物館学の構築は、日本の博物館学を模倣しながらその萌芽を見たが、残念ながら日中戦争のために中断された。それから、中国博物館学の発展は、自主の探索期へと邁進していた。中国博物館学は、日本の博物館学の模倣が中断されたが、日本の博物館学が中国博物館学の構築にとって、多大な促進作用を与えたことは事実である。

そのゆえに、日本の博物館学が中国へ与えた影響に関する研究が必要であると考えた次第である。さらに、1949年以前の中国の博物館学界が中国の博物館学発展のために実施した様々な努力を明確にすることにより、学術的に博物館学史研究のための重要な博物館史に関する情報を探究することで、今後の中国の博物館学史の研究に寄与することを目的とするものである。そのうえで、縦横に分析された当該期の中国博物館学の成果と課題を明らかにすることで、現実的には中国の現段階の博物館学構築をより良く指導し具体的に示す点を目的とする。



本論文の構成は、序章と結章を含めた 9 章から構成している。

第 1 章では、1930 年代以降の中国博物館学に関する「博物館」「博物館学」「博物館学の構築」などの用語の定義の歴史を論述した。

第 2 章では、筆者は 1989 年までの中国博物館学の時代区分を試作し、揺籃期（1841～1904 年）・確立期（第一次発展期 1905～34 年）・構築期（第二次発展期 1935～48 年）・変革期（第三次発展期 1949～65 年）・迷走期（1966～77 年）・中興期（第四次発展期 1978～89 年）の 6 つの時代区分として、詳細を論述した。なお、1989 年から現在までを充実期としているが、あまりの博物館の増加とこれに伴う博物館学の発展的変容であるところから、今後の課題とする。

第 3 章では、中国博物館学の起源と発展における時代的背景を論述し、国内の環境と国際の環境について言及した。さらに、中国における博物館学の展開状況を全体に論述することに努めた。

第 4 章では、日本の博物館学が中国博物館学の構築への影響の濫觴と推移を論述した。すなわち、清時代末期における見聞録・日記・新聞のなかで紹介・言及された日本の博物館である。さらに、戊戌の変法により発生した博物館学意識と、設立予定された博物館と設立された中国での初期の博物館についても論述した。

第 5 章では、中国の博物館学へ及ぼした日本の博物館学の拡大を論述している。さらに、日本の博物館論に影響する博物館学研究者の博物館論をあげて、当該期に設立された博物館に関して述べた。

第 6 章では、1936 年に費畊雨と費鴻年の共著による『博物館学概論』を、棚橋源太郎が著した『眼に訴える教育機関』と比較し、日本の博物館が中国博物館学に与えた影響を明確にすることに努めた。さらに、中国博物館学の自らの展開状況を記述した。

第 7 章は、1949 年以前の中国博物館学に対する評価と中国の博物館学の現状を論じた。

結章は、上記で論述した第 1～7 章の小結を纏め、結章としたものである。

## 序章 本研究の定義付・先行研究・目的と問題点の所在

### 第一節 本研究の定義付

本研究をよく理解するために、本論文で使用する用語を下記のように定義する。

#### 1、博物館学

本論文で論及する博物館学とは、博物館の各分野の理論化と博物館に関する事柄に関する学問である。すなわち、博物館学は、博物館の科学であり、博物館の歴史・博物館が社会に果たす役割・博物館に対する調査と研究・博物館の経営と活動などの課題を研究して、独立する科学的学問である。

博物館学の範疇は、博物館論・博物館の経営と活動・博物館教育・博物館資料の収集保管と展示・博物館史・博物館学史などの内容を含めている。そのために、博物館の設立・発展などの内容は、博物館学の発展であると考えられる。

#### 2、博物館史と博物館学史

博物館史は、ある具体的な博物館の発展の歴史であると考えられる。それに対して、博物館学史は、博物館学の発展と研究活動の歴史であると考えられる。

なお、博物館学史は、博物館史の内容を含めていると考えられる。

#### 3、近代的博物館

本論文が論及する「近代的博物館」は、近代的意義を持っている博物館である。すなわち、近代的博物館は、近代に入って、発達した博物館であり、保存・教育・研究・展示の諸機能を持つ機関である。

博物館の「museum」の本義は、ミューズと称する芸術の女神達の場所であり、芸術の珍宝を保存する知識交流の場所であった。文芸復興の時代に至って、博物館は、保存機能の上に教育・研究機能を発達した。さらに、17世紀から新航路の開拓は、博物館の発展にとって、画期的な意義があった。1683年に世界で初めての近代的博物館のアシュモレアン博物館（Ashmolean Museum of Art and Archeology）は一般に公開されたことをきっかけとして、近代的博物館は、発達した。

中国には、従来から「博物館」という施設がないが、博物館の機能を有した施設は、孔子廟・祖廟があった。孔子廟は、孔子の記念館として、孔子に関する物品を保存している。祖廟は、祖先の遺物

を保存し、祖先を祭る場所である。さらに、博物館の研究に類似する行為は、金石学であった。近代的博物館は、中国古来の孔子廟・祖廟と違って、保存・教育・研究・展示の諸機能を持つ機関である。

#### 4、理論博物館学・博物館論・博物館学思想

理論博物館学・博物館論・博物館学思想は、博物館の理論的研究のみであると考えられる。

具体的には、理論博物館学は、体系とする博物館論である。博物館学思想は、ある具体的な博物館学者の博物館の理論的研究である。

#### 5、応用博物館学・博物館実践学

応用博物館学・博物館実践学は、「*museography*」という用語の意味である。すなわち、博物館実践学は、博物館学の実用的または応用的な内容を含めて、博物館に関連する実際的な経営活動と業務に関する技術と定義される。例えば、博物館の施設の整備・修復・安全であり、博物館の資料の保存・展示である。

### 第二節 中国博物館学史の先行研究

本論文は、中国の博物館学史をめぐって、主に 1949 年以前の中国博物館学の起源と発展状況を研究し、さらに当該期の日本の博物館学の受容状況に関する検討である。

博物館学は、人文科学の一つの学域として、狭義には博物館という分野に関する一切の理論及び実践を指し、広義には社会学・教育学の範疇にも及ぶ学域である。当然のことながら狭義の博物館も、学術的なレベルに上昇し、より専門的な規範化のための研究に至っている。

中国の博物館学を検討することについては、広義の博物館学が主なものと思っている。

19 世紀中後期から、中国における有識者らは、西洋の近代的博物館に対する初歩的な意識を中国に紹介し始めた。なお、約半世紀の発展を経た、1905 年に南通博物苑は、開設されていた。これは、中国における博物館の最初の実践であり、この点に関しても中国博物館学の濫觴であると考えられる。それから、1935 年に中国博物館協会が成立したことは、中国博物館学の構築の濫觴と見なされる。中国の博物館学は、実践によって蓄積された経験が乏しい状況から、西洋と日本の理論と経験を吸収することにより、博物館自身の沿革の整理と統計または博物館史を研究の重点を置いていた。中国の博物館学者らは博物館学に対する一定の理解を持った後、当該期中

国博物館学界が期待した通り中国博物館学は、国家の滅亡を救い民族の生存を図ることをいみする「救亡図存」の歴史的な使命を担って、博物館学に関する研究は博物館実践学に重点を移行し、中でも教育機能に関する研究が中心となったものとの結論が導き出された。

ここであげた先行研究は、主に 2010 年以降の研究状況である。

## 1、著書

### (1) 専門書

中国において、博物館学史に関する専門著作物は、非常に少ないことが現状である。

2010 年代以前に中国の博物館学史を研究した代表的な専門書は、包遵彭が著した『中国博物館史』<sup>(1)</sup>である。当該専門著書では、中国における代表的な博物館の変遷を基に、中国の博物館学史を検討したものであり、中国博物館学史の研究にとって、画期的な意義を持っている。

2010 年代に入ると、中国博物館学界において博物館学史に対する研究は、さらに重視されてきた。中国の博物館学史に関する専門著作は、3 冊が確認される。

まず、徐玲は、2015 年に『博物館與近代中国公共文化（1840—1949）』<sup>(2)</sup>を出版した。当該書には、中国での近代的な博物館意識・近代中国博物館の設立と発展・中国博物館学の発展・博物館と社会教育の発展などの内容を論及し、1840～49 年までの中国博物館学史を詳しく論述している。当該書は、本論文と同時期と扱っているが、当該書が主に公共文化の視点から、中国での近代的な博物館の発展を研究している。本論文は、主に同時期に日本の博物館学が中国へ与えた影響を論述している。

さらに、徐堅は、2016 年に『名山：作為思想史的早期中国博物館史』<sup>(3)</sup>を上梓した。徐は、博物館の概念の変遷・中国での早期における代表的な博物館・考古博物館・大学博物館・博物館組織・博物館論の展開などの内容を含めて、思想史学の分野によって中国博物館史を検討している。

最後に、呉昌穩は、2018 年に『民国時期的中国博物館協會與中国博物館学』<sup>(4)</sup>を著した。本書は、主に中国博物館協会に関する史料をあげて、中国博物館協会の成立と発展、中国博物館協会が中国博物館学に果たした役割等を研究している。

### (2) 著書（通論）

著書については、主に博物館学の概論と通論に関する著書の中で、博物館学の歴史に関する部分で論及した。例えば、傅振倫の『博物

館学概論』(5)の「第二章 博物館事業発展史略」では、中国と外国の博物館事業の発達史を論述し、特に、ソビエト社会主義共和国連邦の博物館事業の状況を論述している。文化部文物局が出版した『中国博物館学概論』(6)の「第一章 中国博物館事業的發展道路」では、中華人民共和国の建国前と建国後の博物館の發展状況を論述している。馬継賢の『博物館学通論』(7)の「第一章 博物館的產生和發展」「第二章 中国博物館的產生和發展」「第三章 中華人民共和国成立後博物館事業的發展(1949年至今)」では、外国と中国における博物館学の發展を論述している。王宏均の『中国博物館基礎』(8)の「第一編 博物館学基本理論和博物館歴史」の中で、「第二章 博物館学的歴史發展」・「第五章 博物館歴史」・「第六章 当代博物館」では、博物館学史と博物館史を論述している。耿超らの『博物館学理論述與實踐』(9)の「第二章 博物館学及其学科体系」の「第一節 博物館学的歴史與定義」と「第三章 博物館的歴史」では、博物館学史と博物館史を詳細に論述している。その中で、中国の博物館史に関する時代区分は、博物館史の研究にとって重要な意義がある。徐玲の『博物館学的思考』(10)は、中国博物館学の發展・博物館資料の發展・博物館教育の發展などの内容を論述している。『博物館学概論』編写組の『博物館学概論』(11)の「第一章 博物館学發展史」と「第三章 博物館的發展歷程」では、博物館学史と博物館史を論述している。

上記の著書が博物館学の通論的な著書であるから、博物館学史に関する内容は、概論的に記述するように十分ではないことが理解できる。しかし、上記の著書によって、中国の博物館学史に関する研究はある一定程度の促進が確認される。

### (3)文献目録

2010年10月に新華出版社が結成され、段勇編集長によって侯春燕・陳為・趙冠群が編集した『中国博物館学研究論著目録』(12)が刊行された。当該目録には、1905年に張謇が著した「上南皮相国請京師建設帝国博覧館議」から、2009年に吉林大学のスリランカからの留学生アリグラムが記した博士論文である「博物館学理論和原則的研究」までを収録し、中国の博物館学100年間の研究成果を全面的に網羅し、2万5千件の論著を掲載し、さらに1400種類の雑誌や新聞や論文集などと1,100冊の単行本を収録した画期的目録である。

上記の目録の体裁は、A4版で、上下2冊にからなり、上冊は中国語で記され、下冊は英語である。内容構成は、単行本と論文と付録の3項から成り立っている。さらに、単行本は著述と翻訳書2種類に分別されている。

論文の種類については細分化がなされ、12項目に分節され基礎理

論・博物館史・蔵品の収集と保管・展示・宣伝とサービス・博物館の文化財(遺産)の保護・博物館におけるデジタル化・発展と管理・博物館の建物と設備・規則制度・海外の博物館と博物館学の翻訳書・修士論文と博士論文であり、各種類の論文を時間軸順で配列されている。

上記の大型文献目録は、収録範囲が広く収録項目は博物館学域を網羅的に取り扱い、科学的で合理的な編成である。勿論、上記の目録には、一部の遺漏は認められるが、学界は当該目録に肯定的な態度を持ち、学術的評価をおこなっている。

#### (4)その他

1993年に『中国大百科全書・文物博物館巻』<sup>(13)</sup>が出版された。百科事典の一つの分冊である当該事典には、中国における文物研究と博物館に関する発展を記録している。当該事典の作成は、中国博物館学史の研究にとって、重要な史料である。

## 2、論文集成

中国博物館学史の研究に関する論文集成は、急速に発展した。

### (1)個人的論文集成

個人的論文集成とは、著者自らが著した複数の論文を集めて掲載している単行書である。

1990年代に、中国の博物館学界は、中国の博物館学史の研究を傾倒していた。最も代表的な人物には、蘇東海がいる。蘇は、1998年<sup>(14)</sup>・2006年<sup>(15)</sup>・2010年<sup>(16)</sup>に3冊の個人的論文集成を作成し、中国における博物館学の発展・博物館学史などの内容に論究した。その上で、蘇は、主に1949年以前の中国における博物館学の特徴を纏め、西洋に学んだ社会的な使命は当該期の中国博物館学の最も重要な使命であったと考えられる。蘇は、当該期の中国博物館学の構築に対しては肯定的な態度を持っており、博物館学の構築の嚆矢であると指摘している。

2000年代に入ると、呂濟民は、2004年に『中国博物館史論』<sup>(17)</sup>を出版した。当該書は、呂の博物館史に関する論文を収集し、中国博物館史の概要・中国博物館の課題・中国における有名な博物館の歴史・博物館と有名な政治人物などの内容がある。

2009年に、宋伯胤は『宋伯胤文集・博物館巻』<sup>(18)</sup>を出版した。その中で、張謇・蔡元培・魯迅・嚴智怡・楊鐘健・林惠祥・楊成志・陳嘉庚・曾昭燏などの博物館学研究者に関する論述があった。同年に、宋向光『物與識—当代中国博物館理論與実践辨析—』<sup>(19)</sup>を上梓し、中国博物館学の発展を研究した。当該書は、博物館学と博

博物館実践である二つの部分の論文を分けて、博物館学理論・博物館学史・大学博物館・博物館教育・特色のある博物館などの内容があった。

## (2)学会論文集

中国博物館学会は、1983年に『博物館学論集』<sup>(20)</sup>を編集出版し、中国博物館学史に関する論文も収録した。

2005年には、中国における博物館事業は1905年に張謇が南通博物院を設立して以来百年を迎えた。なお、中国博物館学会は、百週年を記念するために、学術シンポジウムを開催し、その折に『回顧與展望：中国博物館発展百年—2005年中国博物館学会学術研討会文集—』<sup>(21)</sup>を記念出版している。当該論文集により、中国博物館学史の発展は注目されることとなった。

## 3、学術論文

上記の論著より、中国博物館学史に関する学術論文の出版は、注目すべきである。

中国の博物館学界で、中国博物館学史を意欲的に検討したのは、1980年代以降である。代表的な人物は、梁吉生がいる。梁は、1980年代に「旧中国博物館歴史述略」<sup>(22)</sup>「論旧中国博物館事業的歴史意義」<sup>(23)</sup>などの論文を発表し、中国博物館学の変遷を論及した。

2000年代に入ってから、中国博物館学に対する研究は、急速な発展段階に移行した。甄朔南は、「中国博物館学百年発展述略」<sup>(24)</sup>を著述し、中国における博物館学史の発展について検討した。

さらに、2001年に国家文物局は、プロジェクトを審査の結果、湖南省博物館に全国文化財・博物館システムの人文社会科学重点の研究課題<<中国博物館学史研究>>を担当させた。湖南省博物館の館長である陳建明は、この研究課題をきっかけにして「關於開展中国博物館学史研究的構想」<sup>(25)</sup>を著し、中国博物館学史に対する研究を明確に提出した。なお、<<中国博物館学史研究>>課題組は、陳を推進者として中国の博物館学史研究を徹底的に追及したのであった。「中国博物館学史」課題組が発表した報告論文である「知識・理論・体系・学科—中国博物館学研究軌跡檢視—」<sup>(26)</sup>は当該課題に関する総括的な成果論文である。当該論文には、中国博物館学の発展を論述し、中国博物館学史に関する研究を評価し、さらに中国博物館学史に関する研究の不足点を指摘している。なお、ここで注目すべき事は、陳が2005年に発表した「漢語“博物館”一詞的產生與流傳」<sup>(27)</sup>と、上記の研究報告書には、中国博物館学界において「博物館」という用語が1841年に林則徐及び幕僚らが翻訳・編纂した『四洲志』の中に初見がみられる点を明確にしている。

さらに、徐玲は、2007年に「中国近代博物館学研究綜述」<sup>(28)</sup>を著して、中国博物館学史に関する論文を詳しく検討した。また、徐は、2014年に「中国博物館学学科発展的回顧與反思」<sup>(29)</sup>を作成し、中国博物館学の発展を評価している。趙冠群は、同年に「中国博物館学與中国近代早期博物館」<sup>(30)</sup>を発表した。

一方、博物館学史研究の学位申請論文については、中国博物館学史に関する研究が注目を受けた。

修士論文には、次の論文が例として認められる。『近代中国博物館源起探析』<sup>(31)</sup>『晚清西方博物館觀念在中国的傳播』<sup>(32)</sup>『来華外国人所建博物館研究』<sup>(33)</sup>には、中国博物館学の起源を研究して、清朝末期に西洋から中国に輸入された博物館に関する思想と理念、さらに受け入れ後の中国における変遷過程を重点に分析した労作であると評価できよう。『博物館與中国近代社会变革研究』<sup>(34)</sup>『传承中的裂变』<sup>(35)</sup>『中国近代博物館学研究』<sup>(36)</sup>などの論文は、中国の近代的な博物館学史を全面的に把握し、中国博物館学の起源と発展について詳細に論及している。『現当代中国博物館演進之軌跡』<sup>(37)</sup>『湖南省博物館事業的歷史發展研究（1951—2007）』<sup>(38)</sup>には、特定の博物館をあげて、中国博物館学史の一面を研究している。また、吉林大学の修士論文である『晚清時期《申報》（1872—1911）與博物館信息傳播研究』<sup>(39)</sup>と『《申報》（1912—1949）博物館史料初步整理與分析』<sup>(40)</sup>は、吉林大学が導入した「《申報》データバンク」を利用して、『申報』に掲載された博物館学に関する内容を検討している。この「《申報》データバンク」とは、『申報』が1872年4月30日に創刊され1949年5月27日に廃刊になるまで、発行した約42万版のデータを収集しているデータバンクである。具体的には、上海版の26847期・漢口版の489期・香港版の198期で合計27534期である。『新中国博物館管理法律制度研究』<sup>(41)</sup>は、中国で制定された博物館に関する法律を研究して、新たな分野で博物館学史を検討している。『曾昭燏的博物館学思想研究』<sup>(42)</sup>では、中国博物館学で代表的な女性人物の博物館論を研究している。『民国時期博物館社会教育研究』<sup>(43)</sup>は、博物館の教育機能を論述している。

博士論文では、『中国博物館学理論体系形成與發展研究』<sup>(44)</sup>は、中国博物館学の発展を整理分析し、中国博物館学の理論の体系を検討している。『清末民国文化遺產保護的興起與演進研究』<sup>(45)</sup>は、文化遺産の保護を主に論述している。『張謇與南通博物苑』<sup>(46)</sup>は、博物館学人物を研究し、張謇の博物館論と南通博物苑の発展を詳細に論述している。『民国時期中国美術的海外傳播』<sup>(47)</sup>は、美術と美術館・展覧会を検討している。

上記の先行研究によって、近年では中国博物館学史に対する研究が重視になる。しかし、中国博物館学史に対する研究の視点は、主



に全体的な視点であった。本論文は、中国博物館学史の時代区分が行われていた上で、日本の博物館学が中国へ与えた影響を論述し、中国博物館学の発展に対する作用を研究している。

### 第三節 本研究の目的

中国における博物館学は、歴史的には若い学域であるが今後必要となる学であると筆者は考えている。一方、中国で博物館学が独立の学問とする観点は、近年益々認められているのが現状である。紛れもなく、中国における近代的博物館学は、スタートが遅れたため、不完全な内容が多く難易度も高いと一般的に把握されている。だからこそ、研究の余白が非常に多く、发展空间が大きいところから更なる仔細な研究が必要とされよう。

本論文の主な目的については、中国における博物館学の発展期を明確にし、さらに、中国博物館学は、日本博物館学に如何なる影響を受けたことを明確にすることである。この影響を明確した上で、中国博物館学の発展に対する作用を検討している。

中国では、清朝末期から近代的博物館学意識の受容が開始された。当該期には、西洋と日本の博覧会と博物館が中国へ大きな影響を与えた。さらに、1930年代に入ると、中国博物館学界は、西洋と日本の博物館論を導入し、さらに日本の博物館学通論的な著書を輸入している。中国博物館学の構築は、日本の博物館学の模倣により行っていたが、残念ながら日中戦争のために中断された結果となった。その後の中国博物館学の進展は、自主的な探索期に移行した。中国博物館学は、日本の博物館学の模倣を中断したが、中国博物館学の構築にとって、日本の博物館学が非常に促進作用を与えたことは事実である。その故に、日本の博物館学が中国へ与えた影響に関する研究は、不可避であると考えられるのである。

本論文を記す目的の1つは、1949年以前の中国の博物館学界が中国の博物館学発展のために実施した様々な努力を明確にすることにより、学術的に博物館学史研究のための重要な博物館史に関する情報を探究することで、今後の中国の博物館学史の研究に寄与することである。

第2点は、さらに縦横に分析された当該期の中国博物館学の成果と課題を明らかにすることで、現実的には中国の現段階の博物館学構築をより良く構成して具体的に示すことである。以上2点の理由に基づいて本論文は、1949年以前の中国の博物館学の構築の状況について分析研究するものである。

1949年以前の学界は、博物館学の構築と発展に関する研究を開始し、それによって博物館学史のために学術的な研究内容を提供した。

他方では、1949年以前の学界は博物館学の構築に関する損得を探求して、合理的な評価を下した。本論文により、今後の中国博物館学の進路に関する討議に貢献することを目的とする。

一方、所謂学という学術の分野は、学問自身の発展史を研究することが必要であり、学問の発展のレベルも自身の学史の研究で理解できうるものである。故に、博物館学史についての研究は、必要であり重要であると考ええる。しかし、近年の博物館学の論文は、中国の博物館の注目点と重点が応用博物館学や理論博物館学などに集中している。この点は、博物館学の構築の検討が少ないことに起因するものであり、博物館学史を博物館学の研究方法・方向として記した本論文は、中国の博物館学の構築にとって一定の貢献をなすものと考えている。

本論文で検討するのは、主に1949年以前の中国の博物館学の発展と、日本の博物館学が与えた影響であることである。さらに、本論文は、当該期の実際の資料を根拠として、当該期に中国博物館学の構築の状況を分析することである。本論文は、かかる視座に立脚し、1949年以前の博物館学の学術成果を深く探究する研究である。そして、当該期に取得した研究成果と経験教訓は、現段階で中国の博物館学の構築の重要な資料として、参考と警告の役割を果たすことになると思われる。

さらに、中国の博物館事業の発展の具体的な史実を結合し、中国の博物館学の構築の過程を研究する。その上で、博物館学の発展法則を明らかにすることができることを望み、博物館学の発展方向を探究し、現段階での中国博物館学界のために健全な博物館学の体系構築を目的とする。

またそれは、中国の近・現代史の歴史の解明にも繋がっているものと考えている。

#### 第四節 本研究の問題点の所在

中国博物館学界は、博物館学史に関する研究をますます重視している。さらに、中国博物館学史の体系的な整理と研究を展開することは、中国の博物館学の発展と構築に非常に必要な研究であり、同時に多くの研究者や知識人が注視する事柄でもある。

なお、中国博物館学に関する研究の現状については、まだまだ研究の段階にあり、身につけた基礎理論では足りないのが現状である。すなわち、基礎理論と実践経験が豊かな完全な学問体系を支え得る現状ではないといった中国の博物館学史の研究に対して、荊棘な意見もある。また、博物館学に関する諸概念についての統一的な基準がないことなどの不確実性によって、同様な概念に定義の差異が認

められる。例えば、「博物館学」・「理論博物館学」・「応用博物館学」などの用語の定義である。さらに、具体的な年代ついでの問題も博物館学史においても論争があり、時間軸の区分と時間帯の区分も学术界の議論の話題となっている。中国の博物館学に関する不足点は、観念意識の遅れと研究内容の狭小性、文献分析法のみの研究方法の単一性などからの表出でもあると考えられるのである。

まず、史料の散逸に拠る研究資料の欠如の為に、博物館学史の展開には不確実性が多分に存在している。すなわち、実証が不足のため、真偽の判定は確認できないことである。

次に、研究観念の停滞は、中国の博物館学の構築を行うに当たっての主たる問題である。確かに、近年多くの研究者は、権威を盲信すべきではないことを意識したが、自主的な創造革新の力が足りないことも現状である。

さらに、博物館学の構築についての研究は、博物館の応用研究が多く、理論的な研究が不足している中で、博物館学史における学の構築についての研究は存在するが、深化した研究は稀有であると看取される。博物館の応用研究は、主に博物館の経営など実際の課題を含めている。

最後に、研究方法は、実践が理論の唯一の源であるが、初期の中国博物館学界の研究成果は効果的な吸収がなされておらず、博物館学の構築が完成できない状況であると考えている。無論、博物館学の研究にとって、実践が最も重要であることは確認するまでもないが、学史である先人の経験と教訓を盲目的に無視することは学術としての研究姿勢ではないと考える。

なお、研究方法については、本論文では文献研究・データ分析・比較分析などの方法を含めて実施する。

## 註

- (1)包遵彭 1964『中国博物館史』台湾中華叢書編審委員会
- (2)徐玲 2015『博物館與近代中国公共文化(1840—1949)』科学出版社
- (3)徐堅 2016『名山：作為思想史的早期中国博物館史』科学出版社
- (4)吳昌穩 2018『民国時期的中国博物館協會與中国博物館学』文物出版社
- (5)傅振倫 1957『博物館学概論』商務印書館
- (6)文化部文物局 1985『中国博物館学概論』文物出版社
- (7)馬繼賢 1994『博物館学通論』四川大学出版社
- (8)王宏均 2001『中国博物館基礎』上海古籍出版社
- (9)耿超ほか編著 2018『博物館学理論述與实践』科学出版社

- (10)徐玲 2018『博物館学的思考』鄭州大学出版社
- (11)『博物館学概論』編写組編 2019『博物館学概論』高等教育出版社
- (12)段勇主編 2010『中国博物館学研究論著目錄』新華出版社
- (13)中国大百科全書編輯委員会 1993『中国大百科全書・文物博物館卷』中国大百科全書出版社
- (14)蘇東海 1998『博物館の沈思—蘇東海論文選集—』文物出版社
- (15)蘇東海 2006『博物館の沈思—蘇東海論文選集・二—』文物出版社
- (16)蘇東海 2010『博物館の沈思—蘇東海論文選集・三—』文物出版社
- (17)呂濟民 2004『中国博物館史論』紫禁城出版社
- (18)宋伯胤 2009『宋伯胤文集・博物館卷』文物出版社
- (19)宋向光 2009『物与識—当代中国博物館理論與实践辨析—』科学出版社
- (20)中国博物館学会編 1983『博物館学論集』文物出版社
- (21)中国博物館学会 2005『回顧與展望:中国博物館發展百年—2005年中国博物館学会學術研討会文集—』中国博物館学会紫禁城出版社
- (22)梁吉生 1986「旧中国博物館歴史述略」『中国博物館』(02)
- (23)梁吉生 1988「論旧中国博物館事業的歴史意義」『中国博物館』
- (24)甄朔南 2005「中国博物館学百年發展述略」『中国文化遺產』(04)pp.113-115
- (25)陳建明 2001「關於開展中国博物館学史研究的構想」『中国博物館』03pp.47-50
- (26)<<中国博物館学史>>課題組 2006「知識・理論・体系・学科—中国博物館学研究軌跡檢視—」『中国博物館』(02)pp.90-96
- (27)陳建明 2005「漢語『博物館』一詞的產生與流傳」『回顧與展望—中国博物館發展百年—2005年中国博物館学会學術研討会文集』
- (28)徐玲 2007「中国近代博物館学研究綜述」『中国博物館』第2期 pp. 77-84
- (29)徐玲 2014「中国博物館学学科發展的回顧與反思」『東南文化』(05)pp.101-109
- (30)趙冠群 2014「中国博物学與中国近代早期博物館」『中国博物館通訊』第319期 pp. 23-27
- (31)張娟娟 2006『近代中国博物館源起探析』南京師範大学・修士論文
- (32)陳銳 2007『晚清西方博物館觀念在中国的傳播』湖南大学・修士論文
- (33)李暖 2014『来華外国人所建博物館研究』河南大学・修士論文

- (34)陳為 2011『博物館與中国近代社会变革研究』中国艺术研究院·  
  修士論文
- (35)王宣懿 2016『传承中的裂变』中央美术学院·修士論文
- (36)李心雨 2020『中国近代博物馆学研究』天津师范大学·修士論文
- (37)李霄 2012『现当代中国博物馆演进之轨迹』南京师范大学·修士  
  論文
- (38)黃志華 2013『湖南省博物館事業的歷史發展研究(1951-2007)』  
  中南大学·修士論文
- (39)史梦遥 2014『晚清时期《申报》(1872-1911)與博物館信息传  
  播研究』吉林大学·修士論文
- (40)劉華 2016『《申报》(1912-1949)博物館史料初步整理與分析』  
  吉林大学·修士論文
- (41)邢文穎 2015『新中国博物館管理法律制度研究』山西大学·修士  
  論文
- (42)鄭垂娟 2018『曾昭燏的博物館学思想研究』雲南大学·修士論文
- (43)胡城 2019『民国时期博物館社会教育研究』江西科技师范大学·  
  修士論文
- (44)李慧竹 2007『中国博物館学理論体系形成與發展研究』山東大学·  
  博士論文
- (45)劉守柔 2014『清末民国文化遺產保护的興起與演進研究』復旦大  
  学·博士論文
- (46)周俊基 2016『張謇與南通博物苑』華中师范大学·博士論文
- (47)馬学東 2017『民国时期中国美術的海外传播』中央美术学院·博  
  士論文

## 第一章 中国博物館学史研究の歴史

### 第一節 「博物館」「博物館学」について

抑々中国にとって、博物館や博物館学は西洋から輸入された文化であり、輸入思想である。19世紀中頃に博物館と博物館学は、西洋から中国に伝播し、現在に至っても進展している文化・教育思想であり、現在では博物館学は独立した学域として把握されるに至っている。

博物館学が独立した学域を持ったために、項隆元は、「一種学問要成爲一門独立的学科、必須有一整套術語来描述其研究对象・目的・方法・規律・定律的基本概念。」<sup>(1)</sup>（一つの学問は独立する学になるなら、必ず一連の用語で研究对象・目的・方法・規則・法則の基本概念を描くことである。筆者訳）と述べている。博物館学研究にとっても、最も重要なのは博物館学における専門用語の統一と当該名詞の定義とを明らかにすることであると考える。

本章は、主に中国博物館学史研究の基礎概念と理論の発展に関する検討であり、博物館学の研究分野の中でも博物館学史に属するものである。その他に論を展開するにあたり、博物館学の中でいくつかの重要な概念を明確に定義することが必要である。まずは、「博物館」と「博物館学」に関する概念の発展について検討する。

なお、本章は、中国博物館学史研究の歴史に関する内容であるから、「*museology*」「*museography*」などの外国語の用語が論及しない。

#### 1、中国での博物館の定義の発展

現在、中国の博物館学界での博物館の定義は、一般的に採用されているのは1979年に国家文物局が公布した『省・市・自治区博物館工作条例（草案）』<sup>(2)</sup>の中で記された博物館に関する定義である。内容に関する序文は以下の通りである。

博物館是文物和標本的主要收藏機構、宣傳教育機構和科学研究機構、是我国社会主义科学文化事業的重要組成部分。

（博物館は文化財と標本の主要な収蔵する機関であり、教育を普及する機関と科学を研究する機関であり、中国における社会主義の科学、文化事業の重要な構成部分である。筆者訳）

上記の定義は、1956年に文化部によって開催された全国博物館工作会議において調整された規定である。本定義に基づき中国が考える博物館を確認すると、博物館の第一の目的は文化財と標本資料の収蔵であることが理解される。さらに、資料の活用は、国民の教育と研究に資するためとし、それらの活動は国家的施策として社会主

義の文化事業として位置付けている。

さらに、1956年に北京で開催した中国の「第1回全国博物館工作会議」の中で、中国博物館の基本的な性質は、科学研究機関・文化教育機関・有形文化財と無形文化財及び自然標本の収蔵室である「三性」と、科学研究と人民への奉仕を行う「二務」が博物館の基本的な役割であるとされ、「三性二務」<sup>(3)</sup>が提唱され、より具体的な目的が定められた。この「三性二務」の意図する博物館機能は、科学研究機能に軸足を置く点を特徴とする。その理由は、当該期に他の博物館論に関する論文より、博物館研究機能に論述する論文は、数多に刊行された。

1980年代、中国の博物館学界は、上記の定義を検討した後、博物館の概念は科学研究機関であるとする考え方が定まってきたようにと看取される。それにより、1985年に文化部文物局が出版した『中国博物館学概論』<sup>(4)</sup>と1993年に刊行された『中国大百科事典・文物博物館巻』<sup>(5)</sup>も同様な観点で著わされている。すなわち、中国では、1979年に規定した博物館の定義を踏襲した。

2004年に宋向光は、「博物館定義的時代発展特徴」<sup>(6)</sup>の中で、1979年に規定した博物館の定義に対する評価を次の通りに行っている。

实事求是地講、這一博物館定義體現了当時我国博物館的發展狀況和工作環境、反映了計劃經濟對博物館社會任務和運行方向的規定、反映了我国博物館工作者對博物館業務特點的認識。定義所反映的博物館性質是博物館在計劃體制中的位置、博物館任務則是根拠博物館發展狀態和工作任務而制定的。

(ありのままに言えば、この博物館定義は当該期中国の博物館發展狀況と社会環境を體現し、計画經濟が博物館の社会的な任務と運行方向に対する規定を反映し、中国における博物館の工作人員が博物館業務の特徴に関する認識を反映していることである。定義を反映した博物館性質は計画体制の中で博物館の占めた位置であり、博物館の任務は博物館の發展狀態と仕事の任務によって制定された。 筆者訳)

即ち、宋は、この定義は当該期の中国社会に整合する考え方であるを指摘した。上記の博物館の定義は、中国博物館学の展開にとって積極的な意義があった。しかし、博物館の定義は、当然社会状況によって変化し得るものでことである。博物館は、半世紀の發展を経た今日では、その定義もさらに充実して現在の社会情勢・社会文化に整合する状況に到達しているものと考えられる。

なお、2015年3月20日から施行された「博物館条例」<sup>(7)</sup>(国务院令 第659号)第一章総則の第二条は、博物館を下記のように定義した。

本条例所称博物館、是指以教育・研究和欣賞為目的、收藏・保

護並向公衆展示人類活動和自然環境的見証物、經登記管理機關依法登記的非營利組織。博物館包括国有博物館和非国有博物館。利用或者主要利用国有資產設立的博物館為国有博物館、利用或者主要利用非国有資產設立的博物館為非国有博物館。

(本条例で称する博物館は、教育・研究・観賞を目的として、人類活動と自然環境の実物資料を収集・保存・展示し、管理部門に登録する非営利組織である。博物館の分類には、国有博物館と非国有博物館である二種類がある。国有博物館は国有財産を利用して設立する博物館であり、非国有博物館は非国有財産を利用して設立する博物館である。 筆者訳)

以上のような博物館の定義は、今日の中国の博物館学界が有する慣用的な定義である。また、中華人民共和国の建国前に、中国博物館学界には、異なる定義を提唱していた。本論文は、中国博物館学に関する歴史研究を目指しているため、1949年以前に焦点を定めて学界の博物館に関する定義を明確することが肝要であると考え。

一方、『中国博物館学研究論著目録』<sup>(8)</sup>の統計によると、1949年

出版年	著者名	書名	出版社	全頁
1936年	費畊雨 費鴻年	『博物館学概論』	中華書局	216 頁
1936年	陳端志	『博物館学通論』	上海市博物館	270 頁
1937年	陳端志	『博物館』	商務印書館	62頁
1941年	荊三林	『博物館学大綱』	中国文化服務社陝西分社	102
1943年	曾昭燏 李濟	『博物館』	正中書局	84頁

以前における中国の博物館学の通論的な単行本は5冊を数える。具体的には1936年に出版された『博物館学通論』、同じく1936年の『博物館学概論』、次いで翌1937年に上梓された『博物館』、1941年に出版された『博物館学大綱』、1943年の『博物館』である。上記で5冊の単行本の中で、1943年の『博物館』を除く4冊が博物館の定義を明確に現した著書である。また、1949年以前における中国の博物館学の通論的な単行本の一覧は、表1-1のように示す。

表 1-1 1935年から1949年までの中国の博物館学の通論的な単行本一覧 (筆者作成)

1936に費鴻年は、『博物館学概論』<sup>(9)</sup>の中で、中国では始めてとなる博物館の定義を次のように記している。

博物館為保存最易説明自然現象及人類業績的物品、供民衆知



識的向上、及發展文化所利用的一種設施。

この定義の出典について、費は下記のように記録した。

斯密松林研究所的古特氏、對於博物館下一定義以來、雖屢次學者設法修改、但至今尚未得一最合理的改訂。我們將博物館作為一種的“設施”、“建築”或“蒐集”亦無不可、然三詞之中、所謂建築所謂蒐集、仍包含設施之內、所以二者不能放入於定義之中、結果還是古特氏所說（後略）（上記の博物館の定義の内容）

なお、本論文の第六章の第一節で、費鴻年の『博物館学概論』は、棚橋源太郎が著した『眼に訴へる教育機関』<sup>(10)</sup>を模倣したことを指摘した。そのために、『眼に訴へる教育機関』の中で、博物館の出典と定義を抜粋した<sup>(11)</sup>。

スミソニーアン・インスチテューションのグッド氏が博物館に就いて定義を下してからこの方、これを改善すべく反覆努力したものもあったけれども、今日まで遂に一も合理的の改訂を見るに至らなかった。吾々は博物館を以て一種の「施設」、「建物」又は「蒐集」と解釋し得られるものとする。然しその三つの中、後の二つは畢竟「施設」といふ言葉の中に抱含することが出来るといふ、見地から、これを博物館の定義の中に入れぬことにする。

博物館は自然の現象及び人類の業績を最もよく説明し得べき物品を保存して、これを民衆知識の向上と文化の發展とに利用する施設である——グッド。

上記の資料によって、『博物館学概論』の中では、博物館の定義と出典が『眼に訴へる教育機関』の内容を模倣することが確認した。

費による本定義は、アメリカのジョージ・ブラウン・グッド (George・Brown・Goode) の観点に従って論じたものであることを明記しており、中国における体系的な博物館学のスタート理念はアメリカ合衆国の博物館思想に準拠するものであったことは明白である。

同じく、1936年に陳端志は、『博物館学通論』<sup>(12)</sup>の中で下記のとおり博物館を定義している。

博物館乃保存最足以説明自然的現象、及人類的業績等物品、利用之以為民衆知識的向上、及文化事業的發展之一種設施。

（博物館は自然現象と人間の業績を最も説明するものであり、民衆の知識の向上や文化事業の發展のために利用する施設の一種である。 筆者訳）

ここでの陳の指摘は費の『博物館学概論』での定義と同一のものである。また、1937年に陳は2冊目の単行本である『博物館』<sup>(13)</sup>を上梓するが、ここでも『博物館学通論』での定義と変わることなく一致している。

1941年に荊三林は、『博物館学大綱』<sup>(14)</sup>の中で、費が用いたグッドの定義理念を継承し、次の如く記している。

博物館乃是保存最足以説明自然的現象及人類的業績等物品、利用之以為民衆知識的向上及文化事業。

(博物館は自然の現象や人間の業績などを十分に説明するものを保存し、民衆の知識の向上や文化事業を利用することである。 筆者訳)

その後、下記の通り、定義の増強を計っている。

與促進整個社会的進化之一種設施。為政府經營的事業之一、而其中極富於学述的及教育的意味。

( (博物館は) 社会の進化を促進する施設の一つであり、政府が経営する事業の一つであり、その中には、学術的な及び教育的な意味が非常に豊かである。 筆者訳)

つまり、荊の考える博物館は、社会の進化を促進する施設であるとしたうえで、政府が経営する事業の一つであると断定し、博物館の設置・運営は政府の業務であるとした。

なお、1943に曾昭燏が著した『博物館』<sup>(15)</sup>においては、前述したように博物館の定義を直接には言及されていない。

上記の資料によると、1949年以前の中国博物館学界において博物館の定義は、1895年にアメリカのスミソニアン協会 (Smithsonian Institution) のジョージ・ブラウン・グッド (George・Brown・Goode) が提出した定義に従っていたことが看取できる。この定義の原文は、下記のように記録した<sup>(16)</sup>。

A museum is an institution for the preservation of those objects which best illustrate the phenomena of nature and the works of man, and the utilization of these for the increase in knowledge and for the culture and enlightenment of the people.

このグッド氏の定義は、博物館の教育機能を強調し、博物館が市民教育を普及させる重要な場所であるとする博物館教育機関論とするものであった。この考え方は、当該期の中国博物館学界が博物館の教育機能を重視する姿勢と合致していた点から、中国では容易に受け入れることのできる博物館理念であった。すなわち、グッド氏の定義と出会う前から、中国博物館学界は、博物館の教育機能を重視していた。

本論文にとっては、上記で5冊の単行本にする博物館の定義が重要であり、それが今日の中国博物館学界が有する慣用的な定義と比べて、時代的特徴があった。今日の博物館の定義は、博物館の娯楽性と観賞性が重視している。

また、上記で5冊の単行本において、博物館の定義を明確した上

で、初めて中国に設立された博物館を指摘した。これらの博物館と博物館に対する評価については、下記の表 1-2 の通りである。

表 1-2 5 冊の単行本に見る初めての  
の中国博物館一覧表（筆者作成）

出典	博物館	設立年	設置母体	評価	原文の言葉
『博物館学概論』	自然史博物館	1927年	中央研究院	中国博物館事業の萌芽	萌芽
	博物館	1931年	北平研究院		
『博物館学通論』	南通博物苑	1905年	私立	中国の博物館事業の濫觴	発軔
	北平古物陳列所	1914年	国立	初めての中国政府が経営する博物館事業	最早者
曾氏『博物館』	南通博物苑	1905年	私立	中国の博物館事業の嚆矢	最早者
	北平鉄道管理学院博物館	1921年	国立	国家博物館の開始	

## 2、中国での博物館学の定義の発展

1993年に刊行された『中国大百科事典・文物博物館巻』<sup>(17)</sup>において、「博物館学は研究博物館的性質・特徴・社会機能・実現方法・組織と博物館事業発展規律的科学。」（博物館学は、博物館の性質・特徴・社会的な役割・実現方法・組織管理と博物館事業を発展させる方法の科学研究する科学である。 筆者訳）と指摘している。この定義は、中国の多くの博物館学者に受け入れられている。

2001年、王宏均は『中国博物館学基礎』<sup>(18)</sup>において、上記の定義を賛成する。そして、博物館学は博物館システムだけでなく、博物館事業全般を研究すべきであると指摘する。その上で、博物館システムの研究は、博物館学研究の中核であると記している。博物館システムは、具体的な博物館の運営と管理を支援するシステムである。このシステムの内容は、博物館の情報と蔵品を含めている。また、筆者は、王の考え方に同調するものである。また同時に、『中国博物館学基礎』は、中国の大学の博物館学コースでよく使われる教材でもある。

前述した1949年以前に出版された5冊の単行本は、すべて博物館学についての明確な定義を記述しない。その理由として、当該期の中国では博物館学が構築されたばかりで探索している状況にあり、科学としての理論体系あるいは理論博物館学はまだ完成してお

らず、博物館や博物館学の峻別すら出来得ない状態であったことに起因すると想定される。即ち、当該期の博物館学の理論は、西洋に学んだものであり、その内容も西洋の考え方をそのまま踏襲していたと思われる。

## 第二節 博物館学の構築について

### 1、博物館学の構築の定義

「対博物館学学科属性的初步探討—兼與範広傑同志商榷—」<sup>(19)</sup>によれば、博物館学を研究する多くの者たちは、博物館学を総合学問と縁辺学問に仕分し、独立するひとつの学問と見なすようになっていと述べている。

上記の論文は、縁辺学問について、下記のように記録した。

在博物館学產生過程中、根本不存在採用某一学科的研究方法去研究另一学科的研究对象从而產生了一門新的“邊緣学科”——博物館学這樣的現象。因此、从邊緣学科的特征及形成的方式来考察、博物館学不属于邊緣学科。

（博物館学は、ある学問の研究方法を利用して他のある学問の研究対象を研究して、新たな縁辺学問の博物館学となることではない。そのために、縁辺学問の特徴と形成の方式によって、博物館学は、縁辺学問ではない。 筆者訳）

さらに、総合学問について、下記のように記録した。

博物館学博物館学的產生、不是象海洋科学和環境科学那樣、是運用多門学科方法共同研究的產物,所以它不是綜合科学。

（海洋科学・環境科学と違い、博物館学は、様々な学問の研究を利用して形成する学問ではない。そのために、博物館学は、総合学問ではない。 筆者訳）

中国に従来の観点は、博物館学は総合的な学であり、諸科学が総合的に協力する学であった。しかし、最近に中国の博物館学者は、博物館学は独立の学であると確認した。

しかし、博物館学と学問における博物館学の構築は、全く異なることであると考えられる。陳建明は、「博物館学是一門已具有学科基礎並正在建設之中的科学学科。」<sup>(20)</sup>（博物館学は、すでに学とする基礎があり、建設中の科学的な学問である。 筆者訳）と述べている。これは、博物館研究についての理論と実践の内容を包含し範囲は広く、博物館学研究者らが博物館事業の発展と研究を指導する内容及び博物館実践についての学域は博物館学の内容であると言えよう。

そして、本論文で検討する対象は、博物館学の構築である。博物館学の定義は、第1章第1節で明確にしており、これからは博物館

学の構築の定義を明確にすることが必要だと思う。

『中国博物館基礎』<sup>(21)</sup>によると、国際博物館会議倫理委員会委員長・前 ICOM 副会長・前 ICOFOM 国際博物館学委員会委員長であるスイスの博物館学者のマーチン・シューラー (Martin R. Schäfer) は、博物館学について次の通り記している。

博物館学要成為一个学科必須使博物館這個專業群体接受博物館学、並且、当前最重要的是博物館学应在大学中有一席之地、要有人去研究它。作為科学、首先要有專業語匯体系、第二要有邏輯体系、第三要有学科独立性或称排他性。

(博物館学がひとつの学問であるならば、博物館という専門的な群体は博物館学を必ず学ばなければならない。そして、今最も重要なのは、博物館学が学問としての位置を得て、博物館学を研究する人が居ることである。科学として、先ずは、専門の用語の体系が必要である。次には、ロジックの体系がある。最後には、学問としての独立性であり、あるいは排他性である。筆者訳)

上記の学問の構築に関する認識によって、博物館学の構築の意味は明確にされている。博物館学の構築とは、博物館学の内容をまとめて整理して、より学術化と標準化の理論体系を有さねばならない点である。専門的な学術組織に依拠して科学研究を行ない、学術著述の出版・博物館における工作人員の養成・博物館事業と博物館実践に関する研究と指導・博物館の活動を、より良いものを目指す過程である。博物館学の構築は、長い過程であり、博物館における工作人員が心血を注いで努力を払う必要がある。中国の博物館学は、スタートの遅れによって、学問の構築のため、まだまだ穴をなければならない部分が今日における中国の博物館学研究の関心点だと考える。

## 2、博物館学の構築の標識

学問とは、全体の科学体系の中の一つの科学の分野であり、学術が独立し、理論体系の完備を意味する。博物館学は、学術の上での分類の名称で、大学の中で教育科目を設置する点あるいは大学の学科が基礎である。故に、博物館学の構築とは、抽象的な学を具象化する過程である。多岐に互る要件を、仮説と論証により、推定と評価できる内容を条件とし、学の独立性と完全性を構築することである。

博物館学の構築は、基礎性と総合性を持っているシステムであり、学問の発展、学術団体、基礎理論、学術著述、科学研究、専門人材の養成などのいくつかの方面を網羅するものでなければならない。その目的は、博物館学が学とする基礎を完璧して、学とするレベルを

高めるのである。

しかし、学問の構築の標準に関する定説は未だない。科学の哲学原理によって、学の形成を確認したのは、主に次に記したいくつかの標識である。

第1点は、研究する対象がある程度定められた領域が出来ており、多くの研究者が存在し、その領域の研究が行われていること。

第2は、学術著述や関連刊行物が出版されていることである。

第3は、従属的な学術会議が開催されて、学術交流を実施することである。

第4は、学科が大学の専攻となり、専門の人材を養成することなどが必要条件として挙げられよう。

学問の形成と発展は、様々な基準がある。また、学問の基本的な内容は、研究対象、学の性質、研究方法、理論体系などという他の観点もある。学問の構築の基準は、多くの方面を含める。ある一つの面で学問の構築を判定するのは、不公正という点で欠陥があることを避けられない。したがって、学問の構築の中に含まれる基礎理論・学術団体・学術著述・専門教育・科学研究・学術交流などの多くの方面で共通的に判定することが適切である。

そのために、学問とする博物館学の構築の標識は、基礎理論・学術団体・学術著述・専門教育・科学研究・学術交流・博物館実践などの諸内容を含める。

## 小結

上記の定義によって、「博物館」とは、公衆に向けて開催された文化財と標本の収蔵・科学研究・教育宣伝する場所である。この後の社会の変化と時間の流れにより、博物館の定義は、より確実なものに整備されてきた。しかし、確かに中国の博物館の機能に関する定義の変化は認められるが、博物館の理念に関しては原則的には不変であると言えよう。

即ち、現在の視点から、博物館の原初形態は、個人が珍品を私有し保存に注意を払った。その観客は、民衆ではなく個人或いは少数の特権階級であった。しかし、博物館の利用者は個人ではなく、公衆の為に存在する機関であるとする考え方に則っている。さらに、博物館は収蔵保存の場所であるとともに、民衆のための教育普及と研究を展開する場所でもある。博物館が時代の発展につれてどのように変化しても、その核心の概念は変化することは無いであろう。

一方、博物館学の定義は、一定ではなく、時間の経過と社会情勢の移行に従って、絶え間なく改善と補足説明することにより変容するものと考えられる。それは、博物館に関する問題を扱うことは、

博物館学の範疇に含まれるからであり、考古学において遺跡を発掘調査をすることも、その調査により出土された資料の復元や各種の分析を行うことも、考古学であることと同様であると考えられる。

博物館学は、範囲が広く、それ故に研究内容も焦点も多様であるため、その定義も変化しつつ次第に確立されるものと考えられる。

本章で扱った 1949 年以前という限られた期間において、中国博物館学界が「博物館学」と「博物館」の双方に関して明確な定義と概念が明確でなかったというのが当時の状況であった。

この原因は、当該期の中国博物館学界が西洋の博物館学を学んだ。一方、西洋においても当該期の博物館学は博物館学実践技術の分野を指していることが多いため、博物館学理論の研究については、まだまだ不十分である可能性も考えられるのである。

1905 年に張謇が南通博物苑を創立したことは、中国人が自主的に博物館事業を実践し始めた歴史的事実であり、これはまた中国博物館学の濫觴であることは指摘した通りである。

昔日の中国には宝殿や蔵宝室はあったが、近代的意識を持っている博物館は、西洋から伝えられたものである。南通博物苑の設立は、中国における博物館の中華化の幕開けであった。

これを契機として、中国では中国博物館学に関する理論の検証と実践が勢いをもって発展している。博物館学の実践的技術を蓄積することを通じて、博物館学の構築の必要が理解されるに至った。

1930 年代から 1940 年代初頭に中国博物館学界は、博物館学に関する基礎理論を提唱し始め、中国博物館協会が設立され、博物館学に関する学術著論が刊行され、大学で博物館学コースを開講し始めた。これは、中国博物館学の構築の嚆矢である。

1935 年に中国博物館協会が設立されたことは、博物館学に関する研究が学術団体での検討段階に入ったことを示す記念的な設立であった。

## 註

(1)項隆元 2013「關於博物館學術語規範性的問題與思考」『東南文化』(01)p.107

(2)国家文物局 1979『省・市・自治区博物館工作条例（草案）』

(3)「三性二務」とは、「三性二務」論であり、1956 年に北京で開催した中国の第 1 回全国博物館仕事会議の中で、提唱した中国博物館の基本的な性質と基本的な役割の理論である。具体的には、「三性」とは、中国博物館の基本的な性質は科学研究機関・文化教育機関・有形文化財と無形文化財及び自然標本の収蔵室である。（科学研究機関、文化教育機関、物質文化和精神文化遺存以及自然標

本的收藏所)「二務」とは、中国博物館の基本的な役割は科学研究と人民のために尽くすことである。(為科学研究服務、為廣大人民服務)

- (4)文化部文物局 1985『中国博物館学概論』文物出版社
- (5)中国大百科全書編輯委員会 1993『中国大百科全書・文物博物館卷』中国大百科全書出版社
- (6)宋向光 2004「博物館定義的時代發展特徵」『国際商報』(02)18006
- (7)[http://www.gov.cn/zhengce/2015-03/02/content\\_2823823.htm](http://www.gov.cn/zhengce/2015-03/02/content_2823823.htm)
- (8)段勇主編 2010『中国博物館学研究論著目錄』新華出版社
- (9)費畊雨・費鴻年 1936『博物館学概論』中華書局 p.30
- (10)棚橋源太郎 1930『眼に訴へる教育機関』賓文館
- (11)註(10)と同じ p.36
- (12)陳端志 1936『博物館学通論』上海市博物館 p.4
- (13)陳端志 1937『博物館』商務印書館 p.4
- (14)荊三林 1941『博物館学大綱』中国文化服務社陝西分社 p.1
- (15)曾昭燏・李濟 1943『博物館』正中書局
- (16)G.Ellis Burcaw 1997 *Introduction to Museum Work*, 3rd.ed. p.cm. (The American Association for State and Local History book series) p.18
- (17)王宏均・馮承伯 1993「博物館学」『中国大百科事典・文物博物館卷』
- (18)王宏均 2001『中国博物館基礎』上海古籍出版社 p.3
- (19)黄亦兵 1989「对博物館学学科属性的初步探討—兼與範広傑同志商榷—」『中国博物館』3
- (20)陳建明 2001「關於展開中国博物館学史研究的構想」『中国博物館』 p.47
- (21)註(18)と同じ p.14



## 第二章 中国博物館学の時代区分

1980年代から中国博物館学界は、中国博物館学史に対し意識的に研究し始めたが、博物館学史は博物館学の中でも実用性に乏しいため、中国において博物館学史に関する研究は長期間注目されない状況にあった。

しかし、博物館学の体系を構築する中で、博物館学の発展の歴史を理解することは、今の博物館学の展開に対して積極的な作用がある。そのために、博物館学史の必要性を認識した博物館学者は益々増えており、結果として博物館学史に関する研究が進歩を遂げることとなったのが中国博物館学界の現状である。

中国博物館学史の時代区分に関する中国博物館学界における主流の観点は、社会的状況を踏まえて3段階に区分したものであった。

第一段階は、1900~40年代までの日本と西洋の博物館学に学ぶ段階である。この段階の中国博物館学は、日本と西洋の博物館学を模倣する特徴があった。

第二段階は、1950~60年代のソビエト社会主義共和国連邦の博物館学に学ぶ段階である。当該段階の中国博物館学は、この時期の中国社会と共に社会主義の影響を受け、政治意識を強く印象づけている点が大きな特徴である。

第三段階は、1980年代からの中国博物館学の特徴を探索する段階である。この時期には、中国博物館学界が中国博物館学の適切な発展方向の探索を目指した輝かしい発展期であったとされている。

上記の観点は、中国博物館学史の流れの特徴を良く把握した分類であるが、不足の点も存在していると筆者は考えている。それ故に、本章は中国博物館に関する理論の論著を中心に学史を試作し、中国博物館学の沿革を編年的に整理しようとするものである。

本章は、1989年までの中国博物館に関する理論研究を中心として、博物館理論に関する展開状況を研究し、中国博物館学史の時代区分に基づく構築を目的とするものである。

なお、本章で論述する時代区分は、従来中国博物館学史の時代区分に関する主流的観点に賛同した上で、博物館理論の変化によって中国博物館学の発展段階を詳しく細分することを試み、中国博物館学史体系の一助となることを目的とする。

### 第一節 既往の時代区分について

中国博物館学史の時代区分についての研究者は、1980年代に梁吉生<sup>(1)</sup>がいる。梁は、中華人民共和国の建国前の近代中国における博物館の発展を3段階に分けている。具体的には、「醞釀階段」(1850~1900年代)、「初創階段」(1900~20年代)、「発展階段」

(1920~30年代)である。

次いで蘇東海<sup>(2)</sup>は、中国博物館学の沿革を論述し、3段階に区分した。具体的には、「第一個發展時期」(1905年~1930年代)、「第二個發展時期」(1950年代)、「第三個發展時期」(1980年代)であった。



図 3-1 梁吉生



図 3-2 蘇東海



図 3-3 甄朔南



図 3-4 徐玲

2000年代に甄朔南<sup>(3)</sup>は、中国博物館学史を「旧中国時期博物館学的孕育與發展」(中華人民共和国以前の中国における博物館学の発端と發展 筆者訳)(1905~49年)と「新中国成立后博物館学在我国的曲折發展」(中華人民共和国における博物館学の紆余曲折があった發展 筆者訳)(1949~2005年)である2段階区分を提唱した。その中で、甄は中華人民共和国における博物館学史をさらに3つの段階を区分した。具体的には、「1949年至1966年時期的中国博物館学」、「1966年至1990年時期的中国博物館学」、「1991年至2005年時期的中国博物館学」である。

なお、学史の研究団体である<<中国博物館学史研究>>課題組<sup>(4)</sup>は、中国博物館学史の時代区分を明確にしていなが、中国博物館学史の流れによって4段階であると言及した。具体的には、19世紀末期から1905年までの「萌芽期」、1905~49年までの「早期博物館学」、1949~78年までの「蘇式<sup>(5)</sup>社会主義博物館学」(ソ連型社会主義博物

館学（筆者訳）、1978年からの「全面開放的中国博物館学」である。

さらに、2010年代に徐玲<sup>(6)</sup>は、「中国博物館学学科」<sup>(7)</sup>の発展について、3段階に分けている。具体的には、「中国博物館学学科的形成」（1935~49年）、「中国博物館学学科的初歩発展」（1950~60年代）、「中国博物館学学科的進一步発展」（1980~90年代）である。

既往の時代区分についての提案は、下記の表3-1のように帰納する。

表 3-1 中国博物館学に関する既往の時代区分（筆者作成）

	1900 年代 以前	19 00 年代	19 10 年代	19 20 年代	19 30 年代	19 40 年代	19 50 年代	19 60 年代	19 70 年代	19 80 年代	19 90 年代
梁吉生	醞釀 階段	初創階段		発展階段							
蘇東海		第一個發展時期					第二 個發 展時 期			第三 個發 展時 期	
甄朔南		旧中国時期博物館学的孕育與發展				新中国成立后博物館学在我国的曲折發展					
<< 中国博物館学 史研究 >> 課題組	萌芽 期	早期博物館学				蘇式社会主義博物 館学			全面開放的 中国博物館 学		
徐玲					中国博物館 学学科的形 成	中国博物館 学学科的初 歩發展				中国博物館 学学科的進 一步發展	

## 第二節 時代区分の提唱

## 1、揺籃期（1841~1904年）

1840年代の清末期における西学東漸の風潮に従い、当時の中国の有識者は国家の衰勢を立て直し経済の発展を目指すために、西洋の近代科学技術を学び導入する必要に迫られた。それ故、西洋との交流は、日増しに盛んになって行った。この時期に、中国から渡欧・渡日した人たちは、商売と遊歴を目的とした個人と、公的な職務を持って訪問・視察した公使であった。これらの人たちは、近代西洋文明・技術と出会った初めての中国人として、西洋文明を中国に伝える役割を果たした。この状況において、西洋の文化や社会の様子が数多く伝えられるようになる。

林則徐<sup>(8)</sup>・魏源<sup>(9)</sup>・徐繼畲<sup>(10)</sup>などは、中国から出国することなく西洋の書籍と文献などを翻訳して、西洋の風土を紹介した。その上で、林鍼<sup>(11)</sup>・郭連成<sup>(12)</sup>・斌椿<sup>(13)</sup>・張德彝<sup>(14)</sup>・志剛<sup>(15)</sup>・郭嵩燾<sup>(16)</sup>・王韜<sup>(17)</sup>などの遊歴学者や外交官は、西洋を訪問した際に見聞録や日記を著し、西洋の情報を記録した。

これらの著作物には、西洋の博物館に関する記録は多く認められる。それは、単なる博物館の見聞だけでなく博物館についての理論的な内容もあり、中国における博物館への意識の芽生えを看取することができる。

ここで注目すべき事は、中国博物館学界において「博物館」という用語が1841年に林則徐及び幕僚らが翻訳・編纂した『四洲志』<sup>(18)</sup>の中に初見がみられる点である。このことは、陳建明が2005年に発表した「漢語“博物館”一詞的產生與流伝」<sup>(19)</sup>（中国語で“博物館”という用語の初見と流伝 筆者訳）の中で初めて提起したものであった。なお、<<中国博物館学史研究>>課題組<sup>(20)</sup>が、2006年に上梓した研究報告書である「知識・理論・体系・学科—中国博物館学研究軌跡検視—」<sup>(21)</sup>（知識・理論・体系・学—中国博物館学に関する研究歴史をめぐって— 筆者訳）では、「博物館」という用語の使用が、中国博物館学史における重要な発見であると評価している。中国博物館学界には、従来から「博物館」という用語に関する観点は日本から輸入したものであった。しかし、<<中国博物館学史研究>>課題組の発見によって、この観点に対する異論があった。そのために、この発見は、中国博物館学史にとって、画期的な意義があった。一方、日本の博物館学界においては椎名仙卓<sup>(22)</sup>が「博物館」という用語は、中国から日本へ伝わった可能性がある」と指摘し、この点は家永真幸<sup>(23)</sup>によってそれを裏付ける論文が発表されている。

1860~90年代に入り、アロー戦争と日清戦争の敗戦による衝撃を受けた清朝政府は、洋務運動<sup>(24)</sup>と戊戌の変法<sup>(25)</sup>を行った。洋務運動と戊戌の変法は、西洋の文化と技術を学ぶことを提唱しており、

博物館が、西洋の文化と技術を展示し、それについて学ぶことのできる場所となった。

当該期には、中国における最初の博物館について書かれた論文が掲載された<sup>(26)</sup>。1888年8月19日01版の『申江新報』<sup>(27)</sup>（通称『申報』）の新聞に「擬創設博物院小引」<sup>(28)</sup>（博物館の創立に対する提唱 筆者訳）と題して掲載された論文は、博物館の目的・必要性・建物について論及した内容であった。

（前略）設立博物院、以広見聞、以増学問、以講芸術、以通格致。於物則知生産之方、於器則明製造之法、於奇形异状則知宇宙之内无所不有。（中略）由是心可超乎万有、智不囿於一隅、聰明日出、心性日開、轉移風会即系於斯焉。（中略）院之外宜广栽樹木多植花卉。有楼台亭榭之觀、有竹石池塘之勝。香車可達、画舫可通。藉以暢性靈豁、懷抱怡情而養性、悦志以娛神。古人藏修游息所不偏廢、瀏覽之余学亦寓焉、未始非造就人材之一道也。（後略）

（（前略）博物院を設立することは、民衆に見聞を広めさせ、学識を深めさせ、芸術を理解させ、知識を得させるためである。博物院の観覧によって、民衆は、生物の生まれ方・用具の作り方・世界の広さを了解できる。（中略）それ故、博物院は、民衆に視野を広めさせ、知識を蓄積させる機能を持っている。さらに、博物院は、社会の気風を改められる能力がある。（中略）博物院の建物と環境については、博物院の外に木と花を広く植えると良い。博物院は、一つの建物ではなく、楼閣と釣殿などの建物もあり、竹と石と池などもある。博物院の内部は、車道と水路がある。美しい環境のため、観覧者がいい気持ちで見学できる。古人は、よく遊学し、観覧しながら学問を得た。これは、人作りの一案である。 筆者訳）

この論文は、洋務運動における博物館についての代表的な観点であると考えられる。

また、戊戌の変法を推進した清政府の官員と知識人らは、博物館学意識を広めることに努めた。“維新派”<sup>(29)</sup>は、西洋の政治と文化を広めるため、博物館がどうあるべきかを提議した。鄭観応が著した『盛世危言増訂新編』<sup>(30)</sup>によって、鄭は西洋の博物館と図書館などの施設と博物館の無料開放を褒めて、中国における博物館は英国のように無料開放が必要であると提唱している。なお、梁啓超が著した「論学会」<sup>(31)</sup>によって、強学会<sup>(32)</sup>が開設された際には、十六項の必要事項があげられている。その中では、「十二日大陳各種儀器、開博物院、以助実験。」<sup>(33)</sup>（十二番は、実験を助けるために、様々な機械を陳列し、博物館が開催されることが必要である。 筆者訳）と述べている。維新派の代表とされる康有為が著した「意大利游记」

(34)には、博物館に関する理論を展開し、博物館の収集・教育・研究の諸機能について詳細に論及している。さらに、康は、博物館の目的に関することを「古物存、可令全国增文明。古物存、可使民敬賢英。古物存、能令民心感興。」<sup>(35)</sup>（古物を保存することは、国の文明を保存させ、民衆に賢人を尊敬させ、民衆の興味喚起するためである。筆者訳）と明記した。

“維新派”がこのような活動を展開することと共に、清政府は博物館の設置を推進するため、『続録振興工芸給獎章程』<sup>(36)</sup>（続・工芸を振興する授賞について 筆者訳）を頒布した。この章程には、個人が博物館を設置することの奨励が明記された点が特徴であった。

第七款：如有独捐巨款興辦藏書樓・博物院、其款至二十万兩以外者、請特恩賞給世職。十万兩以外者、請賞給世職或郎中實職。五万兩以外者、請賞給主事實職并給匾額、如學堂之例。

（第七條：藏書樓と博物院などに単独で投資する人に対し、投資額によって授賞する。投資額が二十万兩以上になる方は世職を授賞し、十万兩以上になる方は世職あるいは郎中<sup>(37)</sup>など実職を授賞する。投資額が五万兩以上になる方は主事<sup>(38)</sup>など実職を授賞し、匾額を贈与する。 筆者訳）

第八款：其捐集款項湊辦學堂・藏書・博物院等事僅及万金以上者、亦請加恩獎以小京官虛銜。

（第八條：學堂や藏書樓、博物院などの設立に共同出資する人に対し、投資額が万金以上であれば、中央の虚職を授賞する。 筆者訳）

これは、中国において政府が頒布した博物館に関する政令の嚆矢と筆者は考えている。

洋務運動と戊戌の変法が勃発した際には、中国政府は近代的博物館を正式に了解し始めた。これ故、“洋務派”と“維新派”が博物館のあるべき姿を民衆に紹介することは、中国における博物館学意識涵養への第一歩であった。

1898年に、戊戌の変法は失敗したが、博物館は社会教育と学校教育を推進する場所と見なされて、注目を受けた。

羅振玉は、1901年に「教育私議」<sup>(39)</sup>と題する論文を掲載した。この論文によって、羅は、「謀教育之普及、必自擴國民之聞見始。而擴國民聞見、則圖書館・博物館為先務。」（教育を普及するには、国民の見識を広めさせることである。その方法は、図書館と博物館が設置することである。 筆者訳）と述べ、博物館は社会教育の施設としての重要な役割を提示した。

次いで、光緒新政<sup>(40)</sup>が提唱した“新式教育”を推進するため、清政府は1904年に「奏定優級師範學堂章程」<sup>(41)</sup>（高級師範学校の設立について 筆者訳）を頒布し、学校博物館の地位を確立した。

清の末期には、中国はアヘン戦争を契機として、西洋の近代文明を導入するとともに、同時に近代的な博物館思想も受容した。当時の中国にとって、博物館における教育に対する機能は、国や国民を立て直す最も重要な役割を果たすものであった。それ故、当該期の博物館に関する文献は、基礎的な知識を得るための主に博物館の性格・目的・機能などについての論述が多く認められることが特記事項である。

このような学問的特質は、博物館学に関する意識が萌芽する前触れであったと筆者は考えている。

1890年代の清朝末期から、博物館は教育の場所として確立されるようになった。博物館の教育機能は、社会教育と学校教育の両方の要素を保有しておりが、一般的な博物館より、学校博物館が多量に創設されるようになる。

## 2、確立期（第一次発展期 1905~34年）

この時期の博物館の理論研究は、めざましい発展期に突入した時代であった。例えば、張謇は博物館理論と実践を同時に成功させた第一人者である。張は、1905年に上奏した「上南皮相国請京師建設帝国博覧館議」<sup>(42)</sup>（北京に帝国博覧館を設立する提案が「南皮相国」と称する官員に進言される 筆者訳）の中で、博物館が「夫近今東西各邦、其所以為政治學術参考之大部以補助於学校者、為圖書館、為博物苑」（今の世界諸国には、図書館と博物苑が政治と學術の必要な補佐として学校の一部となっている。 筆者訳）と設置の必要性を明記した。さらに博物館は、「使莘莘学子、得有所觀摩研究、以補益於学校」（学校の補助として、学生たちを博物館で研究させている。 筆者訳）とし、博物館を学校教育の一環と見なし、学校教育との連携を目指した。

次いで、同じく張による「上学部請設博覧館議」<sup>(43)</sup>（博覧館を設立する提案が学部省に進言される 筆者訳）の中では、「圖書館・博物院以為學校之後盾、使承學之彦、有所參考、有所實驗、得以綜合古今、搜討而研論之耳。」（図書館と博物館は、学校教育を支えており、学生に先賢の学問を継承させる。さらに、学生は、図書館と博物館を利用することによって、先例を参考し実験を行い、古今の知恵が総合的に研究できる 筆者訳）と述べ、学校教育にとって必要な教育施設であると主張している。

さらに、張の博物館論の特徴は、博物館に関する基礎知識を論述しながら、「六端」<sup>(44)</sup>という博物館の運営についての方策について述べている点にある。「六端」とは、（甲）建築之制（一・建物の形状と構造 筆者訳）・（乙）陳列之序（二・展示の順序 筆者訳）・（丙）管理之法（三・管理の方法 筆者訳）・（丁）模型之部（四・

博物館資料化への過程（筆者訳）・（戊）採輯之例（五・博物館資料の収集と記録（筆者訳）・（己）表彰之宜（六・博物館の寄付の表彰（筆者訳））の6点であり、博物館の重要な博物館経営について指摘している。

これ以外にも、博物館の工作人員と資料分類についても明記している。張の主張としては、博物館の工作人員は博物館に関する知識を持つべきであり、また国際交流に対応するために、英語などが話せる必要がある点も強調している。

一方、資料分類に関しては、自然・美術・歴史の3部に分け、自然の部は主に地域の博物館資料を展示し、美術と歴史の部は時代に基く博物館資料の展示を示唆している。張の博物館論は、中国における博物館学の展開において先駆的な役割を果たしたと言っても過言ではない。

さらに、同じ時期に博物館学の理論研究を展開した研究者として、蔡元培がいる。蔡は、中華民国の初代教育総長として、国民教育について大きな関心を持っていた。教育機関とする博物館は、国民教育に対して大きな影響を与えるため、蔡は博物館の教育機能の推進を掲げた。従来からの博物館は、主に学校の一部であるとする観点とは異なり、社会教育の一環とする教育機関とする観点を提唱した。蔡は、1920年に著した「何謂文化」<sup>(45)</sup>（文化とは（筆者訳））の中で、教育の場所が学校のみではなく、図書館・研究所・博物館・展覧会・音楽会・劇場・出版物も教育の場所であると述べている。さらに、1922年の北京全体市民大会において「市民對於教育之義務」<sup>(46)</sup>（市民が教育の義務を負うことについて（筆者訳））という題で講座を催し、博物館・図書館・動物園・植物園などの施設が教育機関であると語っている。

なお、中国においては、博物館で美的な教育を行うとする考え方があがあるが、それは蔡の博物館論における創案である。すなわち、蔡は、「美育実施的方法」<sup>(47)</sup>という論文のなかで美学を展開するのは、美術館・美術展覧会・歴史博物館・古物学陳列所・人類学博物館・博物学陳列所・植物園・動物園などの社会教育機関であると指摘している。その原因は、美的な教育を伝播の場は学校のみではなく、社会教育機関を利用すべきであった。蔡が提唱した美的な教育は、社会民衆に向けの教育であるから、社会教育機関の活用が必要であった。さらに、博物館展示と経営に関しても論及し、特に維新派の鄭観応が提唱した博物館は無料開放であるべきとする考えを継承している。

次いで、天津博物院（1928年に「河北第一博物院」と改称）の館長であった嚴智怡も、博物館の教育機能の重要性を提唱した。嚴は、博物館学に関する刊行物の普及に大きな関心を持っており、「欲使文



化之普及、非宣伝不為功、欲広宣伝、必以印刷品為惟一利器。」<sup>(48)</sup>  
(文化を広めることは、宣伝が第一位である。宣伝を広めることは、刊行物が第一位である。 筆者訳) と述べている。巖の理念を推進するために天津博物院では、様々な刊行物を出版している。なお、開館に向けて 1917 年に蔵品の統計による『天津博物院陳列品説明書(天然部)』<sup>(49)</sup>と『天津博物院陳列品説明書(歴史部)』<sup>(50)</sup>を出版した。翌年の 1918 年に天津博物院は正式に開館し、同年の 6 月 1 日~7 月 31 日まで「天津博物院成立展覧会」を行った。二ヶ月の会期中は、毎日「展覧会臨時日刊」<sup>(51)</sup>を刊行して、展示されている資料の紹介を行った。また、1925 年には、未成年者向けの『児童動植物図譜』<sup>(52)</sup>が刊行された。さらに、天津博物院の代表的な刊行物の『河北第一博物院半月刊』<sup>(53)</sup>は、1931 年 9 月 25 日に創刊されている。

当該期は、中国博物館学界が博物館を設置することの必要性を訴えるとともに、博物館のあるべき姿と方向性に関する発案が提唱され、特に博物館学の理論研究が大きな発展を遂げた。博物館の目的と機能・蔵品の分類と展示・博物館の運営と建物などの具体的な研究が、盛んに行われた。それ故、この時期を中国博物館学の確立期と筆者は考えている。

### 3、構築期（第二次発展期 1935~48 年）

1935 年に中国博物館協会が結成され、中国の博物館学の研究は、新たな段階に移行した。本時代における博物館に関する理論の代表的な研究者としては、楊鐘健がいる。動物学者である楊は、自然系博物館の創設を提唱するため、博物館に関する理論研究は自然類博物館を中心に展開した。

楊の代表的な学説は、1936 年に刊行の書籍に掲載された「關於陳列館的意見」<sup>(54)</sup>の中で提唱している「三使命」と称される学説である。「三使命」とは、博物館の使命が収集・保存・研究の機能であることを示しているものである。この論文では、博物館のことを「陳列館」と記しているが、陳列館と博物館を意図的に区別しているのではなく、博物館の使命と展示について述べていると考えることができる。この時期の中国博物館学界には、「陳列館」と「博物館」の名称を混用する状況があるから、「陳列館」は「博物館」と同様な施設であると考えられる。

楊は、「三使命」のそれぞれの関係を整理し、博物館の歩むべき方向を明記し、中国における博物館の使命が収集・保存・研究であることを明確に唱えた代表的な研究者の一人であった。楊の登場により、中国博物館学の構築期を迎える契機になったとすることができよう。

次いで、人類学者である楊成志は、「現代博物館学」<sup>(55)</sup>と題する論文を発表した。パリへの留学経験を持つ楊は、この論文によって博物館の定義・機能、さらには博物館学に対する研究方法についても論及している。

なお、当該期には、「博物館学」という用語を書名に付けた単行書が、いくつか刊行されている。具体的には、1936年に費畊雨と費鴻年が『博物館学概論』<sup>(56)</sup>を出版して、同年に陳端志が『博物館学通論』<sup>(57)</sup>を、次いで1941年に荊三林が『博物館学大綱』<sup>(58)</sup>を著している。

さらに、中国博物館学の展開を推進したため、中国博物館協会は博物館学に関する刊行物を数多く出版していった。その中の『中国博物館協会会報』は、博物館に関する理論を研究、発表する出版物として重要な役割を果たしている。

1940年代になると、中国における博物館学は、大学の学科として設置されるようになる。1940年から中華人民共和国の建国の1949年に至るまでの間に、中国において博物館学科を設置した大学が2校を数えた。一つは、1941年に図書博物館学系を創設した国立社会教育学院であり、もう一つは1947年に博物館専修科が創設された北京大学である。

国立社会教育学院の図書博物館学系は、中国の大学に博物館学が学科として設置された嚆矢である。当系では、荊三林が教授として教壇に立ち、荊が著した『博物館学大綱』を博物館学の教科書として使用している。荊は、博物館の経営と科学博物館に対して大きな関心を持っていた。

一方、北京大学の博物館専修科は、アメリカへ留学した経験がある韓壽萱によって創設された。韓は、中国で初めての博物館学課程を修了と同時に修士学位を取得した留学生として、欧米の博物館学の研究方法を習得していた。韓が著した「中国博物館的展望」<sup>(59)</sup>には、博物館とは社会教育機関・社会サービス機関・学術研究所であると指摘している。さらに、中国の博物館の収集・展示・教育や博物館専門職員についての内容を検討し、中国の博物館のあるべき姿を論及した。

1935年から、中国博物館学は、急速に発展しており、博物館学の体系が構築され始めている。当該期には、博物館についての論理的な著書が多く出版された。この期の中国の博物館学者たちは、博物館が教育の場所であると確信し、博物館の教育機能が活動の中心であると結論づけている。

#### 4、変革期（第三次発展期 1949~65年）

1949年の中華人民共和国の建国とともに、ソビエト社会主義共和

国連邦（以下“ソ連”と簡称）を模倣し、中国は社会主義共和制国家を目指した。それにより、当該期の博物館学は、ソ連の博物館理論に傾倒していくという特徴が見られる。そのため、博物館学に関するロシア語の書物からの訳著が多く刊行された。具体的には、『地志博物館的陳列方法：自然之部』<sup>(60)</sup>『地志博物館的陳列方法：蘇維埃時期之部』<sup>(61)</sup>『博物館陳列的組織與技術』<sup>(62)</sup>など展示に関する著論があり、『蘇聯博物館学基礎』<sup>(63)</sup>など基礎的なことに関するものや、『博物館藏品的保管與修復』<sup>(64)</sup>など保存に関する書籍などを認めることが出来る。また、ロシア語の論文ならびに海外博物館の紹介なども中国語に訳され多量に出版された。

この時期において、博物館に関する理論に対する代表的な研究者として、傅振倫がいる。1930年代から傅は、ソ連の博物館に大きな関心を持っており、ソ連の博物館についての紹介を行っている<sup>(65)</sup>。

たとえば、傅は、「蘇聯博物館界概況」<sup>(66)</sup>において、ソ連の博物館を7種類に分類し、ソ連の博物館の運営、特に保存・教育・展示である3つの機能について研究した上で、1950年代からの中国の博物館学もソ連博物館学を模倣すべきであると主張した。

この時期における傅の最も代表的な著論は、1957年に刊行された『博物館学概論』<sup>(67)</sup>である。『博物館学概論』は、ソ連の博物館学の発展を参考として、中国における博物館学の方向性を述べている著論である。これは、中華人民共和国の建国後、初めて記された博物館学通論として、当該期における博物館学の重要な指導書としての意義を持っているものである。

一方、中華人民共和国文化部は1951年10月27日に発布した条例である『対地方博物館的方針、任務、性質及發展方向的意見』<sup>(68)</sup>（地方博物館の性格・目的・發展について 筆者訳）において、博物館の任務を次のように定めている。

博物館事業的總任務是進行革命的愛国主義教育、通過博物館使人民大衆正确認識歷史、認識自然、熱愛祖国、提高政治覺悟與生產熱情。

（博物館事業の最も重要な任務は、民衆に革命の意識と愛国心を教育することである。博物館を通じて、民衆は、歴史と自然を正確に認識し、祖国が熱愛し、政治的自覚と仕事の意欲が提高できる。 筆者訳）

この文から、当時の中国における博物館の任務は、強烈な政治的思想により定められている特徴があったと見なすことができる。そして、この条例に則して、中国の博物館は大きな改造を行っていくことになる。

さらに、1956年1月に中国共産党中央委員会は、「全国知識分子問題會議」を開催した。その會議の中で周恩来は、「關於知識分子的

報告」を發表し、博物館に関する方向性を論及した。上記の報告を皮切りに、博物館に対する方向性の改造は、次第に浸透していった。

同年 5 月 21 日～6 月 2 日の間に、“全国博物館工作會議”が北京で行われた。本會議では、博物館の「三性二務」が打ち出されて明確化がなされた。博物館の「三性二務」とは、博物館が科学研究機関・文化教育機関・物質文化と精神文化の遺物及び自然標本の収蔵場所としての 3 つの性格を持っており、科学研究と人民に奉仕するという 2 つの義務を持っていることを示している<sup>(69)</sup>。

この「三性二務」は、中華人民共和国における博物館についての論理の展開において、長い影響をもたらした。

1957 年 4 月 22 日～26 日までの間に、中華人民共和国文化部文物局は、湖南省長沙市で“第一次全国記念性博物館工作座談会”を行い、記念性博物館の展開について詳しく検討した。この座談会により、この時期に中国において記念館が大きな進歩を遂げた。

博物館実践は、博物館学の応用的な側面として、博物館資料の収集整理・保存・展示及び博物館における施設の整備などの博物館における日常活動を支える技術であり、博物館の運営に対して直接的な役割がある。それ故、博物館実践は、この時期における中国の博物館事業の推進に対して、重要な位置を占めたため博物館実践に関する著論も多量に出版された。

この時期は、中華人民共和国が建国したばかりの段階である。政権を握る統治者が違うことにより、当然政策にも大きな変化が生じている。それゆえ、博物館学に関する研究にも、新たな観点や考えが展開されていくのである。

具体的には、この時期に地志性博物館<sup>(70)</sup>と記念性博物館<sup>(71)</sup>が重要な位置になった。博集が著した「学習蘇聯先進經驗發展我国博物館事業」<sup>(72)</sup>（ソ連の経験を学ぶ、中国博物館の發展方向を指導することについて 筆者訳）により、地志性博物館と記念性博物館に対する評価は、下記の通りである。

在解放后不久、除对旧有的博物館加以整頓改造外、并學習蘇聯先進經驗建立了新的類型的博物館——地志性博物館和記念性博物館。

（1949 年に第二次国共内戦が終結したばかり、中国博物館学界は、中華人民共和国の建国前に開館した博物館を、社会主義の博物館へ改造し始めた。その上で、当時には、ソ連の先進的な経験を参考し、地志性博物館と記念性博物館である 2 種類の新たな博物館を設置した。 筆者訳）

この 2 種類の博物館は、中国共産党と社会主義の拡幅を目的とする役割を担い、当時を代表的する博物館として、強い時代性を持っている。

1949年に中華人民共和国の建国から、中国博物館学の発展方向を西洋からソ連へと移行したところから、当該期における博物館学は政治意識を強く印象づけている。この変化によって、中国博物館学は、従来からの発展方向とは違い、新たな方向へ展開し始めた。それ故、この時期を中国博物館学の変革期であると筆者は主張している。この時期の中国博物館学は、社会主義的な視点から展開していた。この時期における博物館は、科学研究及び文化教育の場所として、弁証法的唯物論と唯物史観を利用してマルクス主義の研究方法を伝播していた。さらに、この時期の博物館学は、社会主義の建設のために、展開していた。

## 5、迷走期（1966~77年）

この時期における博物館事業は、完全に停滞しないから、“停滞期”と呼んでいるのは適切ではないと思っている。なお、当該期における博物館の研究は、政権の影響を受けて、博物館理論などの研究を見過ごすし、博物館の実践を偶に研究した状態になった。このような博物館理論が無視された時期には、中国博物館学が従来からの博物館の考え方と異なり、違った道に迂回していった。それ故に、“迷走期”と主張している。

1966年に、中国において、文化的に空前の惨禍となった文化大革命<sup>(73)</sup>は勃発した。1966~77年までの11年間は、博物館の事業が完全に停滞にならないが、迷走期というべき状況となった。当該期には、文化界においても政治運動が行われ、文化界における全ての科学的な研究活動が阻害された。さらに、この時期には、知識人らも不公正な待遇に遭い、迫害を受けて死亡したり自殺した人々が続出した。

文化大革命においては、社会主義の正統を守りながら、資本主義と封建主義の復活を防止したため、「破除『四旧』」<sup>(74)</sup>という運動が行われた。しかし、この旧時代の弊害を肅正する運動は、次第に暴走化して行き、多くの文化財が甚大な被害を受けることになった。その背景において当該期の博物館学にも影響を及ぼし、文化財の損害は言うまでもなく、文化財を保護しようとする博物館学者も政府と紅衛兵<sup>(75)</sup>からの迫害を受けた。このような状況にあって、博物館に関する研究は、苦境に陥っていた。

しかし一方では、中国には伝統的に金石学が隆盛であったため、博物館で文化財を保護するという収集保存機能が重要な役割を果たしていた。中国には、宋時代から金石学が重要な位置を占めた。金石学は、“金”の青銅器と“石”の石碑を研究し、金石を作成する実物の銘文によって、現存の文字資料を証左する学問である。金石学を研究するため、文化財の収集と保存は、重要な一環である。それ

故に、中国では、従来のように文化財の収集と保存を重視している。また、近代的博物館は、収集保存の機能があるから、博物館が文化財を保護する場所として重要な役割をしていた。このような社会的背景にあっても、ほんの数人の人たちにより文化財が重要な博物館資料として認識され、文化財が守られたという事実もある。

このような時代の博物館学への取り組みは、制限を受けたが研究も行われていた。この研究は、主に博物館の展示論と資料論の分野に集中している。

具体的には、『「人類和社会的起源」展覽提綱（修改稿）』（76）（特別展「人類と社会の起源」開催概要・修正案 筆者訳）『中国歴史博物館中国通史陳列説明』（77）など展示に関する単行書が刊行され、また『陝西考古・博物館資料報刊索引（1950.1—1975.12）』（78）『博物館学参考書目及論文索引』（79）など博物館学に関する文献目録も出版されている。

一方、当時は「毛沢東思想」(80)が絶対的な指導思想として位置付けられていたため、博物館学に関する研究も、その強い影響下に置かれた。例えば、「到群众中去学习—学习用毛主席思想指导采集工作的点滴体会—」(81)（大衆の中に学ぶ—「毛沢東思想」で収集活動を指導する— 筆者訳）「征集红军长征文物资料的几点做法」(82)（红军长征时期の実物資料を収集することについて 筆者訳）「要重视革命的歷史文物」(83)などの収集に関する論文や、「關於陳列工作中的群众路線問題」(84)（展示で大衆路線の活用 筆者訳）「為鞏固無產階級專政而努力—參觀文化大革命中出土文物有感—」(85)（無產階級の專制政治を守る—文化大革命時期における出土品から— 筆者訳）「我受到了一次深刻的階級教育—參觀文化大革命中出土文物的感想—」(86)（私は階級的教育を受けた—文化大革命時期における出土品を觀覽する— 筆者訳）「文化大革命期間出土文物觀後感」(87)などの展示に関する論文などが、毛沢東思想に基づく博物館活動について著されている。

一方、資料保存に関する研究は、急速に進歩した。

さらに、法令について“国务院函博口” (88)では、「国务院關於發布文物保護管理暫行條例的通知」(89)（国务院が文化財の保護と管理について暫定的條例を發布した通知書 筆者訳）「国务院關於進一步加強文物保護和管理工作的指示」(90)（国务院が文化財の保護と管理を深めることについて指導書 筆者訳）「文物保護管理暫行條例」(91)などの法令が矢継ぎ早に制定された。

この体制においては、中国共産党を宣伝するための記念館が設置されていることが特徴的であり、中国共産党が参戦し、その成果を褒め讃える博物館が開館されている。「文化的革命前后的『八路军西安辦事處紀念館』」(92)「淮海戰役紀念館巡礼」(93)などの中国共産党の

記念館を称賛する論文は、本時期の特徴として発表された。

この時期の博物館学は、国際交流が促進され、特に日本の博物館学に関する論文を翻訳し、「国際文物保護修復中心」<sup>(94)</sup>「文物的保護和修復」<sup>(95)</sup>「日本出土的中国陶瓷—參觀東京国立博物館—」<sup>(96)</sup>などの訳書が上梓されている。これらの訳著は、文化財の保護に重点がおかれる著作であることの特徴があった。文化大革命は、文化財を損害することがあったが、主に儒教思想を代表する文化財を破壊した。それに対して、他の文化財は、保護と管理された。

その他には、国際的な博物館の展開を紹介したものや、地域博物館を視点とした「地区性博物館—文化的中心—」<sup>(97)</sup>、また伝統技術の展示を示した「伝統芸術品的陳列新技术」<sup>(98)</sup>など博物館の実践的な技術にも注目している。

当該時期の博物館学は、政権下の影響において従来からの博物館の考え方とは異なり、違った道に迷走している状態であったと言える。

## 6、中興期（第四次発展期 1978~89年）

中国の文化と経済を破壊した文化大革命の過ちを改め、1978年から「改革開放」<sup>(99)</sup>政策が行われていく。博物館においても、この「改革開放」のうねりによって、様々な活動が復興し始めた。これは、博物館学に関する刊行物の出版数から見ても、再び活発な時期になったことを知ることができる。

この時期には、梁吉生が、博物館学者の第一人者として、博物館学の研究を推進している。例えば、『新中国博物館事業三十年記事（1949—1979）』<sup>(100)</sup>『博物館学書刊資料目録索引』<sup>(101)</sup>などの博物館理論に関する刊行物が発刊される中で、梁は数多くの論文を著している。当該期において、梁の論文の主題は、中国博物館学の沿革を回顧し評価することである。

本主題に関する論文は、筆者は時代によって二種類に大別している。一つは、中華人民共和国の建国前における博物館学の回顧に関する研究である「旧中国博物館歴史述略」<sup>(102)</sup>「論旧中国博物館事業的歴史意義」<sup>(103)</sup>などの論文であり、もう一つは、中華人民共和国における博物館学の展開状況に関する研究である「博物館学重建十年的回顧與断想」<sup>(104)</sup>「博物館学十年概観」<sup>(105)</sup>などの論文である。この時期の梁が博物館学に対する研究は、主に博物館学史に関する内容であった。そのために、中華人民共和国の建国前と建国後における博物館学の展開状況に対する研究は、必要であった。

その上で、梁は、博物館に関する理論の発展と動向<sup>(106)</sup>と、博物館の教育機能<sup>(107)</sup>にも関心を持っていた。

1982年3月23日に中国博物館学会が、北京で成立して第一回の

シンポジウムが開催された。このことは、1949年に中国博物館協会が解散してから中国博物館学界において博物館に関する専門組織がない状態に終止符を打つものとなった。中国博物館学会は、中華人民共和国において初めての博物館に関する専門組織として、博物館学に関する研究活動を復興することを期待された。文化大革命のために、この時期に博物館事業の発展は、まだ困難な状況に陥っていた。中国博物館学会は、このような状況を改善する要務をおびて、博物館学に関する研究を再発足した。1983年に中国博物館学会が編著した『博物館学論集(1)』<sup>(108)</sup>が出版され、内容は博物館理論・展示論・資料論・資料保存論に触れる内容であった。

さらに、当該期には、博物館理論に関する著書も多数刊行された。例えば、『博物館学概説』<sup>(109)</sup>『博物館学新編』<sup>(110)</sup>『中国博物館学概論』<sup>(111)</sup>『博物館学基礎知識』<sup>(112)</sup>などの博物館学に関する基礎知識を啓蒙する著書が出版され、『博物館学(第一輯:通論之部)』<sup>(113)</sup>『文物博物館專業基礎課綱要』<sup>(114)</sup>などの大学における専門教育に使用される教科書も上梓されるに至っている。

以上のように、この時期に博物館理論に関する論文は、従来にない増勢の特徴を持っている。それらの論文は、内容によって4種類が確認される。第1類は、博物館学を研究する必要性を主題として、博物館学に対する研究を展開することを提唱する論文である。例えば、「建議展開博物館学的研究」<sup>(115)</sup>「做好基礎工作、開展博物館学的研究」<sup>(116)</sup>(博物館学の基礎知識を固めて、博物館学に関する研究を展開することについて 筆者訳)などがあげられた。第2類は、博物館の定義・性格・機能などの基礎知識に関する論文であり、例えば「中国博物館体系之淺見」<sup>(117)</sup>「博物館的三重性」<sup>(118)</sup>「關於博物館的性質和任務」<sup>(119)</sup>である。第3類は、中国博物館学の方向性を研究する論文であり、代表的著作としては「建立有中国特色的博物館学」<sup>(120)</sup>「關於創建現代博物館学的設想」<sup>(121)</sup>などである。第4類は、博物館学と博物館学史に関する研究で、代表的著作としては「試論博物館学的定義」<sup>(122)</sup>「博物館学研究芻議」<sup>(123)</sup>(博物館学研究についての評価 筆者訳)「博物館学的研究歷史與現狀」<sup>(124)</sup>などである。

なお、1978年に「改革開放」が行われたところから、1980年代早期に至るまでの間に、中国博物館学界は、博物館が科学研究機関の位置を確保するため、博物館の科学研究機能が研究の重点になった。したがって、この時期には、博物館の科学研究機能を研究する論文が数多く出版された。1980年代中後期から、博物館における教育機能は、重要視され教育機能に関する研究者が増えていった。

このような状況にあって、中華人民共和国国家文物局(以下“国家文物局”)は、博物館をさらに有効に管理するため、博物館学講座を開講した。「我国文博專業干部的培養」<sup>(125)</sup>(中国における博物館の



工作人員の養成について(筆者訳)によって、1980~83年までの間に、国家文物局は成都・板倉・鄭州・揚州・太原・泰安・咸陽の7ヶ所の博物館で、工作人員の訓練所である“文博幹部培訓中心”を設立して博物館の運営と専門知識を教授した。その中で、“揚州培訓中心”は、博物館に関する専門知識を教授したため、『博物館学講座』<sup>(126)</sup>を編纂した。『博物館学講座』は、梁白泉<sup>(127)</sup>・宋伯胤<sup>(128)</sup>が教授した講座の内容を収載し、博物館に関する基礎知識である展示論・資料論・資料保存論・教育論・経営論を含めた内容であった。

また、当該期には、中国博物館学界が博物館法の制定について発案した。1986年に出版した「中国博物館立法論」<sup>(129)</sup>は、博物館法が制定される目的と意義・博物館法の内容・博物館法の制定計画を記述し、博物館法の制定を提唱した。翌年に出版された「制定中国博物館法的必要性、原則及其内容」<sup>(130)</sup>は、博物館法が制定される必要性和原則を記述した上に、博物館法の内容を詳しく挙げている。中国博物館学界は、従来の認識によって、文化財が高い価値を持っているから、文化財に関する法律をよく定めた。なお、博物館が文化財と密接な関係を持っているから、博物館に関する法律は、独立しなく、文化財の保護に関する点として制定された。この「制定中国博物館法的必要性、原則及其内容」は、博物館法が独立に制定することを提唱した。この論文によって、ある博物館学者たちは、博物館法が文化財法の一環ではなく、独立の体系を持っている法の観点を持っている。博物館法の制定の提唱は、従来の博物館を文化財と同一視することが異なり、博物館の位置を確立しようと思われる。

さらに、この時期に国際博物館学に関する理論研究の成果は、中国語に多量に翻訳されている。世界で発表された論文の中から特に日本の博物館学に関する論著は、数多く翻訳され出版された。その内容は、主に博物館の定義・機能など博物館概論と、博物館学の基礎知識と歴史についての研究である。例えば、『博物館概論』<sup>(131)</sup>「博物館学的研究」<sup>(132)</sup>「博物館的基本職能」<sup>(133)</sup>である。なお、この時期には、中国博物館学界が日本における大学で博物館学の課程設置について関心を寄せていた<sup>(134)</sup>。

博物館学に関する日本語の論著からの訳著が多く刊行され、その中で加藤有次と鶴田総一郎の論著は高く注目された。具体的には、加藤有次が1977年に出版した『博物館学序論』<sup>(135)</sup>は、数多い論文に分けて翻訳された。例えば、「博物館学序論」<sup>(136)</sup>「博物館法與棚橋学」<sup>(137)</sup>「博物館学史序論」<sup>(138)</sup>「現代博物館論」<sup>(139)</sup>「日本博物館学史」<sup>(140)</sup>である。

鶴田総一郎の論著については、二種類がある。一つは、直接に翻訳したものである。例えば、「博物館定義的演變」<sup>(141)</sup>は、「博物館定義の変遷—博物館概念の国際的展開—」<sup>(142)</sup>の訳著であり、「博物館

学概説」<sup>(143)</sup>は、「博物館学総論」<sup>(144)</sup>の訳著である。もう一つは、鶴田の博物館論を抜粋し、論文の順番を変更し、新しい論文を編訳したものである。例えば、「博物館是人和物的結合」<sup>(145)</sup>（博物館とは、人と物の結合である 筆者訳）「各国應得出自己的博物館定議（論点摘編）」<sup>(146)</sup>（各国は本国の博物館定議を提出すべきである・論点選編 筆者訳）である。

博物館技術に関する論著では、青木豊の『博物館技術学—博物館資料化への考古資料—』<sup>(147)</sup>が全文を翻訳され、博物館学課程の指導書<sup>(148)</sup>として出版された。

この時期は、文化大革命が終結したばかりであった為、文化大革命を振り返る風潮に従って博物館学界も博物館学の発展方向を模索した。なお、文化大革命に拠って、文化に対する研究がほとんど停滞する状態になったため、中国博物館学界は「改革開放」をきっかけに中国国内の博物館に関する理論を考え直すと同時に、海外の博物館に関する理論を輸入した。このような状況にあったところから、博物館学に関する論著が頻出して、博物館学に関する研究の中興期と言われている。

さらに、1989年以降、中国博物館学は、新たな時期に入った。この時期には、中国博物館学の「充実期（1989～現在）」と区分しているが、紙幅の関係で、この時期の名称を提出するのみを述べるにとどめる。

各時期の名称には、「揺籃期」とは、中国で博物館学を受容し始めた時期である。「確立期」とは、中国で博物館学を確立した時期である。「構築期」とは、中国で博物館学の体系を構築し始めた時期である。「変革期」とは、中国で博物館学が西洋と日本に学ぶことを変更し、ソビエト社会主義共和国連邦の博物館学に学ぶ段階である。「迷走期」とは、中国において文化大革命の勃発によって、博物館の事業の進むべき方向が定まらず、博物館学も迷走の状態になった。「中興期」とは、文化大革命の衝撃の後で中国が博物館学に対する研究の過ちを直しており、中国博物館学の特徴を探索し始めた段階である。さらに、「充実期」とは、中国博物館学界が文化大革命時期の博物館学に対する再考は一段落した。この時期から、中国博物館学界は、中国博物館学の適切な発展方向をさらに邁進している。

## 小結

本章では、1989年までの中国博物館学史の流れを記述し、中国博物館学史について主流の時代区分の上で、具体的な発展段階の区分を試作した。

なお、本章で明示した中国博物館学史の時代区分は、下記の表 3-2 の通りになる。

表 3-2 筆者が作る中国博物館学の時代区分（筆者作成）

時期	時代区分	備考	特徴
1841-1904	揺籃期		博物館の受容
1905-1934	確立期	第一次発展期 中国博物館学の濫觴（1905年）	博物館学の開端
1935-1948	構築期	第二次発展期 中国博物館学の構築の濫觴（1935年）	博物館学の構築の開端
1949-1965	変革期	第三次発展期	ソビエト社会主義共和国連邦の博物館学に学ぶ段階
1966-1977	迷走期		文化大革命
1978-1989	中興期	第四次発展期	文化大革命時期の博物館学に対する再考
1989-現在	充実期	第五次発展期	中国博物館学の特徴と適切な発展方向

清朝末期における西学東漸の盛行は、近代的博物館学意識を中国にもたらし、博物館に対する研究が次第に発展していった。この時期における博物館学について研究は、博物館の設立と博物館教育に注目したため、当該期の博物館学者の博物館論も博物館の設立と博物館教育に関する研究を偏重した。

中国博物館学の確立期を 1900 年代からと設定した。中国博物館学の濫觴は、張謇の博物館論であると筆者は主張している。この時期における博物館学についての研究は、博物館のあるべき姿を正確に把握した方向へ移行しており、博物館について理論も次第に堅固なものとなってきた。

1935 年の中国博物館協会が結成されたことは、中国博物館学の構築に画期的な歴史を留めた。この時期には、中国博物館学が体系としての構築追求が開始され、楊鐘健の博物館論を嚆矢に、当該期の博物館論は大いなる進展を見せた。

1949 年に中華人民共和国が建国され、社会主義共和制を導入するにともない、博物館に対する変革は興った。この時期に提唱された「三性二務」は、中国博物館学論の発展に大きな影響をもたらした。

文化大革命の影響が中国博物館学界に波及したため、博物館学についての研究は、博物館資料論と資料保存論の研究を行うに留まり、他の博物館論がほとんど発展しない変則的な状態に陥った。

「改革開放」によって、中国博物館学は、新たな発展方向を探していくこととなった。当該期は、博物館学にとっても改革開放の時代であり、博物館学に対する研究が急速な進歩を遂げ、論文数と著書数が多量に増加した。さらに、博物館学史に関する研究者は、梁吉生が代表として出現したことも忘れてはならない。

中国博物館学の流れをめぐって、中国博物館学の沿革を確認することは、博物館学に関する研究について重要な内容である。さらに、このような沿革の原因と今中国博物館学に齎した影響は、後の章の内容である。さらに、中国博物館学の「充実期（1989～現在）」についての内容は、今後の課題として残される。

## 註

- (1)梁吉生 1986「旧中国博物館歴史述略」『中国博物館』(02)pp.71-85
- (2)蘇東海 1989「博物館学在中国」『中国博物館』(02)pp.20-23
- (3)甄朔南 2005「中国博物館学百年発展述略」『中国文化遺産』(04)pp.113-115
- (4)<<中国博物館学史>>課題組は、2002年3月22日に中華人民共和国国家文物局が承認し、「全国文物・博物館系統人文社会科学重中国博物館学会『回顧與展望:中国博物館発展百年—2005年中国博物館学会學術研討会文集一』点研究課題」である<<中国博物館学史>>の課題を研究するグループである。この課題組は、湖南省博物館で組成し、中国博物館学史に関する著書・論文などを調査研究している。  
<<中国博物館学史>>課題組 2006「知識・理論・体系・学科—中国博物館学研究軌跡檢視一」『中国博物館』(02)pp.90-96
- (5)中国語では、ソビエト社会主義共和国連邦を“蘇維埃社会主義共和国連盟”と呼んでおり、“蘇連”と略称している。それ故に、中国語では、ソ連から学ぶことが“蘇連の様式”と呼んでおり、“蘇式”と略称している。
- (6)徐玲 2014「中国博物館学学科發展的回顧與反思」『東南文化』(05)pp.101-109
- (7)中国語では、「学科」が「学」・「学問」の意味を持っている。ここで徐が使う「学科」の意味は、学の体系としての知識の意味であると筆者は考える。
- (8)林則徐 1841『四洲志』2018『清末民初文献叢刊』朝華出版社
- (9)魏源 1842『海国図志』2011岳麓書社
- (10)徐繼畬 1848『瀛寰志略』2001『近代文献叢刊』上海書店出版社
- (11)林鍼 1849『西海紀游草』鐘叔河主編 1985『走向世界叢書』岳麓書社

- (12)郭連成 1863『西游筆略』2003 上海書店出版社
- (13)斌椿 1866『乘槎筆記』2019 朝華出版社
- (14)張德彝 1866『航海述奇』鐘叔河主編 1981『走向世界叢書』湖南人民出版社
- (15)志剛 1867『初使泰西記』鐘叔河主編 1981『走向世界叢書』湖南人民出版社
- (16)郭嵩燾 1877『使西紀程』1994『中国啓蒙思想文庫』遼寧人民出版社  
郭嵩燾 1878『倫敦與巴黎日記』鐘叔河主編 1984『走向世界叢書』岳麓書社
- (17)王韜 1890『漫遊隨錄』1982『走向世界叢書』湖南人民出版社
- (18)註(8)と同じ
- (19)陳建明 2005「漢語“博物館”一詞的產生與流傳」『回顧與展望：中國博物館發展百年—2005 年中國博物館學會學術研討會文集—』中國博物館學會紫禁城出版社 p.8
- (20)註(4)と同じ
- (21)註(4)と同じ
- (22)椎名仙卓 2005『日本博物館成立史—博覽會から博物館へ』雄山閣 p.29
- (23)家永真幸 2013「中国の「博物館」受容に関する初歩的検討」『東京医科歯科大学教養部研究紀要』(43)pp. 27-42
- (24)洋務運動とは、清朝末期の高級官僚が推進する自強運動である。清の国力を増強することを目指したため、洋務運動は、西洋の近代的文明と科学技術を導入した。洋務運動の推進者は、曾国藩・李鴻章・左宗棠・張之洞らの“洋務派”であった。
- (25)戊戌の変法とは、光緒帝の全面的な支持の下、中国の有産階級によって行われた政治改革運動であり、康有為・梁啓超・譚嗣同らの“維新派”を中心として、政治外交礼儀などの統治機関全体の大変革を指す。
- (26)史夢遙 2014「晚清時期『晚清時期《申報》(1872-1911)與博物館信息傳播研究』吉林大学・修士論文
- (27)『申江新報』は、『申報』と通称して、近代中国で強い影響力を持っていた新聞である。発行期間は、清の同治 11 年 3 月 23 日(1872 年 4 月 30 日)から 1949 年 5 月 27 日まで。『申報』は、中国における近代的新聞の濫觴としてイギリス人貿易商の Ernest Major によって上海で創立された。それ故、上海の略称の「申」を使った。
- (28)記者 1888「擬創設博物院小引」『申江新報』8 月 19 日 01 版
- (29)維新派とは、戊戌の変法に参加した推進者であった。戊戌の変法が「百日維新」ともいうから、戊戌の変法の推進者らは、「百日維

- 新」の「維新」を使用しており、“維新派”と呼んでいる。
- (30)鄭觀応 1895「考試篇」『盛世危言増訂新編』
- (31)梁啓超 1896「論学会」
- (32)強学会は、康有為と梁啓超が 1895 年に北京に設立した政治団体である。強学会は、立憲改革運動を提唱するため、海外文献の翻訳・新聞雑誌の発行・政治学校の開設など革新運動を展開した。
- (33)註(31)と同じ
- (34)康有為 1898 『意大利游記』 鐘叔河主編 1980『走向世界叢書——歐洲十一国游記二種』 岳麓書社 p.155
- (35)註(34)と同じ
- (36)1898「続録振興工芸給獎章程」『申江新報』 7月 29日 01版
- (37)侍郎は、中国における漢から清まで使った官職名である。侍郎の官位と職務内容は、王朝の更迭に伴う変化していた。清の侍郎は、皇帝に直接に進言する権限を持っていた。その官位が正二品である。
- (38)主事は、官職名である。清の主事は、普通の官吏であり、官位が正六品である。
- (39)羅振玉 1901「教育私議」『教育世界』(1)
- (40)光緒新政とは、戊戌の変法が失敗した後、清の朝廷が推進した政治改革である。光緒新政と呼んでいる原因は、光緒年間に実施されたことから、実際の主導者は光緒帝でなく、西太后である。
- (41)1904「奏定優級師範学堂章程」(1903年に制定し、1904年1月に公布) 陳元暉主編 1991『中国近代教育史資料滙編』上海教育出版社
- (42)張謇 1905「上南皮相国請京師建設帝国博覧館議」南通博物苑 1985『南通博物苑文献集』
- (43)張謇 1905「上学部請設博覧館議」南通博物苑 1985『南通博物苑文献集』
- (44)註(43)と同じ
- (45)蔡元培 1920「何謂文化」高平叔編 1991『中国近代化教育論著叢書蔡元培教育論著選』人民教育出版社 pp.277-282
- (46)蔡元培 1922「市民對於教育之義務」高平叔編 1991『中国近代化教育論著叢書蔡元培教育論著選』人民教育出版社 p.451
- (47)蔡元培 1922「美育實施的方法」高平叔編 1987『蔡元培美育論集』湖南教育出版社 p.162
- (48)嚴智怡 1931「發刊辞」『河北第一博物院半月刊』 9月 25日 1期 1版
- (49)天津博物院編 1917『天津博物院陳列品説明書(天然部)』天津博物館蔵
- (50)天津博物院編 1917『天津博物院陳列品説明書(歴史部)』天津

博物館蔵

- (51)天津博物院 1918「天津博物院成立展覧会臨時日刊」天津博物館蔵
- (52)天津博物院 1925『児童動植物図譜』
- (53)『河北第一博物院半月刊』は、1931年9月25日に創刊された天津博物院の刊行物である。天津博物院は1928年に「河北第一博物院」と改称したため、その刊行物が創刊した時に「河北第一博物院」という院名を使った。その後、当該刊行物は、『河北第一博物院半月刊画報』『河北第一博物院画報』『河北博物院画刊』などの雑誌名を使った。
- (54)楊鐘健 1936「關於陳列館的意見」『科学』20(5)p.104
- (55)楊成志 1936「現代博物館学」『国立北平政務院院務匯報』（縮微品）第七卷第三期国家図書館縮微中心
- (56)費畊雨・費鴻年 1936『博物館学概論』中華書局
- (57)陳端志 1936『博物館学通論』上海市博物館
- (58)荊三林 1941『博物館学大綱』中国文化服務社陝西分社
- (59)韓壽萱 1947「中国博物館的展望」『教育雜誌』32(6)
- (60)文化部社会文化事業管理局編訳 1949『地志博物館的陳列方法：自然之部』中央人民政府文化部社会文化事業管理局
- (61)景超・慶炎など訳 1952『地志博物館的陳列方法：蘇維埃時期之部』文化部社会文化事業管理局編
- (62)宋惕氷訳 1959『博物館陳列的組織與技術』文物出版社
- (63)蘇聯博物館科学研究所編 中国文化部文物局博物館科学工作研究所籌備処編訳 1957『蘇聯博物館学基礎』文物出版社
- (64)戴黄戎訳 1959『博物館蔵品の保管與修復』文物出版社
- (65)傅振倫 1937「蘇維埃聯邦博物館概観」『中国博物館協会会報』2(2)
- (66)傅振倫 1947「蘇聯博物館界概況」『国立沈陽博物院籌備委員会匯刊』1
- (67)傅振倫 1957『博物館学概論』商務印書館
- (68)中華人民共和国文化部 1951『対地方博物館的方針、任務、性質及發展方向的意見』
- (69)「全国博物館工作會議記要」1956『文物参考資料』06p.29
- (70)ここでの地志性博物館の意味は、社会主義の特徴を持っている地方の総合博物館である。
- (71)ここでの記念性博物館の意味は、中国共産党に関する活動・戦争・有名人などを記念する博物館である。
- (72)博集 1957「学習蘇聯先進經驗發展我国博物館事業」『文物参考資料』11(18)
- (73)文化大革命とは、1966年から1976年まで毛沢東主導による文化界における革命運動であり、「文革」に略称する。文化革命運動

と呼んでいるが、実際には、無産階級を除く、他の政治意識を肅清する改革運動であった。文革は、文化界における政治運動であるから、中国に当時の文化に関する発展に大きな悪い影響をもたらした。

- (74)「四旧」とは、旧思想・旧文化・旧風俗・旧習慣である四つの旧時代のものである。「破除『四旧』」とは、上記の四つの封建主義のものを破棄し、社会主義の政治意識を守っている。
- (75)紅衛兵は、文化大革命時期に「紅五類（労働者・貧窮の農民・革命幹部・革命軍人・革命烈士およびその子女）」の学生が主体とする団体である。紅衛兵は、文化大革命時期に造反運動が行う主体として、多くの暴行を行った。
- (76)天津市博物館編 1972『「人類和社会的起源」展覽提綱（修改稿）』
- (77)中国歴史博物館編 1976『中国歴史博物館中国通史陳列説明』文物出版社
- (78)陝西博物館編 1977『陝西考古・博物館資料報刊索引（1950.1—1975.12）』
- (79)中国歴史博物館通史図書資料室編 1977『博物館学参考書目及論文索引』
- (80)「毛沢東思想」とは、毛沢東が創立した共産主義政治思想である。毛沢東思想は、時期によってかなり大きな変化がみられるから、本論文で使う「毛沢東思想」は、文化大革命期の毛沢東思想を指す。この時期における「毛沢東思想」は、毛沢東の個人崇拜・政敵の打倒等の内容を強調した。
- (81)馮永華 1966「到群衆中去學習—學習用毛主席思想指導采集工作的点滴体会—」『自然博物館情况交流』（4）
- (82)鎮雄県紅軍長征文物資料調查征集小組 1974「征集紅軍長征文物資料的几点做法」『雲南文物簡報』（2）
- (83)衛今 1974「要重視革命的歷史文物」『紅旗』（4）
- (84)上海自然博物館籌備委員 1966「關於陳列工作中的群衆路線問題」『自然博物館情况交流』（4）
- (85)韓樹智 1972「為鞏固無産階級專政而努力—參觀文化大革命中出土文物有感—」『考古』（1）
- (86)馬朝軍 1972「我受到了一次深刻的階級教育—參觀文化大革命中出土文物的感想—」『考古』（1）
- (87)龔愛文 1972「文化大革命期間出土文物觀後感」『文物』（6）
- (88)“国務院図博口”は、1970年国務院によって成立した文化財を保護する組織であった。「図博口領導小組」も呼ばれた。
- (89)国務院図博口編印 1972「国務院關於發布文物保護管理暫行条例的通知」『文物法令選編』（6）
- (90)国務院図博口編印 1972「国務院關於進一步加強文物保護和管理



- 工作的指示」『文物法令選編』(6)
- (91) 国务院图博口編印 1972「文物保護管理暫行条例」『文物法令選編』(6)
- (92) 1976「文化的革命前后的『八路軍西安辦事处紀念館』」『文物通訊』(4)
- (93) 彭海 1976「淮海戰役紀念館巡礼」『革命文物』(6)
- (94) 岩崎友吉著 丁義忠訳 1973「国際文物保護修復中心」『国際文物博物館工作参考資料』(8)
- (95) 关野克 1973「文物的保護和修復」『国際文物博物館工作参考資料』(9)
- (96) 三杉隆敏 1976「日本出土的中国陶瓷—參觀東京国立博物館—」『国際文物博物館工作参考資料』(2)
- (97) 1973「地区性博物館—文化的中心—」『国際文物博物館工作参考資料』(10)
- (98) 1976「伝統芸術品の陳列新技術」『国際文物博物館工作参考資料』(7)
- (99) 改革開放とは、1978年12月に開催された中国共産党第十一期中央委員会第三回全体会議において鄧小平が提出した改革政策である。この政策は、鄧小平が提唱する「四つの近代化」に基づいて計画経済から市場経済への移行である「改革」と、対外開放である「開放」である二部分を含めている。この政策によって、中国の経済と文化は、長足の進歩を遂げる。
- (100) 梁吉生編 1979『新中国博物館事業三十年記事(1949—1979)』油印本
- (101) 梁吉生編 1980『博物館学書刊資料目録索引』南開大学歴史系博物館学専業
- (102) 梁吉生 1986「旧中国博物館歴史述略」『中国博物館』(02) pp.71-85
- (103) 梁吉生 1988「論旧中国博物館事業的歴史意義」『中国博物館』(02) pp.10-15
- (104) 梁吉生 1989「博物館学重建十年的回顧與断想」『中国博物館』(04) pp.2-6
- (105) 梁吉生 1989「博物館学十年概観」『文博』(06) pp.79-82
- (106) 梁吉生 1986「博物館学理論研究的趨勢」『中国博物館』(03) pp.28-29
- (107) 梁吉生 1985「博物館学教育芻議」『中国博物館』(02) pp.48-53
- (108) 中国博物館学会 1983『博物館学論集(1)』文物出版社
- (109) 江蘇省博物館学会編 1983『博物館学概説』
- (110) 黎先耀主編 1983『博物館学新編』江蘇科学技術出版社
- (111) 文化部文物局主編 1985『中国博物館学概論』文物出版社

- (112)宋伯胤編 1986『博物館学基礎知識』中国農業博物館翻印
- (113)荊三林 1983『博物館学（第一輯：通論之部）』鄭州大学
- (114)文化部文物局教育处編 1983『文物博物館專業基礎課綱要』
- (115)王鏡如·王宜 1979「建議展開博物館学的研究」『文物通訊』(2)
- (116)姚迁 1980「做好基礎工作、開展博物館学的研究」『文物通訊』  
(1)
- (117)高宗裕 1983「中国博物館体系之淺見」『雲南文物』(12)
- (118)陳紹焯·甄朔南 1981「博物館的三重性」『大自然』(1)
- (119)袁俊卿 1982「關於博物館的性質和任務」『文物通訊』(12)
- (120)梁白泉 1983「建立有中国特色的博物館学」『南京博物院集刊』  
12
- (121)劉新 1983「關於創建現代博物館学的設想」『南京博物院集刊』  
12
- (122)牛繼曾 1983「試論博物館学的定義」『山東省博物館学会会刊』9
- (123)杜顯震 1983「博物館学研究芻議」『博物館通訊』1
- (124)賈士金 1981「博物館学的研究歷史與現狀」『吉林省博物館学会  
成立大会紀念文集』
- (125)夏桐郁 1989「我国文博專業干部的培养」『中国博物館』  
(01)pp.12-16
- (126)文化部文物局揚州培訓中心編 1983『博物館学講座』
- (127)梁白泉 1983「博物館学緒論（初稿）」『博物館学講座』文化部  
文物局揚州培訓中心編
- (128)宋伯胤 1983「文物·藏品·展覽作業與宣傳教育工作」『博物館  
学講座』文化部文物局揚州培訓中心編
- (129)童舟 1986「中国博物館立法論」『中国博物館』(04)pp.1-5
- (130)朱世力 1987「制定中国博物館法的必要性、原則及其內容」『中  
国博物館』(02)pp.4-15
- (131)伊藤寿朗·森田恒之編 吉林省博物館学会訊 1986『博物館概論』  
吉林教育出版社（原本：伊藤寿朗·森田恒之編 1978『博物館概論』  
学苑社）
- (132)千地万造著 陳紅京編訊 1983「博物館学的研究」『博物館学論文  
選』
- (133)森田恒之著 劉興国編訊 1984「博物館的基本職能」『博物館研究』  
4
- (134)聞揚 1985「日本国学院大学『博物館学講座』簡介」『博物館研  
究』3
- (135)加藤有次 1977『博物館学序論』雄山閣
- (136)加藤有次郎〔ママ〕著 白英編訊 1981「博物館学序論」『文博通訊  
（江蘇）』2
- (137)加藤有次郎〔ママ〕著 陳紅京編訊 1983「博物館法與棚橋学」『文

- 博通訊（江蘇）』6
- (138)加藤有次著 趙繼敏・宋偉宏編訳 1985「博物館学史序論」『博物館研究』4
- (139)加藤有次〔ママ〕著 趙繼敏・劉興国編訳 1985「現代博物館論」『偽皇宮陳列館年鑒』
- (140)加藤有次郎〔ママ〕著 白英編訳 1986「日本博物館学史」『東南文化』2
- (141)鶴田総一郎 1981「博物館定義的演變」『国際文物博物館工作参考資料』1
- (142)鶴田総一郎 1975「博物館定義の変遷—博物館概念の国際的展開—」『博物館研究』第10卷第5号
- (143)鶴田総一郎著 寧波・劉麗華編訳 1984「博物館学概説」『博物館研究』4
- (144)鶴田総一郎 1956「博物館学総論」『博物館学入門』日本博物館協会
- (145)鶴田総一郎著 華惠倫・陳国珍整理 1986「博物館是人和物的結合」『中国博物館』3
- (146)鶴田総一郎 1986「各国應得出自己的博物館定義（論点摘編）」『中国博物館通訊』10
- (147)青木豊 1985『博物館技術学—博物館資料化への考古資料—』雄山閣
- (148)青木豊 1989「博物館技術学」『博物館技術』吉林省博物館学会・吉林大学考古学系博物館学教研室編訳 吉林大学出版社

### 第三章 中国博物館学の前夜史

中国博物館学界では、1905年に開設された南通博物苑が中国における博物館学展開の嚆矢と見なされる。その後、中国において博物館学が確立された。

これにより中国博物館学は、第一次発展期を迎え、当該期において中国博物館学は、大きな発展を遂げている。当時の中国では、各地で博物館が設立の隆盛を迎えた。

当該期は、中国の社会にとって、大きな変化を遂げる時期である。アロー戦争（第二次アヘン戦争）・洋務運動・戊戌の変法・義和団の乱・辛亥革命の衝撃とともに、中国の社会状況と中国人の思想理念は、巨大な変革の時期を迎えた。西洋からの新しい思想は、中国人に西洋文明・新たな考え方を齎した。斬新な西洋文明に対し、中国の伝統的な儒教思想は、陳腐化することとなった。その間に中国の知識階層は、博物館が個人的な宝物庫ではなく、教育の場所であるとの理解の転化が芽生えた。近代的な博物館の思想は、博物館の教育機能の向上を促した。

本章は、中国博物館学の前夜における社会状況を検討し、中国における博物館が設立された原因を分析すると共に、その後の時期に中国の博物館が設立される状況を纏め、中国博物館学の展開実態を明らかにすることを目的とする。

#### 第一節 時代的背景

##### 1、清時期

1860年に、中国の清朝はアロー戦争（第二次アヘン戦争）によって、近代ヨーロッパの科学技術をさらに知り、ヨーロッパ近代文明の科学技術を導入して清朝の国力増強を目指す洋務運動が展開された。

しかし、日清戦争によって、清朝は敗北したため、洋務運動は失敗に終わった。確かに、洋務運動が行われた清朝の国勢は一時的に回復したが、旧体制を変えずに西洋の技術のみを取り入れたため、根本的な解決とはならなかった。洋務運動は、清朝の高級官僚が推進する自強運動であることから、支配階級の利益を守るためであったので、洋務運動が失敗することは明らかであった。

洋務運動の失敗によって、新たな改革の必要性を痛感した光緒帝と中国の有産階級の「維新派」は、1898年（光緒二十四年・戊戌の年）に「戊戌の変法」を行った。「戊戌の変法」は、光緒帝の全面的な支持の下、中国の有産階級によって行われた政治改革運動であり、康有為・梁啓超・譚嗣同らの「維新派」を中心として、政治外交礼儀など

の統治機関全体の大変革を指した。

しかし、この変法は、西太后を代表とする保守派の利益を侵害したため、西太后が「維新派」を弾圧した。光緒帝は、監禁されて実権を失い、変法派の主要人物の「戊戌六君子」（端方・楊深秀・康弘人）は処刑され、康有為と梁啓超は日本に亡命した。これにより変法運動は完全に挫折した。この政治改革運動は、日本の明治維新をモデルとして立憲君主制を維持しながら政治・社会制度を大幅に改革する運動であり、100日間に亙り続いたため、「百日維新」とも呼ばれている。しかし、明治維新が日本の発展に大きく寄与したのに対して、洋務運動も戊戌の変法も当時の中国の状況を変えることはできなかった。

1900年に、キリスト教と外国人の排斥を目指す義和団は、西太后の支持を得て、欧米諸国に宣戦を布告した。この排外運動が起きたことは、庚子の年のことであるから、「庚子事変」とも呼ばれている。義和団の騒乱に対して、英・仏・独・露・米・日・伊・奥の八ヶ国が連合軍を編成した。八ヶ国連合軍は、天津と北京を攻略し、皇族の財産を略奪した。この動乱で、皇家離宮である円明園は、徹底的な破壊を受けて廃墟となった。北京が陥落した後、西太后は、光緒帝を同行させて西安へ逃亡した。

西太后は、清朝廷の統治を維持するため、八ヶ国連合軍と連携して、義和団を鎮圧した。その後、西太后は、西欧諸国の関心をかうために『北清事変に関する最終議定書』（通称『北京議定書』）結んだ。中国では、締結した年が辛丑の年であり、『辛丑条約』と呼ばれる。）を締結した。そして、西太后は、「量中華之物力、結與国之歡心」（中国の物を使い果たして、諸国の機嫌を取り結ぶ。 筆者訳）を宣言した。



図 2-1 西太后



図 2-2 光緒帝

## 2、民国時期

1911年（宣統三年・辛亥の年）に中国の状況を改変する「辛亥革命」が勃発したことで、清王朝が廃されて、中華民国が誕生した。その結果は、秦の時代から長く中国を支配する君主制が廃止され、共和制が樹立された。辛亥革命とは、孫文・黄興・宋教仁・蔡元培・章炳麟である革命派が中心として、結社参加者・海外華僑・新軍兵士・地方士紳・農民が参加した共和革命である。辛亥革命の主体とする帰国した留学生と新興知識人は、海外の革命思想の影響を受けて、古代より継承している「三綱五常」<sup>(1)</sup>の思想を排して、清の帝政を終焉へと導いた。

しかし、中華民国は、南京に成立した翌年に、中華民国の臨時大總統に就任した袁世凱によって北京に遷都された。1915年に袁世凱を中心とする北洋軍閥は、君主制を復活させようとしたが、結果は失敗に終わった。

1916年に袁が病気で死亡した後は、中華民国では、統一政府が存在しなかった。そのため、1928年までの期間は、中国が軍閥割拠の時代を迎えた。軍閥の混戦と列強の侵略が同時期に存在したため、中国の情勢は動乱となった。



図 2-3 袁世凱

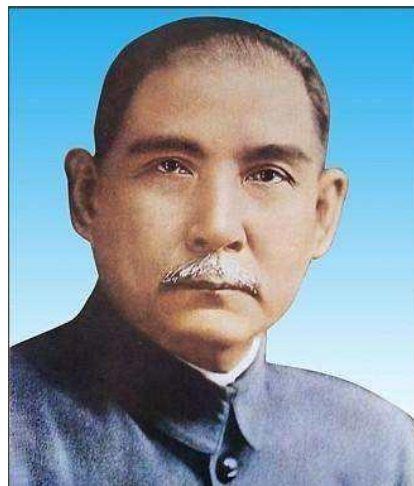


図 2-4 孫文

この間、中国国民党は、1919年に孫文によって創建されて、中国共産党は、1921年に創党された。1924年に国民党は、共産党と合作し、北伐戦争を画策した。孫の後任とする蒋介石は、1926年に北伐を開始した。しかし、その後、国共合作の解消・国民政府の分裂のため、北伐は一時停滞して、1928年に再開された。1928年に蔣は、南京を首都とする国民政府を正式に成立させた。

一方で、毛沢東の指揮の下、中国共産党は発展しており、1931年に江西省に「中華ソビエト共和国臨時政府」を成立した。その形勢に対して蔣は、1930年12月から1934年10月までの間で、共産党に

対し 5 回の包囲討伐を展開した。その後、共産党への長征がはじまった。同時期、満州全域を支配していた日本帝國の関東軍は、清朝の宣統帝を奉じ、傀儡政権である満州国を建国した。関東軍に対抗するため、第二次国共合作が結成され、1937年に日中戦争が勃発した。これ以後、第二次世界大戦の終結まで、中国は長時期に戦争の時代にあった。



図 2-5 蒋介石



図 2-6 毛沢東

## 第二節 国内の環境

清朝末期から中国人は、西欧の近代的な博物館に接触し、西洋国家との交流が益々密接になる中で、「博物館」という概念は様々な紀行文等々を介して中国人に浸透してきた。

具体的には、梁吉生が 1988 年に著した「論旧中国博物館事業的歴史意義」<sup>(2)</sup>によれば、中国の近代的な博物館は、皇室や私蔵室から発展したわけではなく、資本主義の経済と文化の発展に伴って生まれた所産であると記している。中国において博物館設立の研究に関する視点は、有産階級の改良派の代表である「維新派」が初めて提唱した。彼らは、西洋の改革を学び、新しい文化教育を推進することを主張し、博物館は文化教育を展開する重要な施設・機関として、設立しなければならないとした。しかし、戊戌の変法の失敗によって、中国人が自主的に設立した博物館の南通博物苑の設置は遅れ、1905 年になって建設は開始された。さらに、同年に張謇は、「上南皮相国請京師建設帝国博覧館議」と「上学部請設博覧館議」である博物館学の論考を上梓した。これをもって、中国における博物館学が確立されるのである。すなわち、中国で博物館の設立と博物館学の確立は同時に進めることとして捉えられると考えられる。

1885年に、康有為が『実理公法全書』<sup>(3)</sup>の中で、「博物院等項、当令其属之於公、勿据為一己之私、於是任其制度之新奇、以開民智而悅民心。」(博物館等の機関は、個人的なものではなく、民衆に属するはずである。また、国民の知識を向上させることと、国民が娯楽性を持っているため、博物館の設立は、目新しいことである。筆者訳)と述べている。1898年に、康が『大同書』<sup>(4)</sup>の中にも、博物館を設立することを主張した。

1896年に、梁啓超が強学会<sup>(5)</sup>を検討する論文の中で、「大陳各種儀器、開博物院、以助実験。」<sup>(6)</sup>(実験を助けるために、様々な機械と機器・器物などを陳列し、博物館が開催されることが必要である。筆者訳)と述べている。

さらに、維新派が提唱した『京師大学堂規程』<sup>(7)</sup>の中で、維新派は、「各国都会、率皆有博物院、収集各種有用器物、陳設其中、以備学者觀摩、事半功倍。今亦宜仿其意、設一儀器院(中略)以為実力考求之助。」(各国の都会には、博物館がある。見学者の利用のため、博物館には、様々な器物を収集し陳列する。また、見学者にとって、博物館を利用し、見学することは、労力が少なくても、効果が大いである。実業を支援するため、(中略)中国には、諸国を模倣によっても儀器院を設立しよう。筆者訳)と述べている。

次いで、1897年に湖南省の郴州市における郴州学会では、郴州学会博物館を創立して、翌年に閉館した<sup>(8)</sup>。しかし、資料の不十分の故、郴州学会博物館が設立されたことは、今中国博物館学研究の主流派に承認されていない。

戊戌の変法は、博物館事業を興すことを提唱したが、戊戌の変法が失敗したため、博物館が設立されなかった。

一方、中国において学校博物館を設立することを提唱したのは、洋務運動を發議する洋務派の可能性がある。洋務派は、博物館が学校の一部として設立された。すなわち、洋務派の観点によって、中国で最初の博物館は、学校博物館であった。

戊戌の変法の挫折を挽回するため、清政府では、新しい教育制度が施行され、隋から推進する科举制度が大きく変更された。この教育改革を推進するために、清政府は、「欽定学堂章程(壬寅学制)」(1902年・壬寅の年)と「奏定学堂章程(癸卯学制)」(1904年・癸卯の年)が頒布された。「壬寅学制」と「癸卯学制」は、日本の教育思想と学制を模倣し、近代中国の教育体系が確立された。「壬寅学制」と「癸卯学制」は、日本の「学制」(明治5年8月2日太政官第214号)と「教育令」(明治18年8月12日太政官第23号布告)など学校制度を定めた教育法令を模倣し、中国における学制を規定した。

しかし、「壬寅学制」は、内容が不十分であった故に、施行されなかった。その後、張之洞が改訂した「癸卯学制」が実行された。



1904年に頒布された「奏定優級師範学堂章程」によって、「癸卯学制」は「優級師範学堂応附設教育博物館」<sup>(9)</sup>（優級師範学堂にとって、教育博物館の設立が必要である。筆者訳）と提唱した。

このような政府の改革に応じて、教育博物館が中国で設立されるようになる。黄少明が著した「我国早期『図博合一』的図書館」<sup>(10)</sup>によれば、1902年に設立が開始された古越蔵書楼は、中国で初めての博物館と図書館が一体をなす図書館であった。徐樹蘭によって建設された古越蔵書楼は、1902年に浙江省の紹興市で一般に公開された。古越蔵書楼の規程には、「外国様式器械、各学堂皆有之。茲因学校規模未備、故附入蔵書楼、将来経費補充、即開教育博物館、將此項裁去。」<sup>(11)</sup>（各学校は、海外諸国の様々な機械がある。しかし、学校の規模が為十分でないことから、これらの機械は蔵書楼の中に収蔵する。将来には、十分な経費が得られたなら、教育博物館が設立される予定である。筆者訳）と明記されている。確かに、古越蔵書楼は、実際に博物館として利用されたかは判明していないが、上記の『古越蔵書楼章程』の第三章蔵書規程の第六節に博物館が記録されていることから明確である。さらに、1904年に設立した中国初の公共図書館の湖南図書館は、大英博物館と同じく、博物館と図書館を統合される施設であった。湖南図書館は、開催時に「湖南図書館兼教育博物館」と命名されていたが、一年後には「湖南図書館」に改称された。

黄の観点では、古越蔵書楼と湖南図書館は、博物館と図書館の機能を統合される施設であった。しかし、資料不足のため、古越蔵書楼と湖南図書館は、博物館とする展開活動が明白に判明していないことから、古越蔵書楼と湖南図書館が中国初の中国人が設立した博物館とすることは認められていないのが中国博物館学界での現状である。

中国初めての中国人が設立した博物館と公認されている南通博物院は、張謇の弛まぬ努力と心血を注いだ結果設立された。

張の博物館思想の端緒は、1897年に清政府に陳情する「農工商標本急策」<sup>(12)</sup>の中で、博覧会を開催することを下記のように提案した。

工務亟宜開,開導之計有二,一如各省開勸工会。(中略)一派大員集合資本,博采各省著名精巧之器,入巴黎大会,并選挈名商慧工同往。

(工務は、早急に展開したほうがいい。展開の方式は、二つある。一つは、各省で勸業会が開催されることである。(中略)もう一つは、高官は、資本を集めさせて、各省で著名な名物を広く取り入れる。その名物らは、選んだ優秀な工人と一緒にパリ万国博覧会に参加される。筆者訳)

さらに、1901年、張は中国の各埠頭と各省都に博覧所を設立する

と提唱した。1901年に奏聞する「変法平議」<sup>(13)</sup>の中で、張は博覧会が開催される必要があると更に進言した。

1903年に、張は、中国に滞在する日本人領事である天野恭太郎の招待に応じて、大阪で開催され第五回内国勸業博覧会を見学し、深く啓発された。帰朝した後、1905年に張謇は、張之洞と清の学部に「上南皮相国請京師建設帝国博覧館議」<sup>(14)</sup>と「上学部請設博覧館議」<sup>(15)</sup>である二つの上奏文で、北京に国家博物館を設立することを進言したが、清政府では、この請願は採択されなかった。そのため、1905年に張は、彼の故郷である南通に南通博物苑を設立した。南通博物苑は、中国博物館の嚆矢であるとされている。

しかし、2017年に尹侖が発表した「仏国人記録的中国第一座博物館—雲南府博物館—」<sup>(16)</sup>の中で、中国初めての博物館について、新しい論考がなされている。

1901年に雲南で中国初めての博物館は設立された。この博物館は、雲南府政府によって設立された公立博物館である。雲南は、中国の辺境にあるから、雲南で博物館を設立したことは中国の人々には広く知られていない。当時の雲南府中仏学校（l'École franco-chinoise de Yun-nan fou）の学院長である Georges Cordier が雲南府博物館の展開状況を記録して、1915年<sup>(17)</sup>と1922年<sup>(18)</sup>にフランスで発表した。発表した原稿の中で、雲南府博物館の写真を付け加えられていることから、当時の雲南府博物館の展開状況がよく理解できる。それ故、中国初の博物館は、南通博物苑ではなく、雲南府博物館である可能性がある。南通博物苑は、張謇の博物館学思想を具現化することとして、中国博物館学の嚆矢であると考えられる。

動乱の社会状況とともに、中国封建社会伝統的な礼儀・道徳も揺らいだ。1910年代後半の中国で急速に勃興した新文化運動は、表面には中国伝統的な文語文から白話文（口頭語）への転換した文学革命であり、実際には中国封建社会伝統的な礼儀・道徳を打破し、民主と科学を中心とする新文化を提唱した思想革命であった。西洋の教育思想を受け入れた魯迅・錢玄同・胡適・李大釗・吳虞・周作人などの知識人は、新文化運動の中心人物として、儒教批判・人道主義・文字改革を主張した。新文化運動によって、当時の中国は、民主と科学を中心とした新文化が浸透しはじめた。しかし、全ての旧文化を打破することを提唱したため、中国博物館学は発展とともに制限を受けた。民主と科学を提唱するため、中国での科学博物館と自然博物館が大きな発展をしていくことに対して、中国の伝統的な文化が葬られたため、中国での歴史博物館と古物陳列所が大きな悪影響を受けた。

1928年に、南京国民政府が成立されたことを契機として、国民党の統治区域では、一時の平和期を迎えた。この時期には、中国博物

館学界に画期的な事件が発生した。具体的には、楊鐘健が博物館論を提出し、中国博物館協会が結成されたことなどの出来事であった。そのため、1930年代から中国の博物館事業は、大きく発展すると同時に、中国博物館学が構築され始めた。当該期の中国博物館学が大きく発展した原因について、梁吉生<sup>(19)</sup>は、当時における中国の学界の状況について、下記の通り評価している。

一个学科的建立,要堅持学术的自由精神,要有寬松和諧的学术環境和研究主体的自覚意識。在学术研究中,自由探討是認識的必然条件,学术自由在任何由未知到已知的進程中都是重要的。

(ある学問の確立は、三つの要素がある。第一は、学術の自由精神が堅持されること。第二は、調和の取れた学術環境である。第三は、研究主体としての自覚である。学術研究が順調に進んで、自由に検討することは、必然的な条件である。学術の自由は、未知から既知へのプロセスの中で重要なものである。筆者訳)

社会と思想の平和期に迎えて、当該期における博物館学の構築が、芽生えるに十分な条件を備えていたのである。

一方、当該期の中国博物館学は、博物館学的の実践が脆弱であり、博物館学自体の経験に頼るだけでは博物館学を検討することはできない。そのため、当該期の中国博物館学界は、西洋の博物館学の理論研究に注目し、素早く導入した。当該期の中国博物館学は、世界の博物館学と同様の進路を辿ることとなった。

しかし、第二次世界大戦が勃発することとともに、中国博物館学は、危機を迎えるのである。

### 第三節 国際的環境

国内の環境を除き、国外の環境も中国博物館学の発展に制約していたと考えられる。西洋で博物館が構築されるまでには、長い歴史がある。『当代西方博物館發展態勢研究』<sup>(20)</sup>によれば、世界で初めての近代を特徴する博物館はアシュモレアン博物館 (Ashmolean Museum of Art and Archeology) であるとされ、1682年に一般に公開されたが、1926年までにはイギリスのレスター大学において、博物館学を大学の学科として、博物館学専攻が開設された。西洋では長きに渡り、近代博物館が運用されてはきたものの、その理論研究は展開が遅くれ、博物館学の構築も萌芽の段階にあった。

「博物館学(museology)」という単語の初見は、ドイツ人の Philipp Leopold Martin が 1869 年に出版した『*Die Praxis der Naturgeschichte*』<sup>(21)</sup>の中である。「Museologie」という単語は、上記の本の第二章名である「*Dermoplastik und Museologie*」の中で初

めて見出した。更に、ドイツ人の J.G.Th.Graesse が 1882 年に著した『Zeitschrift für Museologie und Antiquitätenkunde』<sup>(22)</sup>の中で、博物館学は学とする立場を強調した。

それに対して、「博物館実践学 (museography)」という単語の初見は、C.F.Neickelius が 1727 年に著した『Museographia, oder, Anleitung zum rechten Begriff und nützlicher Anlegung der museorum, oder Raritäten-Kammern』<sup>(23)</sup>の中である。西洋における早期の博物館学は、理論的な学でなく、実践的な学である。それ故、「museology」と「museography」の定義は、峻別しなかった。ICOM の前身とする国際博物館事務局 (International Museums Office IMO) は、1934 年にマドリードに開催された国際博物館会議により、2 巻の『Muséographie』<sup>(24)</sup>を出版した。蘇東海<sup>(25)</sup>は、上記 2 巻の『Muséographie』の内容によって、書名を『博物館学』と翻訳した。しかし、その後で ICOM が 2010 年に出版した『博物館学のキーコンセプト』<sup>(26)</sup>により、「museology」と「museography」が明確に区別された。博物館学の理論研究とする「museology」は、1950 年代に至るまで広く受け入れられた。それに対して、「museography」は、博物館の応用研究、すなわち博物館に関連する実際的な活動である。一方、「museology」と「museography」の区別は日本ではこの「キーコンセプト」を待つまでもなく、1970 年代にはいわれていることである。



図 2-7 『Museographia, oder, Anleitung zum rechten Begriff und nützlicher Anlegung der museorum, oder Raritäten-Kammern』

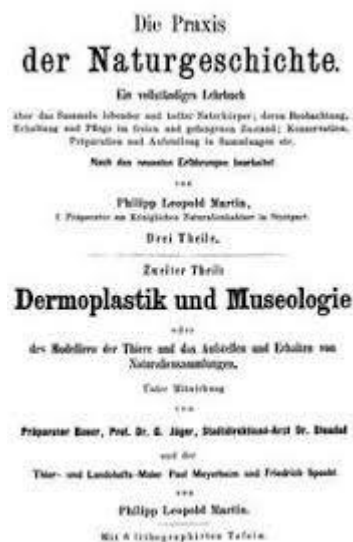


図 2-8 『Die Praxis der Naturgeschichte』の「Dermoplastik und Museologie」

一方、昭和末期まで日本における博物館学の発展は、博物館学前夜・博物館学の確立期・発展期・変革期・社会への浸透期・乖離の時代を経た<sup>(27)</sup>。

加藤有次による「博物館学史序説—博物館学に関する概念—」<sup>(28)</sup>によれば、「日本博物館学の父」と呼ばれる棚橋源太郎は、1950年に著書の『博物館学綱要』<sup>(29)</sup>の中で、初めて「博物館学」という用語を使用した。残念ながら当該書は博物館学の体系に至った内容ではなかった。日本で「博物館学」という用語を初めて使用した人が棚橋源太郎である観点は、日本博物館学界が長きに亙り把握してきたことである。しかし、棚橋源太郎が1950年に著書の『博物館学綱要』は、「博物館学」という用語を書名として初めて使用したことは事実である。

一方、「博物館学」という用語について、青木豊が2008年に上梓した「黒板勝美博士の博物館学思想」<sup>(30)</sup>の中で、日本において「博物館学」という単語の初見は、黒板勝美が1911年に出版した『西遊弐年 欧米文明記』<sup>(31)</sup>の中である観点を提唱し、日本における「博物館学」という用語を使用する時間が繰り上げられた。さらに、前川公秀が2018年に上梓した「「日暮里人」という人を知りませんか？明治42年に「博物館学」について語った人」<sup>(32)</sup>の中で、日本において「博物館学」という単語の初見は、1909年に日暮里人と称する人物が使用していたという事実が判明している。



図 2-9 棚橋源太郎



図 2-10 黒板勝美

なお、明治時代中期における日本博物館学は、西洋文化を完全に咀嚼吸収し、確立期に入った。日本博物館学の発展期である大正時代を経て、1930年代における日本博物館学は、変革期を迎えた。当該期の日本博物館学は、ドイツ郷土保護思想に基づいた郷土博物

館論を唱えたことが一つの特徴とした。その代表人物とする棚橋源太郎は、1930年に『眼に訴へる教育機関』<sup>(33)</sup>が出版した。一方、1931年に、後藤守一は、欧米における歴史博物館を視察した後に『欧米博物館の施設』<sup>(34)</sup>が上梓した。上記二冊の刊行物は、同時期の中国博物館学の展開に大きな影響を齎した。

一方、日本において、初めて「博物館学」という用語が論文名とするのは、大森啓助が1943年に出版した「ミュゼオグラフィ—博物館学—」<sup>(35)</sup>である。当該論文の構成によって、博物館の実践的技術と展示技術論などの博物館学の意識が窺える。

社会教育の浸透によって、博物館を教育施設とする重要性は日増しに高まっている。それ故、日本政府は、1951年に『博物館法』を公布した。この『博物館法』は、1949年に制定された『社会教育法』に基づいて制定した。

更に、鶴田総一郎は、1956年に刊行した「博物館学総論」<sup>(36)</sup>の中で、博物館学の定義を明記したことである。鶴田は、博物館学が教育学の一分野と主張する。鶴田の定義によって、博物館学は、「博物館の正しい発達に寄与することを目的とする科学である」。即ち、博物館学は、実用的または応用的な科学であると考えられる。

さらに、1975年から、日本博物館学の体系と日本博物館学史に関する理論的な研究は台頭した。

一方、日中においては、『当代西方博物館発展態勢研究』<sup>(37)</sup>によれば、19世紀末から20世紀初めの20年にかけて、博物館は本格的に社会へ向けて開放された機関としての機能を発揮し、世界の博物館界は初めて革命的な時代を迎えた。当該期の博物館革命は「博物館の近代化運動」と呼ばれる。その後、博物館が教育機関であるとする観点は、社会に徐々に受け入れられてきた。この観点は、中国において1930年代に発展した博物館の事業に大きな影響を与えた。当該期の中国博物館は、主に国民が持つ文化と知識を啓発し、国家の滅亡を救い、民族の生存を図る社会的な使命を担った。

1930年代から世界規模で初めて博物館学は研究の最盛期を迎えた。もちろん、この時期は、二次にわたる世界大戦の間の平和期である。頻発する戦争のために博物館は、世界で愛国主義を普及、民族文化の伝播を行う意味が与えられた。

当該期は国際社会でも戦争が多発した時代であり、戦争による破壊は、世界の博物館学の発展を大きく制約した。1914年に第一次世界大戦によってヨーロッパは、大きな痛手を負ったが、1939年に第二次世界大戦が勃発するまでの平和な環境は、博物館の事業が再び発展させる可能性があった。一方で戦争は、世界の博物館事業の発展に悪影響を与えていたが、博物館事業を保護するための公約や規定がこの時期に生まれ、各国における博物館事業の発展の規範化も

進んでいた。

#### 第四節 中国における博物館学の展開状況

##### 1、中国博物館学の濫觴

現在、中国博物館学界が中国博物館学の嚆矢については、主に三種の学説がある。それは、1905年説、1930年代説と1980年代説である。

##### (1)1905年説

1905年説は、1905年に張謇が南通博物苑を創設したことを、中国の博物館学の始動期であると考えたもので、学界において主流をなす考え方である。

19世紀に西洋の博物館観念が中国に伝わり、中国において初めての博物館が、1868年フランスの天主教イエズス会の神父であるピエール・マリー・ウード（Pierre Marie Heude）の手により建設した上海自然歴史博物館が設立された。この後で、中国において外国人によって数多くの博物館を設立される。これらの外国人が設置した博物館の設立した要因は、本国であるフランスで考えられていた博物館の理念であった。また、博物館理念は、中国で定着化することにはなかったが、近代の博物館についての考え方を、中国国民に齎したことになった。このような社会情勢をうけて、1905年に張謇が創立した南通博物苑は、初めて中国人自らが設立した博物館であったのである。

2006年に梁吉生は、張が行った博物館の設立に関して次のように評価を記している<sup>(38)</sup>。

張謇作為中国博物館啓蒙思想家,基於對什麼是博物館,怎麼建設博物館等現實問題的思考,提出了辦館宗旨和經營理念,創造了中国博物館模式。張謇的博物館思想最早地為博物館學注入了本土化基因,也可以說是中国博物館學最基礎的奠基。

（張謇は、初めての中国博物館の啓蒙思想家として、“博物館とは”、“どのように博物館を設置するのか”などの現実的な問題に基づいて、博物館の趣旨と経営理念を提出し、中国の博物館の模範を創造した。張謇の博物館思想は、博物館学に中国本土の特徴を最も早く注入したことである。つまり、これが中国博物館学の最も基礎となる定礎である。 筆者訳）

梁は、張謇の博物館理念を継承するとともに、その理念の具現化として設置された南通博物苑も高く評価している。南通博物苑は、中国のみの文化的な価値によって設置されたものではなく、中国文

明と世界文化を組み合わせているのである。このような新しい取り組み方は、南通博物苑が当時の中国国民の知識追求と基本的な娯楽要求に基づき出現された事は、中国の歴史上画期的な意味を有すると考えられる。

## (2)1930年代説

1930年代説は、1935年の中国博物館協会の成立を、中国博物館学の始動期とする考え方である。これは、中国博物館協会の成立が中国の博物館学研究において、専門化・標準化・学術化をもたらし、さらに博物館学の研究範囲に合致しているとの考え方に拠る。しかし、王宏均は、「中国学者对博物館学的學術意義上的研究、30年代才是真正起步的階段。」<sup>(39)</sup>（中国の学者が博物館学を学術的に研究し始めたのは、30年代初期の段階が妥当である。筆者訳）と述べている。博物館学についてのシステム化と標準化を行う研究は、学問とする内容を探究するだけではなく、具体的な理論の方面で意識的に中国の博物館学の枠組みを構築することだと筆者は考える。したがって、1930年代を中国の博物館学の始動期とすることは、適正ではないと考えるものである。

理由は、1930年代のこの時期については、筆者はこの時期が中国博物館学の構築の濫觴であるの観点を持っている。具体的な理由は、次の「中国博物館学の構築の濫觴」で詳細を述べることにする。

## (3)1980年代説

最後の1980年代説は、中国の博物館学は、学問の意味での本格的なスタートを文物局の研究資料室が出版した『文物通信』を始まりと見なす考え方である。『文物通信』は、率先して博物館学の研究を掲載した啓蒙書であり、創刊は1979年10月のことであった。

1981年には、国家文物局が博物館学討論会を主催して、『博物館学概論（質問稿）』<sup>(40)</sup>を編纂している。さらに、1985年に出版された『中国博物館学概論』の「頭書」の中で、「研究中国博物館事業的基礎理論和工作方法的学問、就是中国博物館学。」<sup>(41)</sup>（中国の博物館事業の基礎理論と活動の学問的研究が、中国の博物館学である。筆者訳）と明確に指摘している。さらに、初めて博物館学の命題を博物館事業の基礎理論と活動の学問的研究であると提言した点が特徴であった。

それから、1983年に中国は、国際博物館会議加盟国となり、1998年に教育部が発布した高等学校の本科専門目録の中で、博物館学が二級学科になることが規定された。これは、国家が初めて博物館学の地位を明確にしたものであった。当該期は、1930年代に西洋博物館学に鑑みることと、1950年代にソビエト社会主義共和国連邦の博



博物館学に鑑みることが脱皮し、中国の独自性を求めた博物館学を詮索した結果であったと考える。

「博物館学」とは、博物館の全てに関する研究学域であり、全ての博物館に関する研究と調査は、博物館学の研究分野に含めるものと思料する。1905年に張謇が南通博物苑を創立したことは、中国人らが自主的に博物館事業を実践したことであり、広義の意味での博物館学の範疇に含まれる歴史的事項でもあった。さらに、同年に張は博物館論も提出した。かかる観点から、筆者は中国博物館学の濫觴は1905年説が適当であると考ええる。

## 2、中国博物館学の構築の濫觴

第一章の第二節では、学問の構築の理念について論述したが、次に中国博物館学の構築過程について具体的に検証する始動期を検討する。

確かに、1905年に張謇が創設した南通博物苑から、中国の博物館界は、広義の意味での博物館学についての研究を意識的に発展させた。しかし、これらの研究は、纏まることなく巨視的な理論体系を構成し得なかったことは事実であった。

大学での学問としての位置を確立されることなく、実践活動での応用知識でまとめようとしても、合理的な体系としてまとめることはできなかったのである。また、これら自身の実践によっての理論は、特殊性が強く、全国に押し広める共通の意味が少ないと言った弱点を有していた。つまり、発展の客観的な法則性によって、理論が実践より遅く、さらに普遍的な理論の構築に時間を要したところから、十分な推敲による結果に到達することできなかった。

この停滞の状況は、必然だと考えられる。なぜならば、当該期は中国の博物館学は未熟であったところから、博物館学の構築の段階には到達しえなかった時代であったと考えられるからである。

1935年から、中国の博物館学界は、中国の博物館学研究の学術化と標準化または研究の目標を統一にすることを目指して、具体的に博物館事業の発展変化を試みると同時に、欧米からの博物館学を中国の文化に整合した中国博物館の確立に邁進した。当該期の中国博物館学者たちは、学問を構築する意識の初歩的萌芽を抱きながら、実践した時代であったと指摘できよう。

第一章の第二節の「博物館学の構築の標識」で記した如く、博物館学を構築する基準は、基礎理論・学術団体・学術著述・専門教育・科学研究・学術交流である。

### (1)基礎理論

基礎理論においては、公衆教育の機能が最も中心課題におかれて

いる。たとえば、「中国博物館学科発展の回顧と反省」<sup>(42)</sup>によれば、楊鐘健が提起した「三使命」という理論学説が、博物館学の発生段階で最も影響力を持つ論説であると述べられている。楊は、早期における中国の博物館学理論の輸入と博物館の実践に助力した。博物館学構築早期の中国の博物館学にとって、重要な学者である。楊は、1936年に「關於陳列館的意見」<sup>(43)</sup>を發表し、「三使命」という理論学説が論及した。楊が唱える「三使命」は、研究・教育・保管の博物館設立の目的理念に対して、博物館の機能をそれぞれ研究・教育・保存に対応することを明確に提唱した。具体的には、「研究」は、博物館の研究機能に対応することである。「教育」は、博物館の教育機能に対応することである。「保管」は、博物館の保存機能に対応することである。当該理論は、基本的な博物館学理論の構造をすでに備えており、当該期およびその後の博物館学研究に大きな影響を及ぼしたが、特に自然類と科学技術類の博物館を創立して科学的な知識普及を行うことに活用された。

## (2) 学術団体

学術団体においては、1935年に中国博物館協会が発足する。本協会は、中国で初めての博物館学に関する専門的な研究をすることを目的とする学術団体であった。その成立の具体は、中国の博物館学研究を組織立て、さらに標準化と専門化を踏む礎になった。

## (3) 学術著述

学術著述においては、博物館学界の学者は、専門的な角度から博物館学を探究し、西洋の先進的な博物館学の理念を鑑として、中国の博物館事業の発展を促進させる目的で論著の執筆がなされた。1936年に出版された費畊雨と費鴻年が著した『博物館学概論』<sup>(44)</sup>や陳端志が著した『博物館学通論』<sup>(45)</sup>は、中国の博物館学研究において指導的働きをした著述である。確かに、この二冊の著述内容は、日本と欧米の博物館学理念を多量に参考し、あるいはそっくりそのまま取り入れた内容であったと言えよう。しかし、この行為も、中国の博物館学の枠組みを構築する為の自主的探究の第一歩であったと把握できよう。

清朝末に博物館のことが、西洋から中国に入って来たが、それよりもやや遅れて博物館学の著述が刊行された<sup>(46)</sup>。しかし、これらの著述が言及した内容は、博物館の具体的博物館活動を拠り所とした狭義の内容であり、博物館学全体を見渡す巨視的視座では決してなかった。博物館学を系統的に紹介した最初は、博物館学の通論的な単行本の刊行であることは言うまでもない。博物館学の通論的な単行本は、中国の博物館学を系統的且つ帰納に整理した書籍であった

が、確かに、この通論的な単行本は、不充分のところがある。認められる。

この点は、中国の博物館学者が中国の博物館学を意識的に構築しようとした努力の成果であり、その積極性と進歩的な価値は認められるべきである。さらに、現段階での中国の博物館学の構築に指導と警告を齎す作用があったものと看取されよう。

さらに、当該期の学術著述の中で、中国博物館学に関する通論的単行本は、最も重要な地位を占めた。

第一章の第一節において記したように早期の中国において出版された博物館学の通論的な単行本は、『中国博物館学研究論著目録』<sup>(47)</sup>によれば、1935年から1949年まで、五冊が発刊されている。

当該期の中国博物館学は、中国博物館の特色を発展させることなく、主に日本と西洋の博物館学の観点を吸収咀嚼したものであった。当該期の通論的な単行本は、日本と欧米の博物館学の紹介と模倣であろうが、これも中国の博物館学者が博物館学の構築を初めて意識的に探求し、博物館学に関する様々な問題を巨視的に把握した結果であり、歴史的な成果なのである。中国の博物館学界は、中国における博物館学の構築の沿革を窺えることを期待し、さらに、博物館学の構築をさらに完備し、中国の博物館学の発展に期待するものである。本論文には、この五冊の博物館学の通論的な単行本に基づいて、当該期の中国博物館学の構築について検討する。

#### ① 費畊雨と費鴻年、共著に拠る『博物館学概論』<sup>(48)</sup>

『博物館学概論』は、中華書局が1936年に費畊雨と費鴻年により上梓され、主に博物館の発展史と博物館実務の概況を紹介した書である。

本書は、13章からなり、主に西洋の博物館史、博物館分類と博物館の応用を紹介したものである。費鴻年は、序言の中で次の如く記している。

博物館在社会教育上占一極重要的地位、(中略)主其事者往往缺乏博物館的常識、以致有博物館之名、而不能举博物館之实的、比比皆然。(中略)余觉此種書籍的必要、(中略)如能有益於教育界、則此書之作、就不失其意義了。(後略)

(博物館は、社会教育の中に在って、極めて重要な地位を占める。(中略)その主事者は、往々に博物館の常識が欠ける。その結果は、博物館が名ばかりあって実質が伴わなかった。(中略)私は、この種類の本が必要と思っている。(中略)教育界に有益であれば、本書は、意味を失わない。(後略) 筆者訳)

以上からも明白であるように、本書の主な目的は、博物館の常識を普及させ、博物館の社会教育の意義を重視することである。そして、序言の中で、「(本書は)以日人棚橋氏所著『訴於眼的教育機関』為藍本。」(本書は)日本人の棚橋源太郎が著した『眼に訴へる教

育機関』を底本として著したものである。(筆者訳)と明記しているところから、棚橋源太郎の博物館理論に対して一定の評価をしていることも推し量られる。

## ②陳端志編著『博物館学通論』<sup>(49)</sup>

『博物館学通論』は、上海市博物館が1936年に刊行したものであり、中国で初めての博物館理論と博物館経営(実務方法等)を系統的に論述した単行本である。本書は、陳端志による単著である。

また、胡肇椿は、本書の序言で、博物館の基本使命を次の如く記している。

博物館無問規模之宏陋、靡不活躍於民衆智識之普遍、與高深研究之策進、其影響於国家之隆替、民族之興靡、夫豈偶然!建国以来、内患外侮、曾無寧歲、於国家百年之計、遂多疏略、而博物館事業之運動、亦感蹉后。比歲之間、当軸諸公。奮鬪於国家興亡憂患之間、益事於生聚教訓為民族復興之算、而博物館事業為普及教育、提高民族意識、增進研究精神之要途、提唱之責、要不容懈。

( (欧米の)博物館は、規模の如何によらず、民衆に知識の普及と研究を深めることに力を入れた。それは、国家と民族の栄枯盛衰を影響することが偶然ではない。建国以来、内憂外患があり、平穩な年がないから、国家に関する百年の計が疎略した。博物館の事業も停滞した。このような時、我々は、国家の興亡と憂患を着て、民族復興の計算を考える。博物館の事業は、教育を普及すこと、民族意識を高めること、研究の精神を増進することである。この責任を提唱して、怠慢を許さない。(筆者訳)

以上からも明確であるように、当該期の中国博物館学界は、博物館に囑望され、国家の滅亡を救い、民族の生存を図る歴史的な意味を与えた面も多分に存在する。

さらに、著者の陳は自序の中で、本書刊行の意義について次の如く記している。

其在吾国、除若干種品目刊物及偶或散見於報章雜誌的論文外、尚無較有系統的專書。(中略)本書出版、視為吾国博物館学的一个前哨也可。

( (博物館を研究する書籍は、)中国において、いくつかの品目の刊行物や、新聞と雑誌に論文を偶々散見することを除いては、いまだ系統的な単行本がない。(中略)本書が出版されることは、中国の博物館学の前哨であると思う。(筆者訳)

つまり、本書が上梓されることは、中国の博物館学にとって初の系統的な専門書となり得ることである。この点も、当該期の中国博物館学界が博物館学を意識的に構築している表現である。

本書は、18章を立章し、主に博物館学の理論知識と博物館の実際の応用操作を紹介した本格的とも表現できる博物館学の書籍であった。

### ③ 陳端志が編著した『博物館』<sup>(50)</sup>

『博物館』は、商務印書館が1937年に刊行したものであり、主に博物館の基礎理論と構築の具体的な活動を論述して、理論的な面から博物館設立の計画に関する指導を行う書であった。本書は、5章から構成され、主に博物館運営の実際の操作に関する課題を検討する。

### ④ 荊三林が編著した『博物館学大綱』<sup>(51)</sup>

『博物館学大綱』は、荊三林の執筆による単著で中国文化服務社陝西分社が1941年に刊行したものである。荊は、自序の中で本書の編著目的を明示するなかで、博物館の重要性を説明することを最大の目的とすると述べている。そのため、博物館学の他の内容、具体的には博物館の諸機能である収集、展示などの内容については言及しないとしている。故に、本書が関連する博物館理論面も限界であり、主として博物館学の理論を主題とし、実務面に関しては内容を簡単に言及するに留まっている点が編纂上での特質である。本書を編著した直接的な原因は、「算来算去、総計不過一二十篇、看這是多吗的恐慌阿。」(博物館学についての著述が約二十編を数えるに過ぎないことは、余りに博物館学についての著述が少なすぎ、恐慌させることである。 筆者訳)と述べている点からは、荊は博物館学の社会的啓蒙を目的として著述したものと理解できよう。

さらに、深い理由は、「現代的戦争、是文化的戦争。文化落后的民族、只有作奴隶、文化落后的国家、只有被滅亡。」(現代の戦争は、文化戦争である。文化が落後している民族は、奴隷としてしか在り得ず、文化が落後している国家は、滅亡しているだけだ。 筆者訳)と述べ、民族が保持する文化の重要性を強調し、それを発見し保存し大衆に見せることができるのが博物館であり、その意味でも博物館の国家的な重要性を記した点が特徴であると指摘できよう。

本書は、6章から成立するが、主に博物館の保存・研究・鑑賞の機能論と陳列方法に関する博物館機能論を論究するも、その実務面には触れていない。荊の博物館学思想は博物館展示を中心とする博物館機能論であることを窺い知る。

### ⑤ 曾昭燏と李濟の共著に拠る『博物館』<sup>(52)</sup>

『博物館』は、曾昭燏と李濟の共著であり、国民党が経営し当時南京にあって現在は台湾に移転した出版社の正中書局が1943年に刊行したものである。主に博物館の実務面に偏重している点が本書の特質であり、博物館の様々な業務にとっては指導的な書籍ということが出来る。

本書は、10章から構成され、博物館の実務面とは別に、主に戦時における博物館の対応方法が比較的詳しく論述されている。

1931年の満州事変を契機に、関東軍による侵略が開始され中国東北部（あるいは地方・地区）全域が支配された。1933年、日中戦争の戦火を避けるために、北京の故宮から多量の貴重な収蔵品は現在の南京博物館である中央博物院への避難がなされた。やがて、南京にも戦火は及び戦火を避ける為文物は、再び移送されることになり、多くは当時四川省の重慶、現在は重慶直轄市の巴県（80箱）・峨眉県（7287箱）・楽山県（9331箱）に所在した祠堂・寺・岩窟などの場所に運ばれて保存された。

例えば、楽山県安谷郷の朱潘劉三氏祠・宋氏祠・趙氏祠・陳氏祠・易氏祠・梁氏祠の6ヶ所の祠堂と峨眉県の武廟・巴県の飛仙岩（碑金岩）であった。

この際、曾は欧州諸国の戦時における博物館の先例を紹介し、被占領地区には文物の保護を要務にして、他の地区には教育事業を要務とした。具体的な、戦時における博物館事業は、被占領地区においては従来通りの博物館事業を続ける上で、文物の保護が最も重要な任務になっていた。そして、短期展覧会を開催して、博物館の宣伝事業を止めてはいけないと主張した。他の非戦闘地区では博物館が教育機関として、教育事業を継続させたのであった。学校数が不足のため、博物館の建物は、学校として使用するなどの苦難に見舞われたことなども詳細に記されている。さらに、非戦闘地区の西南地区には、博物館の数は少ないから、臨時的な展覧会の開催が必要であった。

#### **(4)1942年の専門教育機関に於ける博物館学講義**

専門教育機関における博物館講義の最初は、前述した『博物館学大綱』（1941年刊行）の著者である荊三林が、1942年に国立社会教育学院に設けられた図書館博物館学専攻課程で“博物館学”を講義したのが中国における大学での講義の嚆矢であり、中国での博物館学から博物館学の構築への記念的昇華であったと評価できよう。

大学に博物館学専攻を開設することは、大学での講義と通して中国での博物館学の専門者を養成することができ、博物館学の学術化と専門化を齎す原因となった。

上記のこれらの事実によって、中国の博物館学の構築意識は芽生え始め、実践の開始も確認される。

「中国博物館学科発展の回顧と反省」<sup>(53)</sup>によると、博物館学が学術名称として使用されるのは、1930年代のことである。これが、中国の博物館学の構築の濫觴と看取される。1935年に中国博物館協会が設立され、博物館学や博物館学教育などの学術の概念を明確に規定

して、強烈な学問の意識を表現したのであった。このことも一つの契機として、博物館学は専門的な学術科目として研究され始めた。その研究は、目的性と組織性を持っており、博物館学問の構築と博物館実践の両面を意識的に行ったのである。

以上の理由に基づいて、中国の博物館学の構築の嚆矢は、1935年に認めることができると考えるものである。これは、博物館学の研究者らが結成した組織であった。

## (5) 国際交流

1935年11月から翌年の1936年3月にかけてロンドンで開催された「倫敦中国芸術国際展覧会」は、中国文化と伝統的芸術の優秀を西洋に展示した。今回の展覧会で、故宮博物院・中央研究院・河南博物院など有名な博物館は、多量の蔵品を出陳した。

さらに、今回の展覧会に関する図録は、4巻本の『参加倫敦中国芸術国際展覧会出品図説』<sup>(54)</sup>・『参加倫敦中国芸術国際展覧会出品目録』<sup>(55)</sup>が刊行された。

## 小結

中国博物館学の起源について、中国は、日本と西洋の往来が清末から日増しに盛んになっていた。西洋の近代思想が齎されるに伴い、近代的博物館は、西洋の宣教師によって中国で生まれた。中国は、洋務運動・戊戌の変法・光緒新政・辛亥革命・五四運動を経過し、博物館に関する思想を受け入れた。その故、博物館学に関する研究の必要性は、著しくなった。しかし、動乱の最中にあった中国は、博物館学の発展に対して、平和な社会環境が提供できなかった。そのために、中国博物館学の発展は、艱難辛苦と言っても過言ではない。

中国博物館の濫觴と中国博物館学の濫觴は、大きな社会変革を背景にして展開したという歴史を有している。それ故、当該期の中国博物館学に関する研究には様々な問題点が看取される。

清朝末期に西洋人が創設した博物館から南通博物苑、そして中国博物館協会に至り、中国における博物館学は、約半世紀に渡り発展を遂げた。当該期の中国は、社会変化の時期にあり、その不安定な時期は、中国の博物館学の発展に大きな影響を与えるに十分な社会環境であった。

科学博物館についていえば、西洋の科学技術に吸収し、中国における科学博物館は設立された。また、国際交流のために中国における博覧会は開催された。一方で、近代的な博物館の意識を導入したが故に、清朝末期から民国中期の間は、多量の博物館が現れた時期

となったのである。このような社会とともに、当該期の中国博物館学は、大きな発展を遂げたのである。中国においては、博物館の設立だけではなく、博物館学の理論研究も大きく向上させた。

## 註

- (1)「三綱五常」とは、儒教が推行する道徳であり、人として守るべき道義である。「三綱」とは君と臣・父と子・夫と婦の間における三つの道徳であり、「五常」とは仁・義・礼・智・信である五つの道義である。
- (2)梁吉生 1988「論旧中国博物館事業的歴史意義」『中国博物館』
- (3)中国現代学術経典 1996『中国現代学術経典:康有為卷』河北教育出版社
- (4)康有為 1919『大同書』上海長興書局
- (5)強学会は、康有為と梁啓超が 1895 年に北京に設立した政治団体である。強学会は、立憲改革運動を提唱するため、海外文献の翻訳・新聞雑誌の発行・政治学校の開設など革新運動を展開した。
- (6)梁啓超 1896「論学会」
- (7)京師大学堂書類選集 2001『京師大学堂規程』北京大学出版社 p.28
- (8)侯良 2005「回眸與前瞻—再談湖南博物館事業—」『回顧與展望:中国博物館發展百年—2005 年中国博物館学会學術研討會文集—』中国博物館学会紫禁城出版社 pp.10
- (9)舒新城編 1979「奏定優級師範学堂章程」『中国近代教育史資料(中編)』人民教育出版社 p.703
- (10)黄少明 2005「我国早期『図博合一』的図書館」『大学図書館学報』pp.64-67
- (11)徐樹蘭 1902『古越藏書樓章程』清光緒二十八年古越藏書樓刊本
- (12)張謇 1897「農工商標本急策」1931『張季子九録・実業録』中華書局
- (13)張謇 1901「変法平議」1931『張季子九録・政聞録』中華書局
- (14)張謇 1905「上南皮相国請京師建設帝国博覧館議」1985『南通博物苑文献集』南通博物苑
- (15)張謇 1905「上学部請設博覧館議」1985『南通博物苑文献集』南通博物苑
- (16)尹侖 2017「仏国人記録的中国第一座博物館—雲南府博物館—」『雲南档案』
- (17)Georges Cordier 1915 『*Le Musée de Yunnan-fou*』 Bulletin de l'École française d'Extrême-Orient pp. 25-38
- (18)Georges Cordier 1922 『*Note additionnelle sur le Musée de Yun-nan fou*』 Bulletin de l'École française d'Extrême-Orient



- pp. 135-138
- (19)梁吉生 2006「博物館学本土化発展及其今後路向」『中国文物科学研究』
- (20)楊玲・潘守永編 2005『当代西方博物館發展態勢研究』学苑出版社
- (21)Philipp Leopold, Martin 1876『*Die Praxis der Naturgeschichte : ein vollständiges Lehrbuch über das Sammeln lebender und totdter Naturkörper; deren Beobachtung, Erhaltung und Pflege im freien und gefangenen Zustand; Konservation, Präparation und Aufstellung in Sammlungen etc.*』Bernhard Friedrich Voigt
- (22)Johann Georg Theodor, Grässe 1882 『*Zeitschrift für Museologie und Antiquitätenkunde sowie verwandte Wissenschaften*』Wilhelm Baensch Verlagshandlung
- (23)Caspar Friedrich Neckelius 1727 『*Museographia, oder, Anleitung zum rechten Begriff und nützlicher Anlegung der museorum, oder Raritäten-Kammern*』Leipzig und Bresslau : Bey Michael Hubert
- (24)Conférence internationale d'experts pour l'étude des problèmes de muséographie générale 1934 『*Muséographie: architecture et aménagement des musées d'art*』Conférence internationale d'études, vol.1, Madrid
- (25)蘇東海 1998『博物館的沈思—蘇東海論文選・卷一—』文物出版社 p.24
- (26)ICOM 2010『博物館学のキーコンセプト』<http://icom-kyoto-2019.org/jp/icom-japan.html>
- (27)本論文が取り上げる日本博物館学の時代区分の観点は、青木豊が2009年に上梓した「博物館学史序論」の中で提出した主張である。(青木豊 2009「博物館学史序論」『國學院大學博物館學紀要』34pp.1-14)
- (28)加藤有次 1971「博物館学史序説—博物館学に関する概念—」『國學院大學博物館學紀要』3pp.55-63
- (29)棚橋源太郎 1950『博物館学綱要』理想社
- (30)青木豊 2008「黑板勝美博士の博物館学思想」『國學院大學博物館學紀要』32pp.1-6
- (31)黑板勝美 1911『西遊弑年 欧米文明記』文会堂書店
- (32)前川公秀 2018「「日暮里人」という人を知りませんか？明治42年に「博物館学」について語った人」『國學院大學博物館學紀要』42pp.121-126
- (33)棚橋源太郎 1930『眼に訴へる教育機関』賓文館

- (34)後藤守一 1931『欧米博物館の施設』帝国博物館
- (35)大森啓助 1943「ミュゼオグラフィ—博物館学—」『新美術』
- (36)鶴田総一郎 1956「博物館学総論」『博物館学入門』日本博物館協会
- (37)註(20)と同じ
- (38)梁吉生 2006「博物館学本土化発展及其今後路向」『中国文物科学研究』 p.14
- (39)王宏均 2001『中国博物館基礎』上海古籍出版社 p.20
- (40)国家文物局博物館学討論会 1981『博物館学概論(征求意见稿)』  
国家文物局博物館学討論会
- (41)文化部文物局 1985『中国博物館学概論』文物出版社
- (42)徐玲 2014「中国博物館学学科発展的回顧與反思」『東南文化』
- (43)楊鐘健 1936「關於陳列館的意見」『科学』 20(5)
- (44)費畊雨・費鴻年 1936『博物館学概論』中華書局
- (45)陳端志 1936『博物館学通論』上海市博物館
- (46)註(42)と同じ
- (47)段勇主編 2010『中国博物館学研究論著目録』新華出版社
- (48)註(44)と同じ
- (49)註(45)と同じ
- (50)陳端志 1937『博物館』商務印書館
- (51)荊三林 1941『博物館学大綱』中国文化服務社陝西分社 p.30
- (52)曾昭燏・李濟 1943『博物館』正中書局 p.4
- (53)「中国博物館学史」課題グループが撰じた「知識・理論・体系・学科—中国博物館学研究軌跡檢視—」によれば、19世紀40年代のアヘン戦争から20世紀初頭まで、中国において数十人が様々な文章の中で、「博物院」や「博物館」という言葉を言及し、記載した博物館の名称が100館を超えた。1905年以前の近代新聞は、海外博物館と博覧会についての報道が20種類の新聞に300編以上の文章が掲載されていた。「博物館」という言葉の中国語に翻訳した初登場は、林則徐が纂訳した『四洲志』という本の中である。そして、郭篤焘、康有為、陳宝泉を代表とする学者らは、博物館の内部発展及び運営規則を深く研究し始めた。例えば、康有為が著した『意大利遊記』「保存中国名跡古器説」と陳宝泉が著した「天津教育品陳列館議紳陳宝泉上周総弁意見書」。
- (54)倫敦中国芸術国際展覧会籌備委員会編 1936『参加倫敦中国芸術国際展覧会出品図説』倫敦中国芸術国際展覧会籌備委員会出版
- (55)倫敦中国芸術国際展覧会籌備委員会編 1935『参加倫敦中国芸術国際展覧会出品目録』倫敦中国芸術国際展覧会籌備委員会出版

## 第四章 中国博物館学の揺籃期における受容と形成

### —日本の博物館学が中国へ与えた影響—

19世紀前半の中国と日本は、長期間の鎖国の中で、閉鎖的な社会として自給自足の生活をしてきた。しかし、中国は、1840年に英国とのアヘン戦争に敗北して余儀なく開国させられた。それに対して、日本は、1854年にアメリカとの日米和親条約を締結して開国した歴史を有する。なお、西洋との国力の格差を実感した中国と日本では、経済力と軍事力を高めることを目指す近代化運動が行った。そのために、同じアジアに属している日本と中国は、近代化の歩みの発端は相似しているが、結果は大きく異なった。かつての日本は、隋唐時代に遣隋使・遣唐使を派遣し、中国の知識と文化を学んだ。しかし、千年を経て日本は、中国の軍事と経済を完全に超えて、列強に座したのに対して、中国は侵略と内戦の窮地に陥った歴史を有している。かかる状況にあった中国は、日本の近代化を学び始めた。その中で、中国は近代博物館と近代的博物館学意識も日本の影響を強く受容した。

また、中国博物館学界には、日本の博物館と博物館学を研究する論文が現在も多い中で、中国博物館学を日本博物館学と比較検討した論文は少ないことも事実である。その中でも、中国博物館学史を日本博物館学史と比較する研究はさらに少ないのが実情であるところに、本研究の独創性は存在しているものと考えている。

具体的には、殷志強が1991年に出版した「中日美三国博物館的機構設置比較」<sup>(1)</sup>と、2002年に任宏妮が発表した「中日两国博物館機構設置之比較」<sup>(2)</sup>は、日中両国の博物館の設置を比較した数少ない先行研究である。2010年代に入ると、中国博物館学界は、日中両国の博物館学の理論に関する論文が発表されている。特に、博物館の教育職能についても論及した。

さらに、中国博物館学史を日本博物館学史と比較する研究は、1991年に項隆元が書いた「中日两国近代博物館事業產生之比較」<sup>(3)</sup>を代表とする。

また、中国博物館学史を日本博物館学史と比較する研究が少ない原因は、日本の博物館学は、中国博物館学に影響した期間が短時間であった点に起因すると考えられる。つまり、時代に応じて中国博物館学の発展は様々な影響を受けて、具体的には、西洋諸国・日本・ロシアの博物館学の影響を受けた。その中で、日本の博物館学は、主に1940年代以前に中国博物館学の発展に影響を及ぼし、中国博物館学に影響した時間が短かった。それ故に、日中両国における博物館学史の比較についての研究は、不十分な現状になっている。しかし、日本博物館学が中国の博物館学に齎らした影響は、中国の博物館学の理論化と発展にとって、効果的であったことは事実である。

そのために、本章では、揺籃期の中国博物館学に関する文献資料を挙げて、日本博物館学から触発を受けた要点を論述するものである。また、この影響を受けた中国博物館学の発展については、同時期における日本博物館学と比較し、両国が結果として異なる博物館学を構築した原因を究明するものである。

さらに、日中両国の社会情勢を研究し、この原因を究明することを目的とするものである。

なお、日本の博物館学が中国の博物館学にもたらした影響を研究し、その原因を分析することにより、中国博物館学の発展、殊に 1900 年代以前における中国博物館学の発展状況については、客観的把握を行おうとするものである。

## 第一節 19 世紀後半期における中国博物館学の揺籃期・博物館理論編

### 1、清時代末期における日本の博物館に関する紹介

清朝末期から、清の有識者らは従来からの「中華思想」<sup>(4)</sup>を打破し、清が世界一強い国ではない事実を認識したうえで、西洋の近代化の状況を中国国内に紹介した。さらに、アヘン戦争(1840—42年)・アロー戦争(1856—60年)・太平天国の乱<sup>(5)</sup>(1851—64年)を経て、清の支配階級は西洋の近代軍事の能力に驚嘆し、1861年に洋務運動は開始された。

洋務運動は、「中学為体、西学為用」<sup>(6)</sup>(中国の伝統的な学問と思想は、主体として、西洋の技術と器物を道具として活用する。筆者訳)の思想を提唱した。「中体西用」思想により、当該時期は西洋へ留学した“遊歴学者”と外交官の増加が顕著に認められるのが時代的特徴である。

しかし、洋務運動の推進者らは、「中体」を墨守し、ただ西洋の技術のみを利用したことにより洋務運動は失敗に帰し、禍根を残す結果となった。

なお、この「中体西用」の出典は、1842年に魏源が編著した『海国図志』<sup>(7)</sup>の中で、提示された「師夷長技以制夷」(外国の技術を学んで、この技術を使って外国を支配する。筆者訳)に基づく理念であった。

一方、『海国図志』を受容した日本は、1868年に明治維新を断行し、徹底的な改革を遂行した。明治維新时期には、「和魂洋才」なる用語が造語され、日本は西洋の技術のみを学ぶのではなく、西洋の諸制度の受容を目指したのであった。明治維新によって、日本は立憲君主制を確立し、経済・軍事・文化などの諸方面に成功を収め、

国力が増強して西洋諸国のような近代的な国家の礎を築いた。

さらに、明治維新に拠る西洋文化の受容の一端として、日本では近代的博物館が設立され始めた。このような状況下において、中国の有識者は日本における博物館の状況を記録し、中国国内に紹介したのであった。以下これらを紹介する。

### (1)見聞録・日記

当該期に外国へ行った人々は、当地の状況を記録し、見聞録と日記をよく書いた。これらの見聞録と日記によって、中国民衆は、外国の博物館の発展状況を理解する契機となった。

なお、遊学の目的地については、中国と同じ地域である東アジアの日本は、距離が近いなどの点からも当時の最も良い国であった。

#### ①李圭『環遊地球新録』（1876年刊行）



図 4-1 李圭



図 4-2 『環遊地球新録』

1876年に、李圭は、フィラデルフィア万国博覧会に参加し、上海→日本→アメリカ→英国→フランス→インド→ベトナム→上海の順序で世界一周の船旅を達成した。この旅によって李は、『環遊地球新録』<sup>(8)</sup>を編纂した。その第四巻の「東行日記」<sup>(9)</sup>では、李が日本に滞在する間に、大阪の博物館を観覧し、博物館の姿を下記のように記録している。

（前略）又偕遊博物院、亦仿西法開設、広人見識。每人以寛永錢五十文購木牌、始可進院。内列各国貨物機器、各種化石。有枯木成石、骨殖成石、皆歴久所變化者。又有歴代君后冠服、刀劍器皿及男女骸骨胎胚、鳥獸虫魚皮骨、即中華之金石碑帖書画亦有之。如所見宋徽宗白鷹、朱文公墨跡、宋元板書籍、皆世所宝貴者。

（（前略）友人と一緒に観覧した博物院は、西洋の博物館を模倣して設立されたものである。この博物院によって、観覧者の見識は増加する。観覧者は、寛永通宝の50文で入館券を買って、博物院に入館できる。この博物院には、各国の貨物と機械・各種の化石を展示している。（化石とは、）木や骨などが長い時間を経て変化したものである。また、歴代天皇と皇后の冠服

をはじめ、刀剣・器皿（などの人文系資料があり）、人骨・動物の標本（などの自然系資料）もある。また、中国の青銅器・石碑・書画などもある。例えば、北宋の徽宗が作った「白鷹図」・朱熹の墨跡・宋と元時代の木簡・書籍など、全て世界でも貴重なものである。 筆者訳)

李の記録によって、上記の博物館には人文系と自然系資料があるから、この博物館は、総合博物館であると理解できよう。李は、この博物館の具体的な名称を言及しなかったが、『明治大正大阪市史・第1巻・概説篇』<sup>(10)</sup>の「第9章 文化及風俗」に「一、博物場」の節があり、その中で「大阪博物場」と称する博物館に相当する施設がある。大阪博物場は、1875年11月に開館した博物館・美術館・植物園・図書館・公園などをあわせた総合産業文化施設であった。また、『大阪博物場概則並条例』<sup>(11)</sup>の「概則 第六条」で「場ニ入ル者ハ必ズ一人一枚ノ通券ヲ持ツヘシ券ノ價小會ハ新貨三錢大會中ハ五錢トス」と記録した。

上記の資料によって、「大會中」はチケットを「新貨五錢」と規定し、李はチケットを「寛永錢五十文」と記録した。また、「新貨条例」によって、寛永通寶銅1文錢は新貨1厘に相当し、新貨10厘は新貨1錢に相当した。そのために、李が記録したチケット料は、大阪博物場が規定したチケット料と同じであった。

上記の推測によって、李が記録した博物館は大阪博物場である可能性が高いと考えられる。

李の記録によって、上記の博物館は、総合博物館であると理解できよう。李は、駐日大使ではなかったが、初めて日本に上陸した中国人官僚として、日本における博物館を記録した。しかし、李は、日本を經由してアメリカまで行く予定であったから、日本滞在期間は僅か十日間であったところから、残念ながら日本での博物館に関する記録は少なく、以上に留まる。

## ②黄遵憲『日本雜事詩』（1879年刊行）と『日本国志』（1887年刊行）



図 4-3 黄遵憲

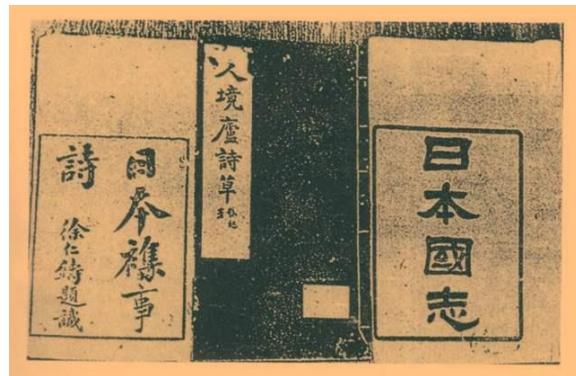


図 4-4 『日本雜事詩』と『日本国志』

1871年に、『日清修好条規』<sup>(12)</sup>の締結を契機として、日中両国は駐在する外交官を派遣し始めた。中国側では、1877年に何如璋が駐日を命じられて、初めの日本に駐在する大使として日本に赴いた。

また、何の同郷である黄遵憲は、何の助手と大使を兼ねて日本に駐在した。知日家・親日家の先駆であった黄は、日本の人文・政治などの諸方面に対して強い関心を持っており、日本を全面的に紹介する『日本国志』<sup>(13)</sup>を編纂する予定であった。『日本国志』の作成を最終目的に、黄は日本に関する見聞と自身の考えを纏めた『日本雑事詩』<sup>(14)</sup>を先ず上梓した。

『日本雑事詩・其五十一』の中での博物館に関する紹介は、「博物千間広厦開、縦観如到宝山回。摩挲銅狄驚奇事、親見委奴漢印来」<sup>(15)</sup>（日本において博物館は、数多く設立されている。博物館に展示を見に行くことは、まるで宝物を山積みする山に行くことである。「移れば変わる世の習い」ということわざがあるが、今回は『漢委奴国王印』の実物を自分で見た。筆者訳）と、博物館を実見し大いに感銘を受けた様子を記している。さらに、筆者は、上記の詩によって、黄が博物館で実物を見ることは心から喜ぶべきことであると推測する。

黄は、東京帝国博物館を視察して以上のように記述している。さらに、黄は註を添付し、「博物館、凡可以陳列之物、無不羅而致之者、広見聞、増智慧、甚於是乎頼。（後略）」<sup>(16)</sup>（博物館は、館内に展示するものを通じ、観覧者の見聞を広め、知恵を増加させ、その役割は甚だしい。（後略）筆者訳）と博物館が見学者に果たす役割を明確に評価している。

その後上梓した『日本国志』<sup>(17)</sup>の中で、黄は博物館についてさらに論述している。

（前略）複有書籍館、匯聚古今凶書以縦人觀覽、博物館陳列欧亞器物以供人考証、新聞紙論列内外事情以啓人智慧。（後略）

（（前略）凶書館には、従来凶書を収集し、公衆の閲覧に供する。博物館は、ヨーロッパやアジアの器物を陳列して、人々に考証を与え、新聞の論評は、国内外の事情を人々の知識を啓発する。（後略）筆者訳）

上記の記述によって、黄は日本における近代的博物館が社会の近代化と人々の知識を広める役割に高い評価を与えた点を確認する。なお、1895年に中国に正式に刊行された『日本国志』は、中国の博物館の発展にとって、積極的な意義を持っていた。当時の中国の有識者らは、黄の記述によって、日本の博物館の優勢が了解し、日本に学び意識が萌芽した。また、後で実行された戊戌の変法は、『日本国志』の影響を受けて、日本における近代的博物館の姿

を範としたことが窺えるのである。

### ③ 王韜『扶桑遊記』（1879年刊行）



図 4-5 王韜

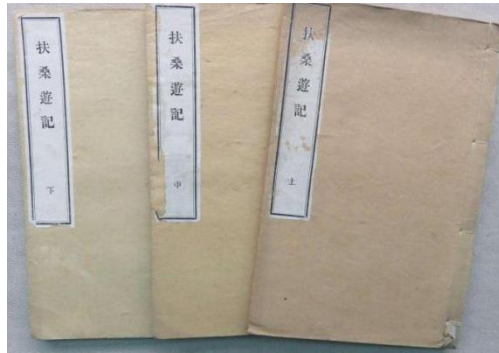


図 4-6 『扶桑遊記』

外交官である黄遵憲とは異なり、当時すでに著名な学者であった王韜は、栗本鋤雲や亀谷行などの学者から招待され、学术交流の目的で渡日する初の学者として、日本を訪問した。王は、1879年に長崎・神戸・大阪・横浜・東京などを訪問し、王自身の日記である『扶桑遊記』<sup>(18)</sup>を記した。亀谷行は、『扶桑遊記』の跋の中で、王を招待したことを下記のように記録した。

戊寅之春。余與栗本匏庵佐田白茅探梅於亀井戸。帰途飲於柳島。匏庵曰。吾聞有弢園王先生者。今寓粵東。学博而材偉。足跡殆遍海外。曾讀其普法戰記。行文雄奇。其人可想。若得飄然来游。願為東道主。白茅曰。善矣。余友寺田士弧曾至南海。與先生善。乃有東游之約。士弧與重野成斎岡鹿門諸人。謀欲邀之。余告以匏庵言。於是成斎始與匏庵交。匏庵每置酒会友。未嘗不津津乎王先生也。己卯之夏。先生遂航海而至。居二月。（後略）

『扶桑遊記』は、王自身が文人として、日本に滞在する期間の生活を記録したものであり、王が毎日の活動を詳細な文体で記している。したがって、王の他の著作と比較して、『扶桑遊記』は客観的思考が欠如する点が特徴である。それ故に、『扶桑遊記』では、王は明治維新の成果についてはあまり論及していない。しかし、実際には王は、明治維新の成果をよく了解していたのであった。王は、1883年に出版した『弢園文録外編』<sup>(19)</sup>の巻二の中の「変法自強下」<sup>(20)</sup>では、日本は明治維新によって、国力が増強したことを明確に論及している。つまり、王は「変法自強下」で明治維新に対して積極的な評価を与えており、この点が『扶桑遊記』と大きく異なるのである。

『扶桑遊記』の中で、王は「博物館」「博物院」などの用語が認められないが、日本における「公園」「寺院」「遺跡」など文化に関する施設の資料収集と展示状況については詳述している。王は、日本における博覧会の観覧は記録しているが、内容に関する詳しい



記録は認められない。具体的には、王が長崎・大阪・西京（今の京都）で観覧した博覧会をただ「光怪陸離・奇巧瑰異（風物の形が珍しく色彩が複雑である・風物の形が珍しくて巧みである 筆者訳）」のみと評価した。この用語は全て「珍しい」の意味であるから、王の博覧会に対する見方が理解できよう。

一方、王は 1868 年に著した『漫遊随録』<sup>(21)</sup>の中で、「遊博物院」<sup>(22)</sup>と題する旅行記が記載されている。この旅行記では、王はエジンバラにおける博物館の状況を詳述し、博物館の役割を評価した内容となっている。具体的には、博物館について「動植飛潜、搜羅畢備。（中略）他若山岳之所蘊蔵、淵海之所産貯、俱収並蓄、以供観覧而備察核焉。」（この世界に生きる動植物の標本などを全て収集し、（中略）さらに、林産と海産などを保存し、観覧と研究に供した。筆者訳）と評価した。なお、王はエジンバラにおける博物館の展示状況を把握し、この博物館の蔵品のミイラ・動物標本・鉱石・灯台・大砲などを記録し、中国における博物館はこのように学ぶべきであると主張している。

さらに、同じく『漫遊随録』の中の「博物大観」<sup>(23)</sup>と題する旅行記では、ルーヴル美術館の収集・展示などの状況を記録し、展示の分類に関しても詳述している。王の博物館に対する思想と観点は、明確に理解できるのである。

しかし、博物館に関する記述では、『漫遊随録』より『扶桑遊記』は感性的とも言える、文人墨客の日記の雰囲気強く感じられるとの評価がある。その原因は、『扶桑遊記』の中では、博覧会に関する記述は少量の見聞のみに留まり、博物館に関する評価と観点がさほど論述されなかった点だと考えられる。

#### ④王之春『談瀛録』（1879年刊行）



図 4-7 王之春



図 4-8 『談瀛録』

1879年に、清政府はロシアと日本の動向を探るため、外交を熟知する官員である王之春に日本を訪ねさせた。王は、1879年12月から1880年1月までの1ヶ月間で、長崎・神戸・大阪・横浜・東京などを訪問した。

日本の博物館について王は、『談瀛録』<sup>(24)</sup>の中で三つの場所を記録した。王が観覧した第一館は、現在の国立科学博物館である。国立科学博物館は、1877～1881年までの間は「教育博物館」と称していた。王は、東照寺を観覧した翌日に、教育博物館へ行っている。

王は、国立科学博物館の立地などを詳しく以下の如く記している。

(前略) 繞穿而西、即抵院門。門者每人授竹籤一、任其入内。院宇宏広、分屋置器。每屋設小木椅数張、以為学者之所坐息<sup>(25)</sup>。

(後略)

( (前略) (庭に置ける) 獸檻の西側は、博物館の正門である。門番は、観覧者一人に竹ひご一本ずつ与えて、観覧者を入館させた。博物館の建物が大きいから、展示品は、種類によって異室に置いている。なお、展示室毎に木製の椅子が数個置かれ、学者たちの為の休憩の場所となっている。(後略) 筆者訳)

さらに、王は展示品を種類によって詳細に記し、展示室での効果的な配置を称賛している。西洋技術の展示室では、王は「泰西機器之属、(中略) 均具体而微。」<sup>(26)</sup> (西洋の機械などの展示品の分類は、(中略) 全部で具体と詳細である。 筆者訳) のように述べている。自然医学系の展示室で王は、「儻医者於細心研究、於治病之道、思過半矣。」<sup>(27)</sup> (もし医者たちは、この展示室の内容をよく研究すれば、医術あるいは病気を治療する技術に対して、十分に推察できる。 筆者訳) と評価している。衣服の材料の展示室について、王は展示品が「(前略) 色色備具。(中略) 一一區別而詳載之、以便入市購買不受人欺、法良善也。」<sup>(28)</sup> (いろいろな種類がある。(中略) これらの材料は、一つ一つ区別し記録した。観覧者は、この展示室を見て、街で服を購入する際に騙されないで済む。この方法は本当に良い方法である。 筆者訳) と褒めている。

しかし、日本の明治維新を推奨する黄遵憲と違い、王は日本が西洋を模倣することを批判的に凝視している。西洋技術の展示室に関しては、王は、展示品を細緻に紹介することを肯定したが、完全に模倣することを反対している。王は、「苟能一二尋繹其意、不難別創一格、以駕夫前人之上。若斤斤於尺寸分秒間規仿之、尚属歩人後塵、不免泰西之齒冷也。」<sup>(29)</sup> (東洋諸国は、これらの西洋技術を研究して、新たな技術が発明でき、西洋の成果を超えられる。しかし、そのままに模倣すれば、これは、西洋の後塵を拝していることである。このようになれば、東洋諸国は西洋の嘲りを受けるはずである。 筆者訳) のように、新しい捉え方を提唱した。

王は伝統的な中華文明を盲目的に崇拝するが、明治維新の成功に対しては偏見を持っていた。東京教育博物館の図書室に対して、王は「半系該国典籍及泰西之書、雖欲以裨实用、而蔑棄圣教、大叛其先崇尚漢学之心、識者嗤其無足觀也。」<sup>(30)</sup> (図書室の図書の大半は、

日本及び西洋の書物である。これらの書物を読むことは、実用性があるが、実際には中華文明を代表する儒教思想を捨てる行為である。このように、日本は漢学を尊ぶ理念に背き、学問をする正道を踏まない。そうであるから、この図書館の書物を見る意義もない。筆者訳)

以上の如く嘲りを持って批判している。王の観点は、当時の中国社会においては代表的な考え方であった。しかし、この考え方は、中国の近代化への歩みを大きく阻害したものと筆者は考える。

なお、王が記録した第二館の博物館は、博物館に相当する施設である「勸工場」である。勸工場は、「博物館」「博物院」と命名されていないが、博物館と同様に収集・展示・教育などの機能を果たしていたようである。

また、『談瀛録』の中で記録された第三館の博物館は、「漢委奴国王印」を収蔵する現在の東京国立博物館である。しかし、王の視点から東京国立博物館は、褒められるものがあるが、これらの展示品はただ『考工記』<sup>(31)</sup>『爾雅』<sup>(32)</sup>『山海経』<sup>(33)</sup>などの漢籍を補注する役割を有していると記している。

当該時期に渡日した中国人は、日本の近代化に驚き、日本の近代国家への歩みを中国に伝えた。一方でまた、中華文明に固執した観点も当然存在しているのである。

## (2)新聞

見聞録・日記を除く、当該期の日本の近代的博物館を紹介する方法の一つとして新聞があった。清朝末における新聞業は、急激な発展を遂げ新聞の種類も豊富であり、同時に内容も充実したものであった。当時の中国国民は、新聞によって日本の近代的博物館の発展を熟知できたのである。

### ①字林洋行新聞社発刊の『北華捷報』と『字林西報』

当該期の新聞は、主に英字と中字である二種類の文字を使用していた。英字新聞は、主に字林洋行が刊行した新聞であった。

字林洋行新聞社は、1867年に上海で正式に成立した新聞社であった。字林洋行新聞社の前身は、1850年に英国商人の Henry Shearman が上海租界<sup>(34)</sup>で創設した「Office of the North-China Daily News & Herald」（北華捷報新聞社）と命名した編集部であった。この編集部は、1850年8月3日に上海での初めての英字週刊新聞である『The North-China Herald』（中国で『北華捷報』と称する）を創刊した。

1864年7月1日に「Office of the North-China Daily News & Herald」（字林西報新聞社）編集部は、字林洋行新聞社に改組し、『北華捷報』特別欄の英字日刊新聞である『The North-China Daily

*News*』（中国で『字林西報』と称する）を独立させて発行した。その後、『字林西報』は、『北華捷報』に代わって、近代中国において最も有力な英字新聞となった。なお、『北華捷報』は、1941年12月に廃刊となり、『字林西報』は1951年3月に廃刊となった。

字林洋行新聞社が刊行した英字新聞には、日本の博物館に関する記録が掲載されなかったが、日本における博覧会の開催状況が記されていた。

1876年2月1日に刊行の『字林西報』の003版には、「*JAPAN AT THE CENTENNIAL EXHIBITION.*」<sup>(35)</sup>（フィラデルフィア万国博覧会での日本の出品物 筆者訳）と題するニュースが掲載された。なお、このニュースは、A.W.Hansard British Museum Photographic Service 出版社が発行した英字週刊新聞である『*The Japan Herald*」<sup>(36)</sup>から転載したものである。このニュースは、『*The Japan Herald*』の記者が、フィラデルフィア万国博覧会での日本の出品物を優先的に観覧して、民衆に紹介したことを報道した。

さらに、『字林西報』は、日本で開催された博覧会に関する状況も報道した。具体的には、1877年に上野で第一回内国勸業博覧会が行われたことについての記事であった。『字林西報』は、『*The Japan Gazette*」<sup>(37)</sup>に掲載する「*OPENING OF THE UYENO EXHIBITION BY THE EMPEROR AND EMPRESS OF JAPAN.*」<sup>(38)</sup>（日本の天皇と皇后は上野博覧会の開場式に出席した 筆者訳）と、「*CLOSING OF THE NATIONAL EXHIBITION AT UYENO, BY THE EMPEROR AND EMPRESS.*」<sup>(39)</sup>（天皇と皇后は上野博覧会の閉会式に臨席した 筆者訳）という二つのニュースを転載している。

## ② 字林洋行新聞社発刊の『上海新報』

字林洋行新聞社が発行した代表的な中字新聞は、『*The Shipping List and Advertiser*』（中国で『上海新報』と称する）である。

また、1861年に発刊された『上海新報』は、上海で初めての中字新聞として、上海で最大級の影響力を持っていた新聞であった。しかし、1872年4月に『申報』の刊行と共に、『上海新報』は価格設定が高すぎたことが災いし、1872年12月に廃刊となった。

『上海新報』で日本の博物館に関する記事は、「日本開博物院」<sup>(40)</sup>（日本で博覧会を開催 筆者訳）と題するニュースが掲載されたに過ぎなかった。しかし、このニュースは、「博物院」という用語を使っているが、実際は湯島聖堂博覧会の内容を記していたものであった。

## ③ 『申江新報』

『申江新報』は、英国の商人である Ernest Major により 1872年4月30日に上海で創刊された中字日刊新聞である。『申江新報』とは、正式的な名称であり、一般的に『申報』と呼ばれていた。さら

に、「申」が上海の略称であるから、『申報』なる名称は、上海市民にとって親しみのある名称であった。

1872年から、『申報』は『上海新報』に代わって、近代中国において最も重要な中文字新聞となった。なお、『申報』は英国人が創設した新聞社であるが、ニュースの執筆者は中国人である点が特徴であった。

『申報』は、上記の『上海新報』と同じ湯島聖堂博覧会の記事を掲載し、高い評価を得ていた。記事は、「論東洋博物院事」<sup>(41)</sup>（東洋博物院のこと 筆者訳）と題して、湯島聖堂博覧会の役割を称賛した内容であった。

有此国所不能為而彼国已為之者、有此国所未及成而彼国已成之者、使尽羅之以置於博物院中。則不難互相師法、互相仿造、而奇技异能有无所不尽之妙矣。

（湯島聖堂博覧会の開催によって、国家間で技術と商品の有無は互いに融通できる。ある国家が作れないものは、他の国家が作れる。ある国家がまだ完成していないものは、他の国家がもう完成した。それぞれのものが博物院に置かれているのは、諸国がお互いに助け合い、技術と能力を向上させることができる。 筆者訳）

さらに、この記事は湯島聖堂博覧会の不足点をも指摘し、博覧会のあるべき姿を提唱したものであった。

今東洋所陳各国奇器甚少、倘下次举行時能先行通知欧洲諸国、庶可使无物不備无妙不泄矣、而豈玩物喪志之謂哉。

（今回の湯島聖堂博覧会には、諸国の展示品が少なかった。日本が次の博覧会が行う前に西洋諸国に通知すれば、博覧会に参加する国家は、展示品の種類の幅を広げて、展示品の数量を増やすことができる。このようになれば、博覧会は「玩物喪志」と言われなくなる。 筆者訳）

上文によって、この記事はニュースのみならず、時評とも見なすことが出来る。

さらに、湯島聖堂博覧会に関するニュースタイトルによって、中国人にとって湯島聖堂博覧会での開催は、博物館としてのイメージがあった。

当時の普通の中国人は、これらの新聞によって、近代的博物館の姿をよく了解した。また、博物館は、中国人に新たな技術を広める場所として積極的なイメージを与えた。

## 2、戊戌の変法における博物館学意識

1894年に日清戦争によって、清の有識者たちは清の洋務運動は日本の明治維新との格差がある事実を理解した。明治維新の成功に対

して、洋務運動の失敗は、清朝が国情を改善し得なかった点に尽きることは記すまでもない。かかる苦境を乗り越えるため、清の有識者たちは、新たな“戊戌の変法”と称する改革運動を企てた。

1898年に、明治維新を模範とする改革運動である戊戌の変法は、推進され始めた。戊戌の変法の推進者が日本に対して大きな好感を抱いたから、戊戌の変法は、日本の明治維新を模倣する特徴を持っている。



図 4-9 康有為



図 4-10 梁啓超

戊戌の変法の推進者たちが結成する「維新派」は、博物館の設立を提唱しているが、博物館を提唱する文面は、主に西洋における博物館を例にとったものであった。日本の博物館・博物館学を紹介してはいないが、維新派が提唱した博物館学意識は日本の影響を受けた可能性が十分推定される。

### (1) 維新派の日本に対する姿勢

戊戌の変法を行う以前、1888年に清仏戦争のために維新派の代表人物である康有為は、『上清帝第一書』(42)を著したが、光緒帝に上奏できなかった。『上清帝第一書』は、康が初めて光緒帝に上書する予定の文章であり、康の理念を明確に吐露している。『上清帝第一書』には、下記のように明治維新の成果を称えている。

日本崎嶇小島、近者君臣変法興治、十余年間、百廢俱舉、南滅琉球、北辟蝦夷、歐洲大国、睨而莫敢伺。

(日本は、険しい山が多く小さい島国である。最近では、天皇と大臣が明治維新を行っている。十年の時間を経て日本は、多くの廃れていた物を復興させた。日本は、南には琉球王国を滅ぼし、北には蝦夷地を開拓した。西洋諸国は、日本を凝視しているが、日本を侵犯できない。 筆者訳)

明治維新によって、日本は西洋の侵略を逃れて、自国の発展を図った。康は、日本の近代化への歩みから激励を受けて、中国の変革の道を熟慮したのである。

1895年4月17日に「下関条約」<sup>(43)</sup>の締結には、中国国内で反対の声が沸き上がった。かかる状況にあつて、1895年5月2日に康は『日清講和条約』に抗議するため『上今上皇帝書』<sup>(44)</sup>を作成して千二百名の賛同者と連名で上伸した<sup>(45)</sup>。

その中で、康は、日本の明治維新を学ぶことを重ねて明言している。

近日土耳其為回教大国、不変旧法、遂為六大国割地、廢君而柄其政。日本一小島夷耳、能変旧法、乃敢滅我琉球、侵我大国。前車之轍,可以為鑑。

(トルコは、イスラム教を信仰している国である。しかし、最近トルコは、従来の法令と制度を変えないため、他の6国に国土を分割され、君主を廃立させられた。さらに、トルコの政権は、他国に渡ったのである。それに対して、日本は小さい島国であるが、従来の法令と制度を維新という形で社会変革を企てた。それ故、日本は琉球を思い切って滅国させ、清を犯した。これは、前車の轍だから鑑とすることができる。 筆者訳)

その後、1898年1月29日に康は、『応詔統籌全局折』<sup>(46)</sup>をさらに上申した。『応詔統籌全局折』は、戊戌変法の政策綱領として、指導書の地位を占めた。今回の上書で康は、日本を学ぶことをさらに明確に提示した。

若至近之墨跡可摹、絶佳之画譜可臨者、職於地球中新興者得二国焉、曰俄・曰日。職愿皇上以俄国大彼得之心為心法、以日本明治之政為治譜而已。昔彼得為欧洲所擯、易装游法学於船匠、変政而遂霸大地。日本為俄・美所敗、步武泰西、乃至易服改紀、而雄視東方。此二国者、其始遭削弱與我同、其後底盛強與我異。日本地勢近我、政俗同我、成効最速、条理尤詳、取而用之尤易措手。

(最近、世界の中でロシアと日本は、新興国として国力が急速な発展を遂げつつある国家である。今光緒帝は、ロシアのアレクサンドル2世と日本の明治天皇のように、改革を推進すべきである。ロシアは、ヨーロッパの諸国に捨てられた後、西欧化改革を推進してユーラシア大陸を制覇した。一方、日本はロシアとアメリカに敗れた後、西洋の軍事を模倣し始め、西洋化改革を推進し東アジアを雄視する。ロシアと日本は、最初に清朝と同じように国力が弱まったが、改革を行った後に国力が増強した。この結果は、今の清朝における状況と異なる。日本は、地理位置が清朝と近いし、政治と風習が清朝と似ているところからも清朝は日本を模倣しやすいのである。さらに、日本の明治維新を模倣する原因は、明治維新の改革の流れが非常に詳しく、結果が非常に素晴らしい。 筆者訳)

上記によって、康は、日本に学ぶ理由を言及した。この理由は、近代における中国が日本に学ぶことの最も重要な理由であると考えている。

日本の近代化経験をさらに学ぶために、康は 1897 年に『日本書目志』<sup>(47)</sup>を編纂した。『日本書目志』は、日本で出版された書物の書名・著者・定価などの情報を記録した文献目録である。康の編纂に拠る本目録には、生理・理学・宗教・図史・政治・法律・農業・商業・教育・文学・文字語言・美術・小説・兵書である 15 種類に分類し、評価をしている。

『日本書目志』の自序の中で、康はこの本を編纂する理由は、中国人にとって英語や印欧語族文献は難し過ぎるのに対し、日本語は理解しやすいと指摘している。また、康はロシアと日本の改革を称賛しながら、ロシアに学ばない理由を述べている。先ずロシアは、清国の隣国であるが、ヨーロッパに属し清国との距離が遠すぎる点。次いで、ロシアは改革を行ったが、実際の効果があまり良くなかった。最後に、ロシア語は中国人にとって習得は難しすぎる点をあげている。

それに対して、康は、日本に学ぶ理由を重ねて明らかにしている。

吾今取之至近之日本、察其変法之条理先后、則吾之治效可三年而成、尤為捷疾也。且日本文字猶吾文字也、但稍雜空海之伊呂波文十之三耳。泰西諸学之書其精者日人已略訳之矣、吾因其成功而用之、是以吾以泰西為牛、日本為農夫、而吾坐而食之<sup>(48)</sup>。

(今、私たちは地理的にも近い日本に学び、明治維新の沿革を研究すれば、うちの改革の成果が三年間で見える。これは、捷徑である。また、日本語は、空海が作った「いろは歌」である仮名を使っているが、日本語の大体が中国語と類似している。なお、西洋の諸学の書籍は、全てを日本語に翻訳している。日本は翻訳した本から得た知識を基に、明治維新を成功に導いた。故に、私々は日本語に翻訳された欧米の書籍の使用によって、西洋と日本の成功を参考にするのである。 筆者訳)

康が日本を先例に推奨する原因と目的は、了解できる。しかし、康が代表する維新派は、中国の国情を十分に認識することなく、単に明治維新を模倣したのであった。この点が、戊戌の変法が失敗に帰する原因の一つと看取される。

一方、維新派は、日本に好意を抱くが、日本の領土拡張の野望を見抜いていた。この時期の維新派は、日本に対して極めて客観的な視座を有していたことが理解できる。

## (2) 維新派の近代博物館に対する姿勢

維新派は、日本に学ぶことを推進するとともに、中国に近代博物



館を設立することを提唱していた。

『上今上皇帝書』<sup>(49)</sup>の中で、康は博物館の設置を直接には提唱しないが、「考工院」「勸工」「勸学」などの用語がよく使用された。康の言う考工院・勸工所・勸学所などは、具体的には陳列館と教育館として使用されていた施設である。また、「博覧会」という用語の使用も認められないが、下記の引用文からも博覧会の開催を提唱していたことが理解できよう。

泰西賽会、非騁遊樂、所以広見聞、発心思、弁良楛。凡物有比較、優劣易見、則劣者滞銷、而優者必行、彼之貨物流行中土、良由此法。

(西洋での博覧会開催の目的は、遊び場ではなく見聞を広めて思想を啓発して物品の良否を判定するにある。物の比較によって、品質の良否が判定できるのである。粗悪品の売れ行きは停滞し、優品の売れ行きは進捗する。これらの商品が流行する原因は、博覧会である。 筆者訳)

次いで刊行した『応詔統籌全局折』<sup>(50)</sup>では、博物館の設立に関しては日本に学ぶことをさらに推奨している。具体的には、制度局を設置し法律・教育・農業など専門的な12局の設置を提唱している。12局は、改革推進の責任を持って実行する機関である。12局の中の第11番の社会局は、様々な学会管理を担当する部門で、「植物会」「動物会」「博覧会」を含めている。なお、12局の具体的な設置は、下記の表4-1の通りである。

表4-1 『応詔統籌全局折』の中で12局の設置(筆者作成)

番号	名称	内容
一	法律局	法律に関する事務
二	税計局	戸籍・統計・税金に関する事務
三	学校局	教育・学術・政治に関する事務
四	農商局	農業・商業に関する事務
五	工務局	工事・建設に関する事務
六	鉱政局	採掘作業に関する事務
七	鉄路局	鉄道に関する事務
八	郵政局	道路・交通・郵便に関する事務
九	造幣局	硬貨と紙幣の製造・銀行に関する事務
十	遊歴局	海外留学に関する事務
十一	社会局	学会・同人組織に関する事務
十二	武備局	軍備・兵器・軍事施設に関する事務

康が著した『日本変政考』<sup>(51)</sup>には、明治六年八月に内務省と大蔵省が12局ずつを設置したことを明確に記録した。これは、康が12

局を設置した理念の発端であると考えられている。

さらに、『日本書目志』<sup>(52)</sup>には、博物館学に関する分野を明確に記述していないが、巻二の『理学門』である分類の中に、博物学・生物学・人類学・植物学・動物学などの分野を含めている。なお、鉱物学に関する書物には、「金石学」と書名を冠する図書がある。ここで注意しなければならない点は、当該書での「金石学」は、中国で一般的に意図する「金石学」と異なるのである。ここでの「金石学」は、鉱物学の意味での使用であり、中国における従来からの金石学は青銅器・石刻に刻まれた銘文・碑文を研究する人文系学問である。また、巻四の『図史門』<sup>(53)</sup>の分類の中には、地理学・歴史学に関する書物が記載されている。

上記の『巻二・理学門』と『巻四・図史門』の中では、著者が「博物館蔵板」「博物局蔵板」と標記した書物の記録が頻繁に認められる。

さらに、1886年に康は明治維新の沿革を記した『日本変政考』<sup>(54)</sup>を始め、1898年に12巻の『日本変政考』を光緒帝に上呈した。『日本変政考』は、明治元年～同23年までの改革の経緯を時間軸で詳しく記した書籍であった。同書で、自分の考え方を加え、光緒帝に明治維新の経過を詳細に説明している。

当該『日本変政考』の巻五は、主に教育についての改革案を記載し、日本の学校の附属博物室について下記のように述べている。

而隸於学校者有動物室、植物室、金石室、有生物室、土木機械模型室、製造化学諸品室、古器物室、羅列各品、以供生徒考驗。（中略）有博物院、陳列欧亜器物、以供考証<sup>(55)</sup>。

（学校には、動物室・植物室・金石室・生物室・土木機械模型室・製造化学諸品室・古器物室等がある。陳列した物品を学生の参考に供する。（中略）学校の博物院は、アジアとヨーロッパの物品を陳列し、学生の参考に供している。筆者訳）

さらに、学校における博物院には、「有動物植物金石土木型模古器物、以備考験、則物無遁形。」<sup>(56)</sup>（動植物の標本・古器物と金器石器・土器木器の模型等を学生の参考に供している。学生たちにとっては、物に対する研究が十分となる。筆者訳）のように評価している。

康は、『日本変政考』の巻五の最後に纏めて、日本の変革が成功した原因を「日本之驟強、由興学之極盛。其道有学制、有書器、有訳書、有遊学、有学会。」<sup>(57)</sup>（日本が強くなった原因は、教育の重視である。日本は学校教育・図書と器物・訳書・遊学・学会である5部門を重視した。筆者訳）と指摘した。

すなわち、日本が教育を重視したことは、学校・図書と器物・訳書・遊学・学会などの5点であり、教育の発展にとって上記の5点

が不可欠であると主張している。この5つの要点は、密接な関係を持っており、相互に補完し合っている。それ故、「有訳書而無博物館蔵書各書器、則無以為教之実験」<sup>(58)</sup>（訳書があるが、博物・蔵書・蔵品などがなければ、実験は行えない。筆者訳）のように、「博物館」という用語は明確に記していないが、博物館の必要性を述べている。さらに、1895年11月に、康の弟子である梁啓超と一緒に清国の富国強兵を目指す強学会を創設している。この時期に康と梁は、外交官を退任して日本から帰国した黄遵憲と出会っている。

有名な知日家・親日家であった黄は、康と梁の主張に賛同し、強学会に参加した。なお、十年後に南通博物苑を設立する張謇もこの強学会に参加した。

強学会を創設した同月に、康が代表となって黄と張など十五人が連名で「上海強学会章程」<sup>(59)</sup>を宣言した。この章程は、強学会を創設する原因・目的と入会条件を記録した内容であった。学会の成立には、4つの要項があると指摘している。すなわち、図書の翻訳・新聞の刊行・図書館の設立・博物館の設立である。ここで、博物館に関する規定は、下記のように記載されている。

一、開博物院。（中略）西国博物院、凡地球上天生之物、人造之器、備列其中。（中略）合衆人之心思以求实用、合万国之器物以啓心思、烏得不富？烏得不強？今創設此院（中略）博攬兼収、以為益智集思之助<sup>(60)</sup>。

（もう一つの方法は、博物院を設立することである。（中略）西洋の博物院には、地球上の自然物と人が作った器物などをその中で収集して陳列する。（中略）人々の思想を集めて実用の思想を求め、各国の器物を集めて知恵を啓発する。（国家は、）経済力と軍事力が増加され富強となるじゃないか？博物院を創設は、物を収集保存し、智恵を得て思想を集める助けとなる。筆者訳）

上記によって、康は博物館の設置は、国力の増強を図る一方法と見なしていることが理解できる。

なお、康の観点は理解の難易度を簡単なものから困難なものへ、器物・図録・文字の順で論述している。すなわち、康によると知見を広げるには、最も理解しやすい媒介物は器物であるとする考え方であった。故に、博物館での器物の展示は、知見を広げる最も簡単な方法であると考えたのである。

隣国たるものは、中国と日本が昔から緊密な関係を持ってきた。近世に入ると、日中両国は、西洋の近代思想と技術に驚いて、新たな発展を求めた。儒教思想を中心とする東洋の思想と違い、近世における西洋の思想は、探検・航海・開拓の思想から植民地主義の思想に至るまで、強い侵略性がある印象を与えた。その結果は、西洋

諸国が日中両国を植民地化の目標にした。

しかし、かかる状況にあって、日本は近代的国家を目指して、明治維新を断行し、近世においてアジア諸国の雄となった。一方、中国は古来より支配的位置に君臨してきたが、近世に入ると、近代技術を軽視する為、近代的軍備を有する西洋列強には将に俎板の鯉であった。この意味で、中国は昔と逆となり、日本に学び始めたのであった。

この時期の中国には、海外との交流の風潮に従って、海外を訪ねた人々が多くなった。それらの人々は、従来から見なかった風景を見ると、興奮を感じて見聞録と日記を多量に書いた。これらの見聞録と日記を読むことは、中国国内の民衆にとっては世界の姿を理解する方法の一つとなったのである。

なお、海外の目的地については、西洋諸国を第一選択としたことは論を俟たない。勿論、当該期には、見聞録と日記が主で西洋諸国に関する記録であるが、日本に関する記録も重要な位置を占めていた。その原因は、路程と渡航費用などから考えて、日本は最良の選択肢であった。さらに、海路でアメリカへ行くに際しては、日本は航路上の経由地として滞在する人々が多かった。それ故に、日本の風土に関しては、多くの人々に記録されたのである。

また、この時期の日本は、近代的国家を目指し積極的に邁進し、西洋の文明と技術を取り入れた。先進の技術と制度を輸入することにより、日本は経済力と軍事力が飛躍的に向上していた。このように近代的西洋文明化によって、日本は伝統的な制度と思想から近代的な制度と思想へ転換し始めた。同時期の中国も西洋の技術に関心を寄せていたところから、中国にとって日本における近代的博物館は、西洋技術と思想を広める場所として見学する必要性があったのである。

一方、中国国内の民衆が世界の姿を知悉する方法は、新聞であった。当該期に、中国国内で刊行された新聞は、主に英国人の出資によって創刊した英字新聞である。これらの新聞は、一般的中国人向けではなく在華外国人向けの刊行物であったが、これらの新聞によって海外の状況は中国国内に伝えられた。その後の中国人向けの中字新聞の増加は、世界の姿を一般的な中国人に啓蒙する結果となった。当時は、ニュースは主に西洋に関する事項の報道であったが、一部に日本の情報もあった。

日本の博物館に関する新聞は、主に博覧会の開催概要・博物館の開館・有名人の見学などのニュースが主であった。これらの報道は、数が少ないが、日本の博物館に関する時評も認められる。

しかし、この時期の中国社会で主流をなす思想は、伝統的な中華文明の盲目的崇拜であり、西洋の思想を認めず排他的であった。勿

論、伝統的な中華文明は、優秀な思想と立派な成果を有するが、愚昧と落後も存在している。伝統的な中華文明の全てに対して賛成或いは反対するのは、社会的整合性に合致する考え方ではない。

かかる社会にあつて、博物館は中国の有識者らにとって教育を広める場所であつたが、普通の中国人にとって、教育の場所より珍奇な物を見る場所として認知されていた。すなわち、この時期における博物館は、教育機能より展示機能が有効に利用されて、学術性より娯楽性が高かつたのである。

さらに、当該期の中国の民衆は、従来から日本が中国に追随する印象を持っているから、日本の変化を重視しなかつた。数少ない有識者らは、日本の崛起を注目し、日本の変革を模倣しよう。それ故、日本における博物館に関する状況調査は、西洋の博物館より研究が少なかつたと言えよう。

## 第二節 19世紀後半期における中国博物館学の揺籃期・博物館編

### 1、揺籃期に設立予定された博物館及び相当施設

1898年に、戊戌の変法<sup>(61)</sup>を提唱した維新派は、改革を遂行しながら博物館の設立も提案した。戊戌の変法における博物館設立の提案は、主に学校博物館と学会博物館であつた。学校博物館とは、校内の建物を利用して、「学校博物館」として活用している博物館である。学校博物館は、主に本学学生のために設置された博物館であるから、展示品が主に本学相関するものと学生教育相関するものである。本節で論及する学校博物館は、大学博物館である。学会博物館とは、ある学会が設置した博物館である。この時期に、「学会」と称する組織は、専門家らが設立する組織があり、同じ趣味を持っている団体が結成する同人組織もあつた。

残念ながら、戊戌の変法の失敗に従つて、これらの博物館は設立されることはなく、ただ提案のみで潰えた。しかし、本博物館設立提案は、その後の中国人の博物館意識をさらに強固なものへと醸成する一因となつた。

#### (1)学校博物館

戊戌の変法を推行する維新派は、変法によって国の発展を守るために、国民の教育に最も注目した。それ故、維新派の教育機関に関する改革案は、多量に提案され、その一つとして学校博物館建設に関する提案も出されたのであつた。

その代表的施設としては、京師大学堂儀器院であろうと考える。維新派は、日本の明治維新の思想を推奨し、明治維新で改革さ

れた諸制度をすべて模倣することを基本目的としていた。しかし、戊戌の変法の失敗とともに、戊戌の変法が推行する改革案は殆ど廃止されるが、教育に関する改革のみはその後も幸いに引き継がれた。かかる思想の代表的な具現化物は、建設された“京師大学堂”と命名された大学教育機関であった。

1898年7月3日に開校する京師大学堂は、今の北京大学の前身であり、中国においては初めての近代的な国立総合大学であった。戊戌の変法の成果である京師大学堂は、戊戌の変法の教育改革によって設立された教育機関であるが、戊戌の変法が失敗した後も1900年まで引き続き開校されていた。1900年の庚子事変<sup>(62)</sup>で、八ヶ国連合軍<sup>(63)</sup>が北京に侵入することによって、京師大学堂は一時閉校に追い込まれる中で、1901年に中国において初めての近代的学校である京師同文館<sup>(64)</sup>と統合し再開校を果たし、1912年に国立北京大学と改称されるに至った厳然たる歴史を有する大学教育機関である。

中国では、漢代から儒学が教育に最も重要な位置を占めたため、中国では従来から人材の選抜の際には、儒学を研究する人材を選抜してきた。国子監<sup>(65)</sup>は、中国において隋代からの最高学府として、人材の育成を果たしてきた。

京師大学堂の開校は、中国における近代教育の確立の象徴であり、京師大学堂は国子監に代わって最高学府の位置を占めることとなった。

1896年に李端棻は、「請推广学校摺」<sup>(66)</sup>を光緒帝に上奏し、京師大学の建設を初めて計画した。「請推广学校摺」は、梁啓超が起案し、李が定稿したものであり、維新派の理念の体現を目的としたことは当然である。当該上奏文によって、李は洋務運動における近代的学校を批判し、新たな近代学校の在り方を提唱した。

さらに、李は新たな近代学校を企画し、博物館の相当施設の整備に論及したことは注意しなければならない事実である。

二曰創儀器院也。格致実学、咸藉試験。無遠視之鏡、不足言天学。無測繪之儀、不足言地学。不多見鉞質、不足言鉞学。不習睹汽機、不足言工程之学。其余諸学、率皆類是。

(中略)今請於所立諸学堂、咸別設一院、購藏儀器、令諸学徒皆就試習、則事实求是、自易專精、(中略)而学徒所成、視昔日紙上空談、相去遠矣。(後略)

(第二点は、儀器院を設立することである。実践的な学問は、実物と実験が必要である。具体的には、望遠鏡がなければ、天文学の研究はできないのである。コンパスと定規などの工具がなければ、地理学は研究できない。鉞物がなければ、鉞物学が研究できない。蒸気機関がなければ、工学が研究で

きないのと同様である。他の学問は、上記の諸学問のように、実物と実験がなれば、研究ができない。（中略）今は、学堂を設立する提案とともに、別の儀器院を設立することも提案する。儀器院では、実践的な工具と実物を保存し、学生の実践に供する。そのためには、学生が実際によって事物の真実を求めることができ、専門的な知識に精通しやすいものとなる。（中略）さらに、学生の習得は、従来からの文字資料を見るのみとは全く異なるのである。（後略）筆者訳）

上記の文章によって、李と梁は学生にとっての儀器院の重要性を詳述した。この儀器院は、「博物館」の名称を使わないで、博物館的な施設であった。

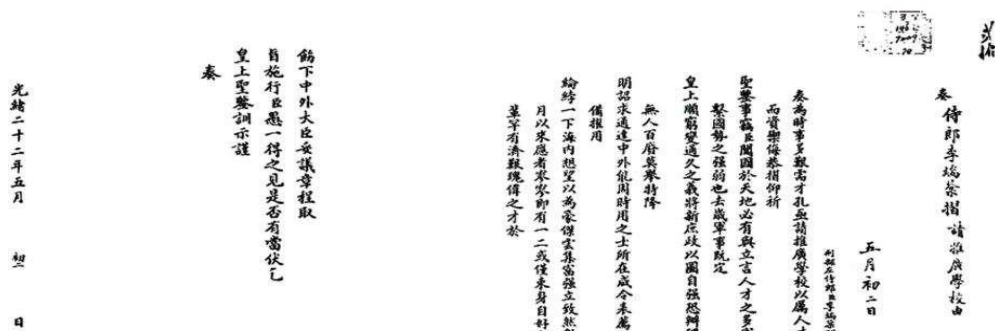


図 4-11 「請推廣學校摺」

その後、1898年に康有為は、「請開學校摺」(67)を光緒帝に上奏し、京師大学の建設に再び言及した。なお、康が「遠法德国、近采日本、以定学制」(ドイツと日本の学制を模倣する。筆者訳)のように、欧米及び日本に学び、「其省府能立専門高等学大学、各量其力皆立図書儀器館」(各地方では、専門的な高校と大学を設立すれば、図書館と儀器館も設立すべきである。筆者訳)と主張した。

同年に梁啓超は、光緒帝の意を授けて『代總理衙門奏擬京師大学堂章程』(68)を上奏し、京師大学堂の設立を明確にした。

『代總理衙門奏擬京師大学堂章程』は、第一章の総綱・第二章の学堂功課例・第三章の学生入学例・第四章の学成出身例・第五章の聘用教習例・第六章の設官例・第七章の経費・第八章の暫章(第一章の総則・第二章の課程設置・第三章の入学生について・第四章の卒業生について・第五章の教員採用・第六章の官職について・第七章の運営費用・第八章の一時的ルール 筆者訳)である八章を章立し、京師大学堂の設立目的・必要性及び学校事務・運営などに及んでいる。

中国では古来より、儒学が正統派として唯一の地位を占めていた。そのために、学生は、私塾<sup>(69)</sup>と書院<sup>(70)</sup>で儒学の啓蒙書である『三字経』<sup>(71)</sup>や『千字文』<sup>(72)</sup>から儒家十三経<sup>(73)</sup>や四書五経<sup>(74)</sup>までを学んだ。さらに、明の時代から、官吏を抜擢する科举<sup>(75)</sup>では、八股文<sup>(76)</sup>が唯一認可された文体として儒学の地位をさらに強固にした歴史を有する。

しかし、京師大学堂は、中国の従来からの教育方式とは異なり、近代学校として近代的な教育を教授した。具体的には、儒学・理学・世界文化・諸子百家学・算学・政治学・地理学・文学・体操などの科目を教授しながら、英語・フランス語・ロシア語・ドイツ語・日本語などの外国語科目も必修科目として定められていた。教育の充実を確保するために、京師大学堂は、中国人の教員に限らず、外国人の教員も招聘した。また、京師大学堂の総教習<sup>(77)</sup>も、中国人と外国人がその任を担当していた。具体的には、許景澄が中文教学総教習に任命され、アメリカの宣教師である丁韪良<sup>(78)</sup>が英文教学総教習に任命され、その任を果たしていた。



図 4-12 許景澄



図 4-13 丁韪良

さらに、上記の『代総理衙門奏擬京師大学堂章程』の中で論及する「総理衙門」は、「総理各国事務衙門」と呼称した事務課の略称であり、総理各国事務衙門は外交や洋務を管轄する事務課であった。一方、中国においては従来から教育についての事務を管轄するのは、三省六部<sup>(79)</sup>の吏部<sup>(80)</sup>であった。なお、吏部も私塾と書院などの教育機関の管理と、科举などの進学と入学試験の判定を管轄した。しかし、京師大学堂を管轄した部門は従来の吏部ではなく、総理衙門であった。この変革によって、清政府は国際交流に対する注目度が高くなったと看取できるのである。

さらに、『代総理衙門奏擬京師大学堂章程』の第一章の第七節によって、梁は儀器院を博物館機能を有した研究機関とする必要性に関しても論及したのであった。

泰西各種実学、多藉実験、始能發明、故儀器為学堂必需之



事。各国都会、率皆有博物院、収集各種有用器物、陳設其中、以備学者觀摩、事半功倍。今亦宜仿其意、設一儀器院、集各種天算・声・光・化・電・農・鉱・機器・製造・動植物各種学問応用之儀器、咸儲院中、以為実力考求之助。

（西洋における各学問は、実践的な学問が多い。これらの学問は、実物を使う実験によって、発明が作れる。そのために、実物は、学問を研究する学校にとって必要なものになる。各国の都市では、博物院がある。それらの博物院は、実物を収集展示し、観覧者の観覧と研究に供する。この博物院を利用することは、研究にとって、少しの努力で大きなよい結果を出すことができる。なお、今中国では、西洋のように儀器院を設置すべきである。この儀器院では、天文学・数学・声学・光学・化学・電学・農学などの実物資料あるいは機械と、鉱物学・動物学・植物学などの標本を収集し、学問の研究に関する実践を増加することが一助となる。 筆者 訳）

上記の資料によって、京師大学堂の儀器院は、外国の博物院を模倣するものが確認した。

さらに、梁は儀器院の従業員の配置に関しては、第六章の設官例の第八節によって、「儀器院設提調<sup>(81)</sup>一員、供事<sup>(82)</sup>四員」（儀器院では、院長一人、従業員四人を配置する。 筆者訳）と規定したうえで、さらに、第七章の経費の第二節で、儀器院の従業員の給料を規定している。

なお、この章程は儀器院に関する主要な機能等については論及しているが、収集・保存・展示などの具体的な博物館機能には論及していないのである。その論及しない内容に対しては、第八章の暫章の第六節に、「応購各器並儀器院准人游観詳細章程、帰儀器院提調続擬」（儀器院で購入しようとする実物資料と入館案内などの事務は、その後に儀器院の院長が実際的な状況によって、新たな規範をみずから創定する。 筆者訳）と述べている。一方、戊戌の変法の時期には、維新派が京師大学堂儀器院の他に、地方学堂儀器院の設立も提案していた。1896年に梁啓超は、『学校総論』<sup>(83)</sup>を著して、各地方の学校においても儀器院を設立することを提案した。

しかし、残念ながら戊戌の変法の失敗とともに、上記の学校博物館構想は全て完遂し得なかった。



図 4-14 京師大学堂



図 4-15 京師大学堂の扁額

確かに当該時期には、中国博物館学が日本の博物館学の影響を強く受けるが、それ以前に中国における学校博物館構想或いは学校博物館及び相当施設があったことも事実である。例えば、具体的には京師同文館博物館と上海格致書院の知新堂博物館である。これらの学校は、中国人が独自に開校した学校でなく、中国人が西洋人と一緒に創設する学校であり、これらの学校では実際の課程と教務などの事務を受け持つ人は中国人ではなく西洋人であった。

京師同文館は、1861年に恭親王奕訢が清文宗の咸豊帝に進言して、1862年に正式に設立した外国語学校である。京師同文館は、洋務運動を推行する洋務派が成立した教育機関であり、国際交流と外交事務に対応するため、外国語ができる人材の育成を目的としていた。なお、京師同文館は、1900年に庚子事変<sup>(84)</sup>で一時閉校となり、1901年には京師大学堂に吸収された。

一方、京師同文館の総教習<sup>(85)</sup>は、主に西洋の宣教師に依頼していた。京師同文館の開校時の総教習は、英国人の宣教師である包爾騰<sup>(86)</sup>であった。その後、最も有名な総教習は、丁韞良<sup>(87)</sup>である。丁は、1864年に京師同文館の教授に就任し、1869年から1894年までの間京師同文館の総教習を担当していた。

1869年に、丁は中国で生活したことを偲ぶ本である『*A Cycle of Cathay or China, South and North with Personal Reminiscences*』<sup>(88)</sup>を著わし、同書に京師同文館で働いた経歴等も記載されている。丁によって、京師同文館の中には、博物館があったことが記されており、丁は“museum”という用語を明確に使用したことは、陳為<sup>(89)</sup>が詳細に論述している。

上海格致書院 (Shanghai Polytechnic Institution) は、1874年に李鴻章と当時の英国駐上海総領事である Sir Walter Henry Medhurst によって提案され、1876年に徐寿と英国人の宣教師である John Fryer によって開院され、西洋の近代的な知識を教授する目的で建設された学校であった。

『格致匯編』<sup>(90)</sup>によると、上海格致書院が開院する時に「知新

堂」と称する博物館に相当する施設は設立された。この知新堂には、天文学・地理学・化学などに関する実物資料等を展示したことの記載が確認できる<sup>(91)</sup>。

1877年にJohn Fryerは、『格致匯編』のなかに「上海格致書院擬設鉄嵌玻璃房為博物館説」<sup>(92)</sup>を掲載し、社会の各分野の人々が蔵品を寄付することを提唱する。しかし、資金と蔵品の不足のため、上海格致書院博物館は、開館しなかった。

京師同文館博物館と上海格致書院の知新堂博物館は、主にアメリカ人と英国人を主催したものであった。本稿は、主に日本の博物館学が中国の博物館学の影響を検討するものである。そのために、上記の内容について具体的な論考は、あまり論及しない。

## (2)学会博物館

戊戌の変法の推進と共に、中国国内の各地域では次第に戊戌の変法を推行する学会の創設が開始された。1895年11月に、北京での“強学会”の設置を濫觴に、その後中国全域で各学術分野の学会は次第に設立されて行く社会情勢となった。

かかる状況にあって、学会博物館は提案された。1896年に梁啓超は、「論学会」<sup>(93)</sup>を發表して、当該学会創設の趣意書の中で、学会の設立には十六の事項が必要であるとして、それらの要件について詳述している。その中で、第十二番の事項は、「大陳各種儀器、開博物院、以助試験」(各種類の実物資料を展示し、博物院を開館し、研究活動を支える。筆者訳)と述べている点からも、明確であるように梁は学会には学会の専門と整合した博物館が必要である点を、学会設立の要件の一つと考えたことが理解できる。

### ①官書局遊芸院

官書局の前身は、1895年に康有為と梁啓超が北京で創設した強学会である。その後、強学会は強学書局と改称し、1896年には清朝政府によって閉局させられている。強学書局は、維新派の出版社として、維新派の理念を広める刊行物を刊行した。それ故に、維新派の理念に反対する政党は、強学書局を排斥した。党争のために強学書局は、僅か2年で閉局した。

戊戌の変法の進捗に従い光緒帝は、強学書局を官書局へと改組することにより再開し、孫家鼐が局長に任命された。1896年に孫は、『官書局奏定章程疏』<sup>(94)</sup>を上書し、官書局の章程を設置した。

この章程には、官書局が蔵書院・刊書処・遊芸院・学堂などの施設の管理と、経費・職員・印章などの事務を掌握すべきであることを規定した。その中で、遊芸院と称する施設の内容については、下記のように述べている。

備儀器、擬設遊芸院、広購化学・電学・光学諸新機、鉱質・地質・動物・植物各異産、分別部居、逐門陳列、俾学者心摹手試、考驗研求、了然於目、曉然於心。将来如製造船隻槍砲等事、可以別材質之良窳、物価之低昂、用法之利鈍、不致受人蒙蔽。

(実物資料などを収集して、遊芸院を設置する。なお、遊芸院では、化学・電学・光学など諸学問の実物資料あるいは機械と、鉱物学・地質学・動物学・植物学などの標本を分別して陳列展示する。学者は、これらの実物資料によって、学問の研究に関する実践を指導しており、学問の理解を進めている。将来において、船舶や槍・砲等を製造する時、学んだ人材は材質の良否・価格の高低・使用法の簡難の区別ができ、他人に騙されないようにする。 筆者訳)

上記の記載記事から、筆者は、遊芸院は博物館に相当する施設であったと判断している。しかし、費用不足などの原因によって、残念ながらこの遊芸院は開館を見なかったが、博物館思想は明らかに存在したと考えられる。

## ② 郴州学会博物院

1898年に、羅輝山と潘仁瑤は、湖南省郴州市で郴州学会を創設した。郴州学会は、郴州輿算学会とも称され、地図・地質・機械・天文などの学問を研究する学術団体である。

郴州学会は、博物館を設置することも提案した。「郴州学会稟(附章程)」<sup>(95)</sup>には、下記のような記録が認められる。

格物致知為孔門正軌、無此則修齊治平俱付虚説、各教無从担荷。茲擬設立博物院一所、即借公所廟宇、先行陳立中国土産、凡花卉・草木・虫魚・泥沙有関考究者、無不可入。

(儒学が提唱する「格物致知」<sup>(96)</sup>という理論は、儒学で正統な理念である。この理論を持たなければ、儒学では「修身・齐家・治国・平天下」<sup>(97)</sup>などの学説と観点が虚無に帰する、教育理念の基本となる哲学的理念である。そのために、博物院を設置することが提案された。博物院は、公共の場或いは寺院などの場所を借用して、中国における土産などを陳列展示し、さらに植物学・動物学・鉱物学を研究する関係者がこの博物院に入館できる。 筆者訳)

しかし、戊戌の変法の失敗とともに、各地域で学会運動は終止した。かかる状況にあつて、郴州学会博物院も開館することはなかった。

戊戌の変法は、明治維新を全面的に受け入れたため、教育変革運動には学校制度の改革と学会の創設が中心になった。初等教育制度と高等教育制度を設置し、特に大学が設立されたことは、高度な教育

を遂行されることとなった。各種類の学会には、学問と技術を研究する関係者を集めて、学問と技術の研究を検討し、様々な視点での交流がはじまり、学問と技術のさらなる発展を目指した。

かかる状況にあって、戊戌の変法を内在した学校博物館と学会博物館の提案は、この時期で最も注目された博物館論であった。惜しくも、学校博物館も学会博物館も、戊戌の変法の失敗とともに実現されることはなかったが、当該時期の学校博物館論と学会博物館論の構想論・構築論発生に至る経緯と推移の研究は、中国博物館学史の構築のうえで不可欠であると筆者は考えるものである。

## 2、揺籃期に設立された博物館及び相当施設の状況

20世紀に入ると、当該時期は中国では多量の博物館及び相当施設が開館した時代的特徴を有する。この時期に開館した博物館及び相当施設は、注目すべき点がある。それは、開館を提案した人物は日本を訪問した経験或いは日本に留学した経験がある共通点を有している。日本への留学・渡日で、日本の博物館を知り、共感をうけて模倣したことであった。

### (1)孫光庭と雲南府博物館（1901年開館？）

尹侖<sup>(98)</sup>は、2017年に雲南府博物館が中国において初めての博物館の可能性があるという新たな観点を提唱した。その論拠は、フランス人の Georges Cordier（ジョルジュ・コルディエ）が1915年<sup>(99)</sup>と1922年<sup>(100)</sup>に『Bulletin de l'École française d'Extrême-Orient（フランス国立極東学院公報）』<sup>(101)</sup>に、雲南府博物館に関する状況を掲載した論文の発見であった。「Le Musée de Yunnan-fou（雲南府博物館）」<sup>(102)</sup>によって、雲南府博物館が1901年に孫光庭によって設立されたことは、明確に記録されていた。さらに、上記の論文によって孫が雲南府博物館を設立する原因は、孫が日本に留学した経験であったと明確に述べている。

Ce musée fut commencé en la 27<sup>e</sup> année kouang-siu (1901) par Souen Kouang-ting 孫光庭, alors directeur de l'école normale. Souen, originaire de la préfecture de Kiu-tsing (Yunnan), séjourna au Japon il y a quelques années comme étudiant ; c'est là, sans doute, qu'il a puisé l'idée d'ouvrir un musée dans la capitale de sa province. Etant donné les fonctions du fondateur, on ne réalisa, au début, qu'un simple musée scolaire auquel on adjoignit, par la suite, à l'intérieur même de l'établissement, une école où Souen enseigna à peindre les planches d'histoire naturelle et à naturaliser les animaux.

(この博物館は、光緒二十七年(1901)に当時の師範学校の校長である孫光庭によって創立されたものであった。孫は、雲南省曲靖の出身であり、数年前に日本に留学したことがある。これを契機に、孫は雲南府で博物館を開設する考え方が芽生え始めたと思っていた。創始者の孫の職責を考慮すると、この博物館は、最初は学校博物館として設立された。その後、この学校博物館で、孫は、自然の歴史と動物の帰化などの内容を教授した。 筆者訳)

上記の記録によって、雲南府博物館が設立された経緯は、下記のように帰納する。

孫は、日本から帰国した後、雲南師範学校の学院長になった。孫は、日本の博物館に非常な感銘を受け、雲南の昆明で博物館を設立しようと決意していた。その結果として、雲南府博物館は、雲南師範学校に附属する博物館として創設されたという。これは中国における公立博物館の濫觴であると同時に学校附属博物館でもあることになる。

#### LE MUSÉE DE YUNNAN-FOU

Par GEORGES CORDIER,

Directeur des Ecoles françaises de Yunnan-fou.

Le Musée de Yunnan-fou, 博物館 Pouo-wou-kouan, est installé dans l'ancien yamen de l'intendant des grains, rue de Leang-tao-kiai 糧道街. Occupant le même bâtiment que la bibliothèque populaire, il est plus connu des habitants sous le nom de Tou-chou-kouan 圖書館. Les bâtiments construits à la chinoise, en brique de terre crue, n'ont été que peu modifiés; on s'est contenté de placer sur les façades donnant vers les cours, de larges verrières. On en trouvera plus loin un plan sommaire.

Ce musée fut commencé en la 27<sup>e</sup> année Kouang-tsin (1901), par Souen Kouang-ting 孫光庭, alors directeur de l'école normale. Souen (\*), originaire de la préfecture de Kiu-tsing (Yunnan), séjourna au Japon il y a quelques années comme étudiant; c'est là, sans doute, qu'il a puisé l'idée d'ouvrir un musée dans la capitale de sa province. Étant donné les fonctions du fondateur, on ne réalisa, au début, qu'un simple musée scolaire auquel on adjoignit, par la suite, à l'intérieur même de l'établissement, une école où Souen enseigna à peindre les planches d'histoire naturelle et à naturaliser les animaux (\*).

Grâce à l'adjonction de cette école, le musée prit un peu plus d'importance et l'on songea alors à en augmenter le matériel et les collections. L'argent faisant défaut pour opérer des achats, on fit appel à la population et les objets affluèrent: les gens riches firent quelques cadeaux; les marchands y placèrent des articles en dépôt, espérant ainsi les vendre plus facilement; les services officiels enfin, cédèrent toutes les pièces curieuses qu'ils pouvaient posséder.

(\*) Après la révolution, Souen fut nommé min-tcheng-seu 民政司 ou chargé de la justice. Il a depuis régné ses fonctions et s'est retiré à Kiu-tsing.

(\*) Cette école, dite Tou-chou-kouan-hio-t'ang 圖書館學堂, fonctionne toujours. Elle est dirigée par un kien-hio 監學, et l'enseignement y est donné par les professeurs de dessin et d'histoire naturelle de la ville. À la fin de leurs études, qui durent trois ans, les élèves passent un examen, et les lauréats sont envoyés dans les écoles de l'intérieur comme professeurs d'histoire naturelle.

XX. 3

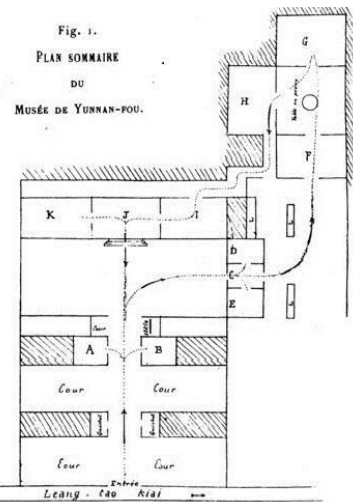


図 4-16

図 4-17 雲南府博物館案内図

### Le Musée de Yunnan-fou

しかし、この観点については、下記のいくつかの疑問点が残る。

第一の疑問は、コルディエ氏が雲南に来た時期と雲南府博物館が開館した時期の時間差である。

「喬治・高德耶和雲南府博物館」(103)によって、コルディエ氏は、ベトナム語の翻訳者と教師として1908年に雲南で在中国フランス大使館に赴任している。一方、コルディエ氏の論文によると、雲南府博物館の開館年は1901年である。すなわち、コルディエ氏は、雲南府博物館の落成を目のあたりにしたわけではなく、論文に記載した雲南府博物館の開館年を他の人から聞いた情報である可能性が指摘できるのである。

第二の疑問は、創設者の孫光庭は日本に留学した時期と雲南府博物館が開館した時期の時間差である。

『曲靖文史資料第五輯歴史人物專輯』<sup>(104)</sup>によって、1890年に孫は内閣中書<sup>(105)</sup>として雲南から北京に赴任した。それから、1900年までの10年間は、孫は北京にいた。なお、1900年に庚子事変で八カ国連合軍が北京に侵入したために、1901年に孫は、雲南に帰って育才書院院長に就任している。1903年に、育才書院が雲南高等学堂と改称し、孫は高等学堂の副長に就任した。さらに、1904年に孫は、雲南省留日学生監督に任命され、選抜される四十一人の学生と一緒に日本に留学した。1906年に、孫は雲南に帰って雲南学務処副長となり、後に雲南図書館館長に就任している。孫は、学務などの事務を執りながら、雲南図書館も管轄した。

上記の孫の履歴によって、孫が日本に留学した時期は、1904～06年までであった。一方、コルディエ氏が記載した孫の日本への留学の時期は、雲南府博物館の開館年（1901年）の数年後であった。さらに、『雲南省志・卷六十・教育志』<sup>(106)</sup>に依拠すれば、雲南省に初めての政府から派遣された留日学生は、1902年に派遣されたた10名であったと記されているのである。これらの記録によって、孫が日本に留学した経歴は、二回である可能性もあることになる。すなわち、第一回目は1890～1900年まで孫が北京に勤務する十年間の中での時期かもしれない。第二回目は1904～06年まで孫が雲南省留日学生監督を任命されて日本に留学した時期である。

しかし、文献不足のため、孫が日本に留学した時期は、主に第二回目の1904～1906年までの記録のみであり、第一回目の留学経歴はコルディエ氏の記録にしかないのである。

第三の疑問は、コルディエ氏が孫の職位に関する紹介は、当時に孫の実際の職位と違いがあることである。

コルディエ氏の論文<sup>(107)</sup>によって、1901年に孫は、師範学校の学園長として雲南府博物館の開館を主宰した。しかし、孫の履歴によれば、1901年に孫は、北京から雲南に帰って育才書院院長に就任した時期である。育才書院は、中国における伝統的な書院であり、師範学校ではないのである。さらに、『雲南省志・卷六十・教育志』<sup>(108)</sup>には、雲南省には1905年に初めての師範学堂である“初級師範学堂”を設置されたと明記されている。すなわち、1901年に雲南には、師範学校がなかったのである。その上で、孫が育才書院と雲南高等学堂以外の他の学校に勤務する記載はない。

一方、ここで注意しなければならない点は、『雲南辞典』<sup>(109)</sup>には、孫が日本への留学終了後、雲南に帰る年（1906年）に雲南高等学堂は師範類の部門を増設し、三人の日本籍教員を採用したことが記載されている。さらに、翌年の1907年に、雲南高等学堂は雲

南兩級師範学堂と改称している。

また、記念論文である「孫少元先生伝」<sup>(110)</sup>では、1905年に雲南高等学堂の学園長である陳栄昌が日本へ視察に行くため、孫は陳の後任として、雲南高等学堂の学園長になったとの記載が認められる。しかし、「孫少元先生伝」によると、孫は1901年以前までに留学した経験は認められなかった。孫は、1884～1900年までの6年間は北京に奉職し、1900年に雲南へ帰郷している。帰郷後には、曲陽書院山長として任用されている。なお、孫の夫人である孫清如は、1906年まで女性留学生として日本に留学しており、はじめての孫氏家族の日本への留学者であった。その上で、上記の論文によって、雲南高等学堂が雲南兩級師範学堂と改称する時に、孫は北京に転任したが、『曲靖文史資料第五輯歴史人物專輯』<sup>(111)</sup>と『雲南辞典』<sup>(112)</sup>によって、孫は日本に留学終了後雲南に帰って、雲南に勤務したことが理解できる。一方、「雲南五洲大薬房及其経営者李仲鏡」<sup>(113)</sup>によれば、孫は1904年に留日学生の監督として、日本に行った事実を伝えている。これを信用すると孫の留学は、雲南への帰郷後となり、1901年の創設についても矛盾が存在することとなる。

孫に関する文献と資料の不足と矛盾のため、筆者は孫の経歴が明確に把握できていないが、現有の文献と資料によって、孫の経歴の一つの可能性を推測する。具体的には、下記の表4-2のように推測する。

表 4-2 孫光庭履歴（1890～1907）一覧（筆者作成）

年	筆者が推測する孫の経歴	筆者が推測する孫の職位
1890年	雲南から北京に赴任する	内閣中書
1890～ 1900年	北京に勤務する ある時期に日本に留学する	内閣中書 留学生
1901年	雲南に帰る	育才書院院長
1903年	育才書院が雲南高等学堂と 改称する	高等学堂の副長
1904年	日本に留学する	雲南省留日学生監督
1906年	雲南に帰る	雲南学務処副長 雲南高等学堂の学園長 雲南図書館館長（後のある時間）
1907年	雲南高等学堂が雲南兩級師 範学堂と改称する	雲南兩級師範学堂の学園長 雲南図書館館長（後のある時間）

上記の推測によって、コルディエ氏が孫を師範学校の学園長と称した理由は、1908年にコルディエ氏が雲南に赴任した折、孫は雲



南両級師範学堂の学園長の任に着いていたかもしれない。

第四の疑問は、雲南府博物館の発端である。コルディエ氏は、雲南府博物館の発端が学校博物館と述べている。なお、論文の註によれば、この学校名は、「T'ou-chou-kouan-hio-t'ang 図書館学堂」と明確に記録している。しかし、雲南では、「図書館学堂」と称する学校がない。一方、『雲南辞典』<sup>(114)</sup>には、1909年に経正書院・五華書院・育才書院の蔵書が収集され、雲南省図書館は設立されたことが記されている。この育才書院は、孫が院長に就任した書院であった。さらに、1910年に雲南省図書館は、博物館の準備をし始めて、翌年に雲南博物館を雲南省図書館の建物の中で設立した。なお、雲南博物館が設立される同年に、雲南省図書館は“雲南図書館兼博物館”を改称されている。さらに、1912年には、雲南図書館兼博物館は、雲南旧糧道署へ移転している。

ここで注意すべき点は、コルディエ氏の論文によれば、雲南府博物館が図書館と同じ建物内にあること。また、雲南府博物館より、図書館の方は有名であったこと。さらに雲南府博物館が「Leang-tao-kiai 糧道街」という街に位置した。

上記の記録によって、コルディエ氏が論及した雲南府博物館は、雲南図書館兼博物館の可能性が極めて高いと考えられる。コルディエ氏が論及した図書館学堂は、育才書院の可能性が高いと考える。

上記の論述により、雲南図書館兼博物館の開館年について不明点が多いが、この時期には、孫は日本の影響を強く受けたことは事実である。

## (2)周学熙と天津考工廠（1902年設立・1904年開館）



図 4-18 周学熙



図 4-19 考工廠

1900年に、山東候補道員となる周学熙は、山東巡撫袁世凱の幕僚となった。翌年に袁は、北洋通商大臣兼直隸総督に昇格して天津に転勤したため、周は袁に引き続き随従して天津に転勤し、北洋地区における農業・工業・商業などの実業を管理した。

1903年に、直隸省銀元局総弁となった周は、袁の命令を受けて、日本における商工業・造幣廠などの運営を視察した。

周は、1903年3月～5月までの二箇月間日本に赴き、造船所・洋行・製鉄所・県署・紡績廠・銀行・戦艦・新聞社・造幣局・印刷局などの商工業設備等々を見学した。さらに、周は山東大学堂総弁を務めた経験から、教育に関心を持っていたため、師範学校・商業高校・女子師範学校・小学校などの教育機関も意欲的に見学している。

「東遊日記」<sup>(115)</sup>には、周が神戸にあった商品陳列所・川崎氏園林及び美術館（兵庫県の川崎芳太郎）・大倉喜八郎の博物館・上野公園の帝室博物館などを参観したことが記されている。ここで注意すべき点は、この時期は日本で最後となった第五回内国勸業博覧会が開催された時期であったことである。博覧会を見学した周は大いに驚いて、中国国内でも博物館と博覧会を設立・開催する決心をしたと明記している。

帰国後、周は直隸省工芸局・天津高等工業学堂・考工廠などの実業機関の創設を袁に進言し、直隸省及び北洋地区における実業の発展に務めた。周は、実業事業に大きな関心に持っており、実業機関を多量に創設したところから、“南張北周”と張謇と並び称される実業家になった。なお、周が著した「自叙年譜」<sup>(116)</sup>には、周が帰国後「以考察所得於日本者、欲以施諸我国」（日本で考察した成果は、中国で推行しようと思う。筆者訳）と明確に記されている。

周が主導した実業機関の中で、考工廠と称する機関は、博物館に相当施設であったと推察される。天津考工廠は、1902年に準備が開始され、1903年に一部開館し、1904年に正式に社会に向けて開館した施設であった。考工廠が順調に開館するため、周は1902年に日本人の藤井恒久を翻訳者として聘用し、さらに1903年には同じく日本人の塩田真を天津考工廠芸長として聘用している<sup>(117)</sup>。藤井・塩田は、考工廠についての建物位置・工作人員・経費・事務などの事項の制定を担当している<sup>(118)</sup>。その上で、事務の職務の中には、皮設(展示と収蔵で使用するケースの設置 筆者訳)・考察・化驗・図書の制作と刊行の内容をも含めたものであった。

「工芸総局詳報考工廠開弁情形文並批」<sup>(119)</sup>によると、天津考工廠は、1904年9月10日<sup>(120)</sup>に正式に開館し、大勢の観覧者を迎えたことと記されている。しかし、運営の不足点が露呈したため、周は考工廠の現状をつぶさに述べて、改良法案を提出した。内容は、経費・蔵品・場所・警備員・保険・外国語案内書・特別チケット・通し切符・女性専用開館日などを含めた広く経営に関する内容であった。

さらに、「天津考工廠試弁章程」<sup>(121)</sup>と「天津考工廠各項規則」<sup>(122)</sup>などの規則完備が充実されるに従い、天津考工廠は正常な軌道に乗

り発展した。

なお、ここで注意すべき点は、「自叙年譜」<sup>(123)</sup>には、考工廠に関して下記のように記載された。

八月、考工廠開幕、当時津郡工商多守旧、故酌采日本成規、購致外省外洋物品招徠各商陳貨寄售、標籤誌票,百種種駢列,以資激發而備仿製。(後略)後於三十三年在河北勸業會場内、特建巨厦改名勸工陳列所。

(考工廠は、八月<sup>(124)</sup>に開館した。さらに、当時に天津における工商業は、昔からの制度を守るから、日本における既成の規則を採用した。考工廠に陳列する商品は、国内と海外の物品を購入するものがあり、商品の所有者が販売を委託するものがあった。考工廠には、様々な商品を陳列し、説明札などを付けた。このように、観覧者は商品を見ると、商品を模倣して製作する要望を激発しようと考えられた。(後略)その後、考工廠は、1907年に河北勸業會場で大きな建物に移動し、勸工陳列所と改称した。 筆者記)

さらに、「督弁条論節抄」<sup>(125)</sup>には、天津考工廠の発展を促進するため、周は専門職員を日本へ派遣している。また、周は天津考工廠の発展を下記のように指示している。

考工廠陳列商品、現奉宮保諭、応仿照日本大阪商品陳列所弁法、將内外国分別陳列、不得牽合攙雜。

(考工廠は、様々な商品を陳列する機関である。今は宮保<sup>(126)</sup>の袁世凱の命令を受け、考工廠は日本の大阪府立商品陳列所の展示方法を模倣すべき。具体には、展示品の国別によって分別に展示し、区別しないで展示すべきではない。 筆者記)

本資料によって、周は日本における商品陳列所の管理と運営に賛同し、日本商品陳列所の方式を中国に導入しよう并希望したことが看取できる。

天津考工廠に関する争論について、1987年に陸惠元<sup>(127)</sup>は、中国における初めての中国人が設立した博物館は南通博物苑ではなく、天津考工廠であるとした新たな観点を主張した。それに対して、梁吉生<sup>(128)</sup>を代表する博物館学者は、天津考工廠は博物館ではなく、博覧會場であるとする理由で反論を唱えた。

さらに、陸が自分の主張を支持するため、陸はさらに2篇<sup>(129)</sup>の論文を發表し、博物館学者らの疑問点を丁寧に説明し、天津考工廠の設立背景・目的及び天津考工廠の陳列内容・方式などの詳細情報を挙げた上で、天津考工廠は一過性の博覧會場の展示場ではなく、常設の博物館である観点を主張した。

陸・梁の両者の議論の中心は、天津考工廠の性格であった。すな

わち、博物館の定義である。この議論によって、中国博物館学界は、近代博物館の定義をさらに明確にすることとなった。

筆者は、天津考工廠が博物館に相当施設であったと考えている。理由は、天津考工廠は明確に蔵品の収集保管・展示・研究及び教育・普及などの博物館の基本的な機能を持っていた。しかし、天津考工廠の商品陳列所として最も重要な機能は、商品の貿易と販売であった。この意味で天津考工廠は、完全な博物館とは言い難い部分も存在するが、常設展示の観点から、本施設は、出現期の博物館であったと考えるものである。

### (3)梁煥奎と湖南図書館兼教育博物館（1904年開館）

1904年に、梁煥奎は、湖南における名流の紳士である龍紱瑞・陳保彝・譚延闓・魏肇文・黄篤恭・胡元倓・許直・陸鴻逵・梁煥彝・劉棟蔚・俞蕃同の、12人の発起人と共同して湖南図書館兼教育博物館を設立することを発議した。上記の12人は、1904年3月15日の『湖南官報』593号に連名で「創設湖南図書館兼教育博物館募捐啓」<sup>(130)</sup>という文章を掲載した。副標題は、「館設城東古定王台 擬二月初間開弁」（博物館の建物は城東における古定王台の旧址であり、開館日期の暫定案は二月初旬<sup>(131)</sup>である。筆者訳）のように、湖南図書館兼教育博物館の地理的位置と開館期日を決めている。



図 4-20 梁煥奎



図 4-21 湖南図書館兼教育博物館

「創設湖南図書館兼教育博物館募捐啓」には、英国・日本・フランス・ドイツ・ロシアの大国の事例として、図書館の重要さを挙げている。さらに、社会教育について論及し、図書館が社会教育にとって必要不可欠な施設であることを指摘した。一方、この文章には、標題のみに「博物館」という用語が使われ、本文内では「博物館」という言葉が全く使われていなかったが、当時の中国が推奨した博

物館の機能は「儲書籍以備觀摩、購図器以資試験。」（研究のために、書籍と器物を収集する。 筆者訳）をあくまでも基盤に置き記載したものと推察される。

さらに、1904年に夏瑞芳が主編する『東方雑誌』（<sup>132</sup>）の第四期の「教育:各省学堂滙誌」で、湖南図書館兼教育博物館の開館に関するニュース掲載され、下記の記事が認められる（<sup>133</sup>）。

湖南長沙城東有古定王台、茲由梁・龍諸君創捐鉅款、購弁中外図書及人体、動植模範、光化等儀器列置其中、設館三所:曰図書、曰教育、曰博物。近已開弁。

（湖南省長沙市の東側には、古定王台の旧址がある。梁煥奎と龍紱瑞は表に立って、湖南における名流の紳士を連れてこの旧址を利用した。彼らは、大金を投じて、中国と海外の図書・人体模型・動植物標本・電気器具など実物資料を購入して陳列する。この建物は、図書（館）・教育（館）・博物（館）である三つの館を設置した。最近開館した。 筆者訳）

上記のニュースによって、湖南図書館兼教育博物館は、博物館の機能を明確に有していたことを窺い知る。

一方、『湖南近代図書館史』（<sup>134</sup>）によると、「創設湖南図書館兼教育博物館募捐后」を提唱する12人は、梁煥奎・陸鴻逵・魏肇文・胡元倓・梁煥彝・許直・劉棟蔚・俞蕃同であり、この中の8人が日本への留学経験を持っていた点も大きな特徴であると言えよう。

1901年に、梁煥彝と魏肇文は、東京の成城学校（1948年に成城中学校・高等学校と改称）に入学し、陸軍士官学校への予備教育を受けた。

1902年に、官費留学生であった胡元倓と俞蕃同と、自費留学生であった許直と劉棟蔚は日本へ留学し、翌年には陸鴻逵も日本へ留学した。上記の5人は、弘文学院の速成師範科へ入学した。弘文学院の速成師範科は、柔道家・教育家であった嘉納治五郎が清国からの中国人留学生のために開校した中国留学生向けの専門の予備校であった。

1903年に、梁煥奎が湖南省留日学生監督になって、35人の留学生を率いて日本へ留学した。同年に、梁は中国に帰って湖南高等実業学堂を創設し、学園長に就任している。

梁は、西洋における近代技術を推奨し、日本に学ぶことが近代技術習得の捷徑と主張した。そのために、梁は、三弟の梁煥彝・四弟の梁煥均・五弟の梁煥廷にも日本への留学することを支持し、学費と生活費などを援助したという。

さらに、「煉錫業大王梁煥奎的教育思想與実践」(<sup>135</sup>)には、梁は人

材育成に大きな関心を持っており、なかでも近代技術の教授を重視していた。梁が設立した湖南高等実業学堂には、在職する教員が全て外国人と留日・留米・留英帰国者であった。その中で、日本人教員と留日帰国学生の割合は高かった。その上で、梁は日本語を学堂での必修の第二外国語として規定した。

また、梁煥均が編輯した『青郊詩存』<sup>(136)</sup>は、梁煥奎が作る詩を収集編輯した詩集である。なお、梁煥均が記述した『青郊詩存』の跋<sup>(137)</sup>によって、梁煥奎は、「癸卯丙午間、三遊日本」(1903～06年までの間に、日本への留学した経験が三回であった。 筆者訳)と述べており、日本に対する見聞と感想に関する詩を多量に書き留めていた。一方、梁煥奎自らが編著した詩集である『青郊六十自定稿』<sup>(138)</sup>の中でも日本に関する詩を記載している。その中で「勸業会」「與人談調査人類館事戯述」「植物園」などの詩のタイトルがあるところから、梁煥奎は日本の博物館にも大きな関心を持っていたことが了解できよう。

#### (4) 巖修と天津教育品陳列場 (1904年・1905年開催)

1904年2月と1905年1月に、巖修は天津城隍廟官立小学堂で二回に亘り天津教育品陳列場を開催している。この天津教育品陳列場は、正式な博物館ではなく、日本の教育博物館と博覧会を模倣した臨時的な教育博覧会であったようである。

なお、教育品陳列場の開催について『大公報』<sup>(139)</sup>では、「文明盛事」<sup>(140)</sup>「文明盛事続誌」<sup>(141)</sup>「開弁第二次教育品陳列場」<sup>(142)</sup>なる標題で掲載している。



図 4-22 巖修

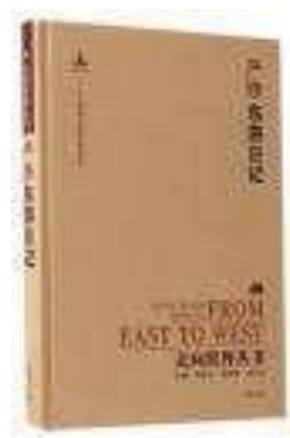


図 4-23 『巖修東遊日記』

「文明盛事」によって、教育品陳列場は、1904年2月7日～同月12日まで開催し、「將所有一切科学儀器及教科書陳列其中縱人觀覽並演説各種利益以鼓人精進之思云」(全ての科学技術に関する器具及び教科書を展示し、観覧に供する。さらに、研究活動を推行ため

に、陳列場で開催する講座は、研究の積極面を演説する。筆者訳）と目的であった。

また、「文明盛事続誌」に依拠すると、教育品陳列場には下記のように十二の展示部門を配置していたことが記されている。

曰博物部曰気学部曰力学部曰水学部曰教育用品部曰磁石部、曰電学部曰化学部曰熱学部曰声学部曰光学部曰書籍部。此外並附列人身模型羅列繁備頗足一拓眼界。

（教育品陳列場は、博物部・気学部・力学部・水学部・教育用品部・磁石部・電学部・化学部・熱学部・声学部・光学部・書籍部である12の展示部門がある。その上で、教育品陳列場では、人体模型も展示し、各種類の実物資料を十分に準備しており、観覧者の視野を広める。筆者訳）

さらに、教育品陳列場の観覧者動線も規制動線形態が採用されていたようである。「観者魚貫而進、出入各有定路、頗有整齐嚴肅之象」<sup>(143)</sup>（観覧者は、連なって入場する。陳列場で規制された出入口があるから、会場では整然と並んでおり、嚴肅な空気を与えている。筆者訳）。

しかし、この教育品陳列場は、日本の博覧会を模倣したため、指示板なども日本語そのままで使用したといった、不具合点もあったことは下記の記事が示している。

惟出入定路沿用日本名詞標貼出口入口字様、観覧者多不解其何謂。仍多不按定路而行、必須按人指示不如改用本国字様為順便耳<sup>(144)</sup>。

（入口と出口などの指示板は日本語で標記せられる。日本語が分からないから、観覧者は指示板を見ると、意味が理解できない。それ故に、ボランティアの協力がなければ、観覧者は規定路線を無視した状態になる。このような状態を免れて、指示板は中国語を使ったほうがいい。筆者訳）

さらに、「開弁第二次教育品陳列場」には、1905年1月21日～同24日まで開催された第二回教育品陳列場の様子が記載されている。

去歲嚴京卿<sup>(145)</sup>及張伯苓君等曾假城隍廟官立小学堂開弁教育品陳列場陳列理化儀器博物標本今歲仍擬在原處開弁第二次陳列場又新增購儀器標本多種。

（去年には、嚴修と張伯苓諸君が城隍廟官立小学堂で教育品陳列を開催し、理学・化学などの器具と動植物などの標本を展示した。今回の教育品陳列場は、去年のように城隍廟官立小学堂で開催された。なお、展示品には、多種多様な器具と標本が集められていた。筆者訳）

また、今回の教育品陳列場への入館料は、学校の団体見学は無料

観覧であったところからも、教育性を有した展示会であったと判断できよう。「惟官民立各学堂学生由教員率領来観者概不收費」(ただ公立と私立の各学堂の教員が生徒たちを引率して団体見学する場合のみは、無料である。 筆者訳)

『東方雑誌』は、「教育:各省教育滙誌」<sup>(146)</sup>の中で、教育品陳列場に関するニュースを下記のように掲載した。

嚴范孫<sup>(147)</sup>京卿近假津郡城隍廟開弁教育品陳列場陳列理化儀器博物標本多種縦人観覧。

(最近には、京卿を担当する嚴修が天津の城隍廟で教育品陳列場を開催した。この教育品陳列場は、理学・化学などの器具と動植物などの標本を展示し、観覧に供した。 筆者訳)

上記の史料らより、天津教育品陳列場は、博覧会の特徴を持っていると確認した。

一方、天津教育品陳列場の主催者であった嚴修は 1902 年と 1904 年に日本を見学した経験を持っていた。嚴は『壬寅東遊日記』<sup>(148)</sup>と『第二次東遊日記』<sup>(149)</sup>を著して、二回の日本旅行を記録している。

上記の日記によって、嚴は日本における博物館及び相当施設に大きな関心を持っていたことが窺える。

具体的には、『壬寅東遊日記』には、嚴は「富士見小学校」「高等師範学校」「女子高等師範学校」「東京府師範学校」「東京美術学校」「第一高等学校」「帝国大学」「渡辺小学校」「体操学校」「学習院」「華族女学校」「東京盲啞学校」「東京音楽学校」「弘文学院」「大同学校」「同文学院」「清華学校」「早稲田大学」「東京高等商業学校」「常盤小学校附属幼稚園」「慶応義塾」等の学校を見学し、それぞれの学校の特徴を詳しく記録している。殊に、学校における陳列室・器械標本室・列品室・陳列所・製造所・動物標本陳列室・地質陳列室・人類学倉庫・標本器械室・林学標本陳列場・博物室・理学教室・博物標本室・商品陳列所など学校博物館・相当施設に大きな関心を持っていたことは文面から理解できる。

また、学校博物館以外には、嚴は「大阪商品陳列所」「商品陳列館」「博物館」「動物園」「水族館」「美術協会」「教育博物館」などの商品陳列所・教育機関を訪問し、詳しく記録している。

具体的には、嚴は 8 月 17 日に大阪商品陳列所を観覧し、見学内容を下記のように記載している。

(前略) 門外每人納金二銭、買票持入。人給一図、図中有陳列所照相、有各国貨幣表、有汽車開行時刻表。先入其外国品見本室、所列如織品・陶器・服飾・金類・角類・紙類、不



可殫述。或立柜、或横几、皆鑲以頗黎。其式或縦或横、或平或立、或方或長、琳郎璀璨、光彩奪目。某国送附、某地出產、某地購得、某价本几何、各書於紙牌、或粘之、或系之。就中貨品、以英国為極多、觸目皆是。次則美德两国亦頗夥頤。（後略）

（（前略）大阪商品陳列所のチケット代は、二錢であり、チケットを買うと陳列所に入れる。パンフレットには、陳列所の写真もあり、各国の貨幣の表もあり、バスの時刻表もある。先ずは、外国品見本室を入り、展示品が織物・陶器・服飾・金工・骨角器・紙工品など多種多様なものが展示されている。また、展示ケースは、ハイケースとローケースなどがあり、鑑賞できるガラスを付けている。その様式は、縦式・横式・平面式・立体式・方型・長型など様々な形態があり、美しい輝きがある。さらに、説明札には、展示品の寄付国・産地・購入地・価格などの情報を記録し、展示品のそばに置いている。展示品は、英国生のもものが一番多く、アメリカ製とドイツ製品が二番目に多い。（後略） 筆者訳）

上記によって、巖は大阪商品陳列所の展示方法を記録し、ときには展示ケースと説明札（題箋）の設置を詳細に記録している。

さらに、巖は中国産の展示品を挙げて、展示品の具体的な名を全て記録した。また、大阪商品陳列所には、外国品見本室・内国見本室・図書部があったが、残念ながら時間の制約が在り、内国見本室と図書部を見ることが出来なかったようである。

その後、8月21日に巖は、大阪で開催されていた天津戲法<sup>(150)</sup>を観覧しながら、博物場・美術室などを見学した。翌日は、『大阪毎日新聞』を読み、天津の日本居留地で商品陳列館を設置することを決心している。ここで言及した商品陳列館は、日本の和歌山県の商人である三毛藤吉が設置した商品陳列館であると見られる。「20世紀初開埠城市天津的日本受容—以考工廠（商品陳列所）及勸業会場為例—」<sup>(151)</sup>によると、日本政府は1900年に在天津領事館で商品陳列所の設置を試みるが<sup>(152)</sup>、義和団の乱のために設置し得なかった。その後、1901年12月に三毛藤吉が天津の日本居留地で雑貨を商売し始めた。経営の発展とともに、この雑貨屋は、商品陳列館になったと明治三十七年外交史料館文書には記されている<sup>(153)</sup>。中国語では、当該商品陳列館を三毛兄弟商会或いは三毛洋行と称した。

9月7日に、巖は博物館と動物園を観覧している。「博物館内創見之物甚多、鉱質及動物尤備。」（博物館には、数多の新しいものがあり、特に鉱物と動物の標本が完備されている。 筆者訳）上記の記録によって、この博物館には、自然類の展示品が豊かであると

ころから自然史博物館であると推定される。しかし、各国物産類の展示品については、「所列吾国及朝鮮物産皆粗悪、吾国尤甚、盖烟具居其半也。」（展示する中国と朝鮮の物産は、全て粗末で質が悪いことである。特に中国の物産の大半は、アヘン吸入の用具である。筆者訳）展示する中国と朝鮮の物産が一部の事実であるが、片寄りすぎる展示には、不公正な悪意が感じられる。

アヘン戦争が清朝の敗戦で終結したことは、深刻な衝撃を中国人にもたらした。清朝が敗戦した原因には、主として清が西洋国家と近代的な技術を軽視したことにある。上記以外の原因もあり、例えば清軍將領の指揮能力が不足していた理由もあり、清軍がアヘンに夢中になって戦闘力が減じた点も大きな理由であろう。

19世紀初頭に英国は、アヘン貿易により中国に対する貿易赤字が逆転し、中国市場を開拓した。かかる状況にあって、当時の中国人の中でも上層民にとって、アヘンを吸うことは社会的地位と家族の財産が体現できたのである。そのために、当時の中国にはアヘンを吸う風潮が蔓延したのである。一方、中国における下層民衆は、アヘンは癖になって高価でアヘンを購入しなければならないため、基本的な生活ができなくなった。なお、長期間アヘンを吸っているため、中国における民衆の身体と心の健康は、大きな損害を受けた。アヘン戦争以前は、世界の人々は中国人は礼儀が上品で、学問が深く、謙虚で、度量が広く包容力がある民族との印象を持っていた。しかし、アヘンを吸たため、中国人は注意力が散漫になると同時に意気が退廃した。アヘン戦争の敗戦によって、中国人が世界に与えた印象は、従来からの積極的な面から、アヘンに夢中になって消極的な印象に大きく変化した。

その後の日中戦争も清朝の敗戦で終結したことは、中国人が世界に貧困で身体能力が低いなどのマイナス印象を強めた。そのために、日本の博物館は中国を紹介すると、アヘンに関する物品を展示することは充分理解できた。確かに、近代中国はアヘンがもたらした影響を強く受けるが、アヘン或いはアヘンを吸うことは中国の物産でも、風習でもなかった。

中国には、アヘンに関する明確な記録が唐朝にあるから、アヘンの輸入が以前に存在したことは事実である。また、一つの見解は、西漢の張騫が西域から帰ってアヘンを輸入しはじめた。しかし、当時のアヘンは、麻薬ではなく、鎮痛と鎮静作用を目的とした医薬品として利用されてきた歴史を有する。その中で、最も有名なのは、東漢末期の華佗が発明した「麻沸散」<sup>(154)</sup>と呼ばれる麻酔薬であった。

*Opium:a history*<sup>(155)</sup>によって、実業家である Joseph Rowntree が中国には、従来からアヘンは医薬品として利用されて、麻薬とし

て吸う習慣がなかった点を明確に述べている。さらに、Martin Booth は、アヘンが麻薬として吸う習慣は西洋人が中国にもたらしたことを明確に指摘した。

1650年代頃、オランダ人がインディアンのパイプとアヘンを台湾に輸入して、それにより中国人はアヘンを吸い始めたとされている。

すなわち、アヘン或いはアヘンを吸う用具などは、確かに中国の歴史の一部であるが、中国の物産ではないのである。当時の日本は、明治維新によって、近代国家になって、社会が向上していた。その上で、日清戦争の勝利によって、日本は、絶対的な自信を持っていた。それに対して、中国は列強の侵略を受けて、事実の主権国家ではなかった。かかる状況にあって、日本は、中国を軽視すべき目的で、消極的な一部のみを展示することは不公正な悪意に基づく展示資料の選択であり、展示であったと考える。

さらなる可能性は、日本は中国の経歴を例証として、今後の戒めとすることであったとも理解できる。しかし、博物館における展示は、資料の展示が片面でなく、全面的に展示したほうが良いと考えられる。

9月14日に、巖は浅草寺周辺の水族館を「珍世界」で観覧した。「珍世界」には、「亦有動物、皆已死而薬浸製者。（中略）有銅鑄像。」（動物の標本があり、全て死亡した後アルコール・ホルマリンなど水溶液に浸したものである。（中略）なお、銅で造られた人像がある。 筆者訳）と記録している。その後、十二重楼を観覧し大いに衝撃を受けた。ここに記されている十二重楼とは、1890年に浅草公園に竣工した電動式エレベーターを備えた12階建ての望楼で、正式名称は“浅草凌雲閣”で、“浅草十二階”単に“十二階”とも呼ばれた展望塔であったと思われる。

十二重楼其下数重列西洋鏡甚多、其中写真之景多半台澎一带山水之勝與官署之形、否則與吾国戦争之場也。皆該国人得意之举。熊慕蘧曾言、彼国之教童子也、必先告以日清之戦、日之何以勝、清之何以挫、故人人脳筋皆刻入此事、自幼已然。余游覧才数処、琴平寺有北清戦争図、而浅草園又有之、十二重楼則有照像鏡矣。大凡繁勝之区、无不以此為点綴。傷哉、吾国之人其何以為心乎！

（十二重楼の下階には、西洋鏡<sup>(156)</sup>を多量に展示する。その中で写真を撮る内容は、主に台湾島と澎湖列島一帯の自然風景と官庁など建物の人文風景であり、或いは日清戦争の戦場の風景であり、全て日本人が得意とする場所である。熊慕蘧は、日本における児童教育が日清戦争を必ず紹介すると言ったことがある。さらに、日本が勝利した原因と中国が失敗

した原因を詳しく紹介するために、日本人は小さい頃から日清戦争のことを詳しく理解していた。日本における見学地は、いくつかを観覧しが、日清戦争に関するものをよく見る。例えば、琴平寺に北清戦争図があり、浅草園にもあり、十二重楼に照像鏡<sup>(157)</sup>がある。日本における人気がある場所には、殆ど日清戦争に関するものを飾っている。これらのものを見ると、中国人にとって悲しい思いをして、信念を失ない自信を無くしてしまった。(筆者訳)

日清戦争によって、日本は大きな自信を持って世界に誇るべきであるが、中国はさらに衝撃を受けて自信を無くしてしまった。それ故に、中国が窮境を脱する政策が当時の有識者らの第一要務であった。

なお、10月12日に、嚴は上野の美術協会を見学した。この美術協会には、画幅・銅器・漆器・石器・磁器・金銀七宝器が展示されていた。その後、教育博物館を見学している。嚴は、教育博物館の展示状況を陳列場毎に詳細に記録している。具体的には、第一陳列場は家庭・幼稚園・小学校用具及成績品があり、第二陳列場は物理・数学・星学・地学・化学・動物・生理・植物教授用具があり、第三陳列場には実業教育用具及成績品・図画・音楽・体操教授用具があり、その効用等々に展示内容は及んでいることを書き残している。

上記の記録によって、嚴は博物館に大きな関心を持って、博物館を利用して国民の教育を高める機関である点を自身に纏め、その上で博物館の建設・設置を目指した理解される。博物館建設目的を抱えた嚴は、まずは教育品陳列場を開催すべきであると考えたようである。

『第二次東遊日記』<sup>(158)</sup>には、1904年に嚴は、再び日本を巡見したことは前記した通りである。なお、教育を重視する嚴は、数多くの学校を見学している。

さらに、特記すべきは棚橋源太郎の手工課を見学している点である。この知遇から、棚橋源太郎との交流は、嚴の考える教育と博物館に関する観点に影響した可能性も十分に予想される

##### (5)天津教育品陳列館 (1905年開館)



図 4-24 陳宝泉

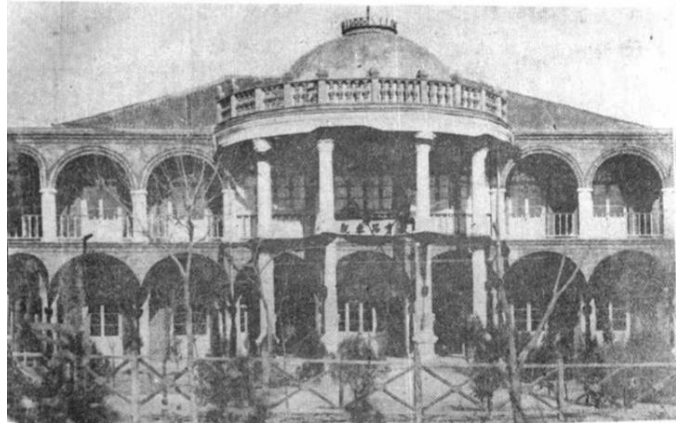


図 4-25 天津教育品陳列館

天津教育品陳列館は、嚴修・周学熙・陳宝泉達の積極的な準備によって、1905年3月15日に正式に開館した。

1904年10月には、周学熙は「直隶工芸総局酌擬教育品陳列館試弁章程並約估經費詳文並批」<sup>(159)</sup>を袁世凱に上書し、教育品陳列館を設立することを下記のように提案した。

查外国学校各科課程皆有教育物品、各種儀器具備、以供指授、故学堂工廠日新月異、競出新裁。(中略)(天津)似宜設立教育品陳列館、購置儀器・凶画、任人縱覽、以資啓發。

(外国における学校には、各学科と課程の教育物品と各種の用具がある。学校と工廠は、その物品と用具を利用して、研究を指導する。そのために、学校と工廠は、毎日進歩し、新たな観点と技術が発見できる。(中略)天津には、教育品陳列館を設立すべき、用具と凶書などを購入して、観覧者が見学する場所を提供し、観覧者がより高い段階へ上昇させよう。 筆者訳)

さらに、「直隶工芸総局酌擬教育品陳列館試弁章程並約估經費詳文」によって、教育品陳列館の設立は周学熙と嚴修が討論して決定したことであったと理解される。その上で、上記の上書には日本で展示品を購入することを提案している。

なお、袁世凱は、「設立教育品陳列館為文明進化最要關鍵、日本各学校会社工場出品日新月異。」(教育品陳列館を設立することは、文明の進化にとって、最も重要である。日本では、教育品陳列館を設立し、学校・会社・工場などが教育品陳列館を利用して、毎日毎日進歩がある。 筆者訳)と返事して、日本での展示品を購入を許している。

また、1904年10月に掲載された「直隶工芸総局酌擬教育品陳列館試弁章程」<sup>(160)</sup>には、管理規則・陳列規則・參觀規則を規定し、教育品陳列館における具体的な運営方法を明記した。

1905年3月13日～同月15日に発刊された『大公報』には、3日連続で教育品陳列館が3月15日に玉皇閣に開館予定とするニュースを掲載した。しかし、周が著した回想録である「自叙年譜」<sup>(161)</sup>には、教育品陳列館に関する記載は認められないが、教育品製造所に関する記載が下記のように記されている。

（光緒三十年）九月、開弁教育品製造所、以仿造教育各種品物儀器、備学堂教科之用。（中略）附設教育品陳列所（中略）所址先在玉皇閣、后迁河北勸業会場内。

（1904年の九月（中国暦）に、教育品製造所は開館した。教育品製造所の開館によって、教育に関する各種類の用具と物品は、模倣製作された。さらに、これらの用具と物品が学校での授業で利用できた。（中略）また、教育品陳列所は、付属品として設立して、（中略）教育品製造所は、最初に玉皇閣で設立するが、後で河北勸業会場に移動した。 筆者 訳）

一方、『北洋官報』<sup>(162)</sup>には、1907年の1429期で「直隶工芸総局詳陳列館擬並名為教育品製造所文並批」<sup>(163)</sup>と題する公牘録要<sup>(164)</sup>が掲載されている。本公牘録要によって、教育品陳列館は、勸工陳列所（元考工廠）と合併して教育品製造所に改称し、河北に移動した。

すなわち、上記の資料によって、教育品陳列館の沿革は下記のようにであったと推測されよう。

表 4-3 教育品製造所設立経過（筆者作成）

時間	教育品陳列館
1904年10月	提案
1905年3月15日	開館
1907年	教育品製造所

なお、周が著した「自叙年譜」に記載された内容は、誤記憶の可能性が高いと考えられる。

一方、教育品陳列館の運営を確保するために、周は陳宝泉を聘した。1903年に、嚴修の推薦によって、陳は宏文学院速成師範科に入学し、日本に留学した。1904年に帰国した陳は、同年に周の命令を受けて、再び日本へ見学に行っている。

「五十自述」<sup>(165)</sup>によれば、陳は、「是年冬周緝之学熙先生將於天津設教育博物館遣予再赴日本任調查及購置之事居月余歸」（1904年の冬に、周学熙先生は、天津で教育博物館を設立した。博物館の運営と展示品の購入などの情報を調査するため、私（陳）は、周学熙先生の命令を受けて、日本へ見学に行った。見学期間は、一月余りであった。 筆者 訳）のように二度目の日本への見学理由を述べて

いる。

さらに、陳は見学期間の経験を纏めて『教育雑誌（天津）』で「天津教育品陳列館議紳陳宝泉上周総弁意見書」<sup>(166)</sup>と題する文牘<sup>(167)</sup>を掲載している。陳は、文牘の最初に「此次至東京屢就諸教育家訪問教育博物館事宜今姑就所聞所知者列之於左」（教育博物館に関する情報を収集するため、今回は東京に行って、日本人の諸教育家を訪問した。今は、今回に見たことと分かったことを下記のように記録した。 筆者訳）と述べて、この文牘の内容を提示していた。

「天津教育品陳列館議紳陳宝泉上周総弁意見書」には、陳は日本での見学した内容は「建築」「分類」「陳列」「許女子参観」「在外国宜任派一留学生為委員」である四つの部分に分けて、詳しく論述した。その上で、陳は「瑣記数則」をその後に追加した。その内容は、小学生向けの展示品の比例・歴史類と地理類展示品の展示方法・生徒団体の無料見学・日本教育博物館における音楽実習室の模倣・物品の修理など具体的な内容に及んでいる。

戊戌の変法思想が広範囲に拡大された時期には、中国では教育変革運動と学会創設運動の風潮が従来以上に盛んになった。さらに、維新派が日本の明治維新を模倣することを提唱ため、この時期には教育変革運動と学会運動もその対象範囲となっていた。

中国の明清時期においては、「閉関鎖国」をとっていた。同じ政策を日本では、江戸幕府は1639～1854年までの間鎖国策を行っている。さらに、1842年に中国が締結した南京条約よりやや遅れて、日本は1854年に日米和親条約を締結し、鎖国状態を解除了。なお、南京条約と日米和親条約も開港を強制的に要求するため、上記の二つの条約をきっかけにして、日中両国は西洋諸国との交流が活発化した。

一方で、アヘン戦争で清朝の敗戦を知った日本は、西洋技術の絶対的な優勢に驚き、西洋の全てを学びとることにより近代的国家を目指した。その後、日本国内の開国派は、当時の日本の状況を把握し維新運動を行った。明治維新は、概して大成功を勝ち取り、日本における軍事力と経済力などの国力は飛躍的に高まった。さらに、近代的文化と教育を導入することは、日本の国民が西洋の視点を受容し、国民が世界に対する意識が明瞭となった。

1894年に日清戦争が勃発し、近代国家となっていた日本は、清朝に打ち勝った。アヘン戦争の敗戦より、これは、清朝政府と人民をさらに震駭させたことであった。その後、中国では、日本を学ぶ風潮が社会に浸潤していた。その代表的な活動と思想が戊戌の変法とその理念であった。

## 小結

日中両国は、ほぼ同時に近代博物館の概念を受容したが、日本では 1872 年に文部省博物局が湯島聖堂で最初の博覧会が開催されたことから、政府が博物館を設立する気運が次第に高揚した経緯を有する。同様に、中国でも当該時期に近代的博物館が設立された。例えば、1883 年に開館した徐家匯博物院（一説は、1868 年に設立。）・1874 年開館の亜洲文会博物院・1864 年開館の登州文会館博物館であった。しかし、現在知り得る資料では、これらの博物館のほとんどは、外国人が創設したものであり、清政府自らによる博物館の設立は歴史の上ではなかった。

この時期に、日本へ見学に行った中国博物館学者は、学習と模倣の目的を持っていた。そのために、19 世紀中葉の見学者より、19 世紀後半期における見学者は、ただ見聞録を記録するのみではなく、日本における博物館・博覧会を模倣し、中国本土に移行しようとする目的で指導方法を記録した。すなわち、中国に博物館を設立するために、この時期には中国博物館学界の役割が博物館意識を広めながら、博物館の経営・展示など具体的な事務を効率的に行うべきであると考えた特徴を持っていた。

さらに、当該時期は、日本における博覧会が開催される風潮が広がっていた。近代的な博覧会を受容する前に、日本には薬品会・物産会などの展示会が開催されたが、その規模は小さくて一般的には公開はされてなかった。一方、日本の遣欧使節団は、1862 年に英国人の初代駐日総領事であった Sir Rutherford Alcock の強力な支持を持って、第二回ロンドン万国博覧会に参加した。福沢諭吉が著した『西洋事情』<sup>(168)</sup>には、この万国博覧会の様子が詳しく記されている。さらに、この万国博覧会をきっかけにして、日本は国際博覧会へ積極的に参加し始めた。その次の 1867 年の第二回パリ万国博覧会と 1873 年のウィーン万国博覧会には、日本も参加した。中でもウィーン万国博覧会へは、日本が国家として公式に参加し、西洋諸国に伝統技術・工芸品などの日本文化を広めた。それに対して、日本も西洋の近代文化と技術を学び、近代国家を目指した。

ウィーン万国博覧会を契機として博物館の萌芽を見た。1972 年（明治 4）のことである。また同時に、ウィーン万国博覧会は日本が予想した以上の成功を収めたことに拠り、内国勸業博覧会の開催を導いた。

内国勸業博覧会は、1877 年に第 1 回は上野公園で、第 2 回は 1881 年に同じく上野公園で、第 3 回は 1890 年に同じく上野公園で、第 4 回は 1895 年に京都で、第 5 回は 1903 年に大阪で開催された。明治維新政府による内国勸業博覧会は、第 5 回を以って終焉を迎えている。

さらに、地方では共進会・物産会・博覧会も次第に開催された。



これらの博覧会の開催によって、日本は、文明開化の啓蒙的な役割を果たした。

一方、洪振強が著した『民族主義與近代中国博覧会事業(1851—1937)』<sup>(169)</sup>によって、中国は1851年の第一回ロンドン万国博覧会へ英国からの招待を受けたが、政治的理由で参加しなかった。しかし、第一回ロンドン万国博覧会には、中国は国家でなく個人の参加者が一人いた。上海で蚕糸を販売した広東籍商人の徐栄村は、12包の「栄記湖絲」をロンドン万国博覧会へ送って参加し、「大賞」を受賞した。

さらに、次の1855年の第一回パリ万国博覧会・1862年の第二回ロンドン万国博覧会・1867年の第二回パリ万国博覧会には、中国では、個人の参加者はいたが、出展の工芸品なども極めて僅かであった。

また、1867年の第二回パリ万国博覧会には、清政府は正式な招待を受けたが、残念ながら中国は国家として参加しなかった。中国が国家として公式に参加したのは、1873年のウィーン万国博覧会であった。しかし、博覧会を軽視する清政府は、税関など事務を管理する西洋人に頼んで、実際に参加しなかった。

日中両国間では、博覧会或いは博物館に対する異なる観点によって、近代文明と技術に対する差異が露呈した。その後、中国における有識者は、中国の軍事・経済などの不足を痛感して、西洋における近代技術の必要性を認識した。そのために、中国は日本を通じて博覧会或いは博物館の開催を模倣し、中国で博物館を設立し始めたのである。この時期には、日本博物館学が中国博物館学へ影響を与えた濫觴と発展の時期であったと筆者は考えている。

一方、博物館学の発展について、日本では1866年に福沢諭吉の『西洋事情』<sup>(170)</sup>によって、「博物館」なる用語とその実態が臆気ながらも社会に普及した。それに対して、中国では1841年に林則徐が纂訳した『四洲志』で「博物館」という言葉が初めて登場したが、「博物館」「博物院」「博覧会」などの用語が混交するといった特徴を有する。

中国における用語「博物館」が未定の状態に対して、日本社会では1875年に栗本鋤雲が著した「博物館論」<sup>(171)</sup>を皮切りに、博物館論が展開され始めた。青木豊は、「博物館学史序論」<sup>(172)</sup>の中で、「当該論が、表題を『博物館論』と標記した事と、その内容にも博物館学における博物館論の濫觴であると看取される。」と評価している。栗本の「博物館論」には、海外博物館の紹介と評価ではなく、博物館に関する基礎知識、さらに日本にでの博物館の必要性を論じた点が特徴であると言えよう。

栗本が「博物館論」を著した同年には、中国において「勸捐建博

博物館戲屋説」<sup>(173)</sup>と「創設博物院」<sup>(174)</sup>の博物館設立を提唱する論文も刊行された。しかし、中国における博物館設置論は、栗本論と比較して、博物館に関する基礎知識が欠乏していたことは事実であった。かかる状況にあつて、1888年に「擬創設博物院小引」<sup>(175)</sup>の発表から、中国での博物館論は本格的な展開となったのである。

なお、近代的博物館は、博物館資料を収集・保管し、博物館資料を研究し、展示して観覧者を教育する機能を基本とする。近代的博物館思想の受容以前に日中両国には、上記の基本機能を明確に有した施設は存在しなかった。しかし、資料保存機能のみ、或いは展示機能のみを有する施設は存在した。

例えば、日本の博物館学界では、博物館思想の淵源を正倉院や江戸時代の物産会・寺社の開帳であると考えている<sup>(176)</sup>。具体的には、物産会では博物館の展示機能を具現し、正倉院では資料の保管機能を具現していた。一方、中国の博物館学界は、博物館思想の淵源は孔子廟と金石收藏であると考えている<sup>(177)</sup>。具体的には、孔子廟は展示機能を有し、文人らが流行した金石收藏では収集・保管を行っていた。すなわち、日中両国での博物館思想の萌芽は、主に博物館の展示機能もしくは収集・保管機能であった点で共通する。しかし、この萌芽は、近代博物館に転換されることはなく、あくまで日中両国の近代博物館は西洋の博物館の受容であった。

一方、日中両国の博物館思想の萌芽を具現する施設は異にする。これは、日中両国の博物館学は、当時の社会組織や文化の差異に起因したものと考えられる。

さらに、日清戦争の敗戦によって、清政府が推行した洋務運動は失敗の結末を迎えた。かかる状況にあつて、維新派は新たな変革を提唱した。

1898年に入ると、維新派が指導した戊戌の変法は、日本の明治維新を模範として、清の国力を増強する目的の自強運動であった。そのため、戊戌の変法は、明治維新の時に日本が博物館を設立した理念を範として、中国における博物館の設立を提唱したのであった。

一方、日本では、1872年に湯島聖堂大成殿で文部省博物局による最初の博覧会が開かれた。この博覧会によって、日本における博物館の誕生でもあった。また、1881年にJ. コンドルは、上野公園の旧寛永寺本坊跡地を利用し、博物館新館（旧本館）を設立した。この博物館新館（旧本館）は、第二回内国勸業博覧会の美術館として利用された。さらに、博物館新館（旧本館）は、翌年の1882年に新築博物館と付属動物園・浅草文庫とともに一般に公開され、1889年に帝国博物館となるに至るまで、順調に発展した。それに対して、中国側では、郴州学会博物院・京師大学堂博物院などの博物館を設立する予定であったが、残念ながら開館には至らなかった<sup>(178)</sup>。つ

まり、当該期においては、中国人が実際に設立した博物館はなかったのである。

なお、この時期における博物館建設の推進論は、中国では主に維新派が主張することが多かった。康有為が提唱する主張の他、維新派の梁啓超・鄭観応なども自らの主張を提唱した。さらに、梁啓超と黄遵憲は、『時務報』を創刊し、維新派の主張を広めた。

一方、中国での近代博物館論が緩慢に展開するのに対して、日本側では1888年に岡倉天心が著した「博物館に就いて」<sup>(179)</sup>、1893年に神谷邦淑が著した「博物館」<sup>(180)</sup>などの論文が直接に“博物館”を標題として刊行されている。「博物館に就いて」には、博物館の設立目的・意義・基本要件から博物館の必要性を論及した。さらに、博物館の収集・展示・教育・経営などの内容もあった。「博物館」には、博物館の歴史・目的と実務などの内容を論及した。

その上で、坪井正五郎<sup>(181)</sup>と前田不二三<sup>(182)</sup>など学者は、「博物館」と標題を使わない博物館論を著したこともあった。さらに、戊戌の変法が行われる翌年に高山林次郎が「博物館論」<sup>(183)</sup>を著し、箕作佳吉が「博物館ニ就キテ」<sup>(184)</sup>を記していることには驚かされる。それらの論述は、博物館の展示について大きな関心を持っていた。

これを機に、日本での博物館論は、全面的とも言える展開が認められ、当該期を日本の博物館学の確立期<sup>(185)</sup>とする考え方もある。

一方中国では、当該期は中国博物館学の揺籃期と筆者は主張し、また5年後の1905年からは、中国博物館学の確立期であると提唱している。この時点から、日中両国における博物館学の差が明確に出現したと考えている。

日本の博物館学は、博物館論と博物館の実際である両方によって、博物館学の発展は順調となった。これに対して中国博物館学は、まだまだ博物館学意識が萌芽期である状況にあって、博物館の実際が未発足の状況にあると考える。

本章は、揺籃期における中国博物館学の歴史をめぐって、当該期に中国博物館学が日本博物館学から受けた影響に関する史料を収集整理し、これらの影響が中国博物館学に対する作用を論述した。さらに、当該期に中国博物館学が日本博物館学に学ぶ目的を分析し、その原因を追究した。

この時期の中国の有識者らは、日本で博物館を見学する機会によって、近代的博物館の姿を了解して、中国本土に導入した。さらに、これらの経験により、中国人は自らの力で中国本土で博物館に相当する施設を設立しよう。このことは、中国博物館学史にとって、画期的な意義があった。

なお、当該時期以降の中国博物館学は、確立期・構築期を経て、日本の博物館学を注視して来た。その中で張謇が南通博物苑を開館し

たことは、中国博物館学にとって、画期的な事柄であり広く社会にも影響を与えた。これは、後の章の内容である。

## 註

- (1)殷志強 1991「中日美三国博物館的機構設置比較」『中国博物館』(02)pp.11-16
- (2)任宏妮 2002「中日两国博物館機構設置之比較」『史前研究』(00)pp.459-466
- (3)項隆元 1991「中日两国近代博物館事業產生之比較」『東南文化』(06)pp.241-244
- (4)中華思想は、中国あるいは中国の主体とする漢民族が持っている自負心である。漢民族の文化と思想が周辺国家（民族）より、文明の度が高かったため、自らを世界の中心と見て「天朝上国」と自称し、中国以外の国家を「蛮夷」と侮蔑した。
- (5)太平天国の乱は、1851～64年まで中国の農民層が清の統治に対する転覆運動である。太平天国は、洪秀全がキリスト教の信仰によって建てた国家である。
- (6)魏源 1842『海国図志』
- (7)註(6)と同じ
- (8)李圭 1876『環遊地球新録』1985『走向世界叢書』岳麓書社 pp.187 - 354
- (9)李圭 1980「東行日記」『環遊地球新録』湖南人民出版社 pp.120 - 157
- (10)大阪市役所編纂 1966『明治大正大阪市史・第1巻・概説篇』清文堂出版 pp.668-673
- (11)大阪博物場 1875『大阪博物場概則並条例』
- (12)『日清修好条規』は、日本と清が1871年9月13日に天津で締結した条約であったが、日清戦争で失効した。明治維新後の日本は、清国と正式な国交を樹立するため、この条約を締結した。日中両国が互いの「邦土」への「侵越」を控える・外交使節の交換と領事を駐在させる・制限的な領事裁判権と協定関税率を互いに認め合うなどの内容であった。一般的には、この条約を対等条約と見なす。
- (13)黄遵憲 1887『日本国志』・2016『走向世界叢書』岳麓書社
- (14)黄遵憲 1879『日本雜事詩』・1981『走向世界叢書』湖南人民出版社
- (15)黄遵憲 1879『日本雜事詩其五十一』・1981『走向世界叢書』湖南人民出版社 pp.89
- (16)註(15)と同じに

- (17) 註(13)と同じに
- (18) 王韜 1879『扶桑遊記』・1982『走向世界叢書』湖南人民出版社  
pp.170 - 314
- (19) 王韜 2002『弢園文録外編』上海書店
- (20) 王韜 2002「変法自強下」『弢園文録外編・卷二』上海書店
- (21) 王韜 1868『漫遊随録』・1982『走向世界叢書』湖南人民出版社  
pp.29 - 170
- (22) 王韜 1868「遊博物院」『漫遊随録』・1985『走向世界叢書』湖南人民出版社 pp.133 - 134
- (23) 王韜 1868「博物大観」『漫遊随録』・1985『走向世界叢書』湖南人民出版社 pp.90 - 91
- (24) 王之春 1879『談瀛録』・2016『走向世界叢書』岳麓書社
- (25) 註(24)と同じ
- (26) 註(24)と同じ
- (27) 註(24)と同じ
- (28) 註(24)と同じ
- (29) 註(24)と同じ
- (30) 註(24)と同じ
- (31) 『考工記』は、中国で最古の技術書である。『考工記』は、『周礼』の一編として、古代の車・兵器・楽器等の製作法と宮室造営の技術を記載する文献である。中国には、『考工記』が先秦の戦国時代の齊という国家の人が書かれたものといわれる。
- (32) 『爾雅』は、中国で最古の類語辞典・語釈辞典である。『爾雅』は、『十三経』の一つとして、当時における標準語を規範した。『爾雅』は、春秋戦国時代以降の儒教学者が整理補充したものと考えられている。
- (33) 『山海経』は、中国で最古の空想的地誌である。著者と編纂時代の詳細は、不明である。内容は、各地の地理・動植物・鉱物などの産物と、伝説的国・妖怪・神などの神話。いまの『山海経』は、五巻の『山経』と十三巻の『海経』がある。
- (34) 1842年にアヘン戦争で敗北した清は、戦勝国の英国と『南京条約』を締結した。この条約により上海は開港し、英国は上海に領事を派遣した。『南京条約』によって、英国人は上海に居住し、貿易を自由に行うことができた。英国は、本国の利益を確保し、上海に外国人居留地を設置した。この外国人居留地は、「上海租界」と呼ばれた。
- (35) 1876「*JAPAN AT THE CENTENNIAL EXHIBITION.*」字林西報 2月1日 003版
- (36) 『The Japan Herald』は、1861年11月に英国商人の A.W.Hansard が横浜で創刊した英字週刊新聞である。

- (37)『The Japan gazette』は、1867年に英国人が横浜で創刊した英字新聞である。
- (38)1877「*OPENING OF THE UYENO EXHIBITION BY THE EMPEROR AND EMPRESS OF JAPAN.*」字林西報 9月15日 003版
- (39)1877「*CLOSING OF THE NATIONAL EXHIBITION AT UYENO, BY THE EMPEROR AND EMPRESS.*」字林西報 12月15日 003版
- (40)1872「日本開博物院」上海新報 4月4日 0002版
- (41)1872「論東洋博物院事」申江新報 6月13日 02版
- (42)康有為『上清帝第一書』2013『康有為散文』上海科学技術文献出版社 pp.114 - 121
- (43)または「日清講和条約」と呼んでいる、1895年4月17日に締結。
- (44)『上今上皇帝書』も『上清帝第二書』と呼称。
- (45)この事件は、「公車上書」と呼称。
- (46)『応詔統籌全局折』も『上清帝第六書』と呼称。
- (47)康有為 1897『日本書目志』1987 蔣貴麟編『康南海先生遺著匯刊 11』宏業書局有限公司
- (48)註(47)と同じ
- (49)註(44)と同じ
- (50)註(46)と同じ
- (51)康有為 1898『日本變政考』1987 蔣貴麟編『康南海先生遺著匯刊 10』宏業書局有限公司 pp.120 - 123
- (52)註(47)と同じ
- (53)「図史門」とは、図録・地図・歴史に関する類別。
- (54)康有為 1898『日本變政考』2011 中国人民大学出版社
- (55)註(54)と同じ pp.96 - 115
- (56)註(54)と同じ pp.96 - 115
- (57)註(54)と同じ pp.96 - 115
- (58)註(54)と同じ pp.96 - 115
- (59)康有為 1895「上海強学会章程」
- (60)註(59)と同じに
- (61)戊戌の変法は、清朝末期の1898年に行われた政治改革であった。1898年は、戊戌の年であるから、「戊戌の変法」と称される。戊戌の変法は、立憲君主制の設立を目指し、政治・経済・教育・文化などの諸方面に改革を提唱した。しかしながら、改革を嫌う保守派は、変法を強制的に中止した。改革実行された日数は、約百日であるから、「百日維新」とも呼ばれる。
- (62)庚子事変とは、1900年に「扶清滅洋」を宣揚する義和團が起

- こった。排外主義の運動であった。さらに、清国は義和團を支持し、欧米列国の利益を損じた。それに対して、欧米列国は、八ヶ国連合軍を結成した。この動乱は、北清事変・義和団の乱の呼び方もある。
- (63)八ヶ国連合軍は、オーストリア＝ハンガリー帝国・フランス・ドイツ・イタリア・日本・ロシア・イギリス・アメリカである八ヶ国による連合軍である。
- (64)京師同文館は、1862年に洋務運動を推行する洋務派が開校した外国語学校であった。京師同文館は、外国語と翻訳のみを教授した。
- (65)国子監は、中国で隋から清まで歴代の最高教育文化機関である。さらに、明から国子監は、教育行政統制と最高学府の肩書を持っていた。
- (66)1896 李端棻「請推广学校摺」
- (67)1898 康有為「請開学校摺」
- (68)梁啓超 1898『代總理衙門奏擬京師大学堂章程』「京報」7月 10・11日
- (69)私塾とは、民間で小規模の教育機関である。先生は、秀才及び元長官であり、普通一人であった。
- (70)書院とは、私塾の一類型である。規模は、私塾より大きい。
- (71)『三字経』とは、儒学の初学者向けの学習書である。内容は、儒学が提唱するもの・儒学の経典、さらに中国における常識・歴史を含める。
- (72)『千字文』とは、儒学の初学者向けの学習書である。文体は長詩であり、中国における常用漢字である 1000 の異なった文字が使われている。
- (73)儒家十三経とは、儒学が重要な 13 冊の経書である。具体的には、『詩経』『尚書』『周礼』『儀礼』『礼記』『周易』『左伝』『公羊伝』『谷梁伝』『論語』『爾雅』『孝経』『孟子』である。
- (74)四書五経とは、儒学における最も重要な経書の総称である。「四書」は『論語』『大学』『中庸』『孟子』であり、「五経」は『詩経』の「詩」、『書経』の「書」、『礼記』の「礼」、『易経』の「易」と『春秋』である。
- (75)科挙は、中国で隋から清までの間、官吏を選考する試験である。明以来の科挙の内容は、儒学のみである。
- (76)八股文とは、中国の明や清の時代に科挙で使う特殊な文体である。明や清の時代に科挙は、「四書五経」から出題された。それに対して、答案とする八股文は、古人の文体を模倣しなければならず、文体は自由に使えなかった。

- (77)総教習は、学院長の職位である。
- (78)丁韪良は、アメリカの宣教師であり、本名は William Alexander Parsons Martin である。「丁韪良」という名は、中国語の名である。京師大学堂の総教習にする前、1869年に丁は、京師同文館総教習に任命された。
- (79)三省六部は、中国において隋・唐から中央政府の最重要部分である。三省は、中書省・門下省・尚書省であり、六部は、尚書省の部下の吏部・戸部・礼部・兵部・刑部・工部である。
- (80)吏部は、尚書省の下で設立する六部の一であり、全国の文官の任免・評定・異動などの人事を担当するため、科挙など教育に関する事務の責任を持っていた。
- (81)提調とは、官職名である。ここでは、博物館館長の職位である。
- (82)供事とは、官職名である。ここでは、博物館工作人員の職位である。
- (83)梁啓超 1896『学校総論』
- (84)註(62)と同じ
- (85)註(77)と同じ
- (86)包爾騰は、Church Mission Society (英国聖公会宣教協会)の宣教師であり、本名は John Shaw Burdon である。「包爾騰」という名は、中国語の名である。
- (87)註(79)と同じ
- (88)William Alexander Parsons Martin (丁韪良) 1869 *A Cycle of Cathay or China, South and North with Personal Reminiscences* New York, Fleming. H. Revell company,
- (89)陳為 2014「京師同文館博物館考略」『故宮学刊』11(01)pp.383-390
- (90)『格致匯編』は、徐寿と英国人の宣教師である John Fryer が 1876年に創刊した雑誌であった。内容は、主に科学技術を紹介する論文である。
- (91)John Fryer 1876「上海格致書院」『格致匯編』夏第六卷
- (92)John Fryer 1877「上海格致書院擬設鉄嵌玻璃房為博物館説」『格致匯編』春第一卷
- (93)梁啓超 1896「論学会」
- (94)孫家鼐 1896『官書局奏定章程疏』
- (95)1898「郴州学会稟(附章程)」
- (96)「格物致知」とは、儒学の基礎的な理念である。具体的には、世界で物の本質と本来などを理解して、知識と学問などを深め得ることである。
- (97)「修身・齐家・治国・平天下」とは、儒学の基礎的な政治観で



- ある。具体的には、まず自身を正しくし、次に家庭をととのえ、次に国を治め、最後に天下を平らかにする。普通に「修齊治平」と略称する。
- (98)尹侖 2017「法国人記録的中国第一座博物館」『雲南档案』(12)
- (99)Georges Cordier1915*Le Musée de Yunnan-fou*”, *Bulletin de l’Ecole française d’Extrême-Orient*, , Volume 15, Numéro 1, pp.25-38.
- (100)Georges Cordier1922*Note Additionnelle sur le Musée de Yun-nan fou*” , *Bulletin de l’Ecole française d’Extrême-Orient*, , Volume 22, Numéro 1, pp.135-138.
- (101)『*Bulletin de l’Ecole française d’Extrême-Orient* (フランス国立極東学院公報)』とは、1901年に *École française d’Extrême-Orient* (フランス国立極東学院) が刊行し始める雑誌である。内容は、東アジアにおける人文と社会科学に関する論文である。
- (102)註(99)と同じ
- (103)尹侖 2019「喬治・高德耶和雲南府博物館」『中国国家博物館館刊』(04)
- (104)楊開雲主編 2006『曲靖文史資料第五輯歷史人物專輯』曲靖市政協文史資料委員会編 pp.138-139
- (105)内閣中書とは、清朝の官職名である。勤務内容は、翻訳・記録・起草など文書と書類を作る工作である。
- (106)雲南省地方志編纂委員会編撰 1995『雲南省志・卷六十・教育志』雲南人民出版社
- (107)註(99)と同じ
- (108)註(106)と同じ p.468
- (109)施之厚主編 1993『雲南辞典』『雲南辞典』編輯委員会編雲南人民出版社 p.631
- (110)張維翰 1974「孫少元先生伝」『雲南文献』第4期
- (111)註(104)と同じ
- (112)註(109)と同じ
- (113)李曾賢・何開明 1996「雲南五洲大藥房及其經營者李仲鏡」『昆明文史資料選輯』26pp.134-139
- (114)註(109)と同じ pp.387
- (115)虞和平・夏良才 2011「東遊日記」『周学熙集』華中師範大学出版社 pp.25-51
- (116)虞和平・夏良才 2011「自叙年譜」『周学熙集』華中師範大学出版社 pp.673-741
- (117)虞和平・夏良才 2011「聘請塩田真為天津考工廠芸長合同」『周学熙集』華中師範大学出版社 pp.58-59

- (118) 虞和平・夏良才 2011「工芸総局稟酌擬創設考工廠弁法四条」  
『周学熙集』華中師範大学出版社 pp.60-61
- (119) 虞和平・夏良才 2011「工芸総局詳報考工廠開弁情形文並批」  
『周学熙集』華中師範大学出版社 pp.62-63
- (120) 本文には、“八月初一”と掲載した。中国暦によって、光緒三十年八月初一は、西暦 1904 年 9 月 10 日である。
- (121) 虞和平・夏良才 2011「天津考工廠試弁章程」『周学熙集』華中師範大学出版社 pp.64-71
- (122) 虞和平・夏良才 2011「天津考工廠各項規則」『周学熙集』華中師範大学出版社 pp.71-77
- (123) 註(116)と同じ
- (124) 八月は、中国暦である。
- (125) 虞和平・夏良才 2011「督弁条諭節抄」『周学熙集』華中師範大学出版社 pp.178-188
- (126) 宮保とは、官職名である。太子少保の略称である。ここでは、袁世凱を指示する。
- (127) 陸惠元 1987「天津考工廠是中国第一个博物館」『中国博物館』第 1 期
- (128) 梁吉生 1988『「天津考工廠是中国第一个博物館」質疑』『中国博物館』第 1 期
- (129) 陸惠元 1988「“天津考工廠”之爭與近代博物館概念」『中国博物館』第 4 期  
陸惠元 1988「从直隸商品陳列所看考工廠的性質—兼複梁吉生同志的質疑—」『博物館研究』第 3 期
- (130) 1904「創設湖南図書館兼教育博物館募捐啓」湖南官報 3 月 15 日 593 号
- (131) 「創設湖南図書館兼教育博物館募捐啓」が掲載した日期は、西暦 1904 年 3 月 15 日であり、萬年暦の甲辰年正月二十九日である。なお、副標題に掲載した開館日期が二月初旬であるのは、萬年暦の日期である。
- (132) 『東方雜誌』は、商務印書館が 1904 年 3 月に上海で創刊し、1948 年 12 月に終刊となり、近代中国史上最大の総合雑誌である。1999 年に『今日東方』と改称して復刊した。
- (133) 夏瑞芳 1904「教育:各省学堂滙誌」『東方雜誌』第四期 p.102
- (134) 沈小丁 2013『湖南近代図書館史』岳麓書社 pp.253-254
- (135) 傅建球 2011「煉錫業大王梁煥奎的教育思想與實踐」『中国職業技術教育』(03)pp.68-71
- (136) 梁曉新・李自強整理 2019『青郊詩存』『梁煥奎輯』民主與建設出版社 pp.142-160
- (137) 梁曉新・李自強整理 2019「青郊詩存・跋」『梁煥奎輯』民主與建

- 設出版社 p.160
- (138)梁曉新・李自強整理 2019『青郊六十自定稿』『梁煥奎輯』民主與建設出版社 pp.3-141
- (139)『大公報』は、1902年に天津のフランス租界に創刊した中国語新聞である。最初は、天主教の柴天寵・樊国梁などを計画していった。それ故、『大公報』は強い宗教色が持っていた。創刊した後、満州族の英斂之が総理人を担任し、方守六が主編を担任した。1925年11月27日に一時停刊し、1926年9月1日に復刊した。その後、『大公報』上海版・漢口版・重慶版・香港版・桂林版は、次第に刊行し始めた。今は、香港のみで発刊が続いている。
- (140)1904「中外近事・本埠・文明盛事」大公報 2月5日
- (141)1904「中外近事・本埠・文明盛事続志」大公報 2月8日
- (142)1905「中外近事・本埠・開弁第二次教育品陳列場」大公報 1月22日
- (143)註(139)と同じ
- (144)註(139)と同じ
- (145)京卿とは、明清時代の官職名であった。京堂と呼んだともいう。文書・計画などの書類作成の責任を持っていた。嚴京卿は嚴修である。
- (146)夏瑞芳 1905「教育:各省教育滙誌」『東方雜誌』第2巻第3期 pp.49-50
- (147)嚴范孫は、嚴修である。「修」は名であり、「范孫」は字である。
- (148)嚴修 1902『壬寅東遊日記』『嚴修東遊日記』1995天津市人民出版社 pp.1-139
- (149)嚴修 1904『第二次東遊日記』『嚴修東遊日記』1995天津市人民出版社 pp.141-247
- (150)天津戲法とは、天津の雑技芸術である。
- (151)徐蘇斌 2014「20世紀初開埠城市天津的日本受容—以考工廠(商品陳列所)及勸業会場為例—」『城市史研究』(01)pp.188-203
- (152)『商第三四四六号天津・漢口・重慶右三ヶ所合案』明治三十三年四月外交史料館 B10074380100
- (153)『天津日本租界旭街三毛藤吉ヨリ商品陳列館規則書当業者へ配布ニ関スル件』明治三十七年外交史料館 B10074360300
- (154)華佗が発明する「麻沸散」の配合については、散佚してしまっていて、実態の考証が不可能であるが、「麻沸散」の推測がある。①唐朝の孫思邈が収集編輯した『古代真本華佗神醫秘傳二十二卷』によって、「麻沸散」の配合は、『羊躑躅三錢・茉莉根一錢・当帰一両・菖蒲三分』であった。②今村了菴が著した

- 『医事啓源』によって、華岡青州が「麻沸散」によって開発した「通仙散」の配合は、『曼陀羅華八分・草烏頭二分・白芷二分・当帰二分・川芎二分』であった。③ Martin Booth が著した *Opium:a history* によって、「麻沸散」は、大麻とアヘンの混合物であった。
- (155) Martin Booth 1998 *Opium:a history* Thomas Dunne Books
- (156) 西洋鏡は、映写機であり、写真や映画をスクリーンに映す器具である。
- (157) 照像鏡は、西洋鏡である。
- (158) 註(149)と同じ
- (159) 虞和平・夏良才 2011「直隶工芸総局酌擬教育品陳列館試弁章程並約估経費詳文並批」『周学熙集』華中師範大学出版社 pp.87-88
- (160) 虞和平・夏良才 2011「直隶工芸総局酌擬教育品陳列館試弁章程」『周学熙集』華中師範大学出版社 pp.89-91
- (161) 註(116)と同じ
- (162) 『北洋官報』は、清末における地方政府官報であった。1901年12月25日に天津で創刊し、1907年に停刊になった。合計で1817期。創刊者は、袁世凱であった。
- (163) 1907「直隶工芸総局詳陳列館擬並名為教育品製造所文並批」北洋官報 1429期第6-7版
- (164) 公牘録要とは、官庁の公文書の記録である。
- (165) 陳宝泉著 1973「五十自述」『退思齋詩文存』沈雲龍主編『近代中国史料叢刊』第五十七輯文海出版社 p.222
- (166) 陳宝泉 1905「天津教育品陳列館議紳陳宝泉上周総弁意見書」『教育雜誌(天津)』第5期 pp.22-23
- (167) 文牘とは、公文書類である。
- (168) 福沢諭吉 1866『西洋事情』
- (169) 洪振強 2017『民族主義與近代中国博覧会事業(1851—1937)』社会科学文献出版社
- (170) 註(168)と同じ
- (171) 栗本鋤雲 1875「博物館論」『郵便報知新聞』第790号
- (172) 青木豊 2009「博物館学史序論」『國學院大學博物館學紀要』第34輯 p.2
- (173) 1875「勸捐建博物館戲屋説」申江新報 9月23日 01版
- (174) 1875「創設博物院」申江新報 11月4日 01版
- (175) 1888「擬創設博物院小引」申江新報 8月19日 01版
- (176) 日本の博物館史の淵源として、近世前に日本における博物館の機能を有した施設や類似行為は、正倉院などの寺院・開帳・神社・絵馬殿・本草学・見世物・物産会がよく挙げられる。(例：全日本博物館学会編 2011『博物館学事典』雄山閣、倉田公裕・矢島國

- 雄 2005『新編博物館学』東京堂出版、大堀哲・水嶋英治編 2012『新博物館学教科書 博物館学 I —博物館概論\*博物館資料論』学文社、伊藤寿朗・森田恒之編 1978『博物館概論』学苑社、古賀忠道・徳川宗敬・樋口清之監修 1981『博物館学講座 第2巻 日本と世界の博物館史』雄山閣等)
- (177)中国の博物館史を論及した場合、孔子廟・祖廟・金石学は、部分的な博物館の機能を持っている機関と見なせる。(例の書目：曾昭燏・李濟 1943『博物館』正中書局、王宏均 2001『中国博物館基礎』上海古籍出版社、中国博物館学会編 2005『回顧与展望：中国博物館発展百年』紫禁城出版社)
- (178)陳為 2011『博物館與中国近代社会変革研究』中国芸術研究院・修士論文
- (179)岡倉天心 1888「博物館に就いて」『日出新聞』
- (180)神谷邦淑 1893「博物館」『建築雑誌』第7巻81號、第8巻85號
- (181)坪井正五郎 1889・1890「パリ一通信」『東京人類學會雑誌』第5巻第46・47號
- (182)前田不二三 1904「學の展覽會か物の展覽會か」『東京人類學會雑誌』第219號
- (183)高山林次郎 1899「博物館論」『太陽』第5巻第9號
- (184)箕作佳吉 1899「博物館ニ就キテ」『東洋學藝雑誌』第16巻215號
- (185)註(172)と同じ

## 第五章 中国の博物館学へ及ぼした日本の博物館学の 影響の拡大

第四章には、中国博物館学の揺籃期における博物館論と博物館の発展を検討する。特に当該期には、日本の博物館学が中国への影響である。

20世紀に入ると、中国博物館学は、確立期になった。この時期には、中国博物館学は、日本の博物館学に対する模倣と学習がさらに流行した。なお、博物館理論については、中国博物館学が日本における博物館理論をさらに詳しく導入した。

一方、中国博物館学は、この時期に日本の模倣と学習のみではなく、西洋諸国の博物館学を模倣と学習をすることもあった。

この時期には、中国博物館学は、日本と西洋諸国の博物館学を混合に模倣と学習する特徴を持っていた。

本章では、この時期に中国で頻出した博物館論と博物館を挙げ、中国博物館学の発展を論述する。

### 第一節 20世紀前半期における中国博物館学の確立期・博物館理論編

#### 1、張謇の博物館論

張謇は、従来から「中国人自らで初めての博物館の創始者」と称される立派な名誉を持っている。そのために、張と張が設立した南通博物苑は、中国博物館学にとって、画期的な意義があり、張と南通博物苑に関する研究は中国博物館学の研究においては高い比重を占める。

当該期に最も有名な個人実業家であった張は、実業と教育に対しても大きな関心を持っていた。早年の張は、当時の中国における普通の知識人と同じく、功名を争って政府に勤仕することを目指していた。しかし、日清戦争の敗戦と清政府の懦弱を見ると、1898年に張は官職を辞し故郷の通州（現在の南通）に帰った。帰郷した張は、実業と教育の発展を目指し、実業と教育に関する事業を展開した。具体的には、実業に関する工場の設立であり、学校の開校である。

一方、張の故郷である通州は、海に沿った地域であったために、明清時代には倭寇の侵害を深く受けた歴史を有する。そのために、通州には、倭寇と抗戦した人物が多いと伝えられていた。張は、このような当該地域の歴史を受けて、日本に対する印象はあまり良くないことが推測できる。さらに、1874年に日本は、「台湾事件」<sup>(1)</sup>に寄せて、台湾に出兵し<sup>(2)</sup>台湾を侵占しようと思った。しかし、清

政府は懦弱のため、10月31日に日清両国は「北京專約」<sup>(3)</sup>を締結した。『張謇日記』<sup>(4)</sup>によって、張は清政府が「北京專約」を締結する意図を聞くと、「知宰臣有議和之举、天下事去、夫復何言？」（私は、日本と交渉する総理衙門大臣の恭親王が議和の主張があることを知ると、本当に憤慨する。これから清の大勢が挽回できない、かかる状況にあって、私は何も話せない。 筆者訳）と自身の日記に書いて、翌日に「咏史」であった四つの詩を作った。「張謇甲戌年日記(節録)箋注」<sup>(5)</sup>によって、「咏史」には、「未覚長城堅故碣、只聞蒼海足明珠。」「横海楼船今不遠、靈旗指顧画招搖。」という詩句を作って、張が台湾の防衛事務を憂慮しており、日本が台湾を侵占することを強く反対したのであった。

一方、『張季子詩錄(十卷)・卷三』<sup>(6)</sup>に拠ると、張は「咏史」と題する詩は見当たらないが、「読史四首」と題する詩が存在している。全文を転載すると下記とおりである。

嵯峨百越柱標銅、珍贖何時入漢宮。曾長万人看賜邸、大夫五利慶和戎。西羌応復思充国、南土誰能繼杜翁。惆悵留犁撓酒日、辺児方弄柘枝弓。

搢紳介冑復何如、西北東南候尉殊。未覚長城堅故碣、祇聞滄海足明珠。張毡出使中行説、列障封侯趙破奴。坐使司農勞国計、借商有令贍軍須。

三年牛馬向西遥、万里蜻蜓島外潮。帝子从無随日出、匈奴敢復倚天驕。須防跋盭常因瘡、豈有樗蒲尽得梟。横海楼船今不遠、靈旗指顧画招搖。

漢文有道邁成周、繪絮何妨被十洲。要藉汾阳定回紇、可曾梅録拜豊州。虺蛇寢大三郎祀、猿鶴蒼茫九世仇。節度微聞承盛寵、筹辺仡仡自高楼。

上記の詩の内容は、全て中国の歴史上の戦争に関する議論である。さらに、これらの戦争は、全て外族との戦争であり、張の国家を守る強い思想を読み取ることが出来るのである。

さらに、1882年に「壬午軍乱」<sup>(7)</sup>が勃発して、清は淮軍将領である呉長慶を派遣し、朝鮮における反乱を鎮めた。張は、呉の助手として朝鮮に同行している。また、張は「代呉長慶擬致張樹声函」<sup>(8)</sup>という公文を書いて、その中で、張は「鄙意主專問李昞以擅廢王命之罪、以兵輔礼、分別懲夷、使四海知中国固非徒事敷衍、而日人亦無置喙之地。」（李昞が朝鮮の王を勝手に廃除する罪名のみを追究した。それゆえに、清軍は今回の出兵が礼儀と道義を守るために、反乱を鎮める。このように、世界に中国は諸事情に対してごまかしを看過しないことを了解させる。さらに、日本人はこのことに対し容喙する余裕がない。 筆者訳）と主張した。

また、「壬午軍乱」の後で、張は、「壬午東征事略」「乘時規復流虬

策」「朝鮮善后六策」などの公文を作成して、琉球・朝鮮などの問題に対する対策を論述した。

さらに、1884年に、張は「甲申政変」<sup>(9)</sup>のことを了解し、呉長慶の後継者である呉兆有と韓参判である金允植に公文を送っている。「致吳兆有函」<sup>(10)</sup>によって、張は「然却不可再賠兵費於日、更蹈从前覆轍。此事似不必待日本向我說、我即先須向日本理論曲直。」（しかし、日本に軍事費を賠償してはいけない、前の失敗を繰り返してはいけない。今回の事件は、私たちは日本の説明を待ってはいけない、先に日本に善悪と正邪を説明すべきである。筆者訳）と進言した。一方、「致韓参判金允植函」<sup>(11)</sup>によって張は、「日與朝鮮有唇齒相依之勢、即有凶為我有之心、餌之以甘言小惠、鉗之以秘党禁戍、此皆事之彰彰者。」（日本は、朝鮮と互いに利害関係が密接である。また、日本は朝鮮に野望を抱くから、日本は朝鮮に甘い言葉と小さい恩恵を施し、さらに、朝鮮における政党と軍隊を制する。筆者訳）と告諭している。

1894年に日清戦争が勃発する前に主戦派の張は、主和派の李鴻章を弾劾した。「呈翰林院掌院代奏劾大学士李鴻章」<sup>(12)</sup>によって、張は、「日之所欲、鴻章与之。日之所忌、鴻章去之。如縱驕子、不至於敗不已。如飼餓狼、至於飽而猶不已。堅日必得朝鮮之志、長日輕量中国之心。謂非李鴻章、誰執其咎？」（日本が欲しいものは、李鴻章が与える。日本が畏怖するものは、李鴻章が除去する。まるで子供をできるだけ放任し、飢えたオオカミにできるだけ飼養する。このように、李は日本に朝鮮をとる自信を確定させ、日本に中国を軽視する自信を助長させる。これは、全て李のせいである。筆者訳）のように、李鴻章を責め立てていった。

翌年の1895年に「下関条約」を締結された後、張は「代鄂督条陳立国自強疏」<sup>(13)</sup>を作った。張は、下記のように評価した。

此次和約、其割地駐兵之事、如猛虎在門、動思吞噬。賠款之害、如人受重傷、氣血在損。通商之害、如鴆酒止渴、毒在臟腑。

（今回の和約には、中国にとって、大きな障害がある。先ず、日本が中国の領土を侵し中国の領土内に軍隊を駐留することは、まるで荒々しい虎が門で待って人を飲み込もうとしているのと同様である。次いで、日本に賠償することは、まるで人が重傷を負い、氣血を損傷し、健康と命を失っているのと同様である。最後に、長江沿岸の都市を日本に開放することは、まるで鴆毒を飲んで渴きをいやし、毒が内臓にあるのと同様である。筆者訳）

上記の資料によって、張は日本の侵略行為に対する態度は、絶対的な反対姿勢であった。しかし、日清戦争の結果は、張が日本



を模倣する考え方への思想変化を齎した。

張は、「代鄂督条陳立国自強疏」の中で、「查日本之制、出洋帰国後、分帰各都省、考列其高下、即任以実官。」（官員は、日本の制度を調査して、帰国した後で各省に帰る。なお、帰国官員は試験に参加し、成績によっては具体的な官職に任ずる。 筆者訳）

さらに、1901年に張は、日本の制度と明治維新の成果を詳しく研究し、「変法平議」を纏めた。「変法平議」には、張が日本における政治・経済・軍事・文化・教育などの諸方面を詳細に論述し、中国に合う改革案を提出した。「変法平議」の作成は、張が日本の制度を模倣する考え方をさらに明確したものであった。

一方、張は、日本の侵略行為には当然反対であったが、優しい日本人の友人に対して張は友好的に付き合った。1903年に、張は、日本人の友人の招待を受けて、日本に遊学している。さらに、『張謇日記』<sup>(14)</sup>によれば、張が日本へ行く主たる原因は下記のように記録されている。

自丙戌会試報罷、即謂中国須振興実業、其責任須在士大夫。因先事農桑、竭八年弁論抵持争進之力、僅成一海門蚕業。甲午後、乃有以実業與教育跌相為用之思、経画紡廠、又五年而后著效。比時即擬東遊考察、会世多故、讒言高張、惧不勝其描画而止。今年正月、徐積餘自江寧寄日本領事天野君博覽会請書來、乃決。

（丙戌（1886）年の会試<sup>(15)</sup>を落第した後、私は中国における実業を振興することが肝要であると考えた。農業は、最も重要な実業であるから、先ず農業を振興しようとしたが、八年が経ってただ海門蚕業<sup>(16)</sup>のみが設立できた。甲午

（1894）年以降私は、実業と教育に相互扶助の作用を促進する理念が浸透し始めたから、画紡廠<sup>(17)</sup>を設立し五年後には顕著な発達を遂げた。あの時には、日本へ調査する考え方があったが、色々な問題が存在したところから断念せざるを得なかった。今年の正月に、徐積餘は江寧（今の南京）から日本国領事である天野君がくれた博覽会の招待状を送ってくれた。そのために、日本への調査旅行を決定した。 筆者訳）

上記の日記によって、張は日本への調査希望を常に持っていた。そこえ、天野恭太郎氏からの招待をきっかけにして、張は日本への調査を慣行することとなった。

日本に滞在する間に、張は第五回内国勸業博覽会を見学し、深い影響を受けている。また、張が著した『癸卯東遊日記』<sup>(18)</sup>には、第五回内国勸業博覽会を見学した印象を下記のように記録している。

同至博覽会。以請帖易其優待票入場。会場在大阪市天王寺

今宮、為日本第五回内国勸業博覧会、規地凡六十万餘方尺、館舍凡九万餘方尺、聚其国内所産製物品、分列農業・園芸・林業・水産・鉱冶・化学・工芸・染織・工業製作・工芸機械・教育學術・衛生・經濟・美術及美術工芸為十門、一門之中、又各分類、以八館處之。別列参考館、置各国之物品。

（友人と一緒に博覧会に行つて、持っていた招待状を優待券と引き換える。今回の博覧会の会場は、大阪の天王寺と今宮にある。今回の博覧会は、日本における第五回内国勸業博覧会であり、敷地面積が約六十万平方尺であり、館舎の建築面積が約九万平方尺である。今回の博覧会には、日本国内の産品と製品を収集し、農業・園芸・林業・水産・鉱冶・化学・工芸・染織・工業制作・工芸機械・教育學術・衛生・經濟・美術・美術工芸の10部門に分けて展示している。さらに、一部門の中でも、展示品は各種類に分けられている。今回の博覧会では、展示品が8館に展示されている。その他には、参考館があり、諸国の物を展示している。 筆者訳）

その後、張は第五回内国勸業博覧会で出展された中国製の物品を記録している。しかし、出展されていた中国製品は、数量が少なく、時代が古いものが多く、張はこのような出展品に対して不満な意見を記している。殊に、漢と唐時代のを見ると、張は「勸業以開來、而此以彰往、若移置中国博物院、差不倍耳。」（日本の勸業博覧会が発展のために開催した博覧会であるが、中国が出展した物は、殆どこのような古物であり、これらの物が中国の博物院で置いてもいい。 筆者訳）のような皮肉を言っている。上記の記録によって、博覧会は張にとって新たな物品と技術を交流する場合であり、それに対して博物館は張にとって、主に古物を収集保存する場と捉えたようである。なお、張は日本人が有する“唐物嗜好”については理解できなかつたようである。

兩日後、張は博覧会の農林館へ行つて、日本における農業の沿革を了解した。張は、特に北海道の開墾に対して大きな関心を持っていた。さらに、張は、北海道の開墾と張自ら設立した通海墾牧公司の開墾を比較分析し、通海墾牧公司の不足点を考えている。

その後、張は、東京から大阪に帰る時、もう一度第五回内国勸業博覧会を觀覽し、中でも水産館の塩の生産工程を調査している。翌日には、張は博覧会で展示する農工用具を調査した。

一方で張は、日本の友人から親切な招待を受けて、日本友人の優しさと中国に対する援助に感謝している。

日人於於華人之來觀実業、教育者、罔不殷勤指示、若山田、若西村、小池、若藤沢、若三井參事石田青直、皆可感。所愿華人虚往実帰、無小大各成一績、不負此行也。

（日本人は、日本の実業と教育を見学する中国人に対して、心からのもてなしを受けた。例えば、山田、西村、小池、藤沢、三井参事、石田青直などの日本人の親切を受ける。彼達の希望は、中国からの見学者が実用的経験を習得したことである。また、中国からの見学者は、今後の成果に関わらず、日本へ行った甲斐があれば、彼達にとって十分である。 筆者訳）

張は、善意を持っている日本人に対して好感を抱いたところから、張は帰国後大勢の日本人を招聘している。

なお、帰国後、日本の近代化の歩みを詳しく了解した張は、日本の進歩性に関する論文と本などを編著し、日本で遂行する近代制度を提唱した。さらに、1905年に張は、「上南皮相国請京師建設帝国博覧館議」<sup>(19)</sup>と「上学部請設博覧館議」<sup>(20)</sup>である二つの公文を上奏し、国立博物館の設置を提唱した。



図 5-1 張謇



図 5-2 『癸卯東遊日記』

「上南皮相国請京師建設帝国博覧館議」によって、張は日本における帝室博物館を挙げて、中国が模倣すべきであると提唱していることは印象的である。

而日本帝室博覧館之建設、其制則稍異於他国、且為他国所不可及。為盖其国家尽出其歴代内府所蔵、以公於国人、并許国人出其儲蔵、附為陳列。誠盛舉也。我国今宜参用其法、特辟帝室博覧館於京師。

（日本における帝室博物館の設立は、西洋諸国と異なり、西洋諸国より良いと思う。その原因は、日本が歴代の天皇の蔵品を全て収集し、国民に展示する。また、国民の私人蔵品は特別展示として収集している。これは、本当に盛大な事業である。中国は、北京で帝室博覧館と同様の施設を設立すべきである。 筆者訳）

上記の資料によって、張は日本における博物館の設立に非常に賞賛して、中国が日本を模倣することを推奨したのであった。また、

「上南皮相国請京師建設帝国博覧館議」の中で、張の「六端」と題する博物館論が初めて刊行された。

別章で記したように「六端」とは、博物館の運営についての方策である。具体的には、（甲）建築之制（一・建物の形状と構造 筆者訳）・（乙）陳列之序（二・展示の順序 筆者訳）・（丙）管理之法（三・管理の方法 筆者訳）・（丁）模型之部（四・博物館資料化への過程 筆者訳）・（戊）採輯之例（五・博物館資料の収集と記録 筆者訳）・（己）表彰之宜（六・博物館の寄付の表彰 筆者訳）の6項目であり、博物館の重要な博物館経営について具体的に指摘している点が特徴である。この「六端」と称する博物館論は、博物館の機能論を確認した。

さらに、「六端」については、「建築之制」には、博物館の立地は「其地便於交通便於開拓者為宜」（交通便利なところで設立したほうがいい 筆者訳）のように記録した。博物館の建物は、「中建楼九楹、為恭奉御府頒存之品。（中略）楼左為儲蔵内外臣工采進多数品物之地。（中略）楼右為儲蔵内外臣工陸続采進品物之地。」（中の建物は9つの部屋があり、政府が頒布と保存するものを保存する。左の建物は群臣百寮が収集するものを保存する。右の建物は群臣百寮がさらに収集するものを保存する 筆者訳）のように記録した。その後で、博物館の採光にも論及した。

「陳列之序」には、博物館の展示は天然・歴史・美術の3つの部分がある。その展示は「天然部以所産所得之方地為等差、歴史美術二部以所製造之時代為等差」（天然部の蔵品は、産地によって展示し、歴史部・美術部の蔵品は、製造の時代によって展示する 筆者訳）のように記録した。

「管理之法」には、博物館が学部属するから、博物館の管理は「学部派員專管」（学部が専門人員を派遣する 筆者訳）のように記録した。さらに、博物館の工作人員には、「必得通東西洋語言文字二三員、以便外賓來觀」（外国の観覧者のために、外国語を使える工作人員が必要である。 筆者訳）のように規定した。

その後の「模型之部」・「採輯之例」・「表彰之宜」には、博物館資料の作成・収集などの内容を論及した。

しかし、残念ながら、張は国立博物館を設置する考えが実現できなかった。一方、張は博物館を設置することを諦めなく、国立博物館のかわりに、張は1905年に南通博物苑を設立した。南通博物苑の発展に対して、張は大きな関心を持っていた。

「上学部請設博覧館議」によって、張は「今為我国計、不如采用博物図書二館之制、合為博覧館。」（（私は、）今中国の発展を考えると、博物館と図書館を合併すべきであると考えられる。この合併する館は、博覧館である。 筆者訳）のように発案した。

1908年に張は、「通州博物館敬征通属先輩詩文集書画及所蔵金石古器啓」<sup>(21)</sup>を掲載した。この論文は、主に張が通州における名士に通州博物館に蔵品の寄付を提唱した内容である。

張は、中国は従来から博物館がなく、私人の収集のみがあった事実を指摘した。さらに、張は近代的博物館の進歩性を褒めて、『万国公法』の中で、近代的博物館における蔵品保護について、特に戦争における蔵品保護を論じている。最後に張は、「伏愿大雅宏達、収蔵故家、出其所珍、與衆共守。」(通州における名士・有識者・収蔵家は、自分の蔵品を通州博物館に寄付し、民衆と一緒に守る。筆者訳)のようにと蔵品の寄付を提唱したのであった。

一方、張は上記の文章で張が提唱する博物館資料の分類を下記のようにさらに明確にした。

其搜集之部目三:曰天然、曰歴史、曰美術。凡動植鉱物皆天然之属、凡金石車服礼器皆歴史之属、凡書画雕綉漆塑陶瓷皆美術之属。

(博物館における収集保存の種類は、天然・歴史・美術である3種類である。具体的には、動物・植物・鉱物が天然に属し、金属器・石器・車・服装・礼器が歴史に属し、書画・彫刻・刺繍・漆塑・陶瓷が美術に属する。 筆者訳)

さらに、1913年に張は、「国家博物院図書館規畫条議」<sup>(22)</sup>を掲載し、国家博物院図書館に関する内容を詳細に論述した。張は、「必設之時期」「擬設之場所」「陳設之品物」「規畫之大概」「経理之人才」である五つの部分に分けて、博物館を設立する具体的な問題を検討している。

張は、日本の影響を深く受けて、日本における博物館の設置を模倣し、張自らの博物館論を構成した上で展開した。張は、日中両国の差異と発展過程をよく理解し、中国が日本を模倣することを提唱したのであった。また、張が博物館教育を重視したところから、張は博物館が教育を広める一つの方法として、博物館の収集保存機能と展示機能は教育機能のために発展するものと位置づけた。

## 2、天民の学校博物館論

1917年に、「天民」と自称する人物は、『教育雑誌』で「学校博物館之設施」<sup>(23)</sup>と題する論文を掲載している。当該論文は、学校博物館について、四つの問題点を論述し、学校博物館の目的・展示品の収集・展示の方法・学校博物館の活用などの内容を含めて構成されている。

具体的には、「第一 学校博物館設置之目的」「第二 陳列材料之選択及搜集」「第三 陳列之方法」「第四 学校博物館之利用法」の4点である。

第一である学校博物館を設立する目的については、「一 実際教授上の要求」「二 処世常識之付与」「三 発明・発見・創作能力之練磨」「四 産業思想之養成」「五 郷土之理解」の五点が主たる目的であると明記している。天民の観点では、学校博物館は、学校教育の補佐として、学生の育成のための設立を基本的目的と考えている。すなわち、学校博物館は、学校における課程の具体的な要求によって設立し、その目的は学校で教授する知識を充実しながら、学生の能力を向上させることである。なお、学校博物館で培う能力は、処世の智慧と常識である社交能力であり、発明・発見・創作などの自主的な学習能力であり、新たな思想を培う能力であるとしている。さらに、学校博物館は、地元の歴史・文化などを広める役割を持って、学生の愛郷心と愛国心を育てる意味でもその設立意義は大きいとしている。

第二部分の展示品の収集については、主に「一 陳列材料選択之方針」と「二 搜集之方法」である内容を含んで記されている。また、陳列材料或いは展示品の選択は、上記の学校博物館における五つの目的によって選択されなければならない。例えば、課程に関する展示品であり、新聞雑誌などの刊行物であり、文明が開化することを体現する日用品などの品物であり、科学技術を体現する品物であり、病理・医療・通信・交通・政治・法律・経済に関する実物資料であり、輸出入品・原料などの品物であり、設備と工場の写真であり、地元の歴史・文化・自然に関する実物資料である。さらに、天民は、展示品の数量より、展示品の質量と代表性が重要であると収蔵品構成の標準を指摘した点も大きな特徴である。一方、収集の方法については、天民は具体的な方法を挙げて、実用的な意見を提出した。

具体的には、第一は教員が収集に関することに注目することである。第二は収集に長時間をかけて展示品を蓄えることである。第三は学校博物館と商店工場などと連携することである。第四は児童向け用品の収集である。第五は展示品の購入に関する注意点である。

第三点の展示の方法については、主に展示品の配列と展示品設備である。天民は、展示品の配列を明確に規定した。例えば、展示品は色々な主題を持つべきであり、同一主題に関連する展示品は同一場所に置くべきである。また、同一主題或いは主題相似の展示品を近く場所に置いて図と表の説明と対比があるべきであると記している。また、展示品の置き場所については、移動しやすい場所に置いた方がいい。展示品は、展示ケースに保存すべきである。さらに、天民は、パネルに相当する設備を論述した。具体的には、展示場所の壁を利用して、展示品に関する紹介と説明の紙或いは設計図を壁に張ることである。最後に、天民は、学校博物館の観覧者が主

に児童であるから、学校博物館の展示品は児童に対して注意喚起の必要性が有る点を強調している。

一方、学校博物館の展示に関する設備・備品には、天民は展示室・展示ケース・パネル・参考資料などの内容に関して詳しく論述している。さらに、天民は展示ケースの要素は、観察しやすいこと・移動しやすいこと・掃除しやすいこと・体積が小さいこと・費用が安いことなどを指摘している。

第四部分の学校博物館の活用については、学校博物館の利用者すなわち児童が学校博物館を有効的に利用することであると明確に記している。また、そのために、天民は展示品の説明と見学方法をさらに明確した。前者の展示品の説明については、児童が理解しやすいために、文字と言葉が民国学校四年生に合う程度を選択するべきであるとしながらも、説明の確度を保証するために、難しい述語は、適量に使用されるべきであるとも記している。なお、説明内容は、展示品の名称・用途及び要点などの内容を含めて、内容を適時に更新すべきであり、普通の文字説明の他には、解説員で人工説明とさらに詳細な説明書・説明板を利用しなければならないと指摘している。

一方、児童に学校博物館にいつでも新鮮な感覚を持たせるために、学校博物館における見学方法は、児童の注意喚起と継続を確保する点が必要とする特徴的意見を記している。具体的に天民は、展示室と教室の見学方法を下記のように分けて説明した。

展示室における見学方法については、天民は下記の7つの意見を述べている。

第一は、展示室に係員を配置し、展示室の整備と管理の事務を担当する。また、ゆっくりとした見学を確保するために、毎回に入場者数は十人以内に抑えるべきである。

第二は、一般公衆に開放することである。

第三は、展示品に関する研究である。

第四は、質問法である。すなわち、生徒は、見学中に質問があれば、教員が質問に答えるべきである。

第五は、参考資料の活用である。

第六は、掲示板の設置と利用である。具体的には、連絡や告知などの見学者に伝えるメッセージを掲載する。

第七は、展示品の更新についてである。

一方、教室における見学方法は、課程の実際内容によって活用することとし、さらに学校博物館が学生の教育による利用のほかに、学校博物館の活用方法として、学校展示・卒業式・懇親会・講演会などの利用ができると指摘している。

学校博物館の設立は、学校教育が書物からの知識のみではなく、

実際的な生活に整合する知識も教授する必要性についても指摘している。天民の博物館学的観点によって、学校における教育は最も重要であるから、学校博物館が学校教育の補佐となる役割は学校博物館設立の必要性の第一であると断言している。

さらに、学校博物館の設立は、教育の革新にとって必要な対策であった。天民が掲載した論文は、博物館を利用した新式教育を広める主流に適合した理論であった。

一方、この論文の作者は、「天民」と自称する人物であった。なお、「天民」という名は、筆名である可能性が高いと考えられる。そのために、宋伯胤が編著した『博物館歴史文選』<sup>(24)</sup>によれば、天民は「擬是一位遊学日本或諳熟日文并生活在民国初年的学人。」（日本に遊学した経験がある人、或いは日本語を上手に話せる人である可能性がある。天民がいた時代は、民国初年であろう。 筆者訳）と宋は推測している。その理由は、本論文の参考文献の中に「大正三年搜集」「日本煉炭会社長崎工場寄贈」などの日本の年号や文言があるところから、宋は天民が日本に遊学した経験を持っていた人物と判断したと思われる。

かかる観点に立脚して、宋は二人の該当者を挙げている。一人は1904年に早稲田大学に留学した呂志伊であり、もう一人もやはり日本に留学した張光厚である。呂と張の両者は、偶然にも1881年生まれで、共に日本に留学し、中国同盟会<sup>(25)</sup>と南社<sup>(26)</sup>に参加している。

呂は、雲南省の出身であり、1904年に官費で早稲田大学へ留学し、翌年に中国同盟会に参加している。1906年に雑誌『雲南』と『滇話報』を創刊し、革命を鼓吹するなどの活動家であった。呂は、『雲南』の主筆を担当しながら、『民報』にも寄稿している。1908年に、呂はミャンマーに逃亡し、ヤンゴンで『光華報』『進化報』の主筆を担当した。1911年に、黄花崗起義<sup>(27)</sup>の参加し、黄花崗起義が失敗した後、呂は上海に逃げて『民立報』の主筆を担当した。1911年7月に呂は、宋教仁・陳其美と一緒に中国同盟会中部総会を創設している。中華民国が建国した後、呂は中華民国南京臨時政府の司法部次長と、『民国新聞』の主編を兼務している。1915年に昆明に帰って、護国戦争<sup>(28)</sup>を策動した。1917年に呂は、中華民国軍政府の司法部次長を担当するなど中華民国軍での要人であった。

宋は、呂が「天民」と推測する理由は、呂の自称が「侠少」「旭初」などであったが、呂の字は天民であるところからであった。

一方、張光厚は、四川省の出身であり、1904年に最後の科挙試験に参加し秀才の資格を取った。その後、張は日本の大学に留学し、法律を学習した。張は、日本に滞在する間に中国同盟会に参加



し、民主革命を推進した。帰国した後、南社に参加している。宋は、張が「天民」と推測する理由は、1905年から張が「天民」を筆名として論文を掲載したことがあったからである。宋は、呂と張の経歴を比較して、「天民」という人物は張の可能性が高いと推測するに至っている。

しかし、資料が不足のために、筆者は張が記した教育に関する文章が認められないところから、疑問を有している。したがって、「天民」なる人物の具体的な身元が確認できないのが現状である。

### 3、新文化運動における博物館理論

陳独秀は、1915年9月15日に上海で『青年雑誌』（第一巻の雑誌名は『青年雑誌』であり、1916年に出版した第二巻から雑誌名は『新青年』と改称されている。）を創刊して、「敬告青年」と題する記事を掲載し、その中で民主と科学を提唱し、封建文化に強く反対する思想を展開した。このことにより、儒教批判・人道主義・文字改革・文学改革を提唱する文化運動である新文化運動が起った。新文化運動は、中国文化界における近代的な進歩文化を推進する運動であるから、中国における伝統的な礼教を打破し、儒教を代表とする旧道徳・旧文化を反対することを目指した。すなわち、儒教の弊害を指摘し、儒教を盲目的に崇拝することと、儒教が提唱する上下の秩序を批判する。さらに、中国における伝統的な迷信思想を反対する。それゆえに、新文化運動は、中国における学生層と青年層に圧倒的な支持を受けた改革思想であった。

1917年に、『新青年』の編集部は、北京へ転移した。翌年の1918年1月に、『新青年』は改版し、第四巻第一号から白話<sup>(29)</sup>と新式標點<sup>(30)</sup>を使用し、白話の使用を推進しよう。

1917年にロシアで十月革命が勃発し、中国における知識人は、社会主義の思想を受けて、マルクス主義を広め始めた。1918年10月に李大釗は、『新青年』第五巻第五号で「Bolshevism 的勝利」「庶民的勝利」などの記事を掲載し、マルクス主義を提唱している。

さらに、1919年にパリ講和会議でベルサイユ条約を締結し、日本は山東省における権益の継承を承認された。この条約の調印を反対する中国学生は、五・四運動を起した。

五・四運動は、1919年5月4日に北京で発生した抗日・反帝国主義を掲げる学生運動であった。五・四運動の影響を受けて、新文化運動は、革命性がさらに高くなった。

様々な新たな思想を受けて、新文化運動の推進者達は、異なる社会的各階層の人員を組成された。具体的には、マルクス主義と社会主義を賛美する知識人であり、プチ・ブルジョワを賛成する知識人であり、ブルジョワジーを賛成する知識人であった。しかし、新文

化運動の推進者らの政治的立場の差はさらなる拡大をみせたところから、『新青年』は1922年7月の第九卷六号を以て停刊にいたった。

一方、新文化運動の代表人物は、陳独秀・胡适・蔡元培・魯迅・李大釗・傅斯年・劉半農・錢玄同・沈尹默・沈兼士・周作人・嚴智怡・馬衡・陳垣・李濟などの人物がいる。これらの中での代表人物は、全て新式思想を受容する知識人あるいは留学経験者であった。その中で、陳独秀・魯迅・錢玄同・沈尹默・沈兼士・嚴智怡などは、日本への留学経験があり、日本の文化と思想の影響を強く受けた人物であった。

### ①魯迅の博物館論

「新文化運動與博物館的關係—兼述新文化運動影響下中国博物館事業的初步發展—」<sup>(31)</sup>によると、魯迅は、数多くの博物館に関する具体的な活動と作業に直接参加している。

1912~26年8月までの期間に、魯迅は蔡元培からの招聘を受けて、社会教育司で働いていた。社会教育司は、主に一般的な儀礼・博物館・図書館・動物園・植物園・美術館・美術展・文芸・音楽・演劇・古物収集・社会教育・講演会・出版社と刊行物などに関する事務を執務する国家機関である。すなわち、社会教育司は、全社会における教育と文化活動を管理していた。そのために、魯迅は、歴史博物館の設立に関する計画に参加し、様々な展覧会を開催し、古物の整理等々担当していた。

宋伯胤が著した「魯迅與博物館事業」<sup>(32)</sup>によって、1913年11月6日に、魯迅は「全国儿童芸術博覧会」の開催を準備し、博覧会の内容を文章・字・画・手工・編織・針黹の6種類に分けて、出展地の省によって十一室に分けて展示した。さらに、宋は下記に引用した魯迅の美術観に論及し、魯迅の博覧会観は魯迅自らの美術観の影響を受けていたことを指摘している。宋は、魯迅の博覧会観を下記のように記録した。

魯迅對展覧會的主題思想和結構、是很重視思想性和科學性的、務使觀衆看到的是一個體系完整、層次分明、具有教育意義的用千萬件實物組成的展覧會、而不是“獻寶”式的像擺古董攤子似的。

（魯迅は、博覧会に関する主題・思想・構成に対する思想性と科学性を重視した。魯迅の観点によって、博覧会の設置は、必ず観覧者に下記のような博覧会を提供する。博覧会は、必ず体系を完整させ、順序をはっきりさせ、教育意義があり、様々な実物資料が必要である。博覧会は、珍しい物を献上する目的であり、決して骨董品店の露店を出すことではない。 筆者訳）

上記の評価によって、宋は魯迅の博覧会観を賞賛している。一方、宋は魯迅の文物観あるいは博物館における実物資料論に対して、以下の三点を指摘している。

まずは、魯迅は文物あるいは博物館における実物資料の作者を明確にする必要性を指摘した。魯迅の観点によって、文物の作者は、ある特定の人物でなく、従来からの全ての間人であったとする考え方である。文物の発展は、全ての間人が長い間に次第に発展させて結果として形成されたものである。これらの文物の種類は、建築・料理・狩猟採集・耕作栽培・医療薬品などの多岐の分野に亙る資料である。

次は、魯迅は文物保護を目的とする資料保存に論及している。資料保存について最も重要な点は、文物資料がただ普通資料と見なさない、史跡と見なして保護することである。すなわち、文物資料の保護は、簡単な収集ではなく、文物資料が存在する時代の環境を復元し、文物資料が復元した環境に置いて、そのまま保存すべきである。史跡と見なして保護することは、文物資料の保護は独立なことではなく、文物資料が環境と一緒に保護することである。

最後は、文物と博物館の工作人員に対する要求を提出している。魯迅の観点によって、文物と博物館の工作人員は、文化遺産あるいは文化財の保護者のみではなく、さらに文化遺産あるいは文化財の開拓者と建設者である。すなわち、文物を保護する工作人員と博物館を維持する工作人員は、ただ文化遺産あるいは文化財を保護することのみではなく、文化遺産あるいは文化財をさらに利用することを目指す。文物と博物館の工作人員の職務内容は、博物館における実物資料の保存だけでなく、実物資料をさらに有効活用することである。なお、文物は、有形文化財とほぼ同義である。中国語で「文化財」という用語がないから、中国に有形文化財に関係することは、「文物」という用語をよく使う。また、文化遺産は、有形文化財と無形文化財である両方を含めている。

さらに、魯迅は、長期にわたって美術・美学を提唱していた。それ故に、魯迅は美術品を展示する博覧会に対して大きな関心を持っていた。「展覧会：魯迅的美術教育実践」<sup>(33)</sup>によって、魯迅は1914~36年までの間に、見学した博覧会は26回であり、計画準備に参加した博覧会は6回であり、自ら主宰した博覧会は3回を数える。

一方、魯迅の博物館論は、蔡元培と相似し、主に美学思想と美術教育の角度から論述し、博物館における美術教育の効果を強調している。1913年2月に魯迅は、本名の“周樹人”を使って『教育部編纂処月刊』第一巻第一冊に「擬播布美術意見書」<sup>(34)</sup>を掲載した。

当該論文は、魯迅が美術の定義・美術の種類・美術の目的と活

用・美術の推行などの点を論及した内容であった。

魯迅は、美術の定義について、三つの要素を指摘した。具体的には、「一曰天物、二曰思理、三曰美化。」（美術とは、第一は自然の物であり、第二は作者の思想が体现できることであり、第三は必ず美化を受けることである。 筆者訳）と定義した。さらに、魯迅は、玉の彫刻・髹漆・象牙の彫刻・核の彫刻・精巧な用具・珍しい古物・外国の珍しいものなど技術的な工芸品が美術ではないと指摘した。魯迅は、新文化運動の代表人物として、儒教・封建を批判したため、中国では伝統的技術と文化を見直した。魯迅は、民衆に科学と民主意識を目覚めさせて、新式的な文化と思想を標榜して、中国の伝統的工芸に対しては複雑な態度を持っていた。中国で伝統的工芸は、中華民族の優しい文化として、継承し発揮すべきである。一方、近代的な新式思想を広めるために、中華民族の伝統的文化を広く宣伝することは収斂すべきであるとする考え方である。

しかし、筆者の観点は、中国における伝統的工芸と技術を使って作る工芸品は、美術である。美術は、人間が技芸と思想を体现して創造する美的産物であると考ええる。

なお、魯迅は美術の種類については、古代ギリシアのプラトン（Πλάτων）による分類・フランスの Charles Batteux とドイツのゲオルク・ヴィルヘルム・フリードリヒ・ヘーゲル（Georg Wilhelm Friedrich Hegel）による分類・英国の Sir Sidney Colvin による分類を事例に挙げて、世界で美術に関する主流的な種類に関して論及した。

また、美術の目的については、魯迅が「美術可以表見文化」（美術は、文化が体现できる 筆者訳）・「美術可以輔翼道德」（美術は、道德を補佐できる 筆者訳）・「美術可以救援經濟」（美術は、經濟を復興できる 筆者訳）である三つの目的を挙げた。

さらに、魯迅は、美術事業の推行の方法が「建設事業」「保存事業」「研究事業」である三つの方法を挙げた。具体的には、「建設事業」は美術館・美術展覧会・劇場・奏樂堂・文芸会を含める。「保存事業」は、著名建築・碑碣・壁画と造像・公園を含める。「研究事業」は、古樂・国民文学を含める。



図 5-3 魯迅



図 5-4 嚴智怡

## ② 嚴智怡の博物館論

嚴智怡は、新文化運動後期の代表人物として、新文化運動を広く実行する作用が深かった。

嚴智怡は、嚴修の第二子として 1902 年に嚴修と一緒に日本に調査目的で渡日し、1903~07 年までの間に東京高等工業学校（現東京工業大学）に留学し、応用化学などの近代的な工業知識を系統的に学んだ。帰国後、嚴は 1913 年に直隸商品陳列所所長を担当し、1915 年にサンフランシスコ万国博覧会を見学している。この経験を生かし 1916 年に天津博物院籌備処を組織し、1922 年に天津博物院院長と天津公園董事会会長を兼務し、さらに 1925 年には天津広智館董事会会長を担当し、1928 年に河北第一博物院（元天津博物院）院長を歴任した人物である。

嚴は、日本に留学した折に、東京高等工業学校の校長であった手島精一の工業教育論と社会教育論の影響を強く受けて、実業・教育・博物館に関する意識の萌芽を見たという。そのために、嚴は手島と同じ、工業と社会教育、特に通俗教育・図書館・講演・博物館などの機関の設立に対して大きな関心を持っている。また、日本の博物館を見学した嚴は、博物館学に関する知識を意識的に学んだ。帰国した嚴は、実業に関する仕事に従事して、1910 年から、南洋勸業会に関する事務を行った。その後、嚴は、博物館に関する活動に実際に参加し始め、1913 年に勸工陳列所が直隸商品陳列所に改組して、嚴は直隸商品陳列所所長として直隸全省における商品調査を行った。1914 年に、嚴は直隸出品協会事務局局長として、直隸全省における物産を募集し、サンフランシスコ万国博覧会に参加したのであった。サンフランシスコ万国博覧会に参加した後は、アメリカの実業の現状調査に従事している。

また、手島精一の工業教育論の影響を強く受けて、嚴は実業・教育・博物館に対して強い関心を持っており、1919 年の直隸手工品展覧会・1919 年の天津県第一次物産会・1921~23 年にかけて三年連続で直隸工業觀摩会（1923 年に実業觀摩会と改称）・1924 年の

児童珍玩展覧会・1924年の東方毛氈展覧会・1925年8月の天津県物品展覧会・1929年の直隸農商会懇親会など、直隸全省における勸業会議を主催した。

天津博物院（1928年、河北第一博物院と改称）の院長に就任した嚴は、博物館の発展を積極的に推進し、博物館の教育機能の重要性を社会への啓蒙に努めた。そのために、天津博物院は数多の博覧会を開催し、民衆の教育普及の水準を高揚に努めている。

さらに、嚴は、博物館学に関する刊行物の普及にたいして大きな関心を持っており、数多くの博物館関係の刊行物を出版した。そのために、嚴の主張を推進する天津博物院は、多量の刊行物を刊行した。

例えば、1917年に天津博物院の蔵品によって出版した『天津博物院陳列品説明書（天然部）』（<sup>35</sup>）と『天津博物院陳列品説明書（歴史部）』（<sup>36</sup>）であり、1918年に出版した「天津博物院成立展覧会臨時日刊」(<sup>37</sup>)であり、1925年に出版した『児童動植物図譜』（<sup>38</sup>）であり、1931年に出版し始めた『河北第一博物院半月刊』であった。上記の刊行物は、民衆知識と視野の向上を目的とした社会啓蒙書籍類であった。

また、嚴は、『河北第一博物院半月刊』の「発刊辞」(<sup>39</sup>)の中で、嚴の代表的な博物館論を下記のように開陳した。

本院乃普通之博物院、而非専門之博物院、其天職、尽在闡明文化、發揚国光、以補助学校教育社会教育之不逮、所負其使命至重且大也。欲使文化之普及、非宣传不為功、欲広宣传、必以印刷品為惟一利器、本刊刊行之主旨、盖在普及文化教育、并以引起一般人士對於博物院之注意而已。本刊内容、分自然科学與歴史学術兩大綱、於文化教育以及社会需要之知識、罔不力事灌輸、并竭力征求中外古今学者之著作、広為發表、以為社会與文化溝通之枢紐、尤力避枯燥之弊、務以增加読者興趣為帰。

（河北第一博物院は、普通の総合博物館であり、専門博物館ではない。その職能は、文化を闡明し、国の素晴らしいものを發揚し、学校教育と社会教育の不足点を補充することである。その使命は、重要である。一方、文化を広めることは、宣伝が第一位である。宣伝を広めることは、刊行物が第一位である。そのために、『河北第一博物院半月刊』を刊行する目的は、文化教育を普及し、一般民衆が博物館に対する注意を喚起することである。また、『河北第一博物院半月刊』が刊行する内容は、自然科学と歴史学術の2種類がある。さらに、文化教育と社会に対する必要な知識が民衆に普及しにくいから、『河北第一博物院半月刊』は古今東西にわ

たる学者の著作を掲載し、世界における文化の交流を求め  
る。なお、掲載する論文は、無味乾燥の内容を回避し、読者  
の興味が増加することを目指す。 筆者訳)

上記の文によって、嚴の博物館論は、教育の普及を目指した内容  
であることが理解できよう。博物館は、学校と社会教育の補充とし  
て、一般民衆に向けて開館することが重要である。さらに、博物館  
を広めるために、博物館に関する刊行物は、重要な位置を占めると  
した考え方は極めて進歩的な考え方であったと評価されよう。

一方、「嚴智怡的博物館科普教育思想與実践-从 1919 年天津博物  
院的“觀鯨会”談起」<sup>(40)</sup>では、嚴の科学普及教育思想が下記の四  
点を評価した。先ず、嚴がいた時代は中国は近代文化と思想を受容し  
始めた時期であるから、嚴の思想は、科学と教育を普及し、民衆の  
民智を開発することを目指した。次いで、嚴の科学普及教育思想の  
重要な手段は、博物館の無料開放である。それから、嚴の科学普及  
教育思想の特徴は、各種の刊行物の刊行である。最後は、個人的な  
損失にはこだわらないとした点である。

上記の評価には、嚴が博物館を無料開放とする主張と、嚴が博物  
館に関する刊行物を刊行する主張は、嚴の博物館論の特徴と看取で  
できると筆者は考えている。さらに、嚴の博物館論には、実業と一般  
民衆向けの教育が特徴であった。当該思想は、日本に留学した折に  
接した東京教育博物館館長の手島精一の博物館学思想に感化を受け  
たものと推定される。即ち、東京教育博物館こそが実業と一般民衆  
である、教員と一般公衆を対象とした博物館であった。



図 5-5 蔡元培



図 5-6 錢玄同

### ③ 蔡元培の博物館論

蔡元培は、日本に留学した経験はなかったが、日本の影響を受け  
たことは事実である。

「从清末中日關係論蔡元培思想的發展」<sup>(41)</sup>によって、蔡の思想の特徴を下記から窺い知ることができよう。

日文書籍的閱讀和翻譯、是晚清時期蔡元培吸收新知的一大途徑。就是他一生學問思想的主要部分、例如他的哲學成就和对宗教的看法、他的教育理論和对學制的見解等、亦莫不淵源於此。

(蔡は、清朝末期に日本語の本を閱讀と翻譯したことによって、新式の知識と思想を了解した。この知識と思想は、蔡の學說と思想の主要な部分となった。例えば哲學・宗教・教育理論・學制に対する觀點である。 筆者記)

1897年に、蔡は日本語を学び、日本語を中国語に翻譯し始めた。同年に、蔡は東文書館を設置し日本語を教授した。さらに、蔡は紹郡中西學堂の校長に任じられた折、日本人を招聘し日本語課程を設置した。蔡の觀點は、日本に学ぶことは西洋諸国に学ぶことより容易いとする考え方で、結果日本に学ぶことを選んだ。

一方、蔡の代表的な博物館論は、教育普及・美学と美的教育である。すなわち、蔡は博物館を一般民衆向けの教育機関として捉え、美学をひろめた人物であった。

#### ④その他、錢玄同・沈尹默・沈兼士の博物館論

上記の三人以外にも、新文化運動における推進者らは、博物館の発展に対して大きな関心を持っていた人物が多数存在していた。その中で、日本に留学し、日本の博物館学の影響を受けた人物は、錢玄同・沈尹默・沈兼士などが下記のようにあげられる。



図 5-7 沈尹默



図 5-8 沈兼士

錢玄同は、1906年から1910年までの間に早稲田大学で学校教育に関する知識を学んだ。帰国後、錢は教育に関する仕事をした。一方、兄の沈尹默と弟の沈兼士は、1905年に私費留学生として日



本鉄道学校へ留学した。しかし、経費の不足のために、一年もたたないうちに兄の沈尹黙は帰国し、弟の沈兼士は東京物理学校に転校して1911年に東京物理学校を卒業した。1921年に、兄の沈尹黙は再び日本に留学し、西京大学（現京都府立大学）で研修した。

しかし、語言学家と音韻学家である錢玄同、書家である沈尹黙・文献学家・文字学家とする沈兼士は、主に文物に対する関心を持っていた。その研究が主に文物に対する研究であるから、博物館に関する研究は、主に博物館の保存と研究機能に触れた。その原因は、博物館が文物を保存する場所として、文物を保存と研究する機能が最も重要な機能を位置したことである。

新文化運動の推進者らが存在した時代は、封建制が滅亡し、民主制が開始され始めた時代であった。かかる時代にあって、一般民衆の発展を阻害する伝統を捨てさせ、発展を促進する新たな知識を受容させることは、第一の急務であった。

中国では、歴史的に教育を受ける権利は、特権階級の私有物であった。しかし、民主と自由の思想を受けて、中国における一部の有識者らは、教育普及の重要性を認知し、一般民衆向けの教育を提唱し始めたのであった。そのために、博物館は一般民衆向けの教育の場所として、重要な位置を占めることとなった。博物館の教育機能は、飛躍的進歩を遂げることとなった。

一方、新文化運動は、新学を提唱し伝統的儒学に反対したために、中国における伝統文化を軽視する特徴を持っていた。その中で、新文化運動における興起の“疑古派”は代表として活躍した。

“疑古派”は、中国における古代史が文字記述のみの場合に対して懐疑の態度を持っていた知識人である。“疑古派”は、中国における伝統的な歴史書を懐疑し、近代的考古学を推奨した。“疑古派”は、“古史弁派”とも称され、代表人物は顧頡剛・錢玄同・胡適などであった。

“疑古派”の出現は、中国における歴史学にとって、大きな影響を与えた。それから、文献資料に対する偏重は引き下げて、それに対して実物資料に対する重視は高められるといった情勢の中で、博物館は実物資料を保存する場として、その評価に変革が認められ活用され始めた。

また、当該期に提唱された博物館論は、日本の博物館学の影響を受けることのほかに、西洋諸国の博物館学の影響も同時に受けていた。例えば、英国・ドイツに留学した傅斯年であり、フランスに留学した劉半農であり、アメリカに留学した李濟である。

一方、留学の経験を持ってない博物館学者は、中国国内で新式教育を受けて、中国の実状に沿った形の博物館論を提唱した。例えば、馬衡と陳垣である。

馬衡は、中国における有名な金石考古学家と書法篆刻家として、博物館の収集保存機能を重視した。馬は、南洋公学（今の上海交通大学と西安交通大学の前身）で金石学と史学を研究した。しかし、馬は、留学した経験がなかった。馬は、「中国近代考古学的前駆」と称賛されている。

陳垣は、中国における伝統的な教育を受けたが、西洋文化に対して大きな関心を持っていたから、自ら日本文化と西洋文化を学んだ。陳は、中国史・宗教史・教育などの諸方面に対する研究を行った。

## 第二節 20世紀前半期における中国博物館学の確立期・博物館編

本時期には、博物館が新式教育を広める場所として活用されながら、博物館は学校教育と社会教育の両方を促進する場所として新たな発展を遂げた。中国では古来より儒学が最も重要な位置を占めたから、教育も儒学を偏重する歴史を有する。新式教育は、中国における伝統的な教育と違い、理学・外国語・科学技術など実用的な能力を重視する教育である。

### 1、張謇と南通博物苑（1905年設立）

1905年に張謇は、日本を模倣し帝室博物館を設立する提案をするが、清政府はこの提案を棄却した。張が帝室博物館を設立する理念を抑えつけさせた。しかし、張は博物館を設立する理念を放棄しないでいて、「南通博物苑大事記 1905—1915」<sup>(42)</sup>によれば、通州師範学校の公共植物園を計画していた。これは、南通博物苑の濫觴であると言えよう。



図 5-9 設立した南通博物苑



図 5-10 今の南通博物苑・中苑

「南通博物苑大事記 1905-1915」と『張謇日記』<sup>(43)</sup>の両資料に拠れば、1906年1月3日に張は、公共植物園を博物苑と農芸試験場を計画したことが理解される。1月6日に、博物苑の建物を決定し、1月23日に、張は、博物苑の入り口に対句である対聯を記した。この対聯は、「設為庠序学校以教、多識鳥獸草木之名」（学校が

設立されて人材を育て、博物館が利用されて視野を広める。筆者訳）と記した。上記の対聯によって、張は博物苑が教育を広める場所を見なし、博物苑に対する希望が高かった。さらに、博物苑を建築する間に、張は何度となく視察した。張は、南通博物苑の建築に対して全ての心血を注いだことが窺い知れる。

一方、南通博物苑は、最初に通州師範学校に属して、博物苑と称した。1912年に、博物苑が通州師範学校から独立して、正式に「南通博物苑」と称した経緯を有する。

なお、張は、日本における博物館の設置を模倣するために、通州師範学校の日本人教師である木村忠治郎を顧問として招聘し、南通博物苑を企画した。

「南通博物苑回憶録」<sup>(44)</sup>によると、木村は南通博物苑の設立に大きく助力した人物で、南通博物苑の顧問として南通博物苑の立地・展示品の陳列などに大きな関心を持っていた。さらに、当時に南通博物苑の庭には木村が日本から持ってきた八重桜があったが、残念ながら、現在の南通博物苑の庭における桜は、木村が日本から持ってきた八重桜ではない。また、「木村忠治郎與南通博物苑」<sup>(45)</sup>に拠って、木村が南通博物苑にもたらした影響と成果は、次の四点をまとめした。

- 第一は、南通博物苑の庭の設計
- 第二は、標本の製作
- 第三は、植物の収集
- 第四は、植物と標本資料の名称同定

木村忠治郎は、1896年に東京高等師範学校を卒業し、嘉納治五郎の紹介によって、通州師範学校の教習をしながら、南通博物苑の顧問をしていた。木村が南通博物苑に関する論述がないが、木村が著した『小学教授法要義』<sup>(46)</sup>の「第二編 教授各論」「第六章 理科」の中で標本に関する内容を含めている。

1914年に『南通博物苑品目』が上梓され、張は同目録のなかに「南通博物苑品目序」を記している。なお、同年に費范九が編成して、出版が開始された『南通地方自治十九年之成績』の「乙編教育」には、「博物苑」<sup>(47)</sup>と題する記載を確認することができ、その内容は南通博物苑の1905~14年までの沿革を詳しく記載した沿革史である。



図 5-11 今の南通博物苑・南苑

## 2、徐樹人と泰安博物館（1906年開館）

1906年に、宏文学院普通科を卒業した徐樹人は、泰安における有識者らを集めて、泰安の岱廟門楼で博物館を創設したことは、『北洋官報』と『山東官報』に、「泰安開設博物館」と題した記事を見出すことが出来る。

『北洋官報』は、「各省新聞」<sup>(48)</sup>の中で、下記のような記事が掲載されている。

泰安開設博物館 山東泰安府図書社近自東洋購到博物多品、擬創設教育博物館一所、以資瀏覽而開知識。惟因社内房舍窄狭稟由府県、移設於岱廟五朝門楼。無論何項人等、均可領票入内觀看。但應遵照定章、西入東出、以免擁擠。業於上月二十日開館、至二十四日停止。以后定每月逢一開館、月開三次、每日准十点钟起、六点钟止。業在各通衢広貼告白、俾衆周知得以得按期前往云。

同じく『山東官報』は、「本省新聞」<sup>(49)</sup>の中で、下記のように掲載している。

泰安開設博物館 泰安府図書社諸志士、近自東洋購到博物多品、擬創設教育博物館一所、以資瀏覽而開知識。以社内房舍窄狭因稟由本府県、移設於岱廟五朝門楼。無論何項人等、均領票入内觀看。但應遵照定章、西入東出、以免擁擠。業於上月二十日開館、至二十四日停止。以后定月逢一開館、月開三次每日准十点钟起、六点钟止。業在各通衢広貼告白、俾人得按期前往云。

上記の二篇の新聞報道は、大体同じ内容を掲載したもので要約すると次のとおりである。「山東省の泰安府における“図書社”と称する結社団体の成員は、最近日本で展示品と実物資料などを購入して教育博物館を創設した。この教育博物館は、民衆が視野を広めて

知識を増加するために、創設する教育の場所である点を力説している。一方、図書社の建物が狭すぎるから、岱廟五朝門楼へ移設している。この博物館の観覧者は、チケットを購入すれば、誰でも入館できる。なお、入館者は、混雑を避けるために博物館の規定を遵守すべきであり、西門から入館し東門へ出館すべきである。博物館は、先月の二十日から二十四日までの間に開館した。今後の開館日は、毎月一日・十一日・二十一日である。開館の時間は、午前十時から午後六時までである。開館に関する情報は、各道路で掲載して、観覧者が了解できる」といった内容である。

また、翌年の『東方雑誌』の「教育:各省教育滙誌」<sup>(50)</sup>の中では、博物館に関する情報を「泰安創設教育博物館 自日本購到教育品物多種、一一陳列任人觀覽。」(泰安には、教育博物館を創設した。この博物館には、日本で購入した多種多様な教育用品を展示し、入館者が観覧できる。 筆者訳)のように掲載されている。

なお、ここで注目される点がある。すなわち、この博物館は、具体的な名称を掲載していないことである。『北洋官報』・『山東官報』は、「泰安開設博物館」と題して掲載し、報道の中で「教育博物館」という用語を使用している。一方、『東方雑誌』は、「泰安創設教育博物館」と題して、直接的に「教育博物館」という用語を使用した。一方、葛延瑛と呉元録が1929年に編著した『重修泰安県志』<sup>(51)</sup>と泰安市人民政府のホームページ<sup>(52)</sup>によって、この博物館の名称は「東安博物館」であることが理解できる。この状況に対して、周郢は「東安博物館」『重修泰安県志』の印刷錯誤と判断している<sup>(53)</sup>。

資料が不足のために、泰安博物館の真実の名称が確認できないが、泰安博物館の創設は、徐樹人と泰安図書社有識者らの努力のためのものである事実が確認できる。徐は、帰国留学生として、日本における博物館に関する知識を利用して、中国で博物館を設立した。また、泰安博物館に展示する実物資料は、日本から輸入した教育資料であり、動植物の標本・鉱物の標本・生物標本・植物の図画・天文図・地球儀・人体解剖図・世界における人種の身体模型など近代的な知識を体現する実物資料であった。

泰安博物館は、近代的な知識を広めるために、西洋における近代化の実物資料を展示した。一方、中国伝統文化の擁護者らは、泰安博物館が西洋文明を普及することに不満を抱った。それゆえに、残念ながら、泰安博物館は、1909年に泰安知県(知事のような役職)である張学寛の反対によって閉館しなければならなかった。



図 5-12 岱廟五朝門樓

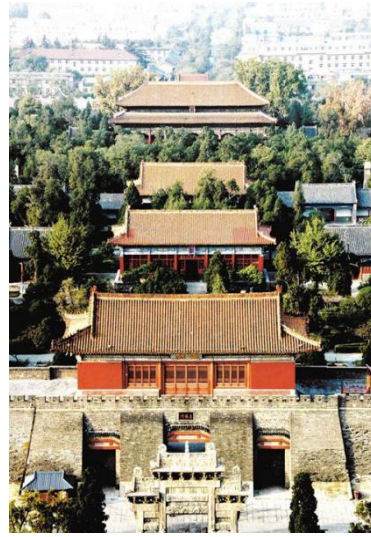


図 5-13 現在の泰安市博物館

### 3、国立歴史博物館（1912年設立・1926年開館）

1912年2月に中華民国教育総長であった蔡元培は、「對於新教育之意見」<sup>(54)</sup>を發表し、美学と美育<sup>(55)</sup>を提唱し、新たな教育理念を推行し始めた。その中で、蔡は「博物学、在応用一方面、為実利主義。而在觀感一方面、多為美感。為研究進化之階段、可以养道德、体験造物之万能、可以導世界觀。」（博物学の応用は、実利主義を體現し、現実の利益と實際の効用をもたらす。一方、博物学の觀感は、芸術的な美感をもたらす。研究者が博物学を研究することは、研究者が道德を身に付けさせて、研究者がものづくりを体験させて、研究者の世界觀を指導する。筆者訳）のように博物学を評価し、博物学を重視した。そのために、博物学が利用する実物資料も重視された。博物館は実物資料を展示する場所として活躍し始めた。また、蔡の主張によって、それから博物館に関する事務は、社会教育司が管理した。

社会教育をさらに広めるために、蔡は、国家博物館の設立を提案した。そのために、教育部は、1912年7月9日に北京国子監<sup>(56)</sup>の旧址で国立歴史博物館籌備処を成立させ、胡玉縉を主任として招聘した。胡は、1903年に張之洞の幕僚になって、翌年の1904年に日本へ調査に行つて『甲辰東遊日記』を記している。

また、当時の教育部社会教育司第二科科长であった魯迅も、国立歴史博物館に関する準備を直接に整えた。例えば、国立歴史博物館籌備処の立地の選択と博物館における展示品の収集などであった。

1917年に国立歴史博物館籌備処は、中華民国教育部502号令<sup>(57)</sup>を受けて、端門と午門<sup>(58)</sup>に移動した。1920年11月に国立歴史博物館は、正式に成立した。しかし、中国内で衝突が頻發して、蔵品の安全のために、国立歴史博物館は、1926年10月10日になって

やっと正式に開館した。展示品は、主に国子監に収集保存する器物と明清檔案<sup>(59)</sup>など歴史文物である。

1931年に満州事変の勃発によって、戦雲が立ちこめ、戦争は一触即発の状況であった。かかる状況にあって、国立中央研究院歴史博物館籌備処は、1933年から中央研究院北平歴史博物館（元国立歴史博物館）・故宮博物院・国立中央博物院籌備処の文物を四つの組に分けて、上海と南京に移転した。

1937年の盧溝橋事件によって、北京が陥落した。王克敏は、日本陸軍の支持を勝ち取って中華民国臨時政府を樹立した。中央博物院籌備処北平歴史博物館（元国立歴史博物館）は、中華民国臨時政府の教育部の直轄へと移行された。

また、「淪陷時期日偽在北平発動“献銅”運動概述」<sup>(60)</sup>によって、日本陸軍は1942年10月・1943年8月・1945年3月に三回で“献銅”運動を遂行し、銅製品を集めた。これにより残念ながら、中央博物院籌備処北平歴史博物館における銅製品は、接收された。

1949年10月に、中央研究院北平歴史博物館は、北京歴史博物館と改称し、中華人民共和国中央人民政府文化部の組織に組み入れられた。

国立歴史博物館は、不安定な時代の基に成立発展したため、名称は、何度も改称された。なお、1950年まで国立歴史博物館の名称の変遷は、下記の表5-1のとおりである。

表 5-1 1950年まで国立歴史博物館の名称の変遷

日期	名称	備考欄
1912年7月	国立歴史博物館籌備処	建設準備
1920年11月	国立歴史博物館	成立
1926年10月	国立歴史博物館	開館
1929年8月	中央研究院北平歴史博物館	
1933年4月	中央博物院籌備処北平歴史博物館	
1945年8月	中央研究院北平歴史博物館	
1949年10月	北京歴史博物館	

一方、国立歴史博物館は開館と同時に、『国立歴史博物館叢刊』などの刊行物の刊行事業を開始している。

『国立歴史博物館叢刊』の「発刊辞」<sup>(61)</sup>には、「民国建元。以京師首都。四方是瞻。文物典司。不容闕廢。乃由教育部籌設本館。」（中華民国は、北京を首都として建国した。全国各地が首都とする北京の行動に追従するため、北京における文物などの管理と保存は、放任することは許さない。そのために、教育部によって国立歴史博物館は、設立された。筆者訳）のように国立歴史博物館の設

置母体を明確に指摘した。これによって、国立歴史博物館は、中国における初めての中央政府が設立した博物館であることが確認できる。なお、『国立歴史博物館叢刊』の「本館開館記事」<sup>(62)</sup>には、「民国成立以首都尚未有典守文物之専司、乃議先設博物館於北京。」

(中華民国の建国以来、首都である北京において文物を管理と保存する機関がなかった。そのために、北京で博物館を設立する必要がある。筆者訳)のように国立歴史博物館を設立する必要性を指摘している。



図 5-14 北京国子監

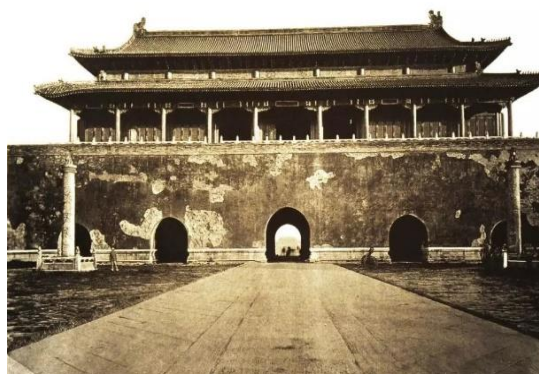


図 5-15 端門と午門周りの建物

また、この「発刊辞」には、国立歴史博物館を設立する目的を明確に提出した。国立歴史博物館を設立する目的は、四点であった。具体的には、第一は「保文物以存国性」(文物を保存して、中国の特性を守る。筆者訳)である。第二は「輯史料以共研究」(史料を収集して、研究を支える。筆者訳)である。第三は「重実験以正虚诬」(実験を重視して、真偽を区別する。筆者訳)である。第四は「整旧説以成学术」(学説を検討して、学术の振興を図る。筆者訳)である。この四つの目的は、当時の中国における社会教育の要務に合致した内容であった。

一方、国立歴史博物館は、国内国外における有識者らの助力を持って開館できた。「本館開館記事」には、特に国立歴史博物館は、小林胖生という人物の所蔵の鍬を借受して展示したことを述べている。この小林胖生は、満洲族民族学研究者・東亜考古学会幹事・元満鉄参事などの肩書を持っていた。

また、『国立歴史博物館叢刊』は、海外での素晴らしい著論を翻訳して掲載し、新たな学説を広めた。その中に、「日本近代考古学の父」と呼ばれる濱田耕作が著した『通論考古学』があったが、『国立歴史博物館叢刊』の中では、「考古学通論」<sup>(63)</sup>と訳されている。さらに、訳者は、下記のように該書を紹介した。

日本文学博士濱田耕作。日本有名之考古学者也。考古学通論。為其生平名著。吾国雖代有考古之士。然迄今千有餘載。



求其有為一系統之考古論著者。則幾如麟角鳳毛之罕覩。爰由本館訊出。藉供国内博雅者之研討。惟倉卒成篇。文辭淺率。恐未能尽原作之菁華耳。

(日本文学博士である濱田耕作は、日本における有名な考古学者である。「考古学通論」は、濱田の論著のなかでも最も有名な著論である。中国には、千年前から考古学を研究する関係者がいるが、残念ながら系統的な考古論を構築した人物はいなかった。そのために、国立歴史博物館は、「考古学通論」を中国語に翻訳し、国内の知識人の検討に供したものである。しかし、突然に翻訳することは、原作の精粹を翻訳しない不足点があるかもしれない。 筆者訳)



図 5-16

『国立歴史博物館叢刊』



図 5-17 国立歴史博物館

国立歴史博物館は、中国における初めて中央政府が設立した博物館として、中国における博物館の発展にとって、画期的な意義がある博物館である。国立歴史博物館の設立によって、国家が博物館を設立する体系を規範し、博物館の発展を促進することとなった。

#### 4、嚴智怡と天津博物院（1916年設立・1918年開館）

天津博物館のホームページで「百年天博路—天津博物館歴史沿革一」<sup>(64)</sup>と題する論文で、天津博物院の沿革を述べる。筆者は上記の文章によって、1950年まで天津博物院の名称の推移を一覧すべく表 5-2 を作成した。

表 5-2 1950年まで天津博物院の名称変遷表

日期	名称	備考欄
1916年4月	天津博物院籌備処	河北公園の商品陳列所

1917年10月10日	天津博物院(予定)	水害によって延期
1918年6月1日	天津博物院	成立・展覧会
1923年2月25日	天津博物院	正式開館
1928年11月	河北第一博物院	
1935年1月	河北博物院	
1937年8月	弁事処	市立美術館
1941年1月	天津特別市立博物院	
1945年12月	河北省立天津博物館	
1949年1月	天津市市立博物館	

嚴智怡は、天津博物院の設立に対して、十分な準備を整えた。嚴は、1903~07年までの間に日本に留学した。日本から帰国した嚴は、1912年に工商科長と勸工陳列所所長に任命された。1913年に勸工陳列所が直隶商品陳列所に改称されたので、直隶商品陳列所所長に任命された。同年に嚴は、直隶省における文物と史跡などを全面的に調査した。また、その折の調査で収集した標本などの実物資料は、後の天津博物院の蔵品となっている。



図 5-18 天津博物院籌備處



図 5-19 天津博物院

なお、海外の経験を得るため、嚴は1914年に陸辛農らを日本に派遣し、東京大正博覧会に参加して、標本などの実物資料の購入を行った。1915年には、アメリカのサンフランシスコ万国博覧会に参加し、16冊からなる『巴拿馬賽會直隸觀會叢編』<sup>(65)</sup>を作成した。サンフランシスコ万国博覧会は、嚴に大きな影響をもたらした。その後、嚴は、アメリカにおける博物館・美術館・博覧会などの機関・施設を見学し、標本などの実物資料を収集した。ここで注目される点は、嚴が中国において初めて民族学に基軸を置いた博物館学者として、民族学に関する実物資料も収集したことである。それゆえに、宋伯胤は嚴を“究心民族文物第一人”<sup>(66)</sup>と評価した。

なお、嚴は1931年に出版した『河北第一博物院半月刊』の第1

期から第4期で4回に分けて「本院沿革要略」<sup>(67)</sup>を掲載し、天津博物院から河北第一博物院に至る沿革を著述している。

「本院沿革要略」によれば、巖はサンフランシスコ万国博覧会に参加した後、「携有美洲紅人用品、将在天津筹設博物院、用為陳列品」(アメリカ州の先住民族の民族学に関する実物資料を収集した。これらの実物資料を陳列するために、巖は天津で博物院を設立すること 筆者訳)という考え方の軸足を決めている。当該点が、天津博物院の設立の契機であって、さらに1916年2月に直隸省署教育科・天津県勸学所・省立各学校は、天津における博物院の設立に関する要望書を連名で、直隸省巡按使<sup>(68)</sup>に提案している。また、この提案には、天津博物院の名称と、巖が天津博物院の設立を主催することを確定した。同年の4月に、天津博物院籌備処は、直隸商品陳列所の中に設立した。

天津博物院は、1917年10月10日に天津公園における旧学会の会場で成立予定であったが、水害のために会場となる内地址が避難所として、被災者を救護したところから、残念ながら天津博物院の開館は延期を余儀なくされた。かかる状況にあって、巖は、天津博物院を紹介するために、『天津博物院陳列品説明書(天然部)』<sup>(69)</sup>と『天津博物院陳列品説明書(歴史部)』<sup>(70)</sup>を刊行し、天津博物院の蔵品を紹介している。

1918年1月14日に天津博物院は、各学校の関係者を招待して、博物院の見学会を開催した。さらに、同年の3月に、天津博物院は、天津総站前の勸業道署の建物と確定した。同年の6月に天津公園で天津博物院の成立展覧会が開催されている。その後で、天津博物院は、正式な開館は見なかったが、展覧会等での見学者は多かった。1919年4月に、天津博物院は、金華商場で観鯨会を主催した。1922年に天津博物院は、章程と理事会を確定し、9月に理事会が開催され、1923年2月25日にようやく天津博物院は、正式に開館した。

一方、『大公報天津版』は、天津博物院の成立展覧会に対して大きな関心を持っていた。1918年1月22日に『大公報天津版』は、「開展覧会」<sup>(71)</sup>を掲載した。また、天津博物院の成立展覧会が開催される前に、『大公報天津版』は、5月25日と26日に「天津博物院成立展覧会特別広告」<sup>(72)</sup>を掲載し、天津博物院の成立展覧会を広報した。天津博物院の成立展覧会が開催する間に、『大公報天津版』は「博物院開会誌盛」<sup>(73)</sup>「人為万物之靈」<sup>(74)</sup>「六月二日遊覽商品列所及博物院記事」<sup>(75)</sup>「人為万物之靈(続)」<sup>(76)</sup>「展覧会之奇觀」<sup>(77)</sup>「古樂之一線伝」<sup>(78)</sup>「演奏古樂之确期」<sup>(79)</sup>「請看大幻術」<sup>(80)</sup>「博物院之崑弋戲」<sup>(81)</sup>などの広告・掲示・評論文を多量に掲載したことも特徴であり、如何に天津博物館の開館が待ち望まれていたかを窺い知

る。

「天津博物館:从官營陳列所到近代博物館」<sup>(82)</sup>によって、天津博物院の成立展覧会は、サンフランシスコ万国博覧会の設置を全て模倣し、陳列館・演説壇・武術館・遊芸部・余興部があった。陳列館には、植物・動物・鉱物・岩石・化石などの自然部があり、文字実物資料・陶器・瓷器・骨器・石器・玉器・礼器・武器などの歴史部があった。また、自然部の展示は、サンフランシスコ万国博覧会における「パノラマ展示」<sup>(83)</sup>という展示方法を利用した点も特徴である。ここで使う「パノラマ展示」は、中国語で「景觀陳列法」あるいは「開放式景觀陳列法」と称する。開放式景觀陳列法は、簡単な陳列ではなく、展示品を作った场景の中に直接に置く展示方法である。一方、景觀陳列法は、復元展示ではない场景をそのままに再現しないことである。景觀陳列法に利用する景觀は、復元の景觀ではなく、想像によって設置する景觀である。上記のように、展示品以外のものを利用して展示することは、中国における初めてのことであり、効果的な宣伝をしたようである。さらに、展覧会の記念はがきを販売したことは、ミュージアムグッズの基盤となったものと看取される。

天津博物院建設の発端は、日本の博物館と博覧会の影響を受けて、事実上はアメリカの博物館と博覧会を模倣したことであった。この発展過程は、中国博物館の発展過程にも整合すると観察される。

## 5、故宮博物院（1924年設立・1925年開館）

紫禁城は、明朝の成祖永楽帝である朱棣が元朝の大都を改築した宮殿である。紫禁城は、1406年から建築が開始され、1420年に完成したとされている。落成を受けて、1421年に永楽帝は北京へ遷都している。それから、1924年までの間に、紫禁城は皇帝と皇族の個人の財産として存在していた。

1911年10月に勃発した辛亥革命によって、清政府の統治は覆された。1912年2月に清朝最後の皇帝の宣統帝である愛新覚羅溥儀が退位したが、中華民国臨時政府が宣統帝と締結した『清室優待条件』によって、清皇室は、紫禁城の内廷<sup>(84)</sup>に居住する権利を持っていた。

一方、紫禁城の外朝は、中華民国臨時政府が接収管理して、1914年2月4日に古物陳列所を成立した。古物陳列所は、清皇室が盛京皇宮と熱河離宮における蔵品を保存し、一般民衆向け開放した展示施設であった。なお、古物陳列所は、1947年に正式に故宮博物院に併合されている。

さらに、1924年10月に、馮玉祥が北京政変<sup>(85)</sup>を起こした。翌

月に、馮は『清室優待条件』を修正し、11月5日に溥儀と清皇室を紫禁城から追放した。その後、紫禁城は故宮と改称し、中華民国臨時政府が接収管理した。同月14日に「弁理清室善后委員会組織条例」を公布し、“弁理清室善后委員会”が成立し、故宮に関する事務を行った。

1925年4月1日に、“弁理清室善后委員会”は、「參觀故宮暫行条例」を修訂した。同年の9月29日に、“弁理清室善后委員会”は、『故宮博物院臨時組織大綱』を公布して、臨時董事会と臨時理事会を成立して、古物館と図書館を設立した。さらに、李煜瀛は臨時理事長になり、易培基は古物館館長になり、陳垣は図書館館長になった。李煜瀛はフランスに留学した経験があり、易培基は日本に留学した経験があった。陳垣は、留学の経験はないが、日本語が話せるところから日本語の資料をよく研究した<sup>(86)</sup>。

“弁理清室善后委員会”は、故宮における清皇室の蔵品を整理点検し、6編28冊からなる『故宮物品点査報告』を作成し、約117万件に及ぶ収蔵文物の目録化を断行した。



図 5-20 民国時期の故宮博物院



図 5-21 今の故宮博物院

1925年10月10日に、故宮博物院は正式に成立した。なお、故宮博物院の成立は、多量の知識人と有識者の努力によって果たされたことであった。紫禁城は、中国人にとって特別な意義があるから、紫禁城が故宮博物院になることは、社会各界の注目を集めた。紫禁城が故宮博物院になることに対して、中国社会には新文化運動の推進者らを代表する賛成派と、中国における伝統の守護者らを代表する反対派があった。

上記で論及する新文化運動の推進者らである蔡元培・沈兼士らは、故宮博物院の設立に大きな関心を持っていた。新文化運動の推進者は、封建的な制度を反対と批判するため、紫禁城を清皇室の私人財産とすることを強く反対していた。

1912年に溥儀は退位したが、『清室優待条件』の庇護によって溥儀は皇帝の肩書を持っており、生活水準は変わらなかった。従前の生活水準を保障するために、溥儀は紫禁城における文物を販売し、現金を入手していた。さらに、1922年に溥儀は結婚式の費用

に充てるため、日本人に 120 万元で奉天における文溯閣に収蔵する『四庫全書』<sup>(87)</sup>を売渡しようことは、中国社会に大きな反応を引き起こした。1922 年 3 月 26 日に上海の『時事新報』と北京の各報刊は上記のニュースを掲載した。その後、『民国日報』『新聞報』『新教育』『来復』などの刊行物も上記の事件を広く報道した。

かかる状況にあつて、沈兼士・沈士遠・単不庵・馬裕藻・朱希祖・馬衡・錢玄同・周作人は、連名で「為清室盜売四庫全書敬告国人速起交涉啓」<sup>(88)</sup>を發表し、溥儀の行為を強く非難したのであつた。

今愛新覺羅溥儀竟胆敢私行倒売与外国人,不但毀棄宝書、貽民国之耻辱、抑且盜竊公產、干刑律之条文。

(今回で愛新覺羅溥儀が外国人に『四庫全書』を私的に売渡すことは、宝書である『四庫全書』を毀棄した。さらに、このことは中華民国にとって、恥を搔かせることである。その上で、溥儀は、中華民国の財産を盗み、刑律の条文に違反する。 筆者訳)

なお、『四庫全書』の保存には、下記のように提案している。

亟宜一律由我民国政府收回筹設古物院一所、任人觀覽。如此弁法、既是以供研究學術者之参考、亦可使帝制余孽稍戢斂其覬覦僥幸之謀逆。

(今は、『四庫全書』の保存は、中華民国の政府が責任を取るべきである。さらに、中華民国の政府は、古物院を設立し、『四庫全書』を保存展示して、民衆に觀覽させる。古物院の設立は、學術研究者らにとって、研究資料があり、研究する場所もある。さらに、古物院が設立され、以前の皇室蔵品が接收されることは、帝制を擁護する人にとって、監督作用がある。 筆者訳)

上記の提案によって、新文化運動の推進者らは、紫禁城を故宮博物院に改造する主張をいつもしていた。

「新文化運動與博物館的關係—兼述新文化運動影響下中国博物館事業的初步發展—」<sup>(89)</sup>によって、紫禁城が故宮博物院になることに対して、北京大学の教授と学生は、大きな助力を与えた。北京大学の教授と学生達は、大勢の人が故宮博物院の設立を参加した。北京大学の新文化運動の主体であつた教授と学生は、新文化運動の理念を推奨したのであつた。そのために、故宮博物院の設立は、新文化運動の成果であると評価できるのである。

また、故宮博物院が近代的な博物館として、その設立は民衆向けの教育機能と国の財産を守る保存機能を持っており、さらに実物資料を利用して研究する研究機能を持っている。上記の諸機能は、新

文化運動が提唱する民主と科学の一致であるから、故宮博物院の設立は、新文化運動の推進者らの支持を得ることは必定であった。



図 5-22 今の故宮博物院全景

一方、中国伝統文化と秩序を守る大儒と清皇室の擁護者は、溥儀が退位した後も清皇室に忠誠を尽くし、中華民国を認可しなかった。その中での代表的な人物としては、羅振玉・王国維・金梁・康有為がいる。

中国伝統文化と秩序を守る大儒らは、儒教が提唱する「天地君親師」<sup>(90)</sup>を墨守し、溥儀に対しては絶対な忠誠を誓っていた。なお、溥儀と清皇室は、1924年まで紫禁城の内廷に居住するために、それらの大儒は紫禁城の内廷に進入する機会があった。内廷に進入する機会を利用し、それらの大儒は、皇室の宝蔵を研究する可能性があった。その中で、羅振玉と王国維は、知識が豊富な大儒として、紫禁城における古物に対する研究を行った。

羅振玉は、考古学者と教育者として、亀甲獣骨文字である甲骨文字に関する研究に大きな成果を得た人物であった。羅は、王国維・董作賓・郭沫若とともに「甲骨四堂」と称される。さらに、羅は敦煌学の分野にも大きな役割を果たしている。羅は、日本に留学した経験はないが、日本語を勉強し、日本の出版物によって、近代的思想と文化を理解していた人物である。羅は主に古物と蔵品保存に関する方面を研究していた。

1923年に、紫禁城の建福宮で火災が発生し、多量の古物が大火で焼失した。この事件によって、溥儀と清皇室に対する非難の声が殺到した。かかる状況にあって、羅は、皇室博物館を設立する提案を提出した。「博物館與国家認同之建構—以故宮博物院開院為中心—」<sup>(91)</sup>によって、羅は、古物の安全のために、「於東郊民巷使館界内購地建築皇室博物館、図書館」（東郊民巷の各国の使館界には、

敷地を購入し、皇室博物館と図書館を設立する。(筆者訳)と述べている。

王国維は、近代的な国学大師の一人と称させる人物であって、その研究の分野は中国文学・中国史学・考古学・美学・哲学などを含めた極めて広範囲であった。王は、1901年に東京物理学校(現東京理科大学)に留学し、翌年に帰国している。1923年に溥儀からの招待を受けて、「南書房行走」<sup>(92)</sup>に就任した。そのために、紫禁城の内廷に自由に出入りする機会があった。この機会によって、王は紫禁城の内廷における蔵品を熟知することが出来、これにより皇室博物館を設置する主張を有していた。

「王国維與故宮(下)」<sup>(93)</sup>によって、1924年5月18日に、王は溥儀に対して「筹建皇室博物館奏折」を上奏し、下記のように皇室博物館の設立を提唱した。

今有一策、有保安皇室之利而无其害者、臣愚以為莫若開放禁城离宮之一部為皇室博物館、而以內府所藏之古器・書画陳列其中、使中外人民皆得觀覽。如此、則禁城之內、民国所轄地面、既有文淵閣之四庫全書、文華・武英諸殿之古器・書画、皆我皇室之重器、而皇室所轄地面、復有皇室博物館陳列內府之重器、是禁城一隅實為全国古今文化之所萃、即與世界文化有至大之关系。一旦京師有事、万国皆有保衛之責。

(今、私には一の策略がある。この策略を利用すれば、皇室の安全と利益が確保できる。すなわち、紫禁城の内廷の一部は、皇室博物館にすることである。皇室博物館は、皇室が収集する古器と書画を展示し、中国と外国の民衆が見学できるようにする。そのために、紫禁城の中で、中華民国が管轄する部分は『四庫全書』・文華殿と武英殿の古器と書画など清皇室の重宝であり、清皇室が管轄する部分は皇室博物館である。このように、紫禁城は、中国全国における重宝を収集保存する場所として、中華文明を代表できる。紫禁城は、世界文化の一部になる。それゆえに、紫禁城は、非常の事態が起これば、諸外国も保衛の責任を持ってくれる。(筆者訳)

上記の文によって、王が博物館を設置する原因は、清皇室の安全と利益を確保する目的であることが理解できる。そのために、王は博物館の保存機能と展示機能を利用して、清皇室の収蔵品を保存し展示することを提案した。このことは、王が博物館の近代的特徴を利用し、私立博物館を設置することであったと筆者は考える。これは、日本の帝室博物館の設置目的と違った。日本の帝室博物館の発端は、ウィーン万国博覧会の準備機関であった。そのために、日本の帝室博物館は、展示の機能が強かった。

それに対して、王が提唱した皇室博物館は、清皇室の利益を確保



することが第一要務であった。王が博物館を設置する着眼点は、教育理念の普及ではないが、時代の制約と理念の違いによって、王を非難するほどのことでもないと考えられる。また、王の皇室博物館論は、博物館の保存機能と展示機能を明確に指摘し、一定程度の進歩性があったと考えられる。

一方、満州正白旗の瓜爾佳金梁は、清朝の八旗制に属した者であるから、清皇室に忠誠を尽くすことははずであった。

「古物陳列所的興衰及其歴史地位述評」<sup>(94)</sup>によって、金梁は、1910年から、溥儀に皇室博物館の設立を何度となく提案した。1910年に、金梁は、「請查盛京大内尊蔵宝物、即擬設博覧館」（盛京における皇宮の蔵品を統計調査して、博覧館を設立すべきである。筆者訳）と提唱し、盛京における蔵品を収蔵保存した。その後、1921年に、金梁は、清皇室の財産を守るために、溥儀に博物館の設立を再びに提案した。1924年に、金梁は、下記のようにさらに提案した。

当先保護宮廷、以固根本。其次清理財産、以維自養自保、然后可密図恢復。一曰“重保護”、保護弁法、当分旧殿、古物二類。一、保古物、擬將宝物清理後、即請設皇室博覧館、移置尊蔵、任人觀覽、并約東西各国博物館借贈古物、聯絡弁理、中外一家、古物公有、自可絶人干涉。一、保旧殿、擬即設博物館於三殿、收回自弁、三殿今成古迹、合保存古物古迹為一事、名正言順、誰得覬覦？且此事既與友邦聯絡合弁、遇有緩急、互相援助、即内廷安危、亦未嘗不可倚以為重。（後略）

（第一要務は、宮廷の立地と建物を保護し、皇室の根本を固める。それから、皇室の財産を整理することは、重要である。皇室は、皇室自らの財産を了解したら、自給自足な生活ができ、清の恢復を図る。その一つの方法は、古い宮殿と古物の保護を重視することである。古物の保護とは、皇室の宝物を徹底的に整理した後、皇室博覧館を設立する。皇室博覧館は、皇室の宝物を収蔵保存し、民衆に向けての開館である。さらに、皇室博覧館は、海外諸国の博物館と連携し、蔵品の貸借などの交流を促進し、皇室博覧館の管理と運営に対して海外諸国の博物館の協力を求める。このように、中国と海外諸国は、一体化する。また、蔵品は、世界の所有に属する財産になり、他人が干渉できない。古い宮殿の保護とは、皇室博物館を、太和・中和殿・保和殿である三殿を利用して設立する。このように、皇室は、三殿を回収する。なお、三殿が史跡になり、皇室博物館を利用することは、正当な行為であり、誰でも文句が言えない。さらに、皇室博物館は、友

邦と協力し設立することであるから、事件が発生したら、国際援助が取って、内廷の安全が確保できる。 筆者訳)

上記の文によって、金梁は、王国維と同じ、博物館を設立する原因は、清皇室の安全と利益を確保することである。『故宮五年記』<sup>(95)</sup>によって、金梁は、「查東西各国多設博覧会館、專儲皇室専用物件、謂足以示皇室之尊嚴、而發国民之忠愛。」(海外諸国の皇室は、博覧会を開催し、博物館を開館するが多い。この皇室博覧会と皇室博物館は、皇室専用の物件を収蔵展示し、一般民衆向けに公開される。これらの博覧会と博物館によっては、皇室の権力と尊嚴が体现でき、国民が皇室に対する忠誠と人望が得られる。 筆者訳)のように、博物館を利用して、清皇室が民衆に与える印象を上げる。さらに、皇室博物館を利用して、清皇室は、中華民国政府に対抗し、皇室の収蔵と皇宮を奪回する。一方、金梁は、博物館の管理と運営を利用して、人材を募集し、清皇室の復位を図った。

一方、前文で論述した康有為・張謇などの人物も、皇室博物館の設立に大きな関心を持っていた。皇室博物館の提唱について、張は1905年に「上南皮相国請京師建設帝国博覧館議」<sup>(96)</sup>を著して、1913年に「国家博物院図書館規画条議」<sup>(97)</sup>を著した。「上南皮相国請京師建設帝国博覧館議」には、皇室の蔵品を利用することを提唱し、「国家博物院図書館規画条議」には、皇室の建物を利用することを提唱した。康は、1913年に「保存中国名跡古器説」<sup>(98)</sup>を著して、その中でも皇室の建物を利用することを論及した。

この時期には、中国社会が大きな変革を経たため、博物館学界も興起し始めた。なお、当該期には、日本の影響を受けて設立した博物館の他に、多量の博物館が設立された。例えば、各地の勸工陳列所・商品陳列館などの博物館相当施設であり、各省立博物館であった。さらに、教育博物館・図書館博物館・大学博物館もあった。

## 小結

本章は、主に中国博物館学の確立期における日本の博物館学が中国へ与えた影響を検討することである。そのために、本章があげる博物館学にかかわる人物とその博物館論などは、主に、日本の影響を受けた人物である。

この時期には、博物館論と博物館が持っている特徴は、博物館が教育を普及する場所と見なすことであり、特に近代的な知識・技術などを広めることである。

一方、歴史文物の保存展示に対して、当該期に提唱する保存は、中国における従来の保存方式とは違った。中国では、金石学が流行しているために、古物に関する収集と保存に対して十分な経験があ

るが、近代的博物館の保存機能と展示機能に対して了解が欠如していた。中国における従来の保存方式は、文物が個人の私有財産として、文物の持ち主が文物を保存したことである。しかし、博物館における文物は、保存機能と展示機能である2つの方面を含める。博物館における文物は、博物館の実物資料として一般公開の必要がある。

かかる状況にあつて、近代的博物館に関する知識を持っている人材は、近代的博物館の設置にとって必要である。それゆえ、留学した経験を持っていた人は、注目を受けた。

しかし、博物館を実際に運営する経験が不足するために、当該期における博物館の展示機能は、主に西洋と日本の博物館及び博覧会を模倣することであった。

なお、中華民国が1912年に建国するとともに、中国における博物館は、勢いよく発展していた。その原因は、博物館が教育の場所として当該期の先進思想を宣伝する義務を負担している。中華民国は、中国で初めての共和制国家として、民主の思想が提唱されるはずである。博物館は、教育と思想を普及する場所であり、重要な位置を占めている。

博物館が多量に創建されるに従い、博物館学に関する理論研究は、目覚ましい進歩を遂げた。中国博物館学界は、当該期における博物館学の理論に大きな関心を持っている。

南通博物苑を創建した張謇は、中国博物館学に関する研究の開山とされている。張の博物館学思想も、中国博物館学の理論研究に大きな影響を与えた。張の博物館学思想により、博物館は教育機関として、学校のように教育機能を担っている。さらに、博物館の教育機能は、張の博物館学思想の中で、第一の位置にあっている。この観点は、当該期における中国の社会状況に順応することである。

民国時期になって、博物館を教育機関とする観念は、猶々深く入り込んでいた。博物館の教育機能は、張の博物館学思想を継承した、教育に対する大きな関心を持っていた蔡元培・魯迅・嚴智怡などの新文化運動の推進者らによって注目された。蔡と魯迅は、美学と美的教育など情操を豊かにする教育を重視するために、美術館などに注目していた。嚴は、一般民衆に博物館を普及するために、博物館に関する刊行物に注目していた。当該期には、中国における博物館学理論についての研究が成果を獲得した。

一方、この時期の日本は、明治から大正の時代である。日本の博物館学界では、様々な論文が刊行された。その代表的な人物は、黒板勝美・棚橋源太郎・谷津直秀・川村多実二・團伊能・三好学・後藤守一などがいる。

黒板勝美の博物館論については、青木豊が2008年に「黒板勝美博

士の博物館学思想」(99)で詳しく論述した。

谷津直秀は、動物学者として、博物館における動物標本などに関する展示論と教育論を提唱した。同じ動物に対して大きな関心を持っていた川村多実二は、動物園・水族館に関する博物館論を言及した。

さらに、この時期には、棚橋源太郎が上梓した『眼に訴へる教育機関』(100)・團伊能が著した『欧米美術館施設調査報告』(101)・後藤守一が出版した『欧米博物館の施設』(102)など著論は、後の中国博物館学に大きな影響を与えた。この時期は、日本博物館学が中国博物館学へ与えた影響の流行の時期であったと筆者が主張する。

一方、当該期には、中国博物館学界で西洋の影響を受けた人物及び留学した経験がなかった人物もいる。彼らも自らの博物館論を提出したが、本章は主に日本の博物館学が中国へ与えた影響を論及する目的であり、ここで論考することは省略したい。

## 註

- (1)「台湾事件」とは、日本では「琉球漂流民殺害事件」もしくは「宮古島民台湾遭難事件」と記述されている。中国では「台湾生番殺琉球人民案」と記述されている。1871年に、琉球王国の国民が台湾近海で遭難し、台湾東南海岸に漂着した。しかし、この54名の琉球国民は、台湾原住民によって斬首され殺害され、事件となったのである。
- (2)「台湾出兵」とは、日本政府は琉球王国が自国を主張し、「台湾事件」によって、清政府に嚴重に抗議した。しかし、清政府は、琉球国民を殺害したのは台湾原住民であり、清政府は統治できないと返事した。そのために、1874年に日本は、台湾出兵を行った。また、「琉球漂流民殺害事件」から「台湾出兵」に至るまでの一連の出来事を「牡丹社事件」と呼ぶこともある。
- (3)「北京專約」とは、「台湾出兵」の結局として締結した条款であった。日本では、「日清両国互換条款」もしくは「互換憑單」と称し、中国では「台事專条」「中日北京專条」「台湾事件專約」「台事北京專約」と称した。
- (4)李明勳・尤世瑋主編 2017『張謇日記』上海辞書出版社
- (5)庄安正 2001「張謇甲戌年日記（節録）箋注」『南通工学院学報』(02)
- (6)張謇 1924『張季子詩錄（十卷）』民國十三年文藝雜誌社鉛印本 pp.10-11
- (7)「壬午軍乱」は、1882年7月23日に朝鮮の首府漢城で閔氏政権と日本を反対する運動であった。かかる状況にあって、日本は

朝鮮に出兵し、それに対して、清は朝鮮の宗主国として朝鮮に出兵した。

- (8)李明勳・尤世瑋主編 2012「代吳長慶擬致張樹声函」『張謇全集・第2巻』上海辞書出版社 p.14
- (9)「甲申政変」は、1884年12月4日に朝鮮で起こったクーデターであった。
- (10)李明勳・尤世瑋主編 2012「致吳兆有函」『張謇全集・第2巻』上海辞書出版社 p.25
- (11)李明勳・尤世瑋主編 2012「致韓参判金允植函」『張謇全集・第2巻』上海辞書出版社 p.26
- (12)李明勳・尤世瑋主編 2012「呈翰林院掌院代奏劾大学士李鴻章」『張謇全集・第1巻』上海辞書出版社 p.14
- (13)李明勳・尤世瑋主編 2012「代鄂督条陳立国自強疏」『張謇全集・第1巻』上海辞書出版社
- (14)註(4)と同じ
- (15)会試は、科挙制度の一環として、中央で行われる試験である。普通に郷試の翌年に礼部は、举行された。会試の合格者は、貢士と称する。なお、会試の後には、最終の殿試がある。
- (16)海門蚕業は、張謇で設立した実業であり、蚕業をやる場所である。
- (17)画紡廠は、張謇で設立した実業であり、紡織をやる場所である。
- (18)鐘叔河主編 2016『張謇癸卯東遊日記・凌文淵鑰匙東遊日記』『走向世界叢書』岳麓書社
- (19)張謇研究中心 1994「上南皮相国請京師建設帝国博覧館議」『張謇全集・第4巻事業』江蘇古籍出版社 pp.272-277
- (20)張謇研究中心 1994「上学部請設博覧館議」『張謇全集・第4巻事業』江蘇古籍出版社 p.272
- (21)張謇研究中心 1994「通州博物館敬征通属先輩詩文集書画及所藏金石古器啓」『張謇全集・第4巻事業』江蘇古籍出版社 pp.278-279
- (22)張謇研究中心 1994「国家博物院図書館規劃条議」『張謇全集・第4巻事業』江蘇古籍出版社 pp.280-282
- (23)天民 1917「学校博物館之設施」『教育雜誌』九卷1号
- (24)宋伯胤・李淑萍選註 2000『博物館歴史文選』陝西人民出版社 pp.136-137
- (25)中国同盟会は、1905年8月20日に孫文が東京で結成した政治結社であり、清朝を打倒することを目指す革命団体である。
- (26)南社は、1909年に中国における東南の文人が蘇州で結成された文学結社であり、清朝を反対する革命的感情を広めるために

『南社叢刻』と称する刊行物を刊行した。代表人物は、陳去病・高旭・柳詠子などであった。しかし、南社は、旧詩文を推奨して、五・四運動期の新文化運動を反対したために、1923年に終えた。

- (27) 黄花崗起義は、1911年に広州で黄興が指導する反清武装蜂起であった。しかし、この武装蜂起は失敗と終わった。
- (28) 護国戦争は、1915年から1916年まで中国で発生した内戦であり、袁世凱の帝政を討伐することを目指す戦争であった。
- (29) 白話文は、難しい文語文に対して理解しやすい口語文である。
- (30) 中国従来からの文章など文語文は、標點を使わなかった。それゆえに、理解しにくい。かかる状況にあって、新文化運動には、標點を使うことを提唱した。新式標點は、句読点などである。
- (31) 陳為 2011「新文化運動與博物館的關係—兼述新文化運動影響下中国博物館事業的初步發展—」『故宮博物院院刊』(05)
- (32) 宋伯胤 1984「魯迅與博物館事業」『博物館研究』(1)
- (33) 劉欣 2019「展覽會:魯迅的美術教育實踐」『魯迅研究月刊』(01)pp. 59-61
- (34) 周樹人 1913年「擬播布美術意見書」『教育部編纂處月刊』第一卷第一冊
- (35) 天津博物院編 1917『天津博物院陳列品說明書(天然部)』天津博物館藏
- (36) 天津博物院編 1917『天津博物院陳列品說明書(歷史部)』天津博物館藏
- (37) 天津博物院 1918「天津博物院成立展覽會臨時日刊」天津博物館藏
- (38) 天津博物院 1925『兒童動植物圖譜』
- (39) 嚴智怡 1931「發刊辭」『河北第一博物院半月刊』9月25日1期1版
- (40) 侯曉慧 2018「嚴智怡的博物館科普教育思想與實踐—從1919年天津博物院的“觀鯨會”談起—」『博物院』(03)pp.27-34
- (41) 周佳榮 1999「從清末中日關係論蔡元培思想的發展」『新民與復興—近代中國思想論—』香港教育圖書公司 p.255
- (42) 「南通博物苑大事記 1905-1915」  
<http://www.ntmuseum.com/column6/col4/hm/94.html>
- (43) 註(4)と同じ
- (44) 孫渠 1985「南通博物苑回憶錄」『東南文化』(00)
- (45) 孫渠 1982「木村忠治郎與南通博物苑」『科普作品選』南通市科普創作協會編
- (46) 木村忠治郎 1901『小學教授法要義』同文館

- (47)費范九編 2003『南通地方自治十九年之成績』張謇研究中心・南通博物苑重印 pp.177-181
- (48)1906「各省新聞・泰安開設博物館」北洋官報第 1050 期第 8 版
- (49)1906「本省新聞・泰安開設博物館」山東官報第 61 期第 5 版
- (50)1907「教育:各省教育滙誌」『東方雜誌』四卷 7 号 p. 165
- (51)葛延瑛・吳元録 1929『重修泰安縣志』泰安縣志局
- (52)泰安市人民政府のホームページ [http://www.taian.gov.cn/art/2011/2/23/art\\_50722\\_4060715.html](http://www.taian.gov.cn/art/2011/2/23/art_50722_4060715.html)
- (53)[http://blog.sina.com.cn/s/blog\\_4c3e6ba40102xn1o.html](http://blog.sina.com.cn/s/blog_4c3e6ba40102xn1o.html)
- (54)蔡元培 1912「對於新教育之意見」民立報 2 月 8 日
- (55)美育は、美術・音楽などを通じて情操を豊かにし、人間性の向上を図る教育である。美的教育である。
- (56)国子監は、隋代から清代まで中国における最高学府である。
- (57)鐘国文 2015「細説国家博物館館址変遷」『文史天地』(02)pp.63
- (58)端門と午門は、紫禁城の建物である。
- (59)明清檔案は、国子監の中で収集保存する明代と清代の公文書である。
- (60)李自華 2015「淪陷時期日偽在北平發動“献銅”運動概述」『北京党史』(03)pp. 35-39
- (61)1926「発刊辞」『国立歴史博物館叢刊』第 1 年第 1 冊
- (62)1926「本館開館記事」『国立歴史博物館叢刊』第 1 年第 2 冊
- (63)1926「考古学通論」『国立歴史博物館叢刊』第 1 年第 1 冊
- (64)<https://www.tjbwg.com/cn/NewsInfo.aspx?Id=4751>
- (65)嚴智怡編 1921『巴拿馬賽會直隸觀會叢編』（鉛印本）
- (66)宋伯胤 1987「究心民族文物第一人—嚴智怡—」『博物館研究』第 1 期
- (67)嚴智怡 1931「本院沿革要略」『河北第一博物院半月刊』第 1 期 p.5・第 2 期 p.3・第 3 期 p.3・第 4 期 p.3
- (68)巡按使は、袁世凱で設立した役職である。今中国の省長、日本の知事のような役職である。
- (69)註(35)と同じ
- (70)註(36)と同じ
- (71)1918「本埠瑣聞・開展覽会」大公報天津版 1 月 22 日 07 版
- (72)1918「天津博物院成立展覽会特別廣告」大公報天津版 5 月 25 日 03 版
- 1918「天津博物院成立展覽会特別廣告」大公報天津版 5 月 26 日 03 版
- (73)1918「博物院開会誌盛」大公報天津版 6 月 2 日 10 版
- (74)1918「人為万物之靈」大公報天津版 6 月 4 日 10 版
- (75)香 1918「六月二日遊覽商品列所及博物院記事」大公報天津版 6

月 4 日 11 版

- (76)1918「人為万物之靈（続）」大公報天津版 6 月 5 日 10 版
- (77)1918「展覧会之奇観」大公報天津版 6 月 6 日 10 版
- (78)1918「古楽之一線伝」大公報天津版 6 月 17 日 10 版
- (79)1918「演奏古楽之确期」大公報天津版 6 月 19 日 10 版
- (80)1918「請看大幻術」大公報天津版 6 月 20 日 10 版
- (81)1918「博物院之崑弋戲」大公報天津版 6 月 26 日 10 版
- (82)宋柯欣 2018「天津博物館:从官營陳列所到近代博物館」『中国文物報』6 月 12 日 006 版
- (83)パノラマ展示とは、普通に動物園で使う展示方法である。具体的には、檻や柵などの遮蔽物を使用しない、直接に生物を觀賞出来るようにした展示方法である。無柵放養式展示とも称される。
- (84)外朝と内廷は、紫禁城における建物が構成と配置によって、外朝と内廷に分ける。外朝は皇帝が公務をやる場所であり、内廷は皇室が生活の場所であった。
- (85)北京政変は 1924 年 10 月 23 日に馮玉祥が北京で起こされたクーデターである。
- (86)牟潤孫 1980「从通鑿胡注表微論援庵先師的史学」新晚報 11 月 9 日 10 版
- (87)『四庫全書』は、清朝高宗の乾隆帝の弘曆が命令し、紀昀が編纂した中国における最大数量の漢籍叢書である。“四庫”と称する原因は、全般著書が経・史・子・集である四部を分類するからである。『四庫全書』は作成した後、文淵閣（北京・紫禁城）・文源閣（北京・円明園）・文津閣（熱河・避暑山莊）・文溯閣（瀋陽・盛京宮殿）・文匯閣（揚州・大觀堂）・文宗閣（鎮江・金山寺）・文瀾閣（杭州・聖因寺）である七つの蔵書地で収蔵した。しかし、戦争のために、現存する『四庫全書』は、文淵閣本・文津閣本・文溯閣本・文瀾閣本のみである。
- (88)沈兼士・沈士遠・単不庵・馬裕藻・朱希祖・馬衡・錢玄同・周作人 1922「為清室盜売四庫全書敬告国人速起交涉啓」『北京大学日刊』1005 期 p.3
- (89)註(31)と同じ pp.50-51
- (90)「天地君親師」は、儒教が提唱する最も重要な精神的信仰である。すなわち、天・地・君主・両親・先生である。
- (91)徐婉玲 2013「博物館與国家認同之建構—以故宮博物院開院為中心—」『故宮學刊』(02)p.404
- (92)「南書房行走」は、清朝の職務であった。普通には、官職を持っている翰林を担任する。皇帝の秘書である。
- (93)肖伊緋 2015「王国維與故宮（下）」『紫禁城』(02)p.12



- (94)段勇 2004「古物陳列所の興衰及其歴史地位述評」『故宮博物院院刊』(05)p.18
- (95)吳景洲 2000『故宮五年記』上海書店出版社
- (96)註(19)と同じ
- (97)註(22)と同じ
- (98)康有為 1913「保存中国名跡古器説」『不忍』第3冊
- (99)青木豊 2008「黑板勝美博士の博物館学思想」『國學院大學博物館学紀要』第32輯
- (100)棚橋源太郎 1930『眼に訴へる教育機関』賓文館
- (101)團伊能 1921『欧米美術館施設調査報告』帝室博物館
- (102)後藤守一 1931『欧米博物館の施設』帝国博物館

## 第六章 日本の博物館学の影響と消長 — 中国博物館学の変遷 —

### 第一節 日本の博物館学の影響と消長

1930年代には、中国が日本の博物館学を模倣する最盛期になるが、残念ながら日中戦争の勃発により、中国の博物館研究者は日本を模範対象から断念せざるを得ない状況となった。

清朝末期の日本留学の潮流により、中国における有識者は日本の近代化を了解し、日本に学び始めた。中華民国が成立した後で、日本に留学し、近代的な知識を習得する潮流は、さらに流行した。中国の博物館学者は、近代博物館学の理念を輸入し、中国博物館学は発展し始めた。また、中国の博物館学者は、博物館学を構築する時に、親切な日本人からの助力を受けることは事実である。そのために、中国の博物館学者は、日本に対して好感を抱いていた。

しかし、日清戦争と違い、日中戦争は、日本軍が中国本土に侵入し、中国本土の東北・華北・華東などを占領した。中国人にとって、これは大きな衝撃であった。なお、戦争のために、中国における博物館の蔵品などは影響を受け、博物館学の発展も損害を受けた。かかる状況にあって、中国の博物館学者は理性的に日本の博物館学の先進性を承認したが、感情面で日本軍が中国にもたらした衝撃は容赦できなかった。そのために、日中戦争が勃発した後、中国博物館学界は、日本の博物館学に対する模倣の熱情が弱くなった。

一方、中国博物館学界は、中国博物館学の発展の機会を得るため、西洋の博物館学を直接に学び始めて、中国自身に相応する博物館学を探索した。

#### 1、費畊雨・費鴻年による『博物館学概論』

この時期には、日本の博物館学を模倣する代表的な博物館理論は、費畊雨と費鴻年が著した『博物館学概論』<sup>(1)</sup>である。

前述の第三章の第四節で述べた通り、費鴻年が『博物館学概論』の序言の中で、『博物館学概論』の由来を下記のように記録した。

博物館在社会教育上占一極重要的地位、故最近数年以来、我国各都市、漸有此種機関的設置、亦為一種可喜的現象。惟主其事者往往缺乏博物館的常識、以致有博物館之名、而不能舉博物館之实的、比比皆然。家兄畊雨有<sub>□</sub>於此、曾於研究昆虫学之余、對於博物館的事項、無不悉心研究、自行創作、如關於動物的剥製、模型的製造以及昆虫生態的陳列等、均曾親自製造或指導、而於西湖博覽会的浙江昆虫局出品中、見其若干的心血、惜以肺疾時作、不能多所發揮。去年以日人棚橋氏所著『訴於眼的教育

機関』為藍本、編博物館学一書、亦因病稿未全竣、余覺此種書籍的必要、而又覺家兄所編此書未竟全功為可惜、遂補編若干章而付梓、如能有益於教育界、則此書之作、就不失其意義了。

（社会教育には、博物館が極めて重要な地位を占める。そのために、最近の数年間に、中国における各都市に博物館のような機関が設置されたことは、喜ばしい現象である。しかし、博物館における主事は、往々に博物館の常識に欠ける点がある。その結果は、多数の博物館は名ばかりであって実質が伴わない状況にある。かかる状況にあつて、自分の兄である畊雨は、昆虫学を研究する傍らで博物館に関する研究を行つて、実物資料を作成した。例えば、動物標本の剥製であり、模型の製造及び昆虫などの展示である。兄は、博物館に関する実務に直々に参加し、或いは指導していた。また、西湖博覧会では、兄の多数の製作資料が浙江昆虫局の出品資料の中にあつた。しかし、残念ながら、兄は肺疾患を持っているために、病気の発作が何度も起こつて博物館での実践的業務は發揮し得なかつた。去年、兄は日本人の棚橋源太郎が著した『眼に訴へる教育機関』を底本として、博物館学に関する本を著した。しかし、病気のために刊行には至らなかつた。私は、この種の著書が必要であると思つており、未刊行を惜しいと思つていた。私は、兄の意思を継ぎ本書の編輯を續けて出版に至つた。当該書が教育界に有益であれば、意味を失わないと思う。 筆者訳）

上記の文によつて、費鴻年が『博物館学概論』は、棚橋源太郎の『眼に訴へる教育機関』<sup>(2)</sup>を参考としことを明確に述べている。

近代的博物館は、中国と日本にとって本国に直接に誕生するものではない、西洋から伝えた舶来品である。そのために、日中両国が近代的博物館意識と博物館学に関する研究は、西洋より遅れているという現実がある。『明治期博物館学基本文献集成』<sup>(3)</sup>によつて、日本は、明治時代前期から、博物館学の論考が検討され始めた。それに対して、中国での開始は民国前期からで、博物館学の開始は日本より遅れた事実を有する。日本における博物館学の著述の中でも、棚橋源太郎が著した『眼に訴へる教育機関』は、中国の博物館学の出現期に大きな影響を齎した。中国で初めての博物館学に関する単行本である『博物館学概論』は、『眼に訴へる教育機関』をもとにして、中国博物館学を考察・検討したものであつた。つまり、中国の博物館学は、『眼に訴へる教育機関』の影響を直接的に受けて、博物館学を系統的に研究し始めたと言つても過言ではないのである。

しかし、日中両国の博物館学は別路を選んで発展する。日本における博物館学は『眼に訴へる教育機関』を基石として順調に展開しているが、中国における博物館学は最初に日本に学び初めて、そし

て西洋に学んで、それからソビエト社会主義共和国連邦に学んで、最後に中国博物館学自身に適合の進路を諦めずに探し出した。この差異が生じる原因は、博物館学自身の展開と客観情勢の変化である。

『眼に訴へる教育機関』は、1930年（昭和5）に寶文館より棚橋源太郎が刊行した、博物館学についての単行本である。

緒論を除いて、全16章から構成されている。先ず、第一章から第九章まで博物館学理論を検討し、眼に訴へる教育機関発達の歴史、博物館の種類及び職能に続き、地方博物館、郷土博物館、教育博物館、学校博物館、児童博物館、戸外博物館、動植物園水族館など海外の事例をもとに種々述べる。そして、第十章から第十六章まで博物館の実践的技術を検討し、物品の蒐集製作整理保存、博物館の陳列、博物館の説明案内、博物館と学校教育、研究機関としての博物館、博物館の宣傳、博物館の建築という内容を備えている。当該書は、日本で博物館学を初めて体系的に論じた記念すべき単行著作である(4)。

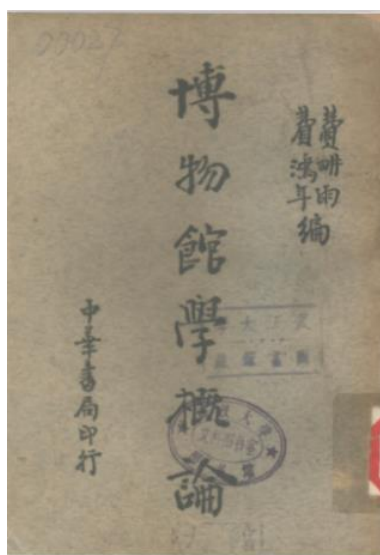


図 6-1 『博物館学概論』



図 6-2 『眼に訴へる教育機関』

日本における“博物館学の父”と尊称される棚橋源太郎は、『眼に訴へる教育機関』を上梓するまでに博物館学についての論文を多数刊行している。しかし、それらは博物館機能に関する論文が大半で博物館学を体系的に論じたものはなかった。『眼に訴へる教育機関』は、日本で初めて日本博物館学の全貌を検討する単行本として公刊された意義は、博物館学の上で極めて大きいと評価できよう。

教育学者であった棚橋源太郎は、理科教育を基盤に教育全般に強い関心を抱いていた。そのため、棚橋の博物館学思想である“棚橋学”の中で、博物館機能としての教育は重要な位置を占めているのである。

一方、費兄弟による『博物館学概論』は、1936に出版された博物館学についての概論的な単行本である。兄の昆虫学者である費畊雨と弟の海洋生物学者である費鴻年は、博物館学の専攻者ではないが、中国の博物館学に対して大きな関心を持っていた。

また、費兄弟の『博物館学概論』に対する具体的な分析は、本章の第二節の「中国博物館学の著書」の中で詳しく論述することとする。本節では、以下棚橋の『眼に訴へる教育機関』と費兄弟の『博物館学概論』の目次を比較し、書籍の構成を検証する。

筆者は、『眼に訴へる教育機関』と『博物館学概論』の内容によって、「基礎理論」と「応用理論」に区分する。「基礎理論」は、『眼に訴へる教育機関』では第1章～9章までの各章で展開されている。これに対して、『博物館学概論』は、第2章～9章までである。「応用理論」は、『眼に訴へる教育機関』は第10章～16章までであるのに対し、『博物館学概論』では第10章～13章までと3章少ないことが特徴である。

さらに、明確に対比するために、筆者は各章の内容によって「基礎理論」と「応用理論」をさらに細分した。

「基礎理論」では、「緒論」・「博物館の歴史」・「博物館の種類及び職能」・「具体的な分類」である博物館の基礎的分類が含まれている。「応用理論」では、「収集」・「展示」・「社会との連携」・「建物」である博物館機能に関する分類が含まれている。

筆者は、「基礎理論」と「応用理論」を称する理由は下記のように述べる。

「基礎理論」は、博物館学に関する基礎的理論であり、その内容は博物館の概要・目的・博物館史・分類などの内容を含める。それに対して、「応用理論」は、博物館の活動と運営に関する理論であり、その内容は博物館の具体的な活動・経営・管理などの内容を含める。

なお、『眼に訴へる教育機関』と『博物館学概論』の目次の比較は、下記の表6-1の如くである<sup>(5)</sup>。

表 6-1 『眼に訴へる教育機関』と『博物館学概論』の目次比較①

	『眼に訴へる教育機関』	『博物館学概論』
	叙言	序
基礎理論	緒論 <b>緒論</b>	第一章 緒論 一 <u>博物館與社会教育</u> ・二 <u>博物館與学校教育</u> ・三 <u>博物館與専門研究</u> ・四 <u>外国博物館の現状</u> ・五 <u>中国博物館の缺乏</u> ・六 <u>博物館與動植物園</u> ・七 <u>動植物園の新傾向</u>
	博物館の歴史 <b>第一章 眼に訴へる教育機関發達の歴史</b> <b>世界最初の博物館・羅馬時代の家庭博物館・欧羅巴中世代の博物館・文芸復興時代の博物館・科学の進歩と自然物の蒐集・MUSEUM と云ふ語の使用・昔の博物館の陳列品・早期の博物館・その後に来た古い博物館・専門の博物館・見世物としての博物館・蒐集品の散逸・非科学的な舊博物館・舊博物館の陳列法・近世博物館・博物館陳列法の改善・博物館建築の革新・本邦博物館の沿革</b>	第二章 博物館發達史略  一 最古的博物館・二 羅馬的博物館・三 中世紀博物館・四 文芸復興時代博物館・五 科学發達與自然物・六 早期的博物館・七 十七八世紀的博物館・八 古代舊式博物館・九 舊博物館的陳列法・一〇 近世博物館・一一 博物館陳列法的改良・一二 博物館建築的改良・一三 <u>中国博物館的沿革</u>
	博物館の種類及び機能 <b>第二章 博物館の種類及び機能</b> <b>博物館の種類</b> ・内容上から見た博物館の種類・關係區域に依る博物館の種類・維持の方法に依る博物館の種類・ <b>博物館の定義</b> ・美術・歴史・科学・ <b>博物館の種類</b> 及び <b>その配置</b> ・本邦に建設すべき博物館の種類及び配置案・中央博物館・地方博物館・博物館建設上の注意・ <b>博物館の機能</b> ・博物館と社会教育・博物館と学校教育・博物館と学芸の研究・中央博物館と地方博物館	第三章 博物館の種類及効能  一 <u>博物館的分化</u> 二 博物館の種類 三 博物館的定義 四 博物館的配置 五 博物館的効能

上記の内容は、「基礎理論」の「緒論」・「博物館の歴史」・「博物館の種類及び機能」に関する比較である。

表 6-1 『眼に訴へる教育機関』と『博物館学概論』の目次比較②

		『眼に訴へる教育機関』	『博物館学概論』
基礎理論	具体的な分類	<b>第三章 地方博物館</b> <b>英米国の地方博物館普及運動</b> <b>地方博物館建設の必要に関するマックマレー氏の意見</b> 本邦将来の地方博物館施設・商品陳列所物産館改造案 <b>地方博物館の建設維持</b> 英米両国地方博物館の建設維持 <b>地方博物館維持に関するマ氏の意見</b> 地方博物館の建設維持に関する其他の問題 <b>独国地方博物館の一例</b> アルトナ博物館 アルトナ博物館の任務 図書館漁業室 水族館 地質室 民俗室（文明史室） 博物室 <b>英国地方博物館の一例</b> ベルファスト市立博物館 諸室の配置と設備 陳列品の内容	第四章 地方博物館  一 地方博物館普及運動 二 麥克馬來氏の意見 三 建設及維持費 四 德国地方博物館一例 五 英国地方博物館一例 六 郷土博物館
		<b>第四章 郷土博物館</b> 本邦近時の郷土博物館熱 郷土博物館とは何んなものか 郷土博物館施設に関する諸家の意見 柳田氏の郷土博物館に関する意見 郷土博物館の意義 郷土博物館として必要な設備 学校内の郷土室問題 独国の小郷土博物館	

上記の内容は、「基礎理論」の「具体的な分類」に関する比較である。具体的には、地方博物館と郷土博物館に関する内容である。

表 6-1 『眼に訴へる教育機関』と『博物館学概論』の目次比較③

		『眼に訴へる教育機関』	『博物館学概論』
基礎理論	具体的な分類	<b>第五章 教育博物館</b> 教育博物館に対する誤解・所謂教育博物館の本質・独乙式と米國式の教育博物館・教育博物館に関する誤解の原因・内外国教育博物館の施設・ブレスラウ市立教育博物館・ミュンヘンの教育博物館・和蘭教育博物館・サーミント教育博物館・本邦の教育博物館・本邦将来の教育博物館施設	第五章 教育博物館 一 教育博物館的意義 二 德國式與美國式 三 歐洲主要的教育博物館 四 其他的教育博物館
		<b>第六章 学校博物館</b> 学校博物館の意義・初等教育程度の学校博物館・本邦小学校の学校博物館・学校博物館に対する反対意見・ヒューズ嬢の学校博物館に関する意見・物品の蒐集整理・労作的動的の博物館・蒐集品の処理・学校博物館の管理・教室内備附けの水族器・陸族器及昆虫飼育函・水陸族器・植物の鉢植・学校園・技術教育用の蒐集品・児童環境の美化・中等学校に於ける学校博物館・専門学校及び大学博物館・専門学校大学博物館の必要・美術専門学校の博物館・シカゴ美術研究所・ロードアイランド美術館・ペンシルバニヤ美術院・ペンシルバニヤ博物館及工芸学校・フォッグ美術館・英国大学の博物館・東京美術学校の陳列館・各種専門学校の博物館・農科大学の農業博物館・大学博物館に関さるミーヤ卿の意見・大学博物館に関さるベーカー氏の意見・大学博物館の教育価値・大学博物館の特色・大学博物館と研究・イリノイス大学博物館の設備・ハツブス博士とミシガン大学博物館・本邦大学専門学校博物館・	第六章 学校博物館 一 学校博物館的意義 二 初等教育博物館 三 教室内的水族器 四 動物飼育箱及昆虫箱 五 植物的盆栽及学校園 六 中學的博物館 七 大學的博物館 八 大學博物館的一例 九 美術専門学校博物館

上記の内容は、「基礎理論」の「具体的な分類」に関する比較で



ある。具体的には、教育博物館と学校博物館に関する内容である。

表 6-1 『眼に訴へる教育機関』と『博物館学概論』の目次比較④

		『眼に訴へる教育機関』	『博物館学概論』
基礎理論	具体的な分類	<b>第七章 児童博物館</b> <b>児童博物館の意義・児童の教育と博物館・</b> 児童博物館の発達・ブルックリン <b>児童博物館</b> ・ブルックリン児童博物館の蒐集品・講演室・館外貸出及図書の閲覧・職員及各種の教育事業・ボストン児童博物館・倉橋教授のボストン児童博物館観・米国のその他の児童博物館・児童博物館の運用・ミュージアムアソーズとミュージアムゲーム・児童の学級及倶楽部児童博物館と少女少女団・ <b>美術館の児童室</b> ・クリーブランド美術館児童室・児童陳列品の蒐集陳列・児童の学習指導法・ <b>英国の児童博物館</b> ・結論	第七章 児童博物館 一 児童博物館的意義 二 児童教育與博物館 三 児童博物館的一例 四 <u>児童博物館的<u>事業</u></u> 五 美術館的児童室 六 英国的児童博物館
		<b>第八章 戸外博物館</b> <b>戸外博物館の発達・スカンセンの戸外博物館・和蘭アーヘンの戸外博物館・イージングトンの戸外博物館・米国の戸外博物館運動・戸外博物館</b> に対する新旧両思想・自然科学戸外博物館・歴史の戸外博物館・美術の戸外博物館・戸外博物館施設の方針・紐育州立博物館の路傍展観・本邦の戸外博物館施設・特別保護建造物及国宝・ <b>史跡名勝天然記念物保存事業</b> ・海外の史跡天然記念物保存事業・史跡名勝天然記念物の教育上利用の方法・ <b>路傍博物館の発達</b> ・米国最初の路傍博物館・パリセイヅ国立公園路傍博物館施設・練習の小路・検査小路・路傍博物館の有形設備・其の他の路傍博物館・米国博物館協会経営の路傍博物館・路傍博物館の建物及内部の設備	第八章 室外博物館 一 室外博物館的由来 二 瑞典的室外博物館 三 和蘭的室外博物館 四 英国的室外博物館 五 美国的室外博物館 六 <u>室外博物館的<u>意義</u></u> 七 史跡保存事業 八 路傍博物館

上記の内容は、「基礎理論」の「具体的な分類」に関する比較である。具体的には、児童博物館と野外博物館に関する内容である。

表 6-1 『眼に訴へる教育機関』と『博物館学概論』の目次比較⑤

		『眼に訴へる教育機関』	『博物館学概論』
基礎理論	具体的な分類	<b>第九章 動植物園水族館</b> <b>動物園</b> 世界著名の動物園 維持の方法 動物園の構成分子 飼育動物の蒐集 動物の飼育陳列方法 動物の保健 動物園の教育事業 研究の機関としての動物園 日本の動物園 <b>植物園</b> 海外の植物園 ダーレム植物園 キュー植物園 ブルックリンの植物園 本邦の植物園 <b>水族館</b> 世界の水族館 アントソープ水族館 伯林の水族館 ロンドンの水族館 紐育の水族館 本邦の水族館 堺市立水族館 魚津町立水族館 箱崎水族館 東北帝大浅虫臨海実験所附属水族館 大谷天然水族館	第九章 動植物園與水族館  (A)動物園 一 世界著名的動物園 二 維持的方法 三 動物園的設備 四 飼育動物の収集 五 動物飼育及陳列方法 六 動物園的教育事業 七 動物園與動物保護  (B)植物園 一 各国的植物園 二 大能植物園 三 丘植物園 四 伯勞克林植物園  (C)水族館 一 世界的水族館 二 安脱外丕水族館 三 伯林的水族館 四 倫敦的水族館 五 紐約的水族館

上記の内容は、「基礎理論」の「具体的な分類」に関する比較である。具体的には、動植物園水族館に関する内容である。

表 6-1 『眼に訴へる教育機関』と『博物館学概論』の目次比較⑥

		『眼に訴へる教育機関』	『博物館学概論』
応用理論	収集	<p><b>第十章 物品の蒐集製作整理保存</b></p> <p><b>蒐集の方法</b></p> <p>蒐集に関するマックマレー氏の意見</p> <p><b>素人蒐集家の危険</b></p> <p><b>貴重品散逸の危険</b></p> <p>国宝的陳列品の配置</p> <p><b>発掘歴史品の処分</b></p> <p>古美術品の保管配置</p> <p>将来の解決案</p> <p><b>蒐集品の整理</b></p> <p>物品の受付</p> <p>物品目録及目録番号</p> <p>蒐集品の目録番号</p> <p>目録番号の付け方</p> <p><b>蒐集品目録</b></p> <p><b>補助的記録</b></p> <p>処分品記録</p> <p><b>蒐集品の製作加工</b></p> <p>海外博物館の製作場</p> <p><b>博物館従業員養成の必要</b></p> <p><b>蒐集品の修理</b></p> <p>伯林の国立博物館化学実験室</p> <p>古美術歴史品の修理に関する秋山氏の意見</p> <p>古建築物陳列品の修理に関する石川博士の意見</p> <p>誤れる修理法の一例</p>	<p>第十章 物品的収集與保存</p> <p>一 蒐集的方法</p> <p>二 門外漢蒐集家の弊病</p> <p>三 古董的散逸</p> <p>四 考古品的処分與保管</p> <p>五 蒐集品の整理</p> <p>六 蒐集品の編目</p> <p>七 補記的記録</p> <p>八 蒐集品の加工製造</p> <p>九 博物館員養成的必要</p> <p>一〇 蒐集品の修理</p>

上記の内容は、「応用理論」の「収集」に関する比較である。

表 6-1 『眼に訴へる教育機関』と『博物館学概論』の目次比較⑦

		『眼に訴へる教育機関』	『博物館学概論』
応用理論	展示	<b>第十一章 博物館の陳列</b> <b>博物館陳列法の改善・</b> 緒論の陳列 機械の陳列に動力応用 <b>組合せ陳列</b> 時代陳列室 ジオラマの簡易製作法 <b>工芸品の陳列方法</b> <b>組合せ陳列と系統陳列</b> <b>陳列の場所に関する諸問題</b> <b>陳列ケースに関する諸問題</b> <b>陳列ケースの様式・陳列ケースの大きさ・陳列ケースの構造・衝立</b> 陳列方法上の諸問題・一般に陥り易い缺点 <b>ケースの配置・物品の性質と陳列の様式・物品の排列</b> 陳列ケース内の陳列 <b>背景用の用布</b> <b>假りの背景及揚げ底</b> 棚の吊り方 棚を用ひぬ立面陳列 平面陳列 <b>物品陳列用の臺</b> ケース外の陳列 壁面陳列	第十一章 博物館的陳列  一 陳列法的變遷 二 配合陳列法 三 配合陳列與系統陳列 四 工芸品陳列法 五 陳列室的配置 六 陳列櫃及其式樣 七 陳列櫃的構造 八 陳列櫃的配置 九 物品性質與陳列式樣 一〇 物品的排列 一一 陳列的背景及階段 一二 說明箋的問題
		<b>第十二章 博物館の説明案内</b> 説明札の意義・説明札に関するコールマン氏の意見・説明札に関する諸問題・説明札の大きさ・説明札の用紙・ダビソン氏の意見・説明札の文字・説明の文句・説明札の種類・説明札の配置・説明札の配置に関するダビソン氏の意見・美術館の説明札に関するギルマン氏の意見・本邦の現状に適する美術館説明札・博物館の説明者・博物館説明制度の由来	

上記の内容は、「応用理論」の「展示」に関する比較である。

表 6-1 『眼に訴へる教育機関』と『博物館学概論』の目次比較⑧

		『眼に訴へる教育機関』	『博物館学概論』
応用理論の連携	社会と	<b>第十三章 博物館と学校教育</b> <b>博物館と学校教育とに関する米国教育界の輿論</b> <b>歐洲に於ける学校教育上博物館利用の状況</b> 合衆国諸学校の博物館利用 <b>費府商業博物館の活動</b> <b>クリーブランド市博物館の教育事業</b> 甲冑室見学指導案 <b>紐育博物学博物館の館外貸出</b> <b>博物館の貸出品及巡回陳列</b> 兒童個々の学習上博物館の利用	第十二章 博物館的社會事業  一 博物館與学校教育 二 歐洲学校利用博物館的 情形 三 美国学校與博物館 四 博物館教授資料的 貸借 五 博物館的研究工作 六 博物館的研究設備 七 博物館的貯藏室 八 博物館對於研究者 態度 九 博物館的研究報告 一〇 博物館的宣傳工 作 一一 開館時刻與參觀 費 一二 特別展覽會與音 樂會 一三 博物館與無線電 話
		<b>第十四章 研究機関としての博物館</b> <b>博物館自体の研究</b> 發明創作と博物館 研究機関としての任務の遂行 <b>科学博物館研究設備の改善</b> <b>博物館の貯藏室</b> 地方博物館の研究設備 <b>研究者に対する博物館の態度</b> チャールスリチャード氏の意見 ボストンの美術館の研究設備 博物館附属の図書館 植民地博物館の研究事業 <b>博物館に於ける研究の発表</b>	
		<b>第十五章 博物館の宣傳</b> 博物館の積極的經營方針 廣告 <b>入場料</b> <b>開館日及時刻</b> 博物館宣傳と新聞紙 <b>特別展覽會</b> <b>音樂會</b> <b>博物館とラヂオの協力</b> 大英放送局成人教育部長の意見 博物館宣傳の一例	

上記の内容は、「応用理論」の「社会との連携」に関する比較で

ある。具体的には、学校教育・研究・宣伝に関する内容である。

表 6-1 『眼に訴へる教育機関』と『博物館学概論』の目次比較⑨

		『眼に訴へる教育機関』	『博物館学概論』
応 用 理 論	建 物	<b>第十六章 博物館の建築</b>	第十三章 博物館的建築
		<b>建設地の選定</b>	
		假建物時代	一 建設的地点
		<b>博物館建築家</b>	二 博物館與建築家
		地方的小博物館建築とクールマン氏	三 博物館建築設計の原則
		<b>博物館建築設計上の原則</b>	四 博物館各室的配置
		<b>博物館の諸室と其の配置</b>	五 博物館建築的増築
		<b>博物館建物の増築</b>	六 地方博物館設計の一例
		<b>地方博物館設計の一例</b>	七 建築的構造與式様
		博物館建築上の諸問題	八 博物館的採光
		<b>建築の構造様式</b>	九 博物館的天窓
		<b>博物館の照明</b>	十 博物館内部的粉刷
		小博物館最良の照明法	
太陽光線の調節			
<b>博物館のトップライト</b>			
ホノル、美術館の新しいトップライト			
本邦の博物館とトップライト			
<b>博物館内部の仕上げ</b>			
床の構造			
博物館の塵埃問題			
其の他の危害			
博物館の規模			

上記の内容は、「応用理論」の「建物」に関する比較である。

上記の目次対比によって、『博物館学概論』の構成は、ほぼ全て『眼に訴へる教育機関』を模倣していることが確認できる。

『博物館学概論』には、章立ての構成と内容は殆ど『眼に訴へる教育機関』と同じである。さらに、『博物館学概論』の各章の内容は、『眼に訴へる教育機関』のいくつか関連の章を合併するものであった。

『博物館学概論』の独創的な内容は、主に中国博物館学の展開である。具体的には、「第一章 緒論」の「五 中国博物館的缺乏」と「第二章 博物館發達史略」の「一三 中国博物館的沿革」である。

しかし、『博物館学概論』には、『眼に訴へる教育機関』の一部

の内容を削除し、一部の内容をまとめて要略した状況が確認される。

削除した内容は、主に日本の博物館学に関する内容である。かかる状況にあって、徐堅が出版した『名山：作為思想史的早期中国博物館史』<sup>(6)</sup>では、下記のような評価がなされている。

費畊雨、費鴻年の『博物館学概論』就是隱去其名的棚橋学入華、但由于情境差異、費氏昆仲未能全面把握棚橋源太郎在日本博物館学史上的主張和貢獻、因而也肢解和抹殺了他的價值、將對日本博物館而言極富理論和實踐價值的棚橋学拉低到支離的博物館学入門的層次上。

(費畊雨と費鴻年が著した『博物館学概論』は、棚橋源太郎の名を隠した『眼に訴へる教育機関』である。しかし、博物館学に対する研究の差異があるから、費兄弟は棚橋の日本博物館学史にたいする主張と成果を十分に把握し得なかった。そのために、『博物館学概論』の作成は、棚橋の博物館論を壊して、棚橋の博物館論の価値を失わせた結果になった。さらに、『博物館学概論』の作成は、豊かな理論と実践を持っている『眼に訴へる教育機関』を、博物館学入門書のような低いレベルに格下げることになった。 筆者訳)

しかし、筆者は上記の観点に対して異論を持っている。確かに、『博物館学概論』は、日本博物館学に関する内容を削除したが、全体的な構成が『眼に訴へる教育機関』を模倣したことを確認する。その故に、『博物館学概論』が『眼に訴へる教育機関』の影響を受けたことは、否定できない。

一方、『博物館学概論』には、まとめて要略した内容は主に「郷土博物館」「博物館の説明案内」「社会との連携」などの内容部分である。日本の博物館学は、上記の内容に関する研究と実践が豊かであった。なお、日本博物館学の論及を削除した『博物館学概論』には、上記内容の加筆が当然必要であった。

上記の日本の博物館に関する章・節の意図的削除の原因は、当該期の中国社会が日本に対する抵抗感が強かった点を唯一とする。つまり、1931年9月18日に起きた満州事変<sup>(7)</sup>により、関東軍が満州全土を占領したことは中国社会に大きな怒りと憎しみを引き起こしたことは確認するまでもない史実である。

一方、日本博物館学の発達を了解した中国博物館学者は、日本博物館学の導入希望を有していたが、中国人民の気持ちを考慮して、日本に関する情報を完全に削除したのであった。当該期の社会状況にあって、中国博物館学者らの行為は、非難するほどのことではないが学術研究を阻害する結果となったことは残念な歴史である。

『博物館学概論』の作成は、中国博物館学にとって、画期的な意義があった。『博物館学概論』の作成の前には、中国博物館学界に

「博物館学」という用語を使う書名がなかった。さらに、博物館学を全体的に論述する著作は、これから次第に出現していた。

## 2、陳端志による『博物館学通論』

『博物館学概論』が出版された直後に、陳端志が著した『博物館学通論』<sup>(8)</sup>は公刊された。

陳は、『眼に訴へる教育機関』を模倣したことを明確に論及していたように、『博物館学通論』は『博物館学概論』との類似度が高い状況があったが、この点に関しては何も記していない。一方、『博物館学通論』には、棚橋源太郎が著した『眼に訴へる教育機関』<sup>(9)</sup> 團伊能が著した『欧米美術館施設調査報告』<sup>(10)</sup> 後藤守一が著した『欧米博物館の施設』<sup>(11)</sup>と日本における博物館案内書と調査報告書などの参考文献を多数あげているところから、日本の博物館学の影響を受けたことが十分推測できる著作である。

また、『博物館学通論』に対する具体的な分析は、本章の第二節の「中国博物館学の著書」の中で詳しく論述する。

他には、上海博物館館長であった胡肇椿は、京都帝国大学に留学し、濱田耕作に弟子入りして、考古学を専攻した。帰国後、胡は、濱田が著した『支那古玉概説』と濱田が翻訳した『考古学研究法』などを、中国語に翻訳し考古学を中国社会に啓蒙した。さらに、上海博物館館長に就任した胡は、これを機に博物館に対する関心を有することとなった。

### 第二節 中国における博物館学の展開状況

この時期には、日本は、西洋近代の思想と技術によって、明治維新を断行していった。明治維新の近代化改革により、日本の経済・軍事などは、長足の進歩を遂げて、文化も新たな段階になった。中国は、国力を高めるために日本の改革の歩みを模倣しようが、日中戦争で反発する気持ちが生まれた。

さらに、この時期には、中国の博物館学は日本の博物館学の影響をさらに受けたが、日中戦争の勃発によって、中国人民が日本に対して、複雑さの情感を持っていた。その故に、日本の博物館学が中国に伝播することは困難であった。

確かに、この時期の中国博物館学は、前述の通り、『博物館学概論』『博物館学通論』などの著作が出版し、日本の博物館学を導入するが、その影響の範囲が広くなかった。

この時期の博物館学の展開は、西洋の博物館学をさらに偏重した。その上で、この時期には、中国本土に合う博物館学の実践も行っていった。



具体的には、以下の2点から説明する。

## 1、中国における博物館の展開状況

中国における近代的な博物館の設立は、中国にきた宣教師の指導を受けたことがその初めである。しかし、中国人が本格的に設立した博物館は、主流な観点では1905年の南通博物苑が嚆矢であることは再度述べたとおりである。しかし、この観点について、「仏国人記録的中国第一座博物館—雲南府博物館—」<sup>(12)</sup>で、異論が提出された点も述べたとおりである。これは、外国人宣教師ではなく中国人自身が本格的に設立した博物館は、1901年に設立された雲南府博物館であるとする指摘であった。

なお、中国の博物館学の設立期に関しては、中国博物館学の通論的な単行本等の緒論によれば、清末民初において中国人が開館した博物館は、表6-2・表6-3の通りである。

表6-2 『博物館学概論』<sup>(13)</sup>と曾氏『博物館』<sup>(14)</sup>に拠る初期の博物館

出典	名称	開設年	設立地	備考欄(原文の評価)
『博物館学概論』	中央研究院の自然歴史博物館	1930年	南京市	中国における博物館事業の萌芽(中国人設立)
	北平天然博物院	1929年	北京市	
	広州市立博物館	1929年	広州市	中国人設立
	河北省立博物館	1918年	天津市	
	湖南博物館	1924年	長沙市	
	西湖博物館	1929年	杭州市	
	北平故宮博物館(古物陳列所)	1914年	北京市	
曾氏『博物館』	南通博物苑	1905年	南通市	初めての中国人設立した博物館
	歴史博物館準備処	1912年	北京市	
	交通大学北平鉄道管理学院博物館	1913年	北京市	国立博物館の嚆矢(曾の観点によれば、この博物館は国立博物館とされているが、筆者は、公立博物館であると考えてる。)
	北平古物陳列所	1914年	北京市	
	南京古物保存所	1915年	南京市	
	北平故宮博物院	1924年	北京市	
	中央博物院			(未公開)

表6-3 陳氏の『博物館学通論』<sup>(15)</sup>・『博物館』<sup>(16)</sup>に拠る中国の初

期の博物館

出典	名称	開設年	設立地	備考欄(原文の評価)
東氏『博物館学通論』・『博物館』	南通博物苑	1905年	南通市	中国の私立博物館の濫觴
	河北省国貨陳列所	1905年	天津市	公共的な私立博物館
	北平古物陳列所	1914年	北京市	中国初めての国立博物館(政府)
	南京古物保存所	1915年	南京市	中国初めての公立博物館(地方政府)
	天津博物院 (河北第一博物院)	1918年	天津市	中国初めての官民連携になる博物館
	保定教育博物院	1916年	保定市	
	山東金石保存所	1909年	済南市	山東省図書館附属
	国立故宮博物院	1925年	北京市	中国初めての国立博物館(中央政府)
	中央觀象台 (北平中央研究院天文陳列館)	1912年	北京市	中国で初めての専門博物館(陳は、この天文館の設立は1126年であるとするが、この観点に対して筆者は異論を主張する)
	漢口商務公所	1900年	武漢市	専門博物館
	天津考工廠陳列館	1903年	天津市	
	河北省国貨陳列館	1906年	天津市	
	江寧江南商品陳列所	1907年	南京市	
	北平市農事試験場		北京市	
	北平市国貨陳列館	1912年	北京市	
北平市衛生陳列所及商品陳列所	1915年	北京市		
南京地質調査所鉱物資源陳列館	1916年	南京市		
交通大学北平鉄道管理学院博物館	1913年	北京市	初の完全な学校附属の専門博物館	

また、上記の構築期において中国博物館学の通論的な単行本に記載された中国初期の博物館が挙げられていた。上記の既存の博物館によると、当該期の中国博物館学界は、南通博物苑が中国博物館の濫觴であり、北平古物陳列所が中国国立博物館が濫觴であると主張していた。しかし、前述のとおり、今の中国博物館学界には、新たな観点が提出されたのである。すなわち、中国博物館の濫觴は、1901年設立された雲南府博物館である可能性が高いことが指摘されたの

である。雲南府博物館は、日本に留学経験のある孫光庭によって設立された博物館施設である。

清末期には、中国の知識人らは西洋の科学知識と技術を中国へ意識的に将来する風潮が一般的であった。いわば、「西学東漸」である。「西学東漸」思潮が全国に盛行していたため、中国の辺境である雲南府も知識人を先進国に遊学させていた。

Georges Cordier が 1915 年に発表した『*Le Musée de Yunnan-fou*』<sup>(17)</sup>により、雲南府博物館は 1901 年に開館した。しかし、ここに大きな疑問が存在している。つまり、孫が日本に留学した記録が確認できていないため、留学の有無は不明確なのである。前述の第四章の第二節の「揺籃期における設立した博物館及び相当施設の状況」の中で、筆者は孫の第一回目の留学経験を 1884 年から 1900 年までの間と推定しているが、資料の不足のため断定できない状況である。現時点で、孫の留学経験については不明な点が多いが、孫が設立した雲南府博物館は、中国の伝統的な宝物庫と違い、近代的な博物館であったであろうことは、下記の点からも看取できよう。

当時の雲南府博物館は、休館日はなし、開館時間が午前 10 時から午後 4 時までで、月曜日と火曜日は女性向けの開館日であった。入館料は、二角であった。上記の内容は、『*Le Musée de Yunnan-fou*』の中に明確に記載されている。

また、前述の陳端志が著した『博物館学通論』の付録では、当該期の中国では 77 館の博物館を数えている。一方で、曾昭燏等が著した『博物館』によれば、1936 年に中国博物館協会が出版した『中国博物館一覽』では、全国の公私立博物館は 80 館を数えていた明記している。

さらに、梁吉生の「論旧中国博物館事業的歴史意義」<sup>(18)</sup>によると、南京国民政府が成立してから 1930 年代までの間に、博物館についての活動は急速に発展したと指摘している。

中国の博物館数についてみると、当該期は多数の博物館が設立された時期であった。同じく上記の「論旧中国博物館事業的歴史意義」の中では、下記の通り記載されている。

1928 年至 1936 年、平均毎年増長 29%。1936 年博物館総数達 77 所、比 1928 年増加 6.7 倍、這還不包括 56 所美術館和 98 所文物保存所。這其中雖然也有些名不符實的館、但數量增加較快則是不能否認的。特別是有些重要的省・市博物館、如河南省博物館・浙江西湖博物館・上海市博物館都是這時期建成的。辺遠地区博物館的建設也有了進展。1928 年蘭州市立博物館成立、這是中国西北地区第一个博物館。

(1928~36 年の間の博物館の年間平均増加率は、29%である。1936 年の博物館の総数は、77 館であり、1928 年と比較して 6.7

倍程増加している。これには、56館の美術館と98館の文化財保存所は含まれてない。実際は、博物館として不十分である館が多数存在している。しかし、数が急速に増加したことについては否定することはできない。特に、重要な省と市の博物館については猶更であると言え、例としては、河南省博物館・浙江西湖博物館・上海市博物館などの省立・特別市の博物館は、すべて当該期に設立されている。その上、辺境とされる場所の博物館も設置された。1928年に蘭州市立博物館が開館している。これは中国の西北地区において初めての博物館である。 筆者訳)

博物館の普及度について言及すれば、当該期は中国博物館史上では大きな飛躍を遂げた時期であるといえよう。また、博物館数の増加は、藏品数と見学人数の増加にも寄与した。

一方、博物館の数が増加するとともに、博物館の種類も増加していった。博物館の分類は、単に歴史博物館に限らず、博物館の内容を科学教育に関するものも含むとされている。例えば、演劇芸術・衛生体育・水産生物・人類学などの内容についてである。そして、一般的な博物館に限らず、専門博物館・動植物園・水族館なども大きく発展している。

当該期の博物館に与えられた歴史的な使命は、科学的な知識を広めることであり、民衆が自主的に学習できる場所を提供する点になった。民衆は、博物館で科学的な知識を学び、民主的な観念を育成した。その根源的思想は、中国人が動乱の最中であつた国家を救い、民族の生存を図ることを期待してのことであつたと把握できる。

また、当該期の博物館学に関する研究者らは、博物館の本質を下記のように理解していたようである<sup>(19)</sup>。

啓迪民智、救愚脱盲及培養愛國主義・民族主義、宣揚科学・民主観念等社会使命。具有強烈的民族主義色彩。

(国民が持つ文化と知識を啓発し、無知を救い、愛國主義と民族主義を育て、科学と民主の観念を宣揚する社会的な使命を持っている。また、強烈的な民族主義の色彩をも有している。 筆者訳)

これは、当該期の博物館の設置は、長い貧困期にあつた中国人を救済する最大の試みであつたことを物語っている。当該期における中国は、大きな社会変革期にあつて、中国人民が育んできた長期に亙り醸成されてきた伝統を革新する時期であつた。そのため、新しい社会の知識体系を早急に再構成しなければならなかつた。そして、当該期において有識者は、その具体的手段として博物館に着目した。社会全体が巨大な転換期を迎え、長く続く戦争によって中国社会は不安定であつた状況からの脱却と変革の具現であつたと考えられる。

また、日中戦争は、共産党と国民党の政争内戦と異なり、中華民族と大和民族の2つの民族の戦争であった。そこで、当該期の博物館は、単に知識を伝達し、利用者の視野・知識の拡幅目的に留まらず、「愛国主義、民族主義教育神聖基地」<sup>(20)</sup>（愛国主義と民族主義を教育する神聖な基地 筆者訳）に目的があった。これも当該期の中国博物館が急速に発展した原因の一つであると考えられる。

この時期には、大量の博物館が設立されることとともに、博物館に関する歴史の考察も行っていた。確かに、中国で最初の近代的博物館の設立は、中国人自らで

## 2、中国博物館学に関する刊行物の出版状況

博物館が大量に出現したと同時に、当該期の博物館学界は、博物館を書面で伝えることに力を入れていた。なお、博物館に関する刊行物は、各地で台頭する博物館より宣伝面が小さいものの、博物館に関する研究が増加の傾向になった。

さらに、博物館は民衆を主体的対象にして、科学技術・文化知識・民族大義などを伝播することとは異なり、博物館の刊行物は学術の立場において、博物館学を研究する学者らに適時の学術交流を提供することでもあった。そして、これらの学者が最新の研究成果を明らかにすることで、中国の博物館学界は、博物館学に関する研究の成果を掌握することができた。なお、表 6-4 によると、当該期における博物館の刊行物の出版量も多く、軽視できない。

このように、当該期は、多量に出現した博物館と同じように、博物館の刊行物が多量に登場していた。「民国時期文博類期刊探析」<sup>(21)</sup>は、博物館に関する刊行物を下記のように統計している。

据统计、1926~1929年創刊5種、1930—1936年創刊9種、1937—1949年創刊7種。

（統計によると、1926~29年には5種類の刊行物が創刊し、1930~36年には9種類の刊行物の創刊があり、1937~49年には7種類の刊行物が創刊されている。 筆者訳）

しかし、当該期の社会は、不穏な社会情勢の中にあつたため、これらの刊行物を連続して迅速に出版することができなかつた。つまり、社会の動乱と出版社自身の資金苦境のため、休刊を余儀なくされる状況であつたことは十分予想される。

一方で、これらの刊行物は、博物館学への情熱と学術の追求だけではなく、博物館学者らが博物館を武器として中国の運命を救うための希望を託していたと考えられる。

表 6-4 構築期とその前における中国博物館の刊行物<sup>(22)</sup>（筆者作成）

時期	刊行物名	備考欄	発刊年
1935年以前	『国立歴史博物館叢刊』	初めての文博類定期刊行物	1926年
	『故宮週刊』		1929年
	『故宮物品点査報告』	特集	
	『国立中央研究院自然歴史博物館特刊』	特集	
	『国立北平故宮博物院工作報告』		
	『河北第一博物院半月刊』 (『河北第一博物院半月刊画報』『河北第一博物院画報』『河北博物院画刊』)		1931年
	『故宮博物院古物館概覧』	特集	1932年
	『故宮』(故宮博物院設立七周年記念特刊)		
	『浙江省立西湖博物館館刊』	特集	1933年
	『北平故宮博物院古物館南遷物品清冊』	特集	
	『古物陳列所記念專刊』(北平古物陳列所二十周年)	特集	1934年
	『广西省博物館二十三年度年報』	特集	
	『河南博物館自然科学匯報』		
1935~48年	『中国博物館協会会報』		1935年
	『倫敦中国芸術国際展覧会出品目録』	特集	
	『古物保管委員会工作匯報』	特集	
	『参加倫敦中国芸術国際展覧会出品図説』	特集	1936年
	『赴英参加倫敦中国芸術国際展覧会記』	特集	
	『中国芸術国際展覧会参観記』	特集	
	『河南博物館館刊』		
	『北平故宮博物院年刊』		
	『西北文物展覧会目録』	特集	
	『西北文物展覧会特刊』	特集	
	『四川博物館単刊』		
	『上海市博物館周刊』		
	『華西大学博物館抽印叢刊』	英語版	1946年
	『国立沈陽博物院準備委員会匯刊』	特集	1947年
『中国古文物展覧会目録』	特集		
『博物館学特刊』	特集		

さらに、中国では、1936年に博物館学に関する単行本が出版され始めた。1936~43年の間、中国博物館学界で出版された単行本は5冊を数える。これらの通論的な単行本は、本学域についての理論研

究の成果として、高度な総括性を有するものと筆者は評価している。

それらを刊行年の早い順に記すと、費畊雨と費鴻年が著した『博物館学概論』、陳端志が上梓した『博物館学通論』と『博物館』、荊三林が出版した『博物館学大綱』、曾昭燏と李濟が著述した『博物館』である。中国の博物館学に関する研究にとって、重要な研究意義があることは確認するまでもない。上記した単行本は、当該期の中国博物館学に関する研究の具体的な成果であり、いずれもが中国の博物館学事業の展開を牽引、指導した著作であった。その上、これらに単行本の付説された参考文献などは、当該期の中国博物館学事業の展開の全貌を了解出来得る資料であることも事実である。

しかし、これらの単行本に関する研究の現状は、未だ不十分であるといわれていると筆者は考えている。現在の中国博物館学における研究の重点は、博物館の実践的技術に関する研究であるところから、博物館学史についての研究は、あまり研究対象にされていないのが実情で有ると同時に、中国博物館学の特質の一つといえよう。

本章では、上記 5 冊の単行本の主な内容を分析し、本文と付説などを含み考察することにより、構築期に中国の博物館学界と博物館学研究の実態を明らかになり、博物館学の学術としての体系の構築を行うためのひとつの要素となるものと考えている。

### (1)構築期の中国博物館学に関する単行本

『中国博物館学研究論著目録』<sup>(23)</sup>の統計によると、構築期の中国博物館学の通論的な単行本は 5 冊に留まることは、前述の第一章・第一節の表 1-1 の通りである。具体的には、以下各々の特質を述べることとする。

#### ① 1936 年刊行の費畊雨・費鴻年共著の『博物館学概論』



費鴻年

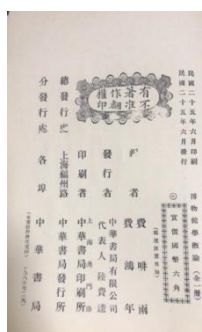


図 6-3 費鴻年

図 6-4 『博物館学概論』

本書<sup>(24)</sup>は、13 章で構成され、各章の内容は次のとおりである。第 1 章「緒論」、第 2 章「博物館發達史略」、第 3 章「博物館の種類及効能」、第 4 章「地方博物館」、第 5 章「教育博物館」、第 6 章「学校博物館」、第 7 章「兒童博物館」、第 8 章「室外博物館」、

第 9 章「動植物園與水族館」、第 10 章「物品的収集與保存」、第 11 章「博物館的陳列」、第 12 章「博物館的社會事業」、第 13 章「博物館的建築」である。

また、内容を、筆者は下記のようにまとめている。第 1~3 章は、博物館の基礎理論を論じ、第 4~9 章は、専門博物館の種類を紹介し、第 10~13 章までは博物館の機能と博物館経営に関して論述している。

第 1 章では、序論で博物館と教育の関係について触れ、博物館と社会教育・学校教育・専門研究機関との関係を説明する。次いで、国内外の博物館の比較検討を行うことにより差異を検出し、論点としている。なかでも注視されるのは、中国の博物館が外国の博物館より未発展である理由は、博物館の館数と博物館の機能の不足にあると指摘している点である。

最後に、費兄弟は動物園・植物園・水族館なども広義に言えば、博物館の体系の中に組み入るべき施設であることを特に指摘している。

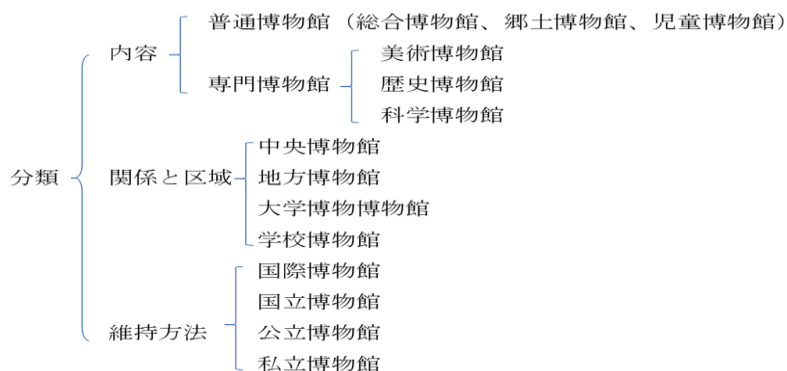
第 2 章は、博物館の発展史の紹介で、6 段階に区分している。具体的には、博物館の起源・ローマ時代の個人的な収集・西洋中世に於いての宗教的な博物館・文芸復興期の博物館の特徴・17 世紀の旧式の博物館・19 世紀の様々な種類の博物館（専門博物館・神学博物館・科学博物館・大学専門学校博物館）と区分しそれぞれの特質について論述している。第 2 章の内容は、博物館・博物館展示・博物館建物のそれぞれの発展沿革である。

本章は、当該著書の特徴である中国博物館の沿革について初めて言及しており、中でも注目に値するのは中国人による独創的な博物館として、中央研究院の自然歴史博物館（1930 設立、以下設立年）・北平天然博物院（1929 年）・広州市立博物館（1929 年）・河北省立博物館（1918 年）・湖南博物館（1924 年）・現在は浙江省立博物館である西湖博物館（1929 年）の 5 館が中国博物館の萌芽であると指摘した点である<sup>(25)</sup>。

第 3 章は、博物館の種類と役割を記し、それに基づく博物館の分類は、表 6-5 の通りである。

表 6-5 『博物館学概論』と『博物館学通論』における博物館の分類  
(筆者作成)





さらに、第 4 章から第 9 章までは、博物館の専門領域の視点で典型的な博物館を個別に論じており、地方博物館・教育博物館・学校博物館・児童博物館・屋外博物館・動植物園と水族館を含んでいる点も当該著作の特徴であろう。これらの博物館を紹介する際には、多くの外国の博物館事業を挙げて論述している。注目に値するのは、教育博物館・学校博物館・児童博物館の 3 種の博物館をそれぞれ列記している点である。費が教育系博物館に注目したことは、博物館の総体を教育と捉えていることを明示しているものと考えられる。

また、第 10 章から最終章である第 13 章までは、博物館の機能と経営に関して論述し、第 11 章では博物館の展示については、中国の博物館の陳列法の主体が専門家から民衆へと移行している点に着眼して、博物館の陳列の進歩であると考察している。当該期の中国博物館学界が目標とする博物館は、国家が推進する民衆教育思想と整合した結果と看取される。つまり、単なる資料の羅列ではなく、意図のある展示の完成を指摘したのである。

最終章の第 13 章は、博物館建築をテーマに、博物館経営論の視点から博物館の敷地・博物館と建築家・博物館建築設計の原則・博物館各室の配置・博物館建築の増築・建築的構造の様式・博物館の採光等々について詳述している。

以上の内容を有する費兄弟の共著による『博物館学概論』は、系統的な体系に重点を置き、基礎理論の紹介の上で、実務的応用論を紹介したものであったところから、中国での博物館学を普及させる大きな契機となった。

更にここで注意すべきは、本書各章の後に 5 点の確認問題を記していることである。この 5 点の問題は、本章の内容の概括であり、読者への確認を目的とするものとなっている。確かに、本書の中に挙げた例は、すべて西洋の博物館事業の実践例であり、中国の博物館事業への言及は僅か 1 節に限定されているに留まる。

しかし、序章では中国の博物館事業の欠如を強調しているが、当該期中国では自主的な博物館事業の実践が芽生えていて、博物館の活動を模索する時期に突入していた。しかしなお理論が実践より遅

れていたことは否めない。なお、当該期の博物館学者は、博物館学を中国民衆に普及させる目的であったことは行間からも読み取れる。そして、専門職員である「工作人員」についての必要性を論じた点も特徴的であった。本書が編纂された目的は、博物館の設置者や運営者が博物館と博物館学の理解の推進を求めることであったと総括できよう。

## ② 1936 刊行の陳端志による『博物館学通論』

本書<sup>(26)</sup>は、18 章から構成され、各章の内容は次のとおりである。第 1 章「概論」、第 2 章「博物館的演進」、第 3 章「我国博物館事業之発軔」、第 4 章「博物館の種類及効能」、第 5 章「中央及地方博物館」、第 6 章「戸外博物館」、第 7 章「教育博物館（上）」、第 8 章「教育博物館（下）」、第 9 章「動植物園及水族館」、第 10 章「博物館的蒐集和整理」、第 11 章「博物館的製作和修理」、第 12 章「博物館的陳列」、第 13 章「博物館的説明」、第 14 章「博物館的利用」、第 15 章「博物館宣伝」、第 16 章「館舎建築的改進」、第 17 章「陳列器具的設計」、第 18 章「工作人員的養成」である。

また、内容によって、筆者は下記のようにまとめた。第 1~4 章は、博物館の基礎理論を論じ、第 5~9 章は、専向博物館の種類を紹介し、第 10~18 章までは、博物館の機能と経営に関して論述した博物館学の専門図書である。

第 1 章は、「博物館」という言葉の由来と博物館の発展沿革を簡単に紹介し、第 2 章は、博物館の発展史を具体的に紹介している。陳は、博物館の発展史を費兄弟の著である『博物館学概論』での分類と同様に 6 段階に区分しているが、各段階区分を詳細に論じているのが特徴である。さらに、本書が具体的に言及するのは、博物館史における最古の史料として前 4 世紀において東方遠征にする大帝国を築いたアレクサンドロス 3 世が略奪品を師匠であったアリストテレスに贈与し、保存した記録にある。また、18 世紀の西洋では、常設博物館は勿論のこと臨時の博物館なども盛行した点から、博物館は大衆化の時期に入ったことを指摘したのである。

第 3 章は、中国の博物館の発展史を個別に列挙して述べている。本書では、博物館の設置母体によって異なるが、先ず中国国民が設立した博物館の嚆矢は南通博物苑（1905 年開設）であり、続いて政府が設立した博物館の濫觴は北平古物陳列所（1914 年開設）であると記している。さらに、地方政府が設立した博物館の濫觴は、南京古物保存所（1915 年）であり、国民と政府が連携して設立した博物館の始まりは天津博物院（1918 年、1928 年に“河北第一博物院”に改称した。）であり、中華民国中央政府が最初に設立した博物館は国立故宫博物院（1925 年）であることを、具体例を挙げながら結論づけたものであった。

中でも、北平中央研究院の天文陳列館（1928年開設）が中国において最古の専門博物館であると指摘したことが本書の特徴の一つである。

次いで、新文化運動<sup>(27)</sup>と中国博物館の展開状況を説明する。新文化運動とは、中国伝統的な思想を打破し、民主と科学を提唱することを目指した社会的な運動である。故に、中国の伝統文化を収集展示する博物館は、新文化運動者の批判の対象となっていたため、本書では、新文化運動が中国博物館事業の意義を誤解していたことを批判して、中国の博物館事業が1915~27年まで中断した原因は新文化運動にあったと指摘した。

第4章は、博物館の種類と機能を紹介する。その分類は、前述の費兄弟が著した『博物館学概論』と一致する（表6-5）が、諸外国の博物館を実例とした詳細な論述が認められる。さらに、博物館の機能を論述し、博物館と社会教育・学校教育・学術研究の関係を詳しく記している。

第5~9章までは、博物館を具体的に分類し紹介する。具体的には、中央及び地方博物館・屋外博物館・教育博物館・動植物園及び水族館である。本書は、教育博物館をさらに教育博物館・児童博物館・学校博物館の3種類に分類している。陳は、本書の中で教育博物館は必ずしも学生と子どもを主対象とするものではなく、利用主体となるのは一般民衆であると指摘している。

なお、第10~18章までは、博物館の実務関連を記している。蔵品の収集と保存・陳列・博物館の利用サービスの発展・博物館の建物・博物館工作人員の養成など多岐の内容を含んだ章となっており、費兄弟が著した『博物館学概論』とほぼ同一視点による展開ではあるが、より詳述された内容となっている。しかし、陳列に関する内容は、費兄弟が著した『博物館学概論』と異なる考えを以って展開されている点の特徴である。先ず、陳は、陳列には2種の目的があるとし、第1点は観衆の好奇心を誘発すること。第2点は文化に関する知識を伝達することであると、陳列の目的に関する概念の規定を企てている。

次に、「提要展示法」と「共同展示法」を紹介し、工芸品の展示方法についても言及している。本書で言う提要展示法とは、当該博物館の数少ない特徴的な収蔵品のみを展示し、この蔵品に関する他の資料群は、収蔵庫に保存する方法である。また、共同展示法とは、一連の蔵品が復元展示される方法である。

最後に、陳列室の配置と解説パネルやキャプションの使用について説明している。社会における博物館の利用について、博物館が教育機関であるという考え方に立脚した、論究であることが看取できよう。

博物館の宣伝について、博物館の広報は広告宣伝・ニュース・宣伝・口頭宣伝（ラジオ放送）などの形式に頼っているとした上で、次いで博物館の入場券や開館時間などの内容についても多くの外国における博物館の運営方式を事例として援用して述べている。最後に、特別展示会やコンサートなどの活動が博物館を利用する上で便益をもたらす点に関して論述する。

また、建築論については、費兄弟が著した『博物館学概論』と一致するが、展示と博物館工作人員に関する基本的な視点は異なり、陳は両者を2章に分け深く論究している。中でも、博物館工作人員に関する部分の論述は、特徴があり、本論では博物館工作人員を養成する必要・準備・研修・方法及び問題などの多方面についても論及している。つまり、博物館の工作人員の短期的な専門技能訓練による人材養成を具体的に明示したのであり、博物館工作人員の専門性と必要性を肯定し、博物館工作人員の課程を開設することの必要性を詳述するなかで、今日の如く博物館学が大学で開講されることを始め、独立の学問として認められるであろうことを予想している点も本書の特徴である。

さらに、付録には、当時の中国に存在する博物館を統計した表や、本書の参考文献を列挙して、読者が当該期中国の博物館事業の発展状況を概ね理解できる啓蒙書的著作となっている。

最後に本書の特徴としては、各テーマが細部にわたって説明され、論述と例示の割合が既存の書と比較してはるかに多く、外国の博物館の事例を大量に引用して詳しく述べている点が大きな特徴である。また、多くの外国の博物館の外観図を添付して、読書が興味を持つよう構成され、同時に読者にとって海外の博物館の外観の理解が容易となるものとなっている。巻末に記載された参考書は、当該期の中国博物館学の主な学習方針を理解させることができる。本書は、中国での博物館学の早期の通論的な単行本として、当該期中国の学者が博物館学に関する研究の現状を社会に啓蒙する書であったと評価できよう。



図 6-5 陳端志



図 6-6 『博物館学通論』



図 6-7 『博物館』

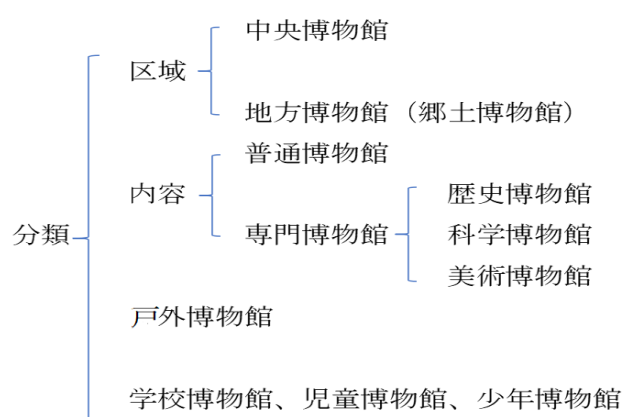
### ③ 1937年刊行の陳端志による『博物館』

本書は<sup>(28)</sup>、5章で構成され、各章の内容は次のとおりである。第1章「緒論」、第2章「博物館之目標與職能」、第3章「設立博物館的先決問題」、第4章「博物館的設立與管理」、第5章「博物館的推広與活動」である。

また、内容によって、筆者は下記のようにまとめている。第1章と第2章は、博物館学の理論研究である。第3章から第5章は応用編である。陳による『博物館』は、前年の1936年に出版された『博物館学通論』と比較して、内容が前書よりも明快である点が特徴である。つまり、『博物館』は『博物館学通論』の普及版として纏められたところから、内容は読みやすく、文体も平易で一般的国民への普及を目的とした書となった。このような意味では、本書は博物館学の知識を普及することを目的として刊行されたものと見なすことが適切であると考えられる。そのために、本書は、博物館の理論知識を簡単に紹介し、博物館の定義・沿革・分類などを明確に纏めている。

第1章は、「博物館」という言葉の由来と定義を紹介して、博物館の進化と種類を述べている。特に中国の博物館事業の沿革を詳述する点も特徴である。博物館の沿革に関する内容は、『博物館学通論』と一致するが、より簡潔でありながらも仔細である。博物館の分類は、『博物館学通論』と『博物館学概論』は同一であるが、『博物館』は表6-5と表6-6の対比からも明確であるように両者の分類基準は抜本的に異なる。

表 6-6 陳『博物館』における博物館の分類（筆者作成）



上記の表6-6によれば、博物館の分類について、『博物館学通論』と『博物館』の相違点は、学校博物館の所属である。『博物館学』では、学校博物館は、特別の博物館として、単独の種類に位置づけている。

第2章は、博物館の目標と機能についての論述を主とし、とくに博物館運営の目標について触れた点は、従来の書籍には認められなかったことである。博物館の目標は、動態と静態の2つの形式であるとしている。静態の形式において博物館は、その国の国民性または国土の特徴となる長所や美点に関する文献と専門的な学問、各地方の郷土の特徴を保存する場所である。動態の形式において博物館は、民衆が学識を自主的に討究することにより、社会文化と民族産業、即ち中国民族産業とは、中国国民が自分自身で創建する産業であり、このような民族産業の発展を図ることである。この点は、博物館が従来からの古物の倉庫から文化産業の原動力に転じるべきであるとする理論である。

さらに、博物館の機能を紹介する中で、学校教育と社会教育の補助、文化学者の研究の場としての博物館の目的とは別に、博物館と商工界の関係に言及している点も特徴的である。博物館は、教育のみに留まらず技能の発展促進と、商工業の先端技術を革新する役割がある点を強調したのであった。

本書は、理論的な知識に関する論述は比較的簡略に述べており、その重点は主に博物館の応用編に置かれている。また、第3章と第4章は、博物館内部の日常の業務であり、第5章では博物館の対外サービス・普及などに関する問題について述べている。

第3章は、博物館の設置母体・博物館の財政・博物館の敷地・博物館の建築・博物館の工作人員の養成などの内容に言及する。これらは、博物館を建設する以前に解決しなければならない基本的要件であることはいうまでもない。

第4章と第5章は、藏品の募集・収蔵・展示などの活動と博物館の社会活動について説明する。

全体評価で言えば、本書は、前述のとおり『博物館学通論』の普及版であるところからその内容とほぼ一致し、大きな違いはないが、応用博物館学に重点を置いた上で、理論博物館学については凝縮された項目でまとめられている。一方、文章の論理と章節の構成によって、本書は、『博物館学通論』と比較して、更に明確に記されているところからも読む者をして理解せしめ、高い普及性を持っていると評価される。

#### ④ 1941年刊行の荊三林による『博物館学大綱』



図 6-8 荊三林



図 6-9 『博物館学大綱』

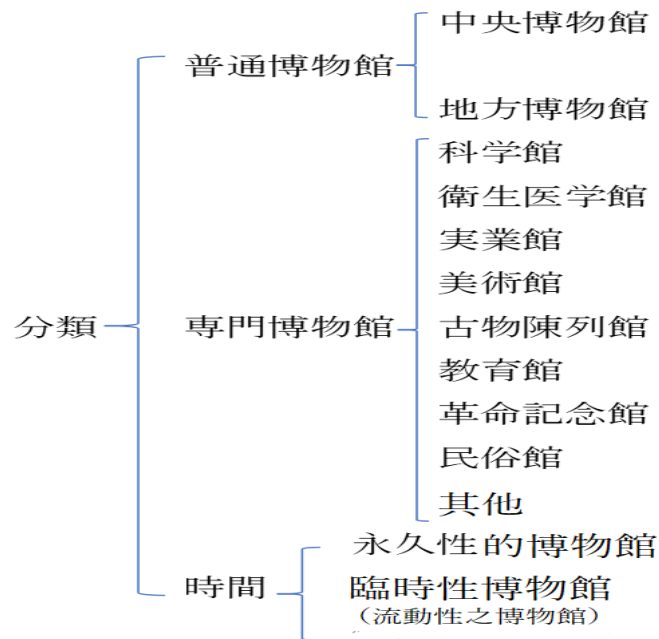
本書は<sup>(29)</sup>、全 5 編の講座本の形態を呈し、各章の内容は次のとおりである。第 1 編「緒論」、第 2 編「博物館事業之発達史略」、第 3 編「現代博物館之形式與功用」、第 4 編「博物館之陳列方法」、第 5 編「科学博物館之各部門及其組織」である。

また、内容によって、筆者は下記のようにまとめている。第 1~3 編は、基礎理論であり、第 4 編と第 5 編は、実践的技術の部分であり、全体には博物館展示に重点を置き言及したものとなっている。

本書は、博物館の基礎理論から着手して、主に博物館の沿革、形式、機能などの博物館の内容について論述している点を特色とする。

第 1 編は、序章であり、第 1 章は、主に博物館の定義と分類について説明している。次いで、博物館設立の意義について論究し、資料の保存と活用については古物を保存するだけでなく活用による教育的な意味を担っていると結論付けている。博物館の機能については、博物館が教育と文明を広める場所とする考えを提言している。第 2 章は、博物館の分類に言及し、表 6-7 のような分類表を明示している。

表 6-7 『博物館学大綱』における博物館の分類（筆者作成）



第2編は、博物館の発展史であり、荊は博物館の発展史を4段階に分けている。即ち、18世紀の博物館・19世紀の博物館・現代の博物館・博物館の未来として区分している。

この区分のうち、前の2段階の論述する内容は、陳端志が著した『博物館学通論』と同一の内容で展開するが、次の点を重点的に指摘している。先ず、博物館は、公衆のために設営されるとする観念は18世紀に確立し、19世紀の博物館は現代化の時期に相当するため、新式的な博物館は個々の歴史資料を研究せず、資料と資料の比較により資料間に発生する関係を研究するべきであるとする、博物館での研究理念を提唱した。つまり、19世紀の博物館学の理念は、単独の歴史資料を個別に研究するのではなく、資料間の関連を比較研究する研究方法にあった。

世界で最初の科学博物館は、1869年にアメリカのニューヨークに設立されたアメリカ自然史博物館であるとし、十九世紀に博物館の発展傾向が徐々に大衆的になっていく傾向を確認した上で、現代世界の独・露・英・米の発展概要を挙げ解説している。最後に、博物館の発展には、さらに成人教育を重視する必要があると指摘する。

第3編は、博物館の形式と機能について論及し、博物館の機能は保存・研究・鑑賞であると独自の理念を打ち出している。これは、同じ時期に他の単行本が言及した博物館の機能とは大きく異なり、博物館の展示機能・教育機能に代わり、博物館の鑑賞を一つの機能として位置付けることの必要性を提唱した。即ち、展示機能は博物館が行う機能であり、鑑賞機能は観覧者自身が有する機能であるとする考え方であった点が、新たな観念であると指摘できよう。

また、博物館資料には、研究品と展示品とを分けるべきであり、



研究のための資料が第一位の資料であると考えている点も特徴であると言えよう。

さらに、博物館の建築と展示については、両者の本質は観衆のニーズのためにあって、その展示は、観衆の需要に合致するべきで、研究者の需要に合致することは必要ではないと断じている。最後に、博物館の発展と新時代の博物館の変化傾向を想定し、荊も「郊外博物館」の台頭と普及を想定したうえで、特別に説明している。

第4編は、博物館展示の重要性について著述し、博物館の展示方法と展示に存在する種々の問題について詳細に論述したものとなっている。とくに展示の方法を詳しくまとめている点では、年代的に先行する3冊の著作より更に専門性を備えた論調であると評価できよう。本書で挙げられている多くの事例は、外国の博物館が中心となっているが、中国国内でも参考するに可能となる博物館を挙げていることも重要である。

第5編は、主に科学博物館を対象としてその部門と組織形式に関する検討である。科学博物館は、科学の知識を広める重要な任務を担っていることを指摘し、科学博物館の蔵品分類・職務・部門などの広く博物館経営についての内容を検討している。

本書は、付説で英国とドイツの博物館での見学記と科学博物館の重要性を記した論文に触れ、欧米博物館の展示方法と運営方式を詳しく紹介することで、中国の博物館の事業発展に参考になることを指摘している。荊が、本書のサイズが小さいところから緒言の中で「小冊子」と呼んでいる『博物館学大綱』は、博物館の重要性を強調することを目指しており、博物館を利用して知識、特に科学の知識を民衆に広めることを目的とする点を強調した、独創的な書籍であると評価できる。

⑤ 1943年刊行の曾昭燏・李济による『博物館』



図 6-10 曾昭燏



図 6-11 『博物館』



図 6-12 李济

本書<sup>(30)</sup>は、全体で 10 章を立章し、各章の内容は次のとおりである。第 1 章「緒論」、第 2 章「組織」、第 3 章「管理」、第 4 章「建築」、第 5 章「設備」、第 6 章「収蔵」、第 7 章「保存」、第 8 章「研究工作」、第 9 章「教育工作」、第 10 章「戦時工作」である。

また、内容によって、筆者は下記のようにまとめている。第一章の理論と第二章から第十章までの技術的実践に分けられる。第一章の理論についての部分の論述が非常に簡潔であり、博物館の具体的な実践についての内容は、本書が主に博物館の業務に重点を置いて論述して、特に戦争期における博物館事業の展開を重点的に言及している。

第 1 章の序論で博物館の沿革・分類・目標に言及しており、博物館の沿革について述べて、創始と発展の段階、現在の概況を簡単に分けている。また、博物館の祖型は、古代メソポタミアのバビロンにあったと指摘している。そして、博物館の現在の概況について論述する中で、米・英・仏・伊・露での博物館の事業の現状を列挙している。

次に、中国の博物館事業の発展について論じ、その中で『宣和博古図録』<sup>(31)</sup>、『西清古鑑』<sup>(32)</sup>などの書籍は、博物館の図録の祖型であるとする観点を披露している。さらに、中国における従来からの収蔵品が博物館にならなかった原因を 2 点あげ、第 1 点は昔の中国は宝物を収集する宝物庫があったが、宝物庫は博物館ではなかった。もっとも、近代以前の中国において、博物館が存在しなかった原因は、昔の中国人が古物を重視する傾向にあり、科学技術を重視しなかった為であると結論している。第 2 は、当該期の収蔵品は少数の限られた人々の関心を満たすだけであり、民衆への還元は行われなかった点であることを記している。

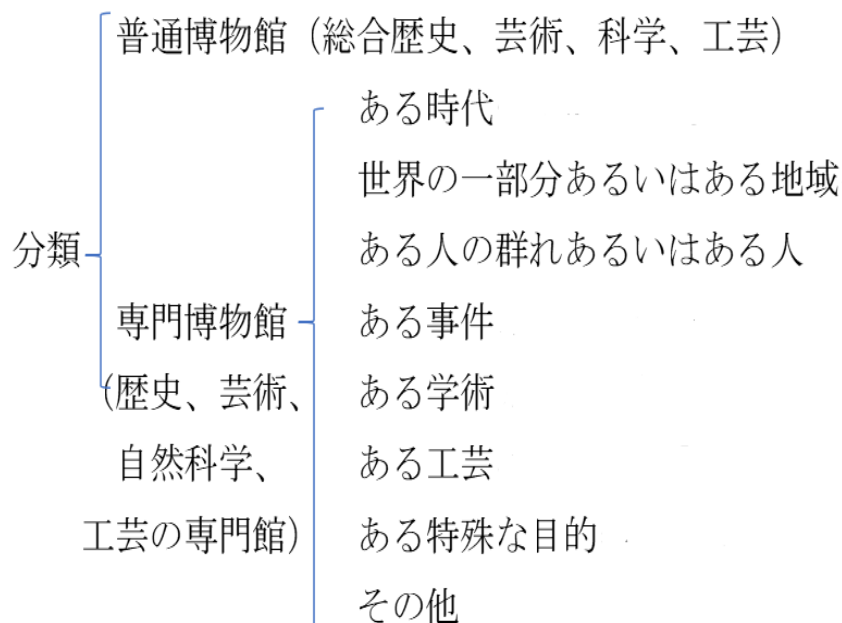
さらに、本書では、1913 年に創設された交通大学北平鉄道管理学院博物館を、中国の国家博物館の濫觴であるとする見解を論述している。

中国の博物館事業の現状については、中国は日中戦争の時期にあたるため、被占領区の博物館が戦火によって毀損されたが、一方戦闘地域でなかった地域の博物館は博物館事業を積極的に展開している状態であったことも指摘している。

最後に、中国博物館協会が 1935 年から刊行した『中国博物館協会報』は、1937 年の盧溝橋事件により廃刊となったことが記されている。

曾と李が著した『博物館』の中での博物館の分類についての具体は、表 6-8 の如くである。

表 6-8 曾ほか『博物館』における博物館の分類



本書は、博物館の目的論と機能論について詳述したもので、博物館設置の目的は4点あると指摘する。先ず、第1点は物品の保存であり、第2点は研究の補助である。第3点は、実物の教育であり、第四点は精神の教育であるとしている。

第2章から第10章まで、主に博物館の実践的技術と日常の業務内容に触れる。また、当該期の中国は、戦争が頻繁に起こる情勢であったところから、特に戦時の博物館の事業を詳しく説明するなどの博物館の実務を中心に展開する。この部分が本書の核心とも言えよう。

曾は、博物館の応用分類を論究し、さらには博物館組織とその管理を言及する。次に、博物館自体の建設問題について検討し、建築・設備・蔵品の収集・保存などの内容を詳述している。最後に、博物館の様々な日常の業務について論述する中で、研究・教育をも網羅し、特に戦時の博物館の事業を重視する。

博物館の組織については、博物館の設立・名称・経費・行政組織などから各種の博物館に分類して説明する。博物館創設の具体的方法がわかりやすくまとめられているため、読者が明確に認識できる書籍であると評価できよう。

また、博物館の内部管理問題については、開放時間と入館料に関する問題と博物館工作人員の養成問題について説明する。本書は、開放時間と入館料などについては、海外の実例を挙げて検討する必要性があることを指摘した。また、博物館工作人員の養成にとって、本書は大学で博物館工作人員を養成する必要性があることを明確に言及した点は、博物館工作人員養成に新たな視点を投じた1書であ

ると評価できよう。

本書のさらなる特徴は、戦時における博物館事業の検討を特徴とし、西洋諸国の先例を挙げながら当該期の中国博物館の事業の必要性を指摘している。

本書の付録は、2種類があり、1つは博物館の法令であり、2つは参考文献である。

本書は、博物館の日常的な業務における様々な問題について、簡潔かつ網羅的に紹介しようとしている。本書の内容は多岐に亙るが、紙幅の関係の為か、検討内容は、概括的にまとめることを重要としている。本書を博物館学に関する指導書と位置付けるのは、有益であったと考えられる。

#### ⑥各単行本における論点の共通性と特殊性

博物館学の5冊の単行本が出版された1936年から1943年までの7年間は、前述の第二章の第二節のとおり、中国博物館学の構築期或いは第2次発展期<sup>(33)</sup>に相当する。この時期の主な特徴は、博物館において社会教育の役割を重視した点であり、また日本と西洋の博物館学観念を全面的に吸収、模倣した時代であった。

一方で、『中国博物館学理論体系形成與発展研究』<sup>(34)</sup>によれば、当該期は中国博物館学の構築が始まった段階であり、国立社会教育学院と北京大学には、博物館学に関する課程が設置された。即ち、博物館学理論を確立し、知識体系と研究標準形態を明示することにより、博物館学は独立の学問に昇華された。これらの単行本の主な目的は、博物館の理念を啓蒙し、博物館学を系統的に研究することであり、体系化を図ることであった。

1905年から中国の博物館学は実践を始め、その後30年間の応用的な実践の蓄積により、中国の博物館学を学問とすべく系統性を定めた上で、博物館事業の発展を指導する必要があることを明らかにした。当該期に上梓された通論的な単行本は、博物館理論から博物館の実務に関しても指導を試みた博物館学にとっては基礎的書籍であった。しかし、中国の博物館事業の応用実践は、出発点からの期間は短く、まだまだ理論形成が不十分で、当該期の大量の理論は西洋からの移入理論であり、実践方法も西洋を中心に参考としたもので中国独自の博物館学に到達したものではなかった。

本章では、先述の5冊の単行本が重視する内容の変化によって、2種に区分する。

第1種は、陳端志と費兄弟の著作であり、即ち理論と応用の両方を重視することを提唱し、博物館学を徹底的に理解することを旨とした。すなわち、費兄弟が著した『博物館学概論』、陳端志が著した『博物館学通論』と『博物館』を挙げる。

まず博物館学の理論について、『博物館学概論』は、大半は棚橋

源太郎による『眼に訴へる教育機関』の焼き直しに過ぎないと評価せざるを得ない部分を有している。

『博物館学通論』は、確かに基礎理念の上で欧米の新しい観点を加味しているものの、やはり模倣が中心であることは否定できない。梁吉生<sup>(35)</sup>は、当該書に対して「移植的な思考」と呼んで、「西洋の博物館学の思惟」を超えないと評価しているとおりである。確かに、このような模倣性と模倣に専従する停滞性は、中国の博物館学が発展するに当たり必要な段階であるとも思料される。しかし、中国の博物館学の進路を探る試みも、以後博物館が中国国内での増加に伴い、博物館理論も基礎を築いていった。

上記の博物館論形成の具体的内容は、博物館の発展史・博物館の分類・博物館緒機能などの分野に互るが、その中でも博物館の教育機能を主としたところから、博物館は民衆に属するとする観念が広く普及するに至った。つまり、博物館は、国民の教育を提供する場所であると考えた“博物館総体教育機関論”の芽生えであった。“博物館総体教育機関論”とは、博物館は、国民の教育を統合する役割を果たすために、教育機能をさらに強化する理論である。

次に、応用博物館学については、『博物館学概論』の中で論述され、物品の収集保存・展示・博物館の社会事業・博物館の建物などの分野として構成され、その詳細について述べている。

一方で、『博物館学通論』では、さらに細かい分類がなされている。物品の収集保存は、収集整理と製作整理に分類し、展示・説明・展示器具に細分し、博物館の社会事業は利用と宣伝に細分されている。その上で、博物館工作人員養成の内容を加えた内容となっている。

次に、陳端志が1937年に出版した『博物館』について検証する。特徴は、理論を簡略化し、応用に重点を置いたことであり、その内容については洗練されていると評価できよう。前述したように科学普及読物と見なすべきで書ある。

『博物館学概論』は、全216頁で、『博物館学通論』は270頁を数える。これに対し陳による『博物館』は62頁であった。単行本の紙幅から、『博物館学概論』と『博物館学通論』は、博物館学の学術性とその機能の全面的な紹介を目的としたのに対し、『博物館』は簡潔な普及版であると理解される。

なお、前述のとおり、『博物館学概論』と『博物館学通論』の二冊の単行本について、両者の類似性は、非常に高く、僅かに枠組みと細部に若干の違いがあるのみである。

第2種の著作は、『博物館学大綱』と曾と李が著した『博物館』であり、即ち実際の応用を重視するが、理論の紹介はある程度に留めるという構成を基軸とする。この種類の著作は、第一種の著作と

比較して、理論は全体に脆弱であり、紙面も『博物館学大綱』は全102頁であり、曾の『博物館』は全84頁である。どちらも比較的洗練された内容である。博物館の日常業務と実務応用に関しては入念に記され、博物館の日常業務の専門化と、規範化を指導することを趣旨とする。

『博物館学大綱』は、博物館学を学科として大学で開設するために編集された教科書であり、博物館事業の発展のために博物館の工作人員を養成する指導書でもあった。その中で、展示と科学博物館の設置が重要な内容として記述されている。

曾ほかが著した『博物館』は、力点を応用博物館学に置き、博物館の業務の中で言及した組織・管理・構築・設備・藏品・保存などに触れて、博物館業務の重点を重点的に言及した点が特徴である。博物館での通常的な教育機能と研究機能、更に当該期の社会環境に通じる戦時中の博物館事業に触れる。

さらに、上記の分類方法は、内容についての区分であり、ほかに、書籍を編纂する資料と実践によって、5冊の単行本を分類すると下記のとおりである。

第一類は、間接的な経験に依拠したものである。つまり、ただ単に外国文献を踏襲し編纂した陳端志・費兄弟・荊三林の著述がこれに相当する。さらに言えば、陳・費・荊の著述は、他人の著述を参考にしたもので自分の観点が極めて少ない点が特徴である。

第二類は、曾ほかが著した『博物館』の如く、自身の留学経験に基づく博物館理念と海外の文献を結合した博物館理論書である。『中国博物館学理論体系形成與発展研究』<sup>(36)</sup>によれば、西洋に遊学した経験のある曾による『博物館』は、他の著作物と比較して博物館に関する認識をグローバルな視座と専門性を以って捉え、さらに中国の実情を合理的に結合させて博物館理念を構築したものと評価されている。

確かに、「博物館」という言葉は、中国と日本のどちらが先に翻訳したのかは疑問であるが<sup>(37)</sup>、初期の中国の博物館学は、日本の博物館学の研究に影響を受けていることは否めない事実である。日本の博物館学も、西洋からの思想移入に抛り開始された点は、中国と同一であると看取される。中国の博物館学は、日本を通じて間接的学習をし、欧米で直接的な学習に至り、結果として社会にも通じる博物館学として展開するにいたっていると考えられる。

## ⑦ 付説の概要

上記の5冊の単行本の後付けは、参考文献と中国博物館学に関する活動の概要である2種類の付説がある。

### A 参考文献<sup>(38)</sup>

参考文献の種類と国別により、この著書の作成が受けた影響は確

認した。

本論文で扱った 5 冊の単行本の中で、参考文献を示しているのは、4 冊のみである。即ち、『博物館学概論』<sup>(39)</sup>『博物館学通論』<sup>(40)</sup>『博物館学大綱』<sup>(41)</sup>『博物館』<sup>(42)</sup>である。『博物館学通論』と『博物館』は、詳細な参考文献を掲げて論述しているのに対し、『博物館学概論』は棚橋源太郎による『眼に訴へる教育機関』<sup>(43)</sup>1 冊のみを参考とする。

『博物館学通論』の参考文献は、39 冊であり、付説の中で詳細に記載されている。先ずは、中国語の著作と訳本であり、具体的には表 6-9 の通りである。次に海外の参考文献は中国語に翻訳されることなく、そのまま原文で抄録されている。

また、海外の参考文献は、欧米の文献と日本の文献に二分され、その掲載数が多いことを特徴とする。日本の文献は、表 6-10 で掲載し、欧米の文献は表 6-11 で記した通りである。

『博物館学大綱』の参考文献は、1936 年に L.C. Everard が著して、李永増が翻訳した「博物館與陳列館」<sup>(44)</sup>、1936 年にアメリカ人の Clarence S. Stein が著して、趙儒珍が翻訳した「現代博物館之形式與功用」<sup>(45)</sup>である。さらに『博物館学大綱』の展示に関する部分は、同書において“李瑞年の大作”を採用した点に言及するものの、具体的な書名は記していないが、当該参考文献は資料内容から 1935 年に李瑞年が著した「欧美博物館及美術館陳列方法之演進」<sup>(46)</sup>であると筆者は考えている。また、『中国博物館学研究論著目録』<sup>(47)</sup>によると、当該期に李瑞年が著した博物館展示に関する論文は、「欧美博物館及美術館陳列方法之演進」であり、そこに記載された内容からも理解できる。なお、同様に荊三林が著した「科学館之工作及組織問題」<sup>(48)</sup>も参考文献とする。荊は、『博物館学大綱』の中で、上記の参考文献が全て『中国博物館協会会報』1 巻と 2 巻の中に載せられていると述べている。

表 6-9 『博物館学通論』の参考文献——中国語の著作と訳本

書名	作者或いは訳者	出版年	備考欄
『考古発掘方法論』 <sup>(49)</sup>	胡肇椿 訳	1934	英 G.L.Woolley 著
『中国博物館一覽』	中国博物館協会	1936	
『博物館協会会報』	中国博物館協会	1935	
『南通博物苑品目』	張謇	1914	
『亜洲文会博物院史』	亜洲文会		

『西湖博物館館刊』	西湖博物館	1933	
『民衆教育』	陳礼江	1934	
『社会教育実施法』 <sup>(50)</sup>	孫逸園	1926	

表 6-10 『博物館学通論』の参考文献——日本語の著作

書名	作者	出版年
『眼ニ訴ヘル教育機関』	棚橋源太郎	1930
『欧米ニ於キル博物館ノ施設』 <sup>(51)</sup>	後藤守一	1931
『欧米美術館施設調査報告』	帝室博物館	1921
『帝室博物館年報』	帝室博物館	1935
『全国博物館案内』	日本博物館協会	
『博物館研究』	日本博物館協会	月刊 1928年創刊
『博物館教育』	樺太廳博物館	
『樺太廳博物館案内』	樺太廳博物館	1933
『弗蘭西博物館制度ノ調査』	文部省普通學務局	
『福岡市通俗博物館要覧』	福岡市通俗博物館	

表 6-11 『博物館学通論』の参考文献——英語の著作

書名	国別	作者	出版年
The Small-Community Museum	英	W.N.Berkeley	1934
A Naturalist in University Museum <sup>(52)</sup>	米	Buthven	1931
Collected Paper-san Museum Preparation and Installation <sup>(53)</sup>	米	The American Association of Museums	1927
A Bibliography of Museums and Museum Work		Smith	1900-61
Plan for a New Museum	米	Dana	1920
The Gloom of The Museum	米	Dana	1917
Historic House Museums	米	Coleman	1933



Building The Museum Group	米	Butler	1934
Museums and Art Galleries As Educational Handbook of The Collections		Chubb	
Museums: Their History and Their Use	英	Murray,David	1904
The New Museums	米	Dana,John cothon	1917
Taxideomy and Museum Exhibition	米	Bowley	1925
Manual for small Museums	米	Coleman	1927
Report of a Journey Around The World To Study Matters Relating To Museums	米	Brigham	1913
Exploring The Earth and Its Life in a Natural History Museum		Mc Gecay	
Museum and The community	米	Rea	1933
Consolidation of The Law Relating to Public Libraries and Museums	英	Hewitt	1931
Libraries museums and art galleries year book 1935 <sup>(54)</sup>	米		1935
A report of the public museums of the British Isles <sup>(55)</sup>	英	Miers	1928
Museum Ideals of Purpose <sup>(56)</sup>	米	Cilman <sup>(57)</sup>	1918
The Industrial Museum	米	Richards	1926

なお、曾の『博物館』の参考文献は、22冊を数え全て明記した上で2種に分けている。第1類は、定期刊行物であり、表6-12に示した。第2類は、海外の単行本であり、表6-13の通りである。

表 6-12 曾ほか『博物館』の参考文献——定期刊行物

定期刊行物	出版社	出版年	備考欄
『中国博物館協会会報』	中国博物館協会	1935~37	第1・2巻、毎巻5期
The Museums Journal <sup>(58)</sup>	英国博物館協会		月に1冊
Museum News	アメリカ博物館協会		2週に1冊
Museum Work	アメリカ博物館協会	1918~28	8冊合計
Museumkunde	ドイツ博物館協会		年に4冊
bulletin des Mus'ees de france	フランス国立博物館協会		年に10冊
Museumion	国際博物館事務局		非定期刊行物

表 6-13 曾ほか『博物館』の参考文献——海外の単行本

書名と出版年	作者	発行地と備考欄
The Civic Value of Museums(1938)	Adam,T.R.	ロンドン
Museums and Schools(1931)	Board of Education	ロンドン
Historic House Museums(1933)	Coleman,L.V.	アメリカ博物館協会
Manual for Small Museums(1927)	Coleman,L.V.	ニューヨーク・ロンドン
The Museum(1917)	Jackson,M.T	ニューヨーク・ロンドン
Libraries and Museums(1930)	Kenyon,F	ロンドン
Antiques: Their Restoration and Preservation(1924)	Lucas,A.	ロンドン初版 1932 再版
The Museums and Art Galleries of the British Isles(1938)	Markham,S.F.	英国
Drawings and Measurements of furniture used by the Museum(1923)	Metropolitan Museum of Art	ニューヨーク
A Manual for History Museums(1935)	Parker,A.C	ニューヨーク
The Conservation of Prints: Drawing, and Manuscripts (1937) <sup>(59)</sup>	Plenderlcith,H.J	ロンドン
The Preservation of Antiquities(1934)	Plenderlcith,H.J	ロンドン
Die konservierung von Altertumsfunden(第一巻・第二巻 1898)	Ratbgen,F.	第一巻ベルリン初版、 1915・再版、1926・三版 第二巻ベルリン初版、 1924・再版
Adult Education in British Museums(1934)	Scherer,M.M.	アメリカ
The Natural Lighting of Picture Galleries(1927)	Walsh,J.W.T	ロンドン

以上は、この4冊の単行本のすべての参考文献である。本稿では、全部の参考文献を簡潔にまとめて表 6-14 のように整理した。

表 6-14 単行本の参考文献概況 <sup>(60)</sup> (筆者作成)

数量 別統計 単行本	類	国別				発行年			合計
		日本	欧米	中国	不詳	1930 年前	1930 年後	不詳	
	『博物館学概論』	1	なし	なし	なし	なし	1	なし	1
	『博物館学通論』	10	18	8	3	15	16	8	39
	『博物館学大綱』	なし	1	2	1	なし	3	1	4
	曾氏『博物館』	なし	21	1	なし	7	10	5	22
	合計	11	40	11	4	22	30	14	66

割合	17%	60%	17%	6%	33%	46%	21%	100%
----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	------

本稿で取り上げた著作物に掲載された参考文献を国別に観てみると、表 6-14 のとおりで、欧米系の参考文献が一番多いことが理解できる。次いで、日本の文献も多いが、当該期中国の博物館研究の参考として、裨益するところが大きかったのは西洋と日本の博物館に関する文献のようである。当時の中国で博物館学を研究したのは、日も浅く、選択できる参考資料は比較的限られており、「中国博物館協会留下的学術遺産」<sup>(61)</sup>によれば、当該期の中国博物館学にとって重要であったのは、西洋と日本の博物館学の基礎理論を参考に中国博物館の具体的な実践を総括しすることで、徐々に中国博物館学の構築を目的に展開されていこうとしたことは外国文献の利用からも理解できるのである。

## B 付説

付説の内容は、a.中国における博物館、b.中国博物館学に関する刊行物、c.博物館紀行文、d.中国博物館協会、e.法令である。以下概略を記すこととする。

### a.中国における博物館

『博物館学通論』<sup>(62)</sup>に記載のある中国の博物館は、普通博物館・専門博物館・動植物園と水族館の 3 種類に分けられる。それらの博物館の所在地・設立年月日・専門領域・経費源などをまとめて統計としている。

当該統計によると、1936 年までの中国における普通博物館は、(歴史・美術と自然・科学を含む) 45 館を数え、専門博物館は 23 館である。動植物園及び水族館は 9 館である。この統計には、中国において外国人が作った博物館と私立博物館も含まれている。

特に、自然科学博物館について、『博物館学大綱』<sup>(63)</sup>の付録の中で、「中国之自然環境與科学館应有之特殊性能」の一文によって、自然科学博物館は、中国にとって重要な役割を担う博物館である点を指摘した。その理由は、自然科学博物館を媒体として自然科学を広く社会に啓蒙し、中国の自然科学事業の発展に寄与することが国家的施策の目的の一つであったからである。

### b.中国博物館学に関する刊行物

陳の『博物館』<sup>(64)</sup>の中では、中国の博物館学に関する参考書に言及し、1936 年<sup>(65)</sup>に上梓された著書は 8 冊であると記している。内容は、目録名簿・蔵品陳列・保管修復・法案法規などに触れられている。さらに、既刊の博物館学に関する通論的な単行本については、表 6-15 の通りである。

表 6-15 陳氏『博物館』の付録一で記載された博物館学刊行物

書名	作者	備考	出版年
中国博物館一覽	中国博物館協会 編		1936
博物館参考書		印刷中	1936(予定)
博物館学通論(上海市博物館叢書)	陳端志 著		1936
古物之修復與保存(上海市博物館叢書)	胡肇椿・曹春廷共著		1936
地方博物館実施法(上海市博物館叢書)	陳端志 著	印刷中	1936(予定)
博物館学概論	費鴻年 編		1936
博物館陳列器物図説	陳端志 編	纂訳中	1936(予定)
博物館協会会報	中国博物館協会 編		1936

(“印刷中”は、原稿を出版社に送った、製本をやっている。“纂訳中”は、原稿が作成中である。)

### c. 博物館紀行文

『博物館学大綱』には、2編の見学紀行文が本文の後に付随している。1編は、傅振倫がイギリスの博物館を見学して記録した紀行文であり、他方は、劉衍淮がドイツの自然科学と工業博物館を見学して書いた紀行文である。この2編の紀行文は、旅行した博物館についての建物の配置から蔵品の分類まで、多岐にわたり詳細に記録している。これらは、中国の博物館が、西洋に学ぶための情報を提供している。

### d. 中国博物館協会

なお、陳が著した『博物館』の中では、中国博物館協会を論及している。中国博物館協会は1936年に開催した第1回年会において、「博物館」の3文字に代わりに、ウ冠の下に「博」である **博** をロゴとして使うようになったと述べている。建物の中で、多くの蔵品がある意味と考えられる。

### e. 法令

曾が著した『博物館』は、民国政府が発表した『古物保存法』を付録にしている。これは、1930年6月7日に民国政府が発表し、14条の条文より成り立つ。これは、古物の定義・帰属・保存の役割・流通・考古遺跡の発掘などの関連内容に関し定めた法律である。

前述の参考文献と付録の統計状況によって、当該期の中国博物館学は、自国での実践経験が浅かったために、博物館学が先進する欧米の例を参考にしていたことを窺い知る。確かに、当該期の中国博物館学界は、博物館学の構築に関心を持ち始めた。もちろん、これも当該期の博物館が動乱の最中にあった国家の窮乏を救い民族の存続を図る歴史的な使命が付与されたことに関わりがある。

法令の公布は、国家が博物館事業について規制と保護を行っていることを示しているものであり、博物館事業も国家の支持を得て行われていることが理解できるのである。

## 小結

上記の中国の博物館学に関する論著からみる博物館学事業の展開状況から、1935年からの中国博物館学は確立期から発展する段階にあったと言っても過言ではない。当該期の中国の博物館学は、西洋と日本の博物館学の知識を吸収したうえで換骨奪胎ともいえる中国独自の博物館学の発展を試みた時代であった。これは、中国博物館学の構築期と主張する。

なお、当該期の博物館に必要なことは、博物館学の応用による博物館業務の展開を早急に指導しなければならないことであった。民衆にとっては、博物館が社会に普及することは、基礎的な文化に触れることもあった。博物館研究員にとっては、博物館は博物館についての学術的研究を専門に行うために良好な場となる。

1935年に、中国の博物館学研究者や博物館関係者は、約半世紀に亘る博物館を実践した後、中国の博物館学は西洋の博物館学より独立し、中国独自の科学としなければならないことを認識するに至った。それは、学術の視点からの体系的な中国博物館学の構築意識によるものであった。

当該期の博物館学に関する研究は、その後の中国での博物館学構築に大きな役割を果たしたが、そこには様々な課題も存在していると看取される。

1935年、中国博物館協会が結成され、中国博物館学界は組織的且つ具体的な学術研究活動を目標するに至った。なお、博物館学研究者にとっては、当時存在した博物館学に関する種々の疑問を解決する機会を得ることとなったのである。これを契機として、中国の博物館学界は、博物館学の科学としてのシステム構築の基盤がここに形成され、その成果は、現場である博物館の経営、諸機能にも大きな影響を与えることとなった。

なお、本章で5冊の単行本を簡単に紹介した。この5冊の単行本は、構築期の中国の博物館学界が中国の博物館学を構築する目的で学術書として公刊された書であり、今日の研究視座からすると不備な点も著しく存在するが、それらは中国の博物館学の構築の歴史であり、また中国の博物館の歴史でもあるといえる。これらの歴史の把握は、なにも博物館学史に有益である点に留まらず、中国における近代化への移行を確認できる歴史でもあると考える。

現在、中国の博物館学界では、中国博物館学の発展を明らかにし、

中国博物館学史の形成を試みる思潮が盛んになってきている。学史の整理と研究を展開することは、中国博物館学の発展には極めて重要事項であると考えられる。換言すれば、西洋からの換骨奪胎をはかり中国の博物館の特徴に適合する博物館学の体系を模索してきた歴史を明らかにすることで、これからの中国博物館の将来像を求めることが出来ると思われる。

現在、構築期の中国博物館学について、一部の中国学者には当該期の博物館学研究の段階がまだまだ脆弱な段階にあるという意見もあり、当該期の基礎理論と実践的技術に対する研究は未成熟で、完全な科学システムを支え得る状況に至っていないといった、自虐的な意見も多数あることも事実である。

本章は、中国博物館学の構築期における中国博物館学の基礎理論・学術著論・専門組織の構成・学芸員養成・学術交流などの多方面から、中国博物館学界が目標とした博物館学の構築の到達点と課題を具体的に分析することにより、中国の博物館学史の検証・中国の博物館学構築の一助となることを目的とするものである。さらに、この過程において明らかとなった博物館学への取り組みの成果は、現在も継続して行われている中国の博物館学の構築作業の重要な資料として、参考と警告の役割を果たすことになるものと考えられる。

一方、当該期には、日本の博物館学の中国への影響は最盛期と式微期を同時に至ったと筆者は主張する。「最盛期」と主張する原因は、当該期に日本の代表的な博物館論を輸入したから。この時期前には、中国博物館学界は主に日本の博物館或いは博覧会の形式を模倣したが、日本の博物館論をあまり論及しなかった。この時期に中国博物館学界は、日本の博物館論を意識的に学び始めた。一方、「式微期」と主張する原因は、日中戦争により、当該期に日本に学ぶことに対する熱情がなくなったから。1931年の満州事変・1937年盧溝橋事件である一連の事件によって、中国社会は戦争の時代であった。さらに、1937年の日本軍による中国の都市への空爆と南京事件・1939年からの重慶爆撃には、中国人民に対して、大きな傷害を与えた。そのために、中国博物館学界は日本の博物館学に対する態度は、複雑な状態になった。中国博物館学界は、日本の博物館学を学ぶことが見送った。

また、1949年に中華人民共和国の建国とともに、中国博物館学界は、日本の博物館学との交流が再興した。これは、今後の課題として、それからの中国博物館学の具体的な展開について、中国国内の状況と外国の状況を比較した上で、様々な専門書・訳書・論文などの学術的資料を結びつけて、中国の博物館学の構築状況を全面的に理解しようと考えている。

一方、1931年に、満洲事変が勃発して、関東軍により中国東北部

である満洲全土が占領される。1932年に、日本人は、清朝最後の皇帝の愛新覚羅溥儀を満洲国皇帝として扶植し、満洲国を建国した。満洲国は、中国東北部に存在した国家であるが、実際の統治者は日本人であった。そのために、この時期において日本人は、満洲国による博物館活動が盛んに展開されていた。これらの活動は、今後の中国東北部の博物館学は、大きな影響を与えた。これに関する内容は、今後の課題として残される。

さらに、この時期における東アジアの博物館学の展開は、中国博物館学の展開との影響も今後の課題として残される。

## 註

- (1)費畊雨・費鴻年 1936『博物館学概論』中華書局
- (2)棚橋源太郎 1930『眼に訴へる教育機関』賓文館
- (3)青木豊編 2012『明治期博物館学基本文献集成』雄山閣 pp5 - 6.
- (4)全日本博物館学会編 2011『博物館学事典』雄山閣 p.361
- (5)『眼に訴へる教育機関』の目次に斜体・太字にする目次名は、『博物館学概論』がそのまま使用する目次名である。なお、『博物館学概論』の目次に下線を引く目次名は、『眼に訴へる教育機関』の目次に具体的に対応しない目次名であるが、その内容をまとめて作成したものであると思われる。しかし、中国の博物館に関する内容は、新たな内容である。
- (6)徐堅 2016『名山：作為思想史的早期中国博物館史』科学出版社出版 p.370
- (7)満州事変は、1931年9月18日に起きた武力紛争であった。その発端は、関東軍が南満州鉄道の線路を爆破した事件であった。なお、満州事変によって、関東軍は、満州全土を占領した。中国には、「九一八事変」も呼んでいる。
- (8)陳端志 1936『博物館学通論』上海市博物館
- (9)註(2)と同じ
- (10)團伊能 1921『欧米美術館施設調査報告』帝室博物館
- (11)後藤守一 1931『欧米博物館の施設』帝国博物館
- (12)尹侖 2017「仏国人記録的中国第一座博物館—雲南府博物館—」『雲南档案』
- (13)註(1)と同じ
- (14)曾昭燏・李濟 1943『博物館』正中書局
- (15)註(8)と同じ
- (16)陳端志 1937『博物館』商務印書館
- (17)Georges Cordier 1915 『*Le Musée de Yunnan-fou*』 Bulletin de l'École française d' Extrême-Orient

- (18)梁吉生 1988「論旧中国博物館事業的歴史意義」『中国博物館』
- (19)梁吉生 2006「博物館学本土化発展及其今後路向」『中国文物科学研究』
- (20)徐玲 2014「博物館與近代公共教育」『博物館研究』
- (21)李守義・辛迪 2013「民国時期文博類期刊探析」『中国博物館』
- (22)この表が触れた刊行物は、李守義が著した「民国時期文博類期刊探析」と徐玲が著した「中国博物館学学科發展的回顧與反思」により整理する。
- (23)段勇主編 2010『中国博物館学研究論著目録』新華出版社
- (24)註(1)と同じ
- (25)この意見は、同時期の陳端志が著した『博物館学通論』の中で、南通博物苑が初めての中国人によるオリジナルな博物館という意見と相違している。しかし、現在の中国博物館学界は、南通博物苑が中国人によるオリジナルな博物館の嚆矢との意見を持っている。
- (26)註(8)と同じ
- (27)新文化運動とは、1910年代後半の中国で勢いよく勃興した文化運動である。新文化運動は、表面には中国の伝統的な文語文から口語文（白話文）への転換した文学革命であるが、実際には中国の伝統的な封建社会・礼儀道德などを打破し、民主主義と科学思想を中心とする新文化を提唱した思想革命である。中心人物となったのは、陳独秀・魯迅・胡適などの西洋の教育思想を受け入れた知識人である。
- (28)陳端志 1937『博物館』商務印書館
- (29)荊三林 1941『博物館学大綱』中国文化服務社陝西分社
- (30)註(14)と同じ
- (31)『宣和博古図録』とは、宋代の金石学に関する著書である。北宋時代の1107年（大觀初）に宋徽宗の勅命により王黼などが編集した全30巻の古器物図録である。徽宗の宣和内府に収蔵される殷から唐までの各時代を中心とした青銅器類（839件）を集録し、考証している。青銅器は、二十類に分類され、臨画している。銘文も拓本がある。
- (32)『西清古鑑』とは、清代の金石学に関する著書である。清時代の1749年（乾隆十四）に清乾隆帝の勅命によって梁詩正らが編集した全40巻の古器物図録である。清宮廷所蔵の殷から唐にかけての古銅器・錢貨（1,529件）などを図示し、考証を加えた。
- (33)中国博物館学の第1次発展期は、前述のとおり、1905年の南通博物苑の設立から、1935年の中国博物館学会が成立されるまでの間である。この観点は、中国博物館学界の主流である。一方、最新の資料（尹侖 2017「仏国人記録的中国第一座博物館—



雲南府博物館一」『雲南档案』)によって、中国において初めて開設された博物館は、1901年に設立された雲南府博物館である可能性が指摘されているところから、第1次発展期を1901年から1935年までとする可能性がある。しかし、資料の不足のために、雲南府博物館が設立された時間が不明の状況にある。そのために、第1次発展期は、1905~35年の間であると考えている。

(34)李慧竹 2007『中国博物館学理論体系形成與發展研究』山東大学・博士論文

(35)註(19)と同じ

(36)註(34)と同じ

(37)中国博物館学界では、「博物館」という言葉は長きに亙り日本人の使用に始まるものと把握されてきたが、陳建明は、1839年に林則徐が編訳した『四洲志』の中で、初めて「博物館」という用語が使用されていることを指摘した。また、1842年に魏源は、『四洲志』を底本として『海国図誌』を上梓しているが、この『海国図誌』は、1854年には日本でも刊行されて、広く日本で知られるところとなった。このような状況の中で「博物館」なる用語も、『海国図誌』を通じて正式に日本に伝わった可能性が指摘されている。(陳建明 2005「漢語『博物館』一詞的產生與流傳」『回顧與展望—中国博物館發展百年—2005年中国博物館学会學術研討會文集』)また、このことは、家永真幸も論及した。(家永真幸 2013「中国の「博物館」受容に関する初歩的検討」『東京医科歯科大学教養部研究紀要』(43)pp.27-42)

(38)本章で列挙した参考文献は、出版時期と国別の明記は、筆者が収集して整理したものであり、明記しなかった箇所は様々な原因によって収集していないものである。

(39)註(1)と同じ

(40)註(8)と同じ

(41)註(29)と同じ

(42)註(14)と同じ

(43)註(2)と同じ

(44)L.C. Everard 著 李永増訳 1936「博物館與陳列館」『中国博物館協會會報』

(45)Clarence S. Stein 著 趙儒珍訳 1936「現代博物館之形式與功用」『中国博物館協會會報』

(46)李瑞年 1935「歐美博物館及美術館陳列方法之演進」『中国博物館協會會報』

(47)註(23)と同じ

- (48) 荊三林 1936 「科学館之工作及其組織問題」 『中国博物館協會會報』
- (49) この論文は、英国人が論じたが、陳が訳文を参考文献にあげた。そして、ただ訳者のみを明記してあるため、この論文は、中国語の参考文献に分類する。
- (50) 正確な書名は、『社会教育施設法』である。
- (51) 正確な書名は、『欧米博物館の施設』である。
- (52) 正確な書名は、A Naturalist in University Museum である。
- (53) 正確な書名は、Collected Papers on Museum Preparation and Installation である。
- (54) 正確な書名は、Libraries museums and art galleries year book 1935 である。
- (55) 正確な書名は、A report on the public museums of the British Isles である。
- (56) 正確な書名は、Museum Ideals of Purpose and Method である。
- (57) 作者の名前は、Gilman である。
- (58) 正確な刊行物名は、The Museums Journal である。
- (59) 正確な書名は、The Conservation of Prints: Drawing, and Manuscripts である。
- (60) この表の統計は、本章で選んだ単行本の中で挙げる参考文献による。時間と国別の内容は、筆者が記入したが、書誌情報が不明な文献は全て「不明」とした。
- (61) 梁吉生 2005 「中国博物館協會留下的學術遺產」 『中国文物報』
- (62) 註(8)と同じ
- (63) 註(29)と同じ
- (64) 註(28)と同じ
- (65) 『中国博物館一覽』『博物館参考書』『古物之修復與保存』『地方博物館実施法』『博物館陳列器物図説』は、刊行年が不明であったが、陳端志の1937年刊行の『博物館』の付説である「博物館に関する参考書」には、これらの単行本の刊行年は「去年」と明記しているところから、出版年は1936年と筆者は推測するものである。

## 第七章 1949年以前の中国博物館学に対する評価と中国の博物館と博物館学の現状

1949年以前の中国博物館学とは、揺籃期・確立期・構築期を含めている時期の中国博物館学である。1949年に中華人民共和国の建国とともに、中国の博物館学は、新たな時期に入れた。この時期から現段階に至って、中国博物館学は、急速な変化を受ける。すなわち、中国博物館学は、変革期・迷走期・中興期・充実期を経ている。

本章では、主に1949年以前の中国博物館学に対する評価の論述と、それから現段階の中国の博物館と博物館学の発展状況である内容である。

### 第一節 1949年以前の中国博物館学に対する評価

中国と西洋の往来は、清末から日増しに盛んになっていた。西洋の近代思想が齎されるに伴い、中国における近代的博物館は、とくに西洋の宣教師によって生まれた。中国は、洋務運動（1860～90年代）・戊戌の変法（1898年）・光緒新政<sup>(1)</sup>（1901～11年）・辛亥革命（1911年）・新文化運動（1915～23年）などの事件を経過して、博物館に関する思想を受け入れた。それゆえ、当該期の中国博物館学の発展に関する研究の必要性は、著しくなったといえよう。

1930年代から中国博物館学界が博物館学の構築を意識的に展開したことは、下記の事象からも頷ける。1935年には、中国博物館学の発展に努める博物館学研究者らが結集して、中国博物館協会が成立した。同協会は、中国博物館の将来のあるべき姿を求めて研究に邁進した。当該期の研究成果は、前述した費畊雨と費鴻年が著した『博物館学概論』、陳端志が上梓した『博物館学通論』と『博物館』、荊三林が出版した『博物館学大綱』、曾昭燏と李濟が著述した『博物館』の5冊の通論的な単行本をはじめとして、同じく博物館学に関する著書や論文が多数刊行されたことを特徴とする。論著の具体的内容は、陳列展示の理論と方法・博物館史・文物保護政策などの多方面に関する博物館学の研究成果であった。

なお、創刊された定期刊行物と各種類の特集は、博物館学に関する学術交流での研究の深さを効果的に促進させた。また、当時開催された中国博物館協会の年会は、中国博物館学界の先駆者らを集めて、中国博物館学の進路を積極的に検討するものであった。中国博物館協会の総会で提案された事案は、博物館学を大学の講座に組み入れることと、博物館の専門職員を養成することと、博物館学の学術性の規範化などに関する3点の構想は、初歩的には成功を得たものであったと評価できよう。

しかし、今の中国博物館学界では、博物館学史に関する研究の注

目度が少ないため、さらに構築期の中国博物館学の発展史に関してはほとんど無関心であると言っても過言ではない状況にある。

本節では、構築期の中国博物館学の成果と展開状況に対する評価を挙げて、博物館学史研究に一定の研究内容を提供し、全体の中国博物館学史変遷の脈絡を透徹して整理する探求を初歩的に行うことである。さらに、当該期の研究は博物館学が構築する指導理論を探究した時代であって、中国の現段階での博物館学の構築にとって、基礎的な役割を果たしたものと考えられる。

## 1、1949年以前の中国博物館学の成果

1949年以前の中国博物館学の展開状況は、当然のことながらまだまだ成熟していないことが窺える。その原因は、当該期の中国博物館学は、主に西洋と日本の博物館学理論に依拠し、中国自身の発展状況を結び付けることが稍不足していたと推測するところからである。しかし、当時の博物館学が自身の成長によって取得した成果がそれ以降の中国博物館学の展開に推進力を齎したことは、事実であると考えるのである。

### (1)理論研究

当該期の中国博物館学は、博物館学理論についての研究が未だ脆弱であったと考えられている。『中国博物館学研究論著目録』<sup>(2)</sup>によれば、当該期における博物館学理論に関する論文は5編だけに留まる。具体的には表7-1の如くである。

表 7-1 1949年以前の中国博物館学理論に関する発表した論文一覧（筆者作成）

発表年	作者名	論文題目	雑誌名
1925年	楊鐘健	「論陳列館」	『学生雑誌』
1936年	王幼僑	「博物館與民族復興」	『中国博物館協会会報』
	荊三林	「地方博物館之目的與組織」	
	楊鐘健	「關於陳列館的意見」	『科学』
1946年	蔣大沂	「博物館與學術研究」	『中央日報』

その中で、楊鐘健が提唱した「三使命」と呼称する理論学説は、当該期に最も影響力を持っていた理論学説であったといえよう。「三使命」学説は、博物館の三つの職能に対応する三つの使命を明確に示した。具体的には、博物館の「研究機能・教育機能・保管機能」と博物館の「科学研究使命・民衆教育使命・物品保存使命」に一対一対応することである。当該理論学説は、基本的な博物館学理論の構造を備えており、当該期および今後の博物館学研究に大きな影響を与えていた。「中国博物館学学科発展的回顧與反思」<sup>(3)</sup>によると、「三使

命」学説は、博物館機能の協調的な発展を強調し、科学研究が博物館の発展に重要な主題であるとする学説を提唱している。さらに、自然類及び科学技術類博物館を創設することと科学的な知識を普及させることの重要性を殊に提唱していたということである。

当該期の博物館学理論に関する研究は、西洋と日本の博物館学理論を重視して、さらにそれを参考にしていたために、博物館の教育機能を大いに提唱していた。すなわち、当該期の中国博物館は、単純な宝物庫のイメージを離脱して、民衆向けの公共資源となる施設・機関と成るべく切実な願望を持っていた。

一方、学術論著の刊行について、単行本の方では、発刊されている博物館学通論的な単行本が5冊に留まることは前述したとおりである。さらに、蔵品の収集・保存・陳列に関する博物館学専門書も刊行された。なお、博物館学に関する専門の刊行物も大きく展開しており、多くの著名な学術刊行物が発刊された。例えば、『東方雑誌』『科学』『燕京学報』『文化財週刊』などである。「中国博物館学学科発展的回顧與反思」<sup>(4)</sup>によると、当該期は博物館に関する歴史・名称・性質及び業務などの多くの方面に関する論文は、数多く発表されていたことが窺える。

博物館学に関する学術論著が出版されたことは、中国において近代的な博物館観念を社会に伝播する推進力となった。さらに、博物館理論の発展は、中国博物館学の展開を促進したという点でも意義があったと考えられる。

## (2)学術組織

中国における初めての博物館に関する全国的な学術組織は、1935年に成立した中国博物館協会である。当協会は、中国の博物館業務に従事している関係者たちが、博物館事業を盛んにすることで合意し、創設された同人協会である。

「中国博物館協会及其学術活動」<sup>(5)</sup>によれば、1934年に発起人である丁文江・王献唐・馬衡・袁同礼を中心とする68人は、『組織中国博物館協会縁起』を発表して、中国博物館協会の設立を提案した。1935年5月18日に、中国博物館協会は、当時の北平（今の北京）景山の綺望楼で設立大会を開催した。当時の故宮博物院の院長であった馬衡は、司会者として中国博物館協会の趣旨・目的を明確に指摘した。『博物館学通論』<sup>(6)</sup>によれば、『中国博物館協会組織大綱』では、中国博物館協会の組織の基礎として、中国博物館協会の名称・趣旨・会員・組織・経費・選挙・会議などの多方面の内容を明確に規定した。さらに、『中国博物館協会組織大綱』では、実行委員会と専門委員会の分業を明確にして、日常の行政事務と専門の学術を区分した。

当該期の中国博物館協会は、中国博物館学の積極的な発展を促進することに力を入れて、博物館学の書籍類を刊行し、博物館年会を開催した。博物館学の基礎理論と応用技術の両方が共に進歩することを促進していた。

1936年9月に、中国博物館協会は、民国中央執行委員会の民衆指導委員会の審査許可を経て、教育部を通じて許可を得た。同時にその会報である『中国博物館協会会報』が創刊された。1936年の春、中国博物館協会は、『中国博物館一覽』を編集出版した。これは、中国で初めての博物館の情報を網羅的に集めた資料性の高い書籍である。1936年7月20日に中華図書館協会は、青島国立山東大学で年会を開催した。

「知識・理論・体系・学科—中国博物館学研究軌跡検視—」<sup>(7)</sup>によれば、中国博物館協会の成立は、中国博物館学に対する研究ブームを起し、中国博物館学に対する研究はこれにより協会を中心に展開していく局面となった。これは、中国博物館学が組織的で係統的な学術研究の活動を展開する先触れであった。

一方、中国博物館協会の年会において、参加者は、中国博物館事業の発展を検討し、中国博物館の進路を積極的に求めた。その中で注意すべきことは、会議では博物館専門職員の養成の要求を明らかに示した。

第1点は、専門学校と学術機関で博物館の課程を増設する議案を明確した。

第2点は、留学生と官費生の募集定員の中で、博物館学専攻の定員が追加された。

しかし、中国博物館協会の発展の勢いは、日中戦争で断ち切られた。確かに、中国博物館協会は、日中戦争が収束した1948年からしばらくして回復したが、1949年の徹底的な社会変化により解散に至ったのである。

中国博物館協会の解散によって、中国博物館学界には、博物館学に関する学術組織がなかった。そのために、中国博物館学界は、管理者と組織者がいない状態になった。

当該期の中国では、国内国外の戦争が打ち続き、国家と民族が揺らいだ時代となったが、当時の有識者らは中国民衆の愛国心を覚醒させて、中国博物館学の発展に良好な基礎を打ち立てた。

中国博物館協会の成立は、中国博物館の関係者らが学術を検討し、博物館事業の発展を促進することを指導していた。中国博物館協会が提唱した学術交流は、国内だけではなく、さらに国際的な交流に力を入れた。そして、博物館展示の概念の形成も、中国博物館協会が欧米の博物館建築及び展示の関心を提唱するためであった。

### (3) 専門職員の養成

1949年以前の中国博物館学界は、活気に溢れて急激な発展を呈したため、博物館が各地で数多く開館し、博物館専門職員の需要は急激に高まった。

「中国博物館協会及其学術活動」<sup>(8)</sup>によれば、1936年に開催された中国博物館協会第一回年会は、参加者らが博物館専門職員の養成についての問題を検討し、中華民国教育部は博物館専門学校や博物館学科課程の設置を提案した。博物館学や考古学などに関する学科の公費生<sup>(9)</sup>と留学生の定員を検討議案とした。博物館学の教育は、中等学校から大学までとし、海外への留学も含めて受け継ぐことを可能としたことは、整合性を重視したものであった。

「知識・理論・体系・学科—中国博物館学研究軌跡検視—」<sup>(10)</sup>の中では、当該期に大学における博物館課程を下記のように評価されている。

這一時期一些学者試図通過学校設置博物館学科課程、建立公認的博物館学理論框架、形成比較完整的知識結構体系、構築自身的学科研究範式、培養特有的学科文化內涵、以使博物館学成為一門独立的成熟学科。

(当該期にある学者らは、大学で博物館学に関する課程を設置しようとし、公認的な博物館学の理論的な枠組みを構築して、比較的完璧な知識体系を形成させて、学問研究の基準を構築し、特有な学問文化の内在的要素が持てるよう、博物館学を一つの成熟かつ独立した学問にさせる試みを行った。 筆者訳)

一方、国立社会教育学院は、1942年に重慶市壁山の校舎で「図書館博物館学系」を設置し、博物館学に関する課程を開催した。これは、中国の大学で初めての博物館学に関する課程を開講したことになり、同時に社会への明示であり、専門職員養成における記念的政策であった。国立社会教育学院の教授である荊三林は、初めて大学講堂で博物館学を講義した教授であった。このことで、中国の博物館学教育は、専門学術科目として変革した。荊が1941年に出版した『博物館学大綱』は、博物館学講座の教材として使用されていた。

『国立社会教育学院概況』<sup>(11)</sup>により、国立社会教育学院の「図書館博物館学系」は、4年制の学制が施行された。大学1年生から3年生は、大学で博物館学の課程を履修し、4年生は博物館実習に従事することが決められていた。なお、卒業については、下記の3点の要件を取得することが求められていた。

第1点は、在学中に132単位を修得すること。

第2点は、博物館実習に参加すること。

第3点は、卒業論文を提出すること。

なお、「我們的母校、国立社会教育学院：一所具有創新特色的高等

学府」<sup>(12)</sup>（我々の母校、国立社会教育学院：創新的な特徴を持っている大学 筆者訳）によれば、博物館学コースの必修科目は、博物館学通論・考古学・金石学・博物館史・博物館学専著研究・中国古代器物学・博物館経営法・標本製作・博物館行政、博物館問題討論などであり、10科目28単位に合計した。大学1年生と2年生は、共通必修科目を履修し、大学3年生と4年生は、博物館学コースの必修科目を履修することを予定している。

さらに、「本院歴届畢業生学生論文題目一覧」<sup>(13)</sup>によれば、1945年に「図書博物館学系」の卒業生である張迺が提出した卒業論文『近代博物館發展之趨勢』は、初めての中国博物館学に関する卒業論文と見なされている。

北京大学は、1947年に「博物館専修科」を開設して、博物館学の課程を教授した。「中国博物館学学科發展的回顧與反思」<sup>(14)</sup>によれば、北京大学「博物館専修科」は、アメリカ留学の経験を持つ韓寿萱が主任を務め、裴文中・唐蘭・沈從文・陳夢家・張政烺などの有名な学者が講師を務めた。しかし、残念なことに、北京大学の「博物館専修科」は、試験段階であって一般的には入学はできなかった。

このように、博物館の専門職員の養成については、当該期の中国博物館学界が重視しており、多くの優秀な研究者の力が投入されていたと考えることができる。

#### (4)学術交流

当該期の中国博物館学は、主に西洋と日本の博物館学の理論と実践に頼っている特徴を持っていた。もちろん、当該期は、西洋の博物館学が博物館学説の主導的地位を占めており、中国の博物館学は発言権がなかった。中国の博物館学は、実践が弱く、当該期では西洋と日本の経験を主に参考としなければならなかったのである。

なお、中国博物館学が西洋と日本の博物館学を参考にしたのは、次の2つの理由からである。

1つは、西洋と日本の博物館に関する研究経験と成果を間接的に参考にしようとする目的からである。言い換えれば、西洋の文献資料を直接に中国語に翻訳することである。章新民が翻訳した『図書館博物館美術館的關係』<sup>(15)</sup>・趙儒珍が翻訳した『現代博物館之形式與功用』<sup>(16)</sup>・李永増が翻訳した『博物館與陳列館』<sup>(17)</sup>は、その一例として挙げられる。

さらに、研究者は、西洋と日本の著述に基づいた上で中国の実態を結合させて、中国博物館学の進路を分析・探究した。例えば、『博物学概論』<sup>(18)</sup>は、『眼に訴へる教育機関』<sup>(19)</sup>を種本としたものであったことは既に記したとおりである。『博物館学通論』<sup>(20)</sup>は、2巻本の『Muséographie』<sup>(21)</sup>を種本としたものである。そして、『博物



館学通論』の参考文献が 39 種類を数え、そのうち 21 種類は欧米の博物館学著述であり、10 種類は日本の博物館学の著述である。また、木刻画と銅版画の挿図があるが、40 枚の銅版画のうち 34 枚は、米・英・独・日・伊・蘭・シンガポール・ベルギーなど海外の博物館の外観図である。

もう 1 つは、研究者ら自身の留学あるいは博物館見学の経験を利用し、西洋と日本の博物館学の発展状況と研究方法を中国に輸入することであった。研究者は、中国博物館学の発展を指導し、中国博物館学発展の問題を解決することを期待した。例えば、傅振倫が著した『英国博物館参観記略』<sup>(22)</sup>・劉衍淮が著した『独国自然科学及工芸博物館遊紀』<sup>(23)</sup>は、その一例である。曾昭燏が著した『博物館』<sup>(24)</sup>は、曾がドイツのベルリン美術館とミュンヘンのドイツ博物館での研修期に著した著述を、帰国後に整理したものである。これらの著論は、すべて著作者が自らの経験に合わせて得た結論と感想である。

そして、中国の博物館学界は、中国の長い歴史と文化を世界に広めようとする試みがあった。なお、『中国博物館学理論体系形成與発展研究』<sup>(25)</sup>によれば、中国の文物(文化財)が西洋で初めて公開されたのは 1935 年のことである。故宮博物院、古物陳列所<sup>(26)</sup>、河南省博物館(今の河南省博物院)、安徽省図書館<sup>(27)</sup>から選んだ銅器・玉器・磁器・書道・絵画などの文物が、イギリスのロンドンで開催された中国芸術の国際展覧会で披露された。これは、中国と世界の文化交流を促進し、中国博物館界が西洋に関する理解と交際を深めてきた証左であると考えられることができる。

## 2、1949 年以前の中国博物館学に対する評価

当該期の中国博物館学の展開に対する評価は、中国博物館学界において今でも異なる観点となっている。梁吉生が著した「論旧中国博物館事業的歴史意義」<sup>(28)</sup>の中で、1949 年以前の博物館学の展開については、下記の通りの評価である。

博物館事業是人民群眾的事業、總結旧中国博物館歴史需要有一个全面的觀點、需要結合歴史实践、具体地分析。正確地總結歴史經驗、才能更有利地推進今天博物館事業的發展。

(博物館事業は、人民大衆の事業である。1949 年以前の中国博物館の歴史をまとめることは、全面的な觀點が必要であり、歴史的实践を結合し具体的に分析する必然がある。歴史の経験を正しく総括することは、まさに今日の博物館事業の発展を有利に進めることができる。 筆者訳)

つまり、時代の客観性によって制約されたことについては、当該期の社会環境の下で、客観的分析を行うべきであると考えられる。

### (1)1980年代中期以前

1980年代からは、学界のなかで中国の博物館学の枠組みの構築目標が明確に提出された。とくに中国における博物館学の沿革を見直し、1949年以前の中国博物館学の発展に関してより客観的な評を行うようになった。

1980年代に中国の特色を持つ博物館学が再構築されたとともに、歴史に関する回顧と評価は、行われていた。1980年代まで、中国博物館学界による1930年代からの中国博物館学の展開に対する評価は、2回にわたって行われていた。具体的には、1回目は1950年代、2回目は1980年代前期である。

上記の2回の評価に関する具体的な内容は、構築期における中国博物館学の発展と成果に否定的な観点を持っていた。なお、上記の2回の評価は、1949年以前の中国博物館学が帝国主義と封建主義に基づいて展開されていると批判された特徴を持っている。つまり、南京国民政府の統制時期における展開した博物館事業について全面的に否定的な態度を持っていた。

### (2)1980年代中後期

しかし、1980年代中後期に入ると、梁吉生を代表とする博物館学者らは、中国での博物館事業の展開と軌跡を改めて振り返り、1949年以前の博物館事業を再評価した。この動向は、1949年以前の中国博物館事業を全面的に弁証法的に見るべきであり、当該期に中国博物館事業の展開が歴史的な条件の下で研究しなければならないとする思想に基づいたものであった。

梁が出版した「中国博物館協会留下的學術遺産」<sup>(29)</sup>によれば、当該期の博物館学者の博物館学に対する研究は、主に博物館の教育機能と研究機能に二分された。さらには、1949年以前の大学での博物館専門職員の養成と博物館学に関する学術著述の刊行は、大きな注目を受けたことであった。梁は、1949年以前の中国博物館学が大きな発展と成果を遂げたことを肯定した後、当該期の中国博物館学が「并未建立起適合我国国情的科学的理論体系」（中国の国情に適合する科学的な理論体系を構築していない 筆者訳）と記した状況にあって、いまだ「形成與發展」（形成と發展 筆者訳）の段階にあったことを指摘した。そして、当該期の中国博物館学は、諸々の問題が存在した故に、「博物館学遠不是一門成熟的学科」（博物館学は、まだ成熟した学ではない 筆者訳）と考えていたようである。

また、梁は1949年以前の中国博物館学は、ただ象徴的な価値のみを持つとの意見を提唱した。その理由について、当該期の中国博物館学者が明晰な学術的自覚を備えることなく、ただ欧米の考え方

に依拠しており、また単に西洋と日本の博物館学を解析しただけのものであったところから、かかる思潮は中国博物館学の実際にそぐわないものであったと考えたためである。

それ故に、梁は、中国博物館学の本格的な始まりは1979年10月であるという主張<sup>(30)</sup>を持っていたのである。1981年に開催された博物館学討論会では、中国博物館学界が博物館学を構築するための学術的命題を初めて提出した。このことは、現在の中国博物館学を構築する基礎の形成であった。

さらに、1983年には中国博物館学会<sup>(31)</sup>は、国際博物館会議(ICOM)に加盟し、1998年には博物館学の学問的地位が初めて明確になり博物館学は2級学科<sup>(32)</sup>として認知された。これにより、学術としての博物館学とその教育は、制度として保証されるにいたったのである。これにより中国博物館学は、学科として形成されていくのであった。

しかし、当該期の中国博物館学に関する専門教育は、学術理論が完璧ではないという問題があった。例えば、学科の分野と特定のテーマの研究が弱い点、知識の欠如が露呈される点、学術用語が不足していた点、学科内容が脆弱な点、研究視野が狭大な点、研究方法の単一化や制度の整備を無視した研究などの問題があった。これらの諸問題により、博物館学は成熟した学問に至らなかったのである。

### (3)1990年代

1990年代から、中国博物館学界は、中国の博物館発展史の考察を次第に重視してきた。蘇東海が著した「中国博物館学研究綜述」<sup>(33)</sup>の中で、1930年代は、中国博物館学の最初の発展時期であるとする意見を持っており、当該期を中国博物館学の構築の嚆矢であると指摘している。

さらに蘇は、当該期の中国博物館学はその大半が西洋と日本の博物館学の思想と博物館論をそのまま参照しただけのものであったが、当該期の中国博物館学に対して見所があったと主張している。蘇は、  
在這個時期,無論是西方還是中国的博物館学研究,都是處於学科建設的起步階段。

(西洋と言わず中国と言わず、当該期の博物館学に関する研究は、学を構築する初歩的な段階になった。 筆者訳)

という新たな観点を提唱するに至っている。そして、当該期の中国の博物館学は、中国における文物を守り、民衆の視野を広げる重要な歴史的な使命を持っていた。この歴史的な使命は、当該期の知識人が自覚して訴えたものであった。蘇は、このような観点を評価し、当該期の中国博物館学の展開に肯定的な態度を持っていた。

#### (4)2000 年代

2000 年代に入ってから、中国における博物館学に関する研究は、さらに急速な発展を遂げていた。

湖南省博物館の館長である陳建明が著した「關於開展中国博物館学史研究的構想」<sup>(34)</sup>によれば、1849～1905 年までの時期は、中国博物館学の萌芽期と見なすものの、1905～49 年までの時期は中国の博物館学の基礎が形成された時期と見なすことができるとする考え方を持っている。さらに、当該期における博物館学に関する研究について、以下の如くの提唱を行っている。

中国人創辦博物館的早期實踐活動、‘拿来主義’與中国博物館学的誕生以及該時期的主要學術活動及成果。

(中国人が早期の博物館を創設した実践活動と、西洋と日本の博物館学を鑑みることや、中国博物館学の誕生及び同時期における學術活動と成果である。 筆者訳)

そして、中華人民共和国における文物・博物館系統人文社会科学の重点研究課題である<<中国博物館学史研究>>課題組は、陳を代表者として、中国における博物館学史研究を徹底的に開始した。「中国博物館学史」課題組が発表した報告論文である「知識・理論・体系・学科—中国博物館学研究軌跡檢視—」<sup>(35)</sup>によれば、1905 年は中国博物館学の濫觴期であると評価された。一方、中国博物館学界は、1935 年から博物館学に関する學術著述が多量に出版された点に注目した。<<中国博物館学史研究>>課題組は、当該期における中国博物館学について

雖然学科体系還很不成熟、但有不少学者在自己的著作中有意識地構建博物館学学科架構。

(学科として体系がまだ成熟していないにも関わらず、多くの学者が自著の中で博物館学を学科として意識的に構築した。 筆者訳)

という意見を持っている。<<中国博物館学史研究>>課題組は、これらの著述が中国博物館学の構築を促進させた役割があったと評価している。

2005 年には、中国の博物館事業は 1905 年に張謇が南通博物苑を設立して以来百年を迎えた。中国博物館学会は、百週年を記念するために、學術シンポジウムを開催し、その折に『回顧與展望：中国博物館發展百年—2005 年中国博物館学会學術研討會文集—』<sup>(36)</sup>を記念出版している。当該論文集により、1949 年以前の中国博物館学史は注目され、当該期の中国博物館学に対する評価は、1980 年代より大いに高揚したことが記されている。なお、当該論文集の刊行は、中国博物館学史の學術的重要性がさらに広く認識されるに至った原因になったと考える。

「中国博物館学百年発展述略」<sup>(37)</sup>を著述した甄朔南は、中国における博物館学史の発展について検討している。甄は、南通博物苑を設立した張謇の成果を顕彰し、「我国的博物館学是随着我国第一座博物館-南通博物苑的建立而開始孕育、奠基并逐步形成的。」（中国の博物館学は、中国初めての博物館である南通博物苑の設立に従って展開し、徐々に形成されていくものである。筆者訳）と述べられている。さらに、甄は、張を中国博物館学を系統的に研究した第一人者であると評価している。そのうえで、1930年代の中国博物館学の重要な出来事や研究成果をまとめ、当該期を「旧中国時期博物館学的孕育與発展」（旧中国時代の博物館学の育成と発展 筆者訳）の時期であると指摘したのであった。

中国博物館協会（元中国博物館学会、2010年に改称）は、2013年に中国博物館協会の第5期第8回常務理事会及び『中国博物館』雑誌創刊30周年学術研究会を開催した。この学術研究会は、「博物館学学科建設與博物館事業發展」（博物館学の構築と博物館事業の展開について 筆者訳）を主題として議論したものであった。

「博物館学学科建設與博物館事業發展学術研討会綜述」<sup>(38)</sup>によって、当該会議で、鄭州大学の副教授である徐玲は、「中国博物館学学科史檢視」を論題として、中国博物館学の濫觴と展開を検討した。徐は、中国博物館学の濫觴は、1930年代であるとする学説の保持者である。その理由は、下記のように記録している。

博物館学史の考察対象包括該学科形成演變過程・知識積累・方法運用・觀念演進、及其在学科不同發展階段所發揮的作用等、而非博物館機構的各个具体事例或一般知識的簡單拼湊。

（博物館学史に関する考察の対象は、ある博物館の具体的な事例もしくは一般的な知識を簡単に寄せ集めることではない。学の形成と沿革・理論・実践・理念の進化及び学が發展段階に果たす役割などを包括することである。 筆者訳）

徐は、1930年代の中国博物館学に関する中心的な研究課題は、中国の博物館学の発展に対して具体的な実践によって、博物館学の基本的な法則を明らかにしたことである点を指摘している。

さらに、徐が著した「中国博物館学学科發展的回顧與反思」<sup>(39)</sup>の中で、上記の観点について検討している。徐は、「博物館学作為知識名稱在20世紀30年代開始使用、可視之為中国博物館学学科的產生標誌。」（『博物館学』という用語は、1930年代に使用され始めた。これが、中国博物館学の濫觴と見なされた。 筆者訳）と述べている。当該期における中国博物館学の成果を挙げ、中国博物館学の濫觴が1930年代であることは事実である点を確認した。

このように、中国博物館学に関する評価は、研究の深化と視点の変化に伴って改善されていることが窺える。今の中国博物館学界は、

最初の単一的な論調で 1949 年以前の中国博物館学が中国博物館学史に属することを否認する観点を捨てると同時に、1949 年以前の中国博物館学に対して多種多様な評価が認められるような共存状態になっている。

1930 年代は、中国博物館学の隆々とした構築期であり、当該期の中国博物館学は、西洋と日本の博物館学に極力学ぶと同時に中国博物館学に関する理論研究の視点が国際化する傾向にあった。一方で当該期の中国博物館学は開始されたばかりであったため、当然のことながら博物館学に関する研究は、十分に体系づけられていなかった。しかしながら、当該期の博物館学界は、博物館学が積極的に展開された中で直面した問題を探究し、さらに問題の解決方法を積極的に探究した。当該期の不安定な社会情勢のために、具体的には広がった戦火により中国博物館学の発展は、停滞を余儀なくされたことは事実である。

一方、当該期の中国博物館学界は、西洋博物館学の研究動向に深い関心を有していたことから、中国博物館学の発展は国際的視座に基づく展望性を持っていたことを窺い知ることができたのである。

当該期における中国博物館学は、博物館における実践があまりに不足していた点で、当該期の優勢を十分に利用し中国の博物館学を発展させられなかったと考えられる。実践経験が欠如するため、1930 年代における中国博物館学界は、西洋と日本の博物館学に対する研究成果を参照することを通じて、中国の博物館学の進路を求めた。他方で、西洋と日本の博物館学の成果に頼っていることや、そこから得た博物館学に関する理論的体系は、中国において実施されている博物館活動に整合していない面が存在していたことは事実であった。

現段階での中国博物館学の体系は、まだ構築中であると言える。その理論体系の形成は、一挙に成し遂げることができなく長期的な視点と、大量の時間と精力的な投入が必要である。中国の博物館学は学科の構築に費やした長い年月を振り返ると、今における博物館学の構築は、より適切な発展方式と方向を探る模索段階にあると考えられるのである。

## 第二節 中国における博物館の現状

構築期の後、中国の博物館学は、変革期・迷走期・中興期などの時期を経て、現在の充実期になる。

変革期・迷走期・中興期などの時期は、中国の博物館学にとって激烈な変化の時期であった。

変革期は、中国博物館学がソビエト社会主義共和国連邦の博物館

学に学ぶ段階であった。この時期の中国博物館学は、従来の発展と違い、ソビエト社会主義の唯物史観などの観点を導入し、主流の考え方になった。

迷走期には、文化大革命の勃発により、中国博物館学の発展が制約を受けた。

中興期に入ると、中国博物館学は、文化大革命時期の博物館学に対する再考し、中国博物館学に対する適切な発展方向を推進し始めた。

現在の充実期には、中国博物館学が自らの特徴を探して、中国博物館学に対する適切な発展方向をさらに推進している。

中国博物館学会は、2005年9月に中国博物館事業の百周年を記念するために研究発表会を開催し、『回顧與展望：中国博物館発展百年—2005年中国博物館学会學術研討會文集—』と題する記念論文集を上梓した。また、中国博物館協会のホームページ<sup>(40)</sup>によって、この記念会の開会式には、中国博物館の公式サイトを作成した。さらに、同年の12月に中国博物館学会設立七十周年記念会を開催し、中国博物館学会理事長の張文彬は「継承優良伝統・伝承中華文化・開創博協工作新局面」（優良な伝統を継承する・中華文化を伝承する、中国博物館学事業の新たな局面を打開する 筆者訳）と題する発言稿によって発言した。これを機として、中国博物館学は、積極的な発展の時期を迎えるに至ったのである。

## 1、博物館数

2000年代に入ると、中国における博物館は、爆発的に設置された。しかし、統計の実施主体が異なることから、統計調査の結果による博物館数には大きな違いがある。

具体的には、国家統計局が2020年2月28日に発表した「中華人民共和国2019年国民経済和社会発展統計公報」<sup>(41)</sup>によって、第十一の「文化旅遊・衛生健康和体育」の中で、博物館数は3410館と掲載した。また、“博物館與社会文物司”が2020年5月18日に発表した文物博發〔2020〕9号である「国家文物局關於公布2019年度全国博物館名録的通知」<sup>(42)</sup>には、博物館数は5535館と明記されている<sup>(43)</sup>。博物館数の違いが出ていく原因は、博物館とする統一的な基準はないと考えられる。

さらに地域によって、具体的な博物館名・博物館の性格・博物館の等級<sup>(44)</sup>・無料開放・藏品数・珍貴文物数・陳列展覽・教育活動・入場者数などの内容を詳しく記録した統計表も作成されているが、全国的見地からは不統一な状況であるといえよう。

## 2、分布

「国家文物局關於公布2019年度全国博物館名録的通知」には、

2019年の中国大陸における博物館は、下記の表7-2のように省単位で多い順に列挙されている。

表7-2 中国大陸における博物館の分布（「国家文物局關於公布2019年度全国博物館名録的通知」により整理）

地域	博物館数	地域	博物館数	地域	博物館数	地域	博物館数
山東	567	甘肅	227	雲南	139	貴州	94
浙江	396	湖北	226	河北	135	重慶	91
河南	348	黒龍江	207	上海	135	天津	64
陝西	307	山西	196	福建	135	寧夏	63
広東	293	内モンゴ	178	遼寧	112	青海	38
江蘇	292	北京	157	新疆	104	海南	33
四川	242	江西	156	吉林	102	西藏	11
安徽	232	湖南	155	広西	100		

上記の表7-2によって、経済力が高い地域と歴史が長い地域には、博物館数が多いことが理解できる。具体的には、中国大陸の東南部における博物館数の分布が多く認められる点が特徴である。

### 3、種類

博物館は、分類の仕方もいくつもの捉え方によって異なることである。

博物館の分類について日本では、展示資料の種類により、「総合博物館」・「人文系博物館」・「自然系博物館」に大別している。

さらに、設置母体により、「国立博物館」・「公立博物館」・「私立博物館」に分けている。

さらにまた、1951年に公布された「博物館法」（昭和26年法律第285号）によって、博物館は「登録博物館」・「博物館に相当する施設」に区分している。

一方、中国では博物館を分類する場合には、下記の基準（表7-3）に依拠している。

表7-3 博物館の主な分類基準

分類の基準	博物館の種類
設置母体	国有博物館・非国有博物館
展示内容	総合類・歴史類・芸術類・科学與技術

さらに、「博物館分類與專業科技博物館」<sup>(45)</sup>に依ると、1988年以前の中国における博物館の分類基準は主に「専門性博物館」・「記念性博物館」・「総合性博物館」の三種類としていた。その後、中国における博物館は、収蔵品の性格によって芸術・歴史・総



合・科学與技術である四種類の区分基準が追加され、当該四種類の分類方法は中国における主流派の分類方法となっている。

一方、中国における博物館は、種類すなわち専門領域において多種多様性が認められる。現段階で中国における博物館の種類は、伝統的な「総合博物館」・「歴史博物館」・「自然博物館」・「芸術博物館」・「記念館」である他に、「民弁博物館」<sup>(46)</sup>・「遺址博物館」<sup>(47)</sup>・「生態博物館」<sup>(48)</sup>・「社区博物館」<sup>(49)</sup>・「行業博物館」<sup>(50)</sup>などの特色のある博物館も多数存在している。

また、設置母体による分類では、中国における博物館の種類は、国有博物館と非国有博物館が基本である。国有博物館は、従来からの設置主体として、最も重要な位置を占めるが、近年に非国有博物館も飛躍的な増加と著しい活躍がみとめられる。

“博物館與社会文物司”が2017年11月16日に公布した文物博函〔2011〕1929号である「關於印發『博物館事業中長期發展規劃綱要（2011—2020年）』的的通知」<sup>(51)</sup>には、2020年までに中国国内での博物館の構成計画では、民弁博物館数が全国博物館数の2割を占める目標を設定している。

また、上記の綱要には、専門博物館と特色博物館の設立に対して大きな関心を持っていた。

大力發展立足行業特点和地域文化特色的專題性博物館。

（中略）加強芸術類博物館（美術館）的發展。（中略）大力發展自然科技類博物館。（中略）建設好国家民族博物館、支持民族地区的博物館發展。（後略）

（中国は、行業と地域文化の特徴を持っている博物館・

（中略）美術館など芸術類博物館・（中略）自然科技類博物館・（中略）国家民族博物館（後略）の發展を促進ことが提唱する。筆者訳）

なお、そのうえで遺址博物館・中国の特色ある自然・文化に関する生態博物館・社区博物館・工業遺産博物館<sup>(52)</sup>などの特色博物館にも論及している。

上記のように、中国が専門博物館と特色博物館を重視することによって、中国は博物館の多様化を重視していることが理解できるのである。

#### 4、博物館における新たな動向

##### (1)博物館におけるデジタル化

近年の世界では、科学技術と情報の發展が飛躍的に向上している。そのために、博物館におけるデジタル化は、重要な議論になりつつある。なお、博物館におけるデジタル化は、主に博物館資料の

デジタル化とオンライン博物館の2種の内容に区分される。

### ① 博物館資料のデジタル化

2019年に“中国博物館協会博物館数字化專業委員會”の年會が開催された。その年會の紀要<sup>(53)</sup>によって、今回の會議では博物館資料のデジタル化が、博物館資料の保存と活用に関する具体的な内容を検討した内容が読み取れる。

中国における博物館資料のデジタル化は、主に博物館資料の保存と展示及び情報伝達（広報）に関する内容である。

博物館資料のデジタル化が保存における活用は、主に博物館資料のスリーディー（3D）模型を作って、博物館資料の修復とレプリカの制作などに関する活用である。

博物館資料のデジタル化が展示における活用は、主にオンライン博物館の活用である。

また、第5世代移動通信システム（5G）と人工知能（AI）など高速通信技術の活用は、博物館にとって、重要な情報伝達手段であり、利用方法であることが提唱された。

さらに、当該會議では、『新技術模式新體驗—桂林博物館智慧化建設的探索與思考—』（新たな技術と新たな體驗—桂林博物館のデジタル化に関する探索と考— 筆者訳）・『南京博物院針對特展的運營統計監測試驗』（南京博物院が特別展の開催に対する統計・監測・試験 筆者訳）・『基於講座的觀衆行為分析—以2018年廣東省博物館舉弁講座為例—』（講座を受ける觀衆の行為に対する分析—2018年に廣東省博物館で開催した講座を例として— 筆者訳）・『文物文献数字化応用的現状及趨勢』（文物と文献のデジタル化活用の現状と趨勢 筆者訳）・『館藏文物三維数字化応用体会』（博物館における文物の3D画像とデジタル化の活用について 筆者訳）・『工業設計視野下的文物保護趨勢』（工業デザインによって文物保護の趨勢 筆者訳）・『激活傳統—数字文化遺產的活化與傳播探索—』（傳統を活性化する—文化遺產のデジタル化活用と傳播について— 筆者訳）・『碑帖数字化資源采集和管理平台的研究』（碑帖のデジタル化に関する資料収集と管理の研究 筆者訳）・『創新技術在文物数字化保護中的応用』（文物のデジタル化の保護によって新たな技術の活用 筆者訳）・『碑刻数字拓印技術進展—以景雲碑為例—』（碑刻の石刷りのデジタル化—景雲碑を例として— 筆者訳）・『从“数”到“据”—博物館的物信融合—』（“数”から“データ”—博物館における実物資料と情報の一致— 筆者訳）・『博物館安防建設』（博物館の安全について 筆者訳）『博物館三維数字化保護與創新探索』（博物館における3D画像の保護と創新について 筆者訳）などの博物館におけるデジタル化の新たな研究が矢継ぎ早に発表された。

その発表会の後で、“文物デジタル化保護技術暨成果展”（文物デジタル化の保護技術及び成果に関する展覧会）も開催された。なお、仮想現実（VR）技術の流行とともに、博物館はVR技術を利用して、体験型の展示方法を広めることも提唱された。さらに、スマートフォンのアプリを利用した無料音声ガイドのシステム開発も推奨された。

## ② オンライン博物館

今年には、新型コロナウイルスの影響によって、世界的に多くの博物館が一時閉館せざるを得ない状況に陥った。かかる状況にあって、オンライン博物館は、博物館の一つの発展方向とも考えられ、再び当該理論とシステムは注目されたが、新型コロナウイルスによる感染の落ち着きに伴い通常の博物館では今後どうなるかは不明である。

今年の「国際博物館の日」の世界共通テーマは、「平等を実現する場としての博物館：多様性と包括性（Museums for Equality: Diversity and Inclusion 2020）」である。「2020年国際博物館日走向デジタル化」<sup>(54)</sup>は、「国際博物館の日」テーマを説明し、特にオンライン博物館に賛成している。

一方、オンライン博物館に関する観点は、賛否両論である。確かに、オンライン博物館は、地域と時間を問わず、博物館における展覧と蔵品の細部が見学できる積極作用があるが、実物が見えないことがオンライン博物館の欠点である。

しかし、オンライン博物館は、博物館の宣伝活動に対して促進効果があることは確認するまでもない。さらに、博物館は、閉館せざるを得ないような不測の事態が出来した場合、オンライン博物館が博物館に代わり運営を保障するといった利用法も考えなければならない。従来からの展示理論である、“二元展示”の理論をさらに延長して、実物博物館とデジタルによるオンライン博物館の2種を兼ね備えた“2元博物館”を提唱したい。

## (2) 博物館群

2018年12月18日に、文化和旅遊部が「宜融則融、能融尽融、以文促旅、以旅彰文」<sup>(55)</sup>（文化と旅遊をできるだけ結合し、文化によって旅遊を促進し、観光によって文化を広める 筆者訳）とする構想をさらに明確し、都市の発展を促進する方策を提唱した。

本提唱により、中国は新たな摸索期に突入し、この新たな模式は博物館を観光者と結節する施設の役割を持っている。

また、複数の博物館を集めて、博物館群を作成し、多種多様な博物館が同時に利用できることのより、観光の基本でもある学習範囲が大幅な拡大が予想される。なお、異なる性格の博物館は、不足を

互いに補い合い、博物館の向上が見られるような進歩をもたらす。

『重構與發展：博物館集群化運營研究』<sup>(56)</sup>では、博物館群については、下記のように説明している。

各博物館及相關企業集中分布、并共同从事博物館相關工作活動。博物館作為傳播文化和科學的重要場所、通過集群可以提高自身的經濟效益、豐富博物館文化消費內涵、鞏固博物館與其消費者的情感關聯、同時還對社會可持續發展作出有價值的貢獻。

（博物館が連携団体と集中分布することは、博物館にとって、有利なことである。博物館は、連携団体と一緒に活動が行える。文化と科学技術を広める重要な場所である博物館は、博物館群の形成によって、より大きな経済効力を取る。なお、博物館は、博物館群の形成によって、見学者の情感に触れ、見学者との交流を深める。さらに、博物館群の形成は、持続的発展が可能な社会の発展にとって、促進作用がある。筆者訳）

上記の説明によって、博物館群の長所が理解できる。すなわち、博物館群の形成は、博物館・観覧者・社会にとって種々の有利な点が発生するものと考えられよう。

しかし、現段階での中国では、博物館群の形成は難しく、現在は実践経験を積む段階であると考えられる。

### 第三節 中国における博物館学の現状

#### 1、理念

中国における博物館の従来からの発展理念は、主に博物館の藏品資料の収集保存と一般展示の機能を重視することであった。しかし、新たな時期に入ると、中国における博物館の発展理念は、変革を迎えた。

つまり、現段階で中国の博物館の発展理念は、博物館が社会・経済とのバランスをとったうえでの、人を中心に置いた教育機関であることである。さらに、博物館の主導権は、国家が全て把握しているところから、博物館自らでの管理が可能となるように変更することが必要である。

また、「新發展理念下的中国博物館發展趨勢探析」<sup>(57)</sup>によって、現段階では中国博物館の発展は、10の時代的な特徴を持っていると明記されている。すなわち、「優勢競争時代」・「系統協作時代」・「超限融合時代」・「跨域分館時代」・「功能拓展時代」・「特色陳展時代」・「文化創意時代」・「綠色發展時代」・「話語

競争時代」・「消費導向時代」である。

「優勢競争時代」とは、現段階で博物館が自身の優勢力によって競争する時期になるとすることである。すなわち、博物館の発展は、博物館資料・地元政策・専門職員などの諸方面から成り立つのである。そのために、上記の博物館に関する具体的な内容の優勢が保持できれば、これらの優勢点は博物館の発展の支えとなる要点である。

「系統協作時代」とは、現段階で博物館が博物館間の連携を重視する時期にあることである。すなわち、博物館の発展は、博物館における館内・館際<sup>(58)</sup>・国際の連携を利用すべきである。

「超限融合時代」とは、現段階で博物館が多種多様な連携を強化すべき時期になることである。すなわち、博物館の発展は、異国・異民族・異分野・異学問との間の連携を利用することである。

「跨域分館時代」とは、現段階で博物館が分館を多量に設立する時期になることである。すなわち、博物館が発展を促進するためには、博物館は世界に複数の分館或いは相当施設を設立すべきであるとする考え方であるが、博物館設立の理念にてらした場合疑問も存在していると考えられる。なお、相当施設とは、博物館の事業に類する事業を行う施設である。

「機能拓展時代」とは、現段階で博物館が多種多様な機能を持っている時期にあることである。すなわち、当該期における博物館が文明を伝承し、社会に奉仕し、人類平和と発展を促進する新たな義務を持っている。さらに、博物館の機能は、従来からの収集保存・展示・教育・研究などの諸点の機能に加えて、外交機能・文創機能・評価機能・社交機能・娯楽機能を持つことが必要であるとする指摘である。

「特色陳展時代」とは、現段階で博物館における展示活動が自らの特徴を持つべきであるとする時期になることである。

「文化創意時代」とは、現段階で博物館の発展が文化を利用すべき時期になることである。つまり、博物館が文化によって人気ある創意商品を創造し、ミュージアムショップの運営を促進すべきである。

「緑色発展時代」とは、現段階で博物館の発展が最新の科学技術を利用すべき時期になることである。つまり、博物館は、蔵品の保存と展示の最適化を図るべきである。なお、「緑色発展時代」の「緑色」とは、科学技術の利用によって、環境を守ることが目指されることである。

「話語競争時代」とは、現段階で博物館は国際的な発言権を得るべきで時期になることである。博物館は、国家にとって国際形象の宣伝機関として大切な役割を担う。国家は、博物館を利用し、国家理

念と民族文化を広めている。

そのために、博物館は、ニューメディアを利用すべきであり、発言権をもって、真実の情報を広める必要を指摘している。

「消費導向時代」とは、現段階で博物館が運営を維持するために、集客力を高める時期になることである。すなわち、博物館は「物中心」から「人中心」へと変更し、観覧者の需求を充足すべきである。なお、博物館には、アプリ音声ガイド・児童区・救急救命士などの配置が必要である。

## 2、研究方向

2016年3月23日に“第一届全国博物館学優秀学術成果終評会”には、論文・著書・訳文・訳著などが優秀な研究として採択された。具体は下記の表7-4に掲載したとおりである<sup>(59)</sup>。

表 7-4 第一届全国博物館学優秀学術成果①

(「第一届全国博物館学優秀学術成果公示」から転載)

篇名	作者	出处	種類
「論我国博物館教育發展的新趨勢」	丁福利	2013『中国博物館』(03)	論文
「二維碼技術及其在博物館中的応用探析」	馬晶晶	2014『文物世界』(02)	論文
「博物館與青少年教育」	毛穎	2010『東南文化』(01)	論文
『体験在博物館学習中の意義及其実現』	樂俏俏	浙江大学・硕士学位论文論文2008年度	論文
「新博物館学運動的姊妹館—生態博物館與社区博物館弁析」	呂建昌等	2013『東南文化』(01)	論文
「物件探索学習理論応用於博物館学生教育初探」	劉平	『中国博物館協会博物館学專業委員会2013年“博物館與教育”學術研討會論文集』	論文
「博物館(MUSEUM)的定義及其理解」	嚴建強等	2001『中国博物館』(01)	論文
「国際生態博物館運動述略及中国的实践」	蘇東海	2001『中国博物館』(02)	論文
「博物館環境監控及相关物聯網技術応用需求分析」	吳来明等	2011『文物保護與考古科学』23(03)	論文
「博物館定義與当代博物館的發展」	宋向光	2003『中国博物館』(04)	論文
「張謇的建館思想探析」	張文立	『回顧與展望:中国博物館發展百年-2005年中国博物館学会學術討論會文集-』	論文
「民弁博物館發展の現状、問題和政策思考」	陸建松等	2011『文物世界』(03)	論文
「数字博物館及其相关問題分析」	陳剛等	2004『智能建築與城市信息』(09)	論文
「博物館與無形文化遺產保護」	陳燮君	2002『中国博物館』(04)	論文
「大都会芸術博物館教育工作述評」	果美俠	2011『中原文物』(02)	論文
「論生態博物館社区的文化遺產保護」	周真等	2002『貴州民族研究』(02)	論文

『博物館兒童教育研究-兒童展覽與教育項目的視角』	周婧景	復旦大學·博士學位論文 2013 年度	論文
「關於新時期博物館職能的思考」	單霽翔	2010『中國博物館』(04)	論文
「學習單:博物館與學校教育合作的有效工具」	孟慶金	2004『中國博物館』(03)	論文
「李濟與西方博物館知識在中國的傳播」	徐玲	2011『中原文物』(04)	論文

表 7-4 第一届全国博物館学優秀學術成果②  
 (「第一届全国博物館学優秀學術成果公示」から転載)

篇名	作者	出处	種類
「求变與保護:中国首座民族生態博物館的处境與对策」	黄萍等	2004『西南民族大学学报(人文社科版)』(10)	論文
『論博物館展示設計的注意控制』	焦麗丹	浙江大学・硕士学位论文2007年度	論文
『博物館館藏文物的物權研究』	焦晋林	中国人民大学・硕士学位论文	論文
「什么是新博物館学」	甄朔南	2001『中国博物館』(01)	論文
「用改進的旅行費用法評估文化旅遊資源的經濟價值-以湖北省博物館為例」	詹麗等	2005『軟科学』(05)	論文
「变形的“文本”-梭戛生態博物館的人類学觀察」	潘年英	2006『湖南科技大学学报(社会科学版)』(02)	論文
「2004-2005年中国博物館觀衆調查報告-“關於加強博物館展示宣傳和社会服務工作的調查研究”之“觀衆調查研究”報告」	潘守永	2005『中国博物館』(02)	論文
「高校博物館学與学科發展:从技能培訓到批判博物館学」 杰西·佩德羅·勞倫特	李慧君	2014『中国博物館』(02)	訳文
「博物館與帰還的正義:遺產、帰還與文化教育」 莫里亞·辛普森	張春美	2009『國際博物館(中文版)』(Z1)	訳文
「注解環境:遺產與新技術」 彼得·馮·門施	侯春燕	2006『中国博物館』(04)	訳文
「讓公衆參與博物館考古」 尼克·梅里曼	黄洋	2012『南方考古』(01)	訳文
「博物館-可塑性、時間性」 讓·保羅·馬蒂農	韓俊艷	2009『博物館研究』(02)	訳文
『中国博物館学基礎(修訂本)』	王宏鈞	上海古籍出版社 2001	著書
『博物館的沉思:蘇東海論文選』	蘇東海	文物出版社 2010	著書
『博物館教育活動研究』	鄭奕	復旦大学出版社 2015	著書
『当代美国博物館』	段勇	科学出版社 2003	著書
『浙江博物館史研究』	蔡琴	中国書店 2014	著書
『經營博物館』 帕特里克·博伊蘭	國際博協中国 国家委员会· 中国博物館学	訳林出版社 2010	訳著



	会		
『博物館変遷—博物館歴史與功能読本』 愛德华・P・亜歴山大 瑪麗・亜歴山大	陳建明 主編	訳林出版社 2014	訳著

なお、次回の2019年4月17日に“第二届全国博物館学優秀学術成果評選終評会”でも同様に、論文・著書・訳著などが優秀な研究として採択された。具体的には、下記の表7-5の如くである(60)。

表 7-5 第二届全国博物館学優秀学術成果  
「第二届全国博物館学優秀学術成果評選結果公示」から転載

篇名	作者	出处	種類
「博物館観衆研究的反思與演變—基於实例的観衆体験分析」	王思怡	『中国博物館』	論文
「博物館教育の新趨勢」	宋向光	『中国博物館』	論文
「詠城:探索博物館青少年展教結合的創新之道」	楊丹丹	『中国博物館』	論文
「智慧博物館核心系統初探」	張小朋	『東南文化』	論文
「如何講好博物展覽中的故事」	鄭奕	『国际博物館(全球中文版)』	論文
「闡釈系統:一種強化博物館展覽傳播效応的新探索」	周婧景	『東南文化』	論文
『対話在博物展覽中的意義及応用研究』	胡凱雲	浙江大学・博士学位論文	論文
「博物館展覽中的照明設計探討」	索経令	『照明工程学報』	論文
『博物館微生物検測與防治』	武望婷	北京燕山出版社	著書
『博物館與近代中国公共文化(1840—1949)』	徐玲	科学出版社	著書
『世界博物館最新發展訳叢』	宋嫻	上海科技教育出版社	訳著

上記の表7-4と表7-5によれば、第一届全国博物館学優秀学術成果が論文27篇、著書5冊、訳文5篇、訳著2冊である。第二届全国博物館学優秀学術成果では論文8篇、著書2冊、訳著1セットである。また、第一届全国博物館学優秀学術成果数が第二届全国博物館学優秀学術成果数より多い原因は、第一屆が第1回のために参加した論文・著書・訳文・訳著などの作成時間が「2001年1月1日至2014年12月31日」であったが、第二屆に参加した論文・著書・訳文・訳著などの作成時間は、評選年の前三年以内であり、すなわち、「2015年1月1日至2017年12月31日」と明確に規定したことに拠るものである。

さらに、内容は、教育・展示・保存・運営・ニューメディア・特色のある博物館・博物館学理論・博物館学史・国際交流などの内容を含めてる。

現段階では、中国博物館学の研究方向は教育を重視しながら、様々な方面をも模索している。また、研究者数の増加につれて、博物館学に関する研究課題は多様化を来たし、数多くの優れた研究成果が生み出されているのが、現在の中国博物館学特徴である。

### 3、大学教育

#### (1)学部

中国における大学の学科には、普通に「学科門類」<sup>(61)</sup>「1級学科」<sup>(62)</sup>「2級学科」<sup>(63)</sup>「3級学科」<sup>(64)</sup>であるに分けられている。

なお、1998年に中国における大学の学部で、歴史学(学科門類番号:06)については、下記の表7-6のように付置されている。

表 7-6 中国の大学・学部で歴史学の設置  
学科番号表 (1998年)

学科番号	専業名称
0601	歴史学類(部分)
060101	歴史学
060102*	世界歴史
060103	考古学
060104	博物館学

しかし、教育部は、2012年9月18日に「普通高等学校本科専業目録(2012年)」<sup>(65)</sup>(発文字号:教高〔2012〕9号)を發布し、歴史学が下記の表7-7のように変更されている。

表 7-7 中国の大学・学部で歴史学の設置  
学科番号表 (2012年)

学科番号	専業名称
0601	歴史学類
060101	歴史学
060102	世界史
060103	考古学
060104	文物與博物館学

上記のように、中国の大学には、博物館学のための設置はなく、博物館学は文物と博物館学を同視準にに置いた中での設置が特徴である。なお、中国語で“文物”といえは、主に博物館の実物資料を指摘する。

一方、中国の大学に実際に設置される際には、「博物館学」と称する専攻或いはコースがないのが現状である。博物館学は、普通に「考古学」の研究方向、或いは「文物與博物館学」に含まれているのが現状である。

また、2020年6月に出版された『中国考古学年鑑2018』<sup>(66)</sup>には、第六編の「考古教学」で「2017年畢業的本科生人数」(2017年学部卒業生数 筆者訳)という統計がある。その中で、名称の中に「博物館学」が認められるのは、下記の大学である。

北京大学考古文博学院文物與博物館学專業  
吉林大学文学院文物與博物館学專業・・  
四川大学歴史文化学院考古学系文物與博物館学專業・・  
南京師範大学社会發展学院文物與博物館学系・・  
南開大学歴史学院考古学與博物館学系文物與博物館学專業  
復旦大学文物與博物館学系博物館学專業・・・  
復旦大学文物與博物館学系文物與博物館学專業・・  
北京聯合大学応用文理学院文物與博物館專業・・  
中央民族大学民族学與社会学学院文物與博物館学專業・・  
中国人民大学歴史学院考古学及博物館学專業・・  
西南民族大学旅游與歴史文化学院文物與博物館專業・・  
遼寧師範大学歴史文化旅游学院文物與博物館学系・・  
重慶師範大学歴史與社会学院文物與博物館学專業・・

さらに、今年の全国普通高等学校招生入学考試<sup>(67)</sup>に於いて、文系で676分(総分750分)を取った女子高生である鐘芳榮は、北京大学の考古学專業を選んだことにより、考古学と文物與博物館学が話題を齎し人気となった。かかる状況にあって、「文博头条」という公式 Wechat アカウントは、「考古学」と「文物與博物館学」をさらに広めるために、現在の「考古学」と「文物與博物館学」の状況をおおよそ統計している。この統計は、政府の公式の統計ではないから、統計データが不完全の場合がある。そのために、不完全データを扱う場合は、確認できる最小値を記録し、その後“以上”を付けている。

具体的には、「文物與博物館專業」を設立する大学は、51校以上存在しており、「考古学專業」を設立する大学は28校以上、「文物保護與修復專業」を設立する大学は9校以上、「文物保護技術專業」を設立する大学は8校以上である。なお、297校には、「歴史学專業」を設立し、「文物博物館」・「文博與考古」などの研究分野がある。さらに、高職院校<sup>(68)</sup>には、25校で「文物保護與修復専科專業」を設立しているのが現在の中国の大学教育での現状である。

## (2)大学院

2011年3月8日に、国務院学位委員会教育部は、「学位授予和人才培养学科目録(2011年)」<sup>(69)</sup>(発文字号:学位〔2011〕11号)を發布し、大学院で設置する学科を規定した。さらに、2018年4月に更新され、現在に至っている<sup>(70)</sup>が、歴史学に関する学科には大きな変更はなかった。学科門類が06の「歴史学」の詳細は、「0601 考古学」・「0602 中国史」・「0603 世界史」である3つの1級学科で構成されている。なお、專業学位<sup>(71)</sup>には、「0651 文物與博物館」が設定されている。

なお、「博物館学」は、明確的な学科番号がないが、「0601 考古学」の一つの研究分野として選択される。

一方、『中国考古学年鑒 2018』<sup>(72)</sup>の第六編の「考古教学」で「2017年畢業的碩士研究生」(2017年大学院・修士卒業生数 筆者訳)によって、2017年に博物館学を研究する修士人数は、下記の表7-8のように記録されている。

表 7-8 博物館学専攻の修士人数表  
(『中国考古学年鑒 2018』より転載)

学校名・学院	専攻	人数
北京大学考古文博学院	文物與博物館專業碩士	4
吉林大学文学院考古学及博物館学	博物館学	5
	文物與博物館專業碩士	6
山東大学歴史文化学院考古学系	文物及博物館・	4
四川大学歴史文化学院考古学系	文物與博物館学	1
	文物與博物館專業碩士	8
鄭州大学歴史学院考古系	文物與博物館專業碩士	2
南京師範大学社会發展学院文物與博物館学系	文物與博物館專業碩士	6
厦門大学人文学院歴史系考古專業	文物與博物館專業碩士	1
南開大学歴史学院	文物與博物館專業碩士	3
復旦大学文物與博物館学系	文物與博物館学・	5
中央民族大学民族学與社会学学院考古学系	文物與博物館專業碩士	3
首都師範大学歴史学院考古系・	文物與博物館專業碩士	5
中国人民大学歴史学院考古文博系	考古学及博物館学・	1
重慶師範大学歴史與社会学院考古文博系・	博物館学・	1
	文物與博物館專業碩士	1
東北師範大学歴史文化学院考古系・	文物與博物館專業碩士	1
遼寧大学歴史学院考古学系・	文化遺產與博物館・	1
雲南大学歴史與档案学院歴史系	文物與博物館專業碩士	6

上記の人数は、修士論文の題目が「博物館」或いは「動物園」・「記念館」・「遺跡公園」などの博物館及び博物館に相当する機関

・施設名を明確に記した論文に留まるところから、上記以上の人数は予想される。

また、『中国考古学年鑑 2018』の第六編の「考古教学」で「2017年畢業的博士研究生」（2017年大学院・博士卒業者数 筆者訳）によって、2017年に博物館学を研究する博士の博士論文の題目は、下記の表 7-9 のように掲載されている。

表 7-9 博物館学での博士号取得者一覧  
（『中国考古学年鑑 2018』より転載）

学校名・学院	作者	題目
西北大学文化遺産学院	丁曉雯	『我国非国有博物館發展困境及出路研究』
武漢大学歴史学院考古学系	張曉雲	『現代公共文化服務体系視角下的県級博物館治理研究』
復旦大学文物與博物館学系	姜玢	『兒童心智與能力拓展的新天地—兒童兒童博物館的發展與当代建設路径』
	厲櫻姿	『博物館經營績效評估指標体系設計研究』
	朱嶠	『將博物館納入青少年教育体系的制度設計研究』
	張昱	『我国博物館職業資格認證制度研究』
	朱懿	『中国博物館人才培养体系建設研究』

上記一覧によって、現段階での大学院における博物館学に関する研究は、博物館教育・博物館展示・特色博物館・博物館専門職員制度・博物館運営・博物館文化創意・高校博物館などの内容が認められる。なお、博物館が提供するサービスなど研究課題もある。

「我国高校文博教育現状及發展对策分析」<sup>(73)</sup>には、現段階での中国の大学における博物館学コースの現状を指摘している。現段階で、中国における博物館学に対する教育活動は、多様化しており、大学でも博物館実習を重視している。しかし、博物館学を教授する教員の不足などの問題があるから、中国の大学における博物館学の教育活動は、さらに發展を企図するものと考えられる。

#### 4、法規

現段階において中国国内で施行されている博物館に関する法規は、2015年3月20日から施行された「博物館条例」<sup>(74)</sup>（発文字号：国務院令第659号）が、最新の法規であり、博物館の基本となる法規である。この条例によって、博物館に関する行政法規は、規範化され博物館の管理・運営・サービスは、明確化された。当該条例は、博物館法の設立にとって、画期的な意義ある内容と評価されている。

日本での1951年12月1日に「博物館法」(法令番号:昭和26年法律第285号)の公布とは異なり、中国では長い間博物館に関する法がなかった。さらに、中国での博物館に関する法律・規定は、普通に文物保存に関する内容として作成され、文物に関する法律・規定の最後に付帯された状態であった。

一方、本条例が施行される以前とその後では、用語「博物館」が明確に記され、一般的な博物館向けの法規類は下表のとおりである。これら法規類は、博物館の機能・経営方等に関する内容である。

表 7-10 博物館条例①

(『新中国博物館管理法律制度研究』<sup>(75)</sup>より整理)

発布時間	制定者	名称
1979年6月29日	国家文物事業管理局	「省、市、自治区博物館工作条例」
1985年1月	文化部・公安部	「博物館安全工作規定」
1986年6月19日	国家文物事業管理局	「博物館藏品管理弁法」
1989年12月26日	国家文物局・財政部	「文物、博物館事業單位財務管理弁法」
2002年3月25日	国家文物局	「文物系統博物館風險等級和安全防護級別的規定」
2003年12月22日	中共中央宣传部・文化部・国家文物局	「關於進一步加強博物館宣傳展示和社会服務工作的通知」
2005年12月22日	文化部	「博物館管理弁法」
2008年1月23日	中共中央宣传部・財政部・文化部・国家文物局	「關於全國博物館、紀念館免費開放的通知」
2008年2月5日	国家文物局	「全國博物館評估弁法(試行)」 「博物館評估暫行標準」
2008年3月2日	国務院法制弁	「博物館条例(征求意见稿)」
2010年1月26日	中共中央宣传部・財政部・文化部・国家文物局	「關於進一步做好博物館紀念館免費開放工作的意見」
2011年8月30日	公安部・国家文物局	「關於進一步加強博物館安全

		工作的通知」
2015年1月20日	国家文物局	「關於提升博物館陳列展覽質量的指導意見」
2015年6月18日	国家文物局・教育部	「關於加強文教結合、完善博物館青少年教育功能的指導意見」
2016年7月	国家文物局	「博物館定級評估弁法」 「博物館定級評估標準」
2017年12月22日	中国博物館協會	「国家一、二、三級博物館運行評估規則」
2019年12月	国家文物局	「博物館定級評估弁法」 「博物館定級評估標準」

上記の法規の他に、博物館蔵品・博物館展示・博物館安全・国際交流・民弁博物館・博物館管理・博物館経費などを規範する法規がある。

中国には、従来から文物を重視する伝統があるから、博物館は文物を保存する場所として発展している。現段階で、博物館は、独立教育機関として、様々な発展を模索している状況にある。また、現段階では、博物館に対する法規が独立して制定されたが、博物館に関する法律はまだ制定されない現状である。博物館の発展とともに、博物館法の制定は早急に必要であると考えられる。さらに、普通の総合博物館・歴史博物館・美術館の他に、中国には、爆発的に発展する特色博物館には、法の制定も必要である。

## 5、国際交流

2006年5月31日に、上海は、第22回ICOM（国際博物館会議）上海大会を引き受けた。これは、中華人民共和国で初めて開催されICOMであった。なお、国際交流のため、「中国博物館学会」は、2010年8月30日に「中国博物館協会」と正式に改称した。

2010年11月7日に、第22回ICOM上海大会は、開催された。ICOM上海大会のテーマは、「社会的調和のための博物館」であった。

このICOM上海大会の開催は、中国博物館学にとって、博物館理念の確認と国家レベルの社会教育機関としての重要性の再確認などの点において画期的な意義があったと考えられる。

## 小結

現在における中国博物館学の発展は、博物館の多様性と博物館の活用を図る特徴を持っている。

現段階で、中国博物館学の展開については、1949年以前の中国博物館学界が有していた学術的水準と国際的な視点といったころを学ぶべきであろうと考えられる。そして、そこには将来的進路の明確化が必要とされよう。

なお、多くの優れた資料を広範囲に収集してマンネリに陥らないことは、確認するまでもなく弛まぬ学術的探求が必要とされる。つまり、博物館学は、社会環境の変化に適応できる最適な方法であると考えからである。現段階では、中国国内社会は勿論のこと、国際社会も日進月歩の状態急速に変化交替していることは周知のとおりである。かかる環境下での博物館学の発展は、さらに先見の明を持つことが必要であろう。一方、1949年以前の中国の博物館学は、実践の蓄積に欠けることや指導性の理論不足などの問題が存在した。

現段階での中国の博物館学を構築することは、上記の問題を戒めに考察しなければならないと考える。例えば、従来の国立・公立博物館に対して、設立母体が個人もしくは民営団体の博物館が多数出現したことに直面して、中国博物館学は多くの実践経験を蓄積した。しかし、私人博物館や野外博物館などの新形態の博物館が隆盛に向かう状況に対して、中国博物館学は実際の経験がまだ乏しいことも事実である。この点も中国において将来の博物館学の発展において注視する必要があると考える。現行の博物館は、経験を積むことによって中国博物館事業の進捗に適応する理論を纏めることに拠って、逆に自らが中国の博物館事業の実践を推進する必要もあろう。この点は、中国の現段階での博物館学の構築にとって大いに益するものと考えられる。

いずれにしても、博物館・博物館学が展開された歴史を確認することは、“温故知新”の格言どおり博物館学の将来像を思考する必要な手段であると考えられる次第である。

## 註

- (1)光緒新政とは、1901年（光緒27年）から西太后が推進した政治・教育制度の改革である。光緒新政によって、隋から推進する科挙制度が廃止され、近代中国の教育体系は確立された。
- (2)段勇主編 2010『中国博物館学研究論著目録』新華出版社
- (3)徐玲 2014「中国博物館学学科発展的回顧與反思」『東南文化』(05)pp.101-109
- (4)註(3)と同じ
- (5)梁吉生 2005「中国博物館協会及其学術活動」『中国文化遺産』(04)pp. 29-31
- (6)陳端志 1936『博物館学通論』上海市博物館 pp. 32-36



- (7) <<中国博物館学史研究>>課題組 2006「知識・理論・体系・学科—中国博物館学研究軌跡検視—」『中国博物館』
- (8)註(5)と同じ
- (9)公費生とは、中国国内で全部の教育費用を公費で負担する学生である。民国政府は、1936年に発布した『各級学校設置免費学額及公費学額規程』によって、公費生制度が遂行した。公費生制度は、1949年に取消された。
- (10)註(7)と同じ
- (11)国立社会教育学院 1948『国立社会教育学院概況』国立社会教育学院 p.24
- (12)傅道文 1989「我們的母校、国立社会教育学院：一所具有創新特色的高等学府」『崢嶸歲月』 2p.8
- (13)国立社会教育学院教務処 1947「本院歷屆畢業生学生論文題目一覽」『教育與社会』 6(2-3) pp.64-70
- (14)註(3)と同じ
- (15)章新民訳 1936『図書館博物館美術館的關係』北平中華図書館協会
- (16)Clarence S. Stein 著 趙儒珍訳 1936「現代博物館之形式與功用」『中国博物館協会会報』
- (17)L.C. Everard 著 李永増訳 1936「博物館與陳列館」『中国博物館協会会報』
- (18)費畊雨・費鴻年 1936『博物館学概論』中華書局
- (19)棚橋源太郎 1930『眼に訴へる教育機関』寶文館
- (20)陳端志 1936『博物館学通論』上海市博物館
- (21)Conférence internationale d'experts pour l'étude des problèmes de muséographie générale 1934『Muséographie: architecture et aménagement des musées d'art Conférence internationale d'études』Madrid
- (22)傅振倫 1936『英国博物館參觀記略』『中国博物館協会会報』
- (23)劉衍淮 1936『独国自然科学及工芸博物館遊紀』『中国博物館協会会報』
- (24)曾昭燏・李濟 1943『博物館』正中書局
- (25)李慧竹 2007『中国博物館学理論体系形成與發展研究』山東大学・博士論文
- (26)古物陳列所は、中華民国政府に紫禁城内で 1914年に成立された陳列所である。同陳列所は、紫禁城の遺物を保存展示していた。1947年に故宮博物院と合併した。
- (27)安徽省図書館は、1913年に設立され、日中戦争中の 1943年に閉館した。
- (28)梁吉生 1988「論旧中国博物館事業的歴史意義」『中国博物

- 館』
- (29)梁吉生 2005「中国博物館協会留下的學術遺產」『中国文物報』
- (30)梁吉生 2006「博物館学本土化發展及其今後路向」『中国文物科学研究』
- (31)中国博物館協会は、1935年に成立し、1937年に起きた盧溝橋事件によって、一時停滞した。さらに、当協会は、1948年に回復したが、1949年に解散した。また、1982年に「中国博物館学会」と称して成立し、2010年に「中国博物館協会」と改称した。
- (32)中国に称する「2級学科」は、日本における学科の研究分野である「コース」に相当する分類である。例えば、博物館学コース・考古学コースである。中国には、本科專業目録で「○○專業」と称する。普通に「○○方向」と称する。
- (33)蘇東海 1998『博物館的沈思—蘇東海論文選・卷一』文物出版社 p.24
- (34)陳建明 2001「關於開展中国博物館学史研究的構想」『中国博物館』03pp.47-50
- (35)註(7)と同じ
- (36)中国博物館学会 2005『回顧與展望:中国博物館發展百年—2005年中国博物館学会學術研討会文集一』紫禁城出版社
- (37)甄朔南 2005「中国博物館学百年發展述略」『中国文化遺產』04pp.113-115
- (38)王超・侯春燕・張遇・李文昌 2014「博物館学学科建設與博物館事業發展學術研討会綜述」『中国博物館』01pp.123-126
- (39)註(3)と同じ
- (40)<http://www.chinamuseum.org.cn/plus/view.php?aid=77>
- (41)[http://www.stats.gov.cn/tjsj/zxfb/202002/t20200228\\_1728913.html](http://www.stats.gov.cn/tjsj/zxfb/202002/t20200228_1728913.html)
- (42)[http://www.ncha.gov.cn/art/2020/5/18/art\\_2318\\_43812.html](http://www.ncha.gov.cn/art/2020/5/18/art_2318_43812.html)
- (43)<http://www.ncha.gov.cn/module/download/download.jsp?classified=0&filename=2005201250073163964.pdf>
- (44)博物館の等級は、国家文物局が規定する『博物館評估暫行標準』によって、中国における博物館は総合管理與基礎設施・藏品管理與科学研究・陳列展覽與社会服務などの諸方面で、1級・2級・3級である3つの等級を分けている。なお、その他には未定級の博物館も存在する。
- (45)2019 胡高偉「博物館分類與專業科技博物館」『中国文物報』11月26日003版
- (46)民弁博物館の設置母体は、国家でなく、個人である。なお、民弁博物館の藏品は、国家に属しない文物・標本などである。す

- なわち、民弁博物館は、日本の分類でいう私立博物館である。
- (47)「遺址博物館」は、遺跡博物館である。
- (48)「生態博物館」は、エコミュージアムである。
- (49)「社区博物館」は、地域博物館である。(筆者の観点)
- (50)「行業博物館」は、ある業界における実物資料のみを収集展示している博物館である。
- (51)[http://www.ncha.gov.cn/art/2012/2/2/art\\_2237\\_42262.html](http://www.ncha.gov.cn/art/2012/2/2/art_2237_42262.html)
- (52)工業遺産博物館とは、工業の遺跡・遺物を利用して設立する博物館である。
- (53)巢臻・李文彬・劉佳 2019「“中国博物館協会博物館数字化專業委員會 2019 年年会暨‘文物数字化保護技術応用’學術研討会”會議紀要」『東南文化』(S1)pp.4-8
- (54)謝穎 2020「2020 年国際博物館日走向数字化」『中国文物報』5 月 15 日 008
- (55)劉焱 2018「文化和旅游部系統広大党員干部職工認真收看收听慶祝改革開放 40 周年大会直播盛況」『中国文化報』12 月 19 日
- (56)王小明・宋嫻 2015『重構與發展：博物館集群化運營研究』上海科技教育出版社 p.8
- (57)翁淮南 2020「新發展理念下的中国博物館發展趨勢探析」『文博學刊』(01)pp.60-67
- (58)館際連携とは、博物館間相互と協力とすることである。
- (59)中国博物館協会 2016「第一届全国博物館學優秀學術成果公示」『中国博物館通訊』4 月第 344 期 pp.31-32
- (60)中国博物館協会 2019「第二届全国博物館學優秀學術成果評選結果公示」『2019 年中国博物館文集彙編(上)』pp.116-117
- (61)「学科門類」は、日本における「学部」に相当する分類である。例えば、文学部である。
- (62)「1 級学科」は、日本における「学科」に相当する分類である。例えば、史学科である。中国には、本科(学士教育)で「○○專業」と称する。
- (63)註(32)と同じ
- (64)「3 級学科」は、2 級学科下でさらなる細分である。
- (65)[http://www.moe.gov.cn/srcsite/A08/moe\\_1034/s3882/201209/t20120918\\_143152.html](http://www.moe.gov.cn/srcsite/A08/moe_1034/s3882/201209/t20120918_143152.html)
- (66)王巍主編 2020『中国考古學年鑒 2018』中国社会科学出版社
- (67)全国普通高等学校招生入学考試は、中国大陸で実施されている大学などの高等教育入試システムである。普通に「高考」と略称する。高考の実施期間は、毎年 6 月 7 日・8 日・9 日である。しかし、今年は新型コロナの影響によって、7 月 7 日・8 日・9 日に行われた。

- (68)高職院校とは、学部（中国には「本科」と称する）に対して、「専科」と略称する大学である。中国における本科の教育年限は4年であり、専科は一般に3年の教育年限である。日本の短期大学に相当するものである。
- (69)[http://www.moe.gov.cn/srcsite/A22/moe\\_833/201103/t20110308\\_116439.html](http://www.moe.gov.cn/srcsite/A22/moe_833/201103/t20110308_116439.html)
- (70)[http://www.moe.gov.cn/s78/A22/xwb\\_left/moe\\_833/201804/t20180419\\_333655.html](http://www.moe.gov.cn/s78/A22/xwb_left/moe_833/201804/t20180419_333655.html)
- (71)「專業学位」とは、「學術学位」に対する学位である。中国における碩士（修士）は、「專業型碩士」と「學術型碩士」である二種類の修士課程がある。両方も碩士学位（修士号）が取得でき、「專業型碩士」は「專業碩士学位」を取って、「學術型碩士」は「學術碩士学位」を取る。なお、「專業型碩士」の教育年限は2年であり、「學術型碩士」の教育年限は3年である。また、「專業型碩士」は、実際の技術を重視するために、学科課程の選択肢が少なく、修士論文の字数の要求が少ない。
- (72)註(66)と同じ
- (73)張昱 2020「我国高校文博教育現狀及發展对策分析」『東南文化』(03)pp.38-43
- (74)[http://www.gov.cn/zhengce/2015-03/02/content\\_2823823.htm](http://www.gov.cn/zhengce/2015-03/02/content_2823823.htm)
- (75)邢文穎 2015『新中国博物館管理法律制度研究』山西大学・修士論文

## 結 章

本論文では、主に 1949 年以前の中国博物館学の発展を論及し、当該期に中国博物館学が日本の博物館学の如何なる影響を受けたかを検討した。

第 1 章では、中国における「博物館」と「博物館学」及び「博物館学の構築」の定義を確認し、本論文が論及する指針を明確にした。

「博物館」は、公衆に向けて解放された文化財と博物館資料・標本の収蔵・科学研究・教育宣伝する場所である。さらに、博物館の理念に関しては原則的には、博物館の利用者は個人ではなく、公衆の為に存在する機関であるとする考え方に則っている。さらに、博物館は収蔵保存の場所であるとともに、民衆のための教育普及と研究を展開する場所でもある。博物館が時代の発展につれてどのように変化しても、その核心たる概念は変化することは無いであろう。

一方、「博物館学」の定義は、博物館に関するあらゆる問題を対象とする点である。何故なら、それらは博物館学の範疇に含まれるからである。例えば、考古学において遺跡の発掘調査をすることも、その調査により検出された資料の復元や各種の分析も、考古学であることと同様の視点であると考えられる。博物館学は、範囲が広く、それ故に研究内容も焦点も多様であるため、その定義も変化しつつ次第に確立されるものと考えられる。

なお、1905 年に張謇が南通博物苑を創立したことは、中国人が自主的に博物館事業を実践し始めた歴史的事実であり、これはまた中国博物館学の濫觴であることは指摘した通りである。

昔日の中国には宝殿や蔵宝室はあったが、近代的意識を持っている博物館は、西洋から伝えられたものである。南通博物苑の設立は、中国における博物館の中華化の幕開けであった。

これを契機として、中国では中国博物館学に関する理論の検証と実践が勢いをもって発展してきた。博物館学の実践的技術を蓄積することを通じて、博物館学の構築の必要が理解されるに至った。

1930 年代から 1940 年代初頭に中国博物館学界は、博物館学に関する基礎理論を提唱し始め、中国博物館協会が設立され、博物館学に関する学術著論が刊行され、大学で博物館学コースを開講し始めた。これは、中国博物館学の構築の嚆矢である。

その上で、1935 年に中国博物館協会が設立されたことは、博物館学に関する研究が学術団体での検討段階に入ったことを示す記念的な設立であった。

第 2 章では、中国博物館学史をめぐって、1989 年までの博物館学史全体の流れを記述し、中国博物館学史の時代区分を試作した。

具体的には、1841～1904年の揺籃期・1905～34年の確立期或いは第一次発展期・1935～48年の構築期或いは第二次発展期・1949～65年の変革期或いは第三次発展期・1966～77年の迷走期・1978～89年の中興期或いは第四次発展期である。

清朝末期における西学東漸の盛行は、近代的博物館学意識を中国にもたらし、博物館に対する研究が次第に発展していった。この時期における博物館学について研究は、博物館の設立と博物館教育に注目したため、当該期の博物館学者の博物館論も博物館の設立と博物館教育に関する研究に偏重する傾向が認められる。

中国博物館学の確立期を1900年代からと設定した。なお、中国博物館学の濫觴は、張謇の博物館論であると筆者は主張している。この時期における博物館学についての研究は、博物館のあるべき姿を正確に把握した方向へ移行しており、博物館についての理論も次第に堅固なものとなってきた。

1935年の中国博物館協会が結成されたことは、中国博物館学史に画期的な歴史を留めた。この時期には、中国博物館学が体系としての構築追求が開始され、楊鐘健の博物館論を嚆矢に、当該期の博物館論は大いなる進展を見せた。

1949年に中華人民共和国が建国され、社会主義共和制を導入するにともない、博物館に対する変革は興った。この時期に提唱された「三性二務」は、中国博物館学論の発展に大きな影響をもたらした。

文化大革命の影響が中国博物館学界に波及したため、博物館学についての研究は、博物館資料論と資料保存論の研究を行うに留まり、他の博物館論がほとんど発展しない変則的な状態に陥った。

「改革開放」によって、中国博物館学は、新たな発展方向を探していくこととなった。当該期は、博物館学にとっても改革開放の時代であり、博物館学に対する研究が急速な進歩を遂げ、論文数と著書数が多量に増加した。さらに、博物館学史に関する研究者は、梁吉生が代表として出現したことも忘れてはならない。

中国博物館学の流れをめぐって、中国博物館学の沿革を確認することは、博物館学に関する研究について重要な内容である。

第3章では、中国博物館学の前夜史或いは中国博物館学の起源と発展の時代的背景を明確にした。

さらに、本章では、1949年以前の博物館学の基礎理論、学術団体、学術著述、博物館学講義などの展開状況を論及している。

中国博物館学の起源については、中国は日本と西洋の往来が清末から日増しに盛んになっていた。西洋の近代思想の受容に伴い、近代的博物館は、西洋の宣教師によって中国で生まれた。中国は、洋務運動・戊戌の変法・光緒新政・辛亥革命・五四運動を経過し、博物館に関する思想を受け入れた。それ故、博物館学に関する研究の

必要性は、著しくなった。しかし、動乱の最中にあった中国は、博物館学の発展に対して、平和な社会環境が提供できなかった。そのために、中国博物館学の発展は、艱難辛苦の中にあったと言っても過言ではない。

一方、本章では、「Museography (博物館実践学)」と「Museology (博物館学)」という用語の歴史を挙げて、国際社会における博物館学の発展を論述している。

中国博物館の濫觴と中国博物館学の濫觴は、大きな社会変革を背景にして展開したという歴史を有している。それ故、当該期の中国博物館学に関する研究には様々な問題点が看取される。

清朝末期に西洋人が創設した博物館から南通博物苑、そして中国博物館協会に至り、中国における博物館学は、約半世紀に渡り発展を遂げた。当該期の中国は、社会変化の時期にあり、その不安定な時期は、中国の博物館学の発展に大きな影響を与えるに十分な社会環境であった。

科学博物館について言えば、西洋の科学技術を吸収し、中国における科学博物館は設立された。また、国際交流のために中国における博覧会は開催された。近代的な博物館の意識を導入したが故に、清朝末期から民国中期の間は、多数の博物館が開館する時期となったのである。このような社会とともに、当該期の中国博物館学は、大きな発展を遂げたのである。中国においては、博物館の設立だけでなく、博物館学の理論研究も大きく向上した。

第4章では、日本の博物館学が中国博物館学の揺籃期に対する影響の濫觴と推移に論及した。具体的には、清時代末期における中国の有識者らが見聞録と日記で日本の博物館に関する紹介であり、それらは中国で発刊されていた新聞掲載記事であった。

また、戊戌の変法における維新派は、日本の明治維新の成果に驚いて明治維新を模倣することを提唱し、さらに日本における博物館の模倣も提唱した。

19世紀前半の中国と日本は、長期間の鎖国の中で、閉鎖的な社会として自給自足の生活をしてきた。しかし、中国は、1840年に英国とのアヘン戦争に敗北して余儀なく開国させられた。それに対して、日本は、1854年にアメリカとの日米和親条約を締結して開国した歴史を有する。なお、西洋との国力の格差を実感した中国と日本は、経済力と軍事力を高めることを目指す近代化運動が行った。

日中両国は、ほとんど同時に近代博物館の意識を受容するが、日本では1872年に文部省博物局が湯島聖堂で日本最初の博覧会を開催したことから、政府が博物館を設立する気運が次第に出現するようになった。それに対して中国側でも当該時期に近代的博物館が設立された。例えば、1883年に開館した徐家匯博物院（一説は、1868

年に設立した。)・1874年に開館した亜洲文会博物院・1864年に開館した登州文会館博物館であった。しかし、現在知り得る資料では、これらの博物館のほとんどは、外国人が創設したものであり、清政府自らによる博物館の設立ではなかった。

この時期に、日本へ見学に行った中国博物館学者は、学習と模倣の目的を持っていた。そのために、19世紀中葉の見学者より、19世紀後半期の見学者は、ただ見聞を記録するのみではなく、日本における博物館・博覧会を模倣し、中国本土への移入目的で指導方法となる理論と技術を記録した。すなわち、中国に博物館を設立するために、この時期の中国博物館学界の役割は博物館意識を社会に広めながら、博物館の経営・展示など具体的な事務を効率的に行うべきであると考えた合理性を特徴としていた。

一方、日中両国は、博覧会或いは博物館に対する異なる観点によって、日中両国では近代文明と技術に対する差異が露呈した。その後、中国における有識者は、中国の軍事・経済などの不足を痛感して、西洋における近代技術の導入の必要性を認識した。そのために、中国は日本を通じて博覧会或いは博物館の開催を模倣し、中国で博物館を設立し始めたのである。この時期は、日本の博物館学が中国博物館学へ与えた影響の濫觴期であり、と同時に発展の時期であったと筆者は考えている。

日本の博物館学は、博物館論と博物館の実務である両面によって、順調に発展した。これに対して中国博物館学は、まだ博物館学意識が萌芽期である状況にあって、博物館の実務は未発達の状態にあったと考える。

本章は、揺籃期における中国博物館学の歴史をめぐって、当該期に中国博物館学が日本博物館学から受けた影響を収集整理し、これらの影響が中国博物館学に及ぼした影響を論述した。さらに、当該期に中国博物館学が日本博物館学に学んだ目的を分析し、その原因を追究した。

第5章は、中国の博物館学へ及ぼした日本の博物館学の拡大状況に関する研究である。具体的には、当該期の中国博物館学者は、日本の博物館論と博物館に影響を受け、中国社会に整する博物館を設立し、博物館論を提唱したことである。

本章は、主に中国博物館学の確立期において日本の博物館学が中国へ与えた影響を検討した。そのために、本章があげる博物館学研究者とその博物館論などは、主に日本の影響を受けた人物に限定された結果となっている。

この時期の、博物館論と博物館が有していた機能的特徴は、博物館は教育を普及する場所と見なしたことであり、特に教育の目的は近代的な知識・技術などを広めることであった。



さらに、歴史文物の保存展示に対しては、当該期に提唱された保存方法は、中国における従来の保存方式と違った。中国では、歴史的に金石学が盛んであったところから、古物に関する収集と保存に対して十分な経験を有していた。しかし、近代的博物館の保存機能と展示機能に対しては欠如する部分が少なからず存在した。中国での従来からの文物（歴史資料）保存の概念は、文物は個人の私有財産として、文物の持ち主が文物を保存したことである。しかし、博物館における文物は、個人の私有物ではなく人類の遺産としての保存と展示である公開する点で幻惑が認められた。博物館における文物は、博物館の実物資料として一般公開の必要があることは、現在なら当然のことであるが当該期には多くの人々にとっては不明瞭で在ったのである。

かかる状況にあって、近代的博物館に関する知識を持っている人材は、近代的博物館の設置にとって必要であった。それゆえに、留学により本知識と博物館に関する知識と経験を持っていた人は注目を受けた。

しかし、博物館を実際に運営する経験が不足しているために、当該期の博物館の展示機方法は、主に西洋と日本の博物館及び博覧会を模倣することに終始したようである。

なお、中華民国が1912年に建国されるとともに、中国における博物館は、勢いよく発展した。その原因は、博物館が教育の場として、さらには当該期の先進思想を宣伝する機能を担った施設でもあった。中華民国は、中国で初めての共和制国家として成立し、民主思想に基づく博物館は、教育と思想を普及啓蒙する場所として重要な社会的公共施設としての位置を占めていた。

博物館が多量に開館されるに従い、博物館学に関する理論研究は、目覚ましい進歩を遂げた。中国博物館学界は、当該期における博物館学の理論に大きな関心を持っている。

南通博物苑を創建した張謇は、中国博物館学に関する研究の創始者として称賛されている。張の博物館学思想は、中国博物館学の理論研究に大きな影響を与えた。張の博物館学思想により、博物館は教育機関として、学校と同等の教育機能を担っていたと思われる。このことは、博物館の教育機能は、張の博物館学思想の中では博物館の総体を教育に置いていたことが理解された。第一の位置にあった。この観点は、当該期における中国の社会状況に順応することでもあった。

民国時期になって、博物館が教育機関であるとする観念は、猶々深く入り込んでいた。博物館を教育機関・施設とする思想は、張の博物館学思想を継承した蔡元培・魯迅・嚴智怡などの新文化運動の推進者らであった。新文化運動の推進者らは、教育に対する大きな

関心を持っていたため、博物館の教育機能に注目している。蔡と魯迅は、美学と美術教育など情操を豊かにする教育を重視したために、美術館などに注目していた。厳は、一般民衆に博物館を普及するために、博物館に関する刊行物に注目していた。以上の如く当該期には、中国では博物館学理論についての研究が成果を獲得していた。

第6章では、費畊雨と費鴻年が共著した『博物館学概論』と、棚橋源太郎が著した『眼に訴える教育機関』を比較し、中国博物館学の構築が日本の博物館学の影響を受けたことを確認した。なお、費兄弟の『博物館学概論』と相似度が極めて高い陳瑞志による『博物館学通論』も、『眼に訴える教育機関』の影響を受けた可能性が極めて高い点を指摘した。

当該期には、日本の博物館学が中国へ与えた影響は最盛期と衰退期が同時であったと筆者は考える。「最盛期」と主張する原因は、当該期に日本の代表的な博物館論を輸入したからである。初期には、中国博物館学界は主に日本の博物館或いは博覧会の形式を模倣したが、日本の博物館論についてはあまり論及しなかったが、やや遅れて中国博物館学界は日本の博物館論を意識的に学び始めた。一方、「衰退期」と主張する原因は、日中戦争により、当該期に日本に学ぶことが中国の社会通念上出来なくなったからである。1931年の満州事変・1937年盧溝橋事件によって、中国社会は戦争の時代に突入したのであった。さらに、1937年の日本軍による中国の都市への空爆と南京事件・1939年からの重慶爆撃で、中国人民に対して大きな傷害を与えた。そのために、中国博物館学界の日本の博物館学の受容に対する姿勢は変更を余儀なくされ、中国博物館学界は日本の博物館学を学ぶことを見送らざるをえなかった。

一方、中国の博物館学に関する論著からみる博物館学事業の展開状況は、1935年頃の中国博物館学の確立期から発展段階への移行期にあったと言っても過言ではない。当該期の中国の博物館学は、西洋と日本の博物館学の知識を吸収したうえで、換骨奪胎ともいえる中国独自の博物館学の発展を試みた時代であった。これを、中国博物館学の構築期であると提唱した。

当該期の博物館に必要なことは、博物館学理念の応用による博物館業務の具体的方法を早急に指導しなければならないことであった。民衆にとっては、博物館が社会に普及することは、基礎的な中国文化に触れることでもあった。博物館研究員にとっては、博物館は博物館についての学術的研究を専門に行うために良好な場となった。

1935年に、中国の博物館学研究者や博物館関係者は、約半世紀に亙る博物館を実践した後、西洋の博物館学より独立し、中国独自の科学としなければならないことを認識するに至った。それは、学術の視点からの体系的な中国博物館学の構築意識によるものであった。

当該期の博物館学に関する研究は、その後の中国での博物館学構築の上では大きな成果を収めたが、しかしそこには様々な課題も存在していたと看取される。

当該諸問題の解決方法として 1935 年に中国博物館協会は結成された。協会の結成に抛り中国博物館学界は、組織的且つ具体的な学術研究活動を目標するに至った。なお、博物館学研究者にとっては、当時存在した博物館学に関する種々の疑問を解決する機会を得ることとなったのである。これを契機として、中国の博物館学界は、博物館学の科学としてのシステム構築の基盤がここに形成され、その成果は、現場である博物館の経営、諸機能にも大きな影響を与えることとなった。

なお、本章では 5 冊の単行本を簡単に紹介した。この 5 冊は、構築期の中国の博物館学界が中国の博物館学を構築する目的で学術書として公刊された書であり、今日の研究視座からすると不備な点も著しく存在するが、それらは中国の博物館学の構築の歴史であり、また中国の博物館の歴史でもある。これらの歴史の把握は、なにも博物館学史に有益である点に留まらず、中国における近代化への移行を確認できる近代史でもあると考える。

中国の博物館学界では、中国博物館学の発展を明らかにし、中国博物館学史の形成を試みる思潮が盛んになってきている。学史の整理と研究を展開することは、中国博物館学の発展には極めて重要事項であると考えられる。換言すれば、西洋からの換骨奪胎をはかり中国の博物館の特徴に適合する博物館学の体系を模索してきた歴史を明らかにすることで、これからの中国博物館の将来像を求めることが出来ると思われる。

現在、構築期の中国博物館学について、一部の中国学者には当該期の博物館学研究の段階がまだまだ脆弱な段階にあるという意見もあり、当該期の基礎理論と実践的技術に対する研究は未成熟で、完全な科学システムを支え得る状況に至っていないといった、自虐的な意見も多数あることも事実である。

本章は、中国博物館学の構築期における中国博物館学の基礎理論・学術著論・専門組織の構成・学芸員養成・学術交流などの多方面から、中国博物館学界が目標とした博物館学の構築の到達点と課題を具体的に分析することにより、中国の博物館学史の検証・中国の博物館学構築の一助となることを目的とするものである。さらに、この過程において明らかとなった博物館学への取り組みの成果は、現在も継続して行われている中国の博物館学の構築作業の重要な資料として、参考と警告の役割を果たすことになると思われる。

第 7 章では、1949 年以前の中国博物館学に対する評価と中国の博物館と博物館学の現状について論述した。1949 年以前の中国博物

館学に対する評価では、中国博物館学が理論研究・学術組織・専門職員の養成・学術交流など諸方面の成果あげて、1949年以前の中国博物館学に対する評価を論述した。

さらに、中国における博物館と博物館学の現状を述べた。中国博物館学にの新たな動向を論述した。

現在の中国博物館学の発展は、博物館の多様性に関する取り組みと博物館の活用を図る方法論の追求の2点の特徴を持っている。

現段階で、中国博物館学の展開については、1949年以前の中国博物館学界が有していた学術的水準と国際的な視点といった点を学ぶべきであろうと考えられる。そして、そこには必要とされる将来的進路の明確化が見えてくるものとする。

多くの優れた資料を広範囲に収集してマンネリに陥らないためには、確認するまでもなく弛まぬ学術的探求が必要とされる。つまり、博物館学は、社会環境の変化に適応できる最適な方法であると考えからである。現段階では、中国国内社会は勿論のこと、国際社会も日進月歩の状態急速に変化交替していることは周知のとおりである。かかる環境下での博物館学の発展は、さらに先見の明を持って対処することが必要であろう。一方、構築期の中国の博物館学は、実践の蓄積に欠けることや指導性の理論不足などの問題が存在した。

現段階での中国の博物館学を構築することは、上記の問題を戒めに考察しなければならないと考える。例えば、従来の国立・公立博物館に対して、設立母体が個人もしくは民営団体の博物館が多量に出現していることに直面して、中国博物館学は実践経験を蓄積した。しかし、私人博物館や野外博物館などの新形態の博物館が隆盛となる状況に対して、中国博物館学は実際の経験がまだ乏しいことも事実である。この点も中国において将来の博物館学の発展において注視する必要があると考える。現行の博物館は、経験を積むことによって、中国博物館事業の進捗に適応する理論を纏めることが必要である。逆に、自らが中国の博物館事業の実践を推進する必要もあろう。この点は、中国の現段階での博物館学の構築にとって大いに益するものと考えられる。

いずれにしても、博物館学が展開された歴史を確認することは、“温故知新”の格言どおり博物館学の将来像を思考する必要な手段であると考え次第である。本論文では、主に1949年以前の中国博物館学の発展を論及し、当該期に中国博物館学が日本の博物館学の如何な影響を受けたことを検討している。

## おわりに

本論文では、主に 1949 年以前の中国博物館学の構築と、当該期に日本の博物館学を学んだ状況を先行研究及び関係資料の博捜に基づく新たな資料を基に論述した。

1949 年以後の中国博物館学の構築と、日本の博物館学との交流は、第二章第二節「時代区分の提唱」で記したが、他に関しては本論では十分に記すことができなかった。今後、1949 年の中華人民共和国の建国から、現在までについては、意欲的に纏める所存である。

そこには、第二章第二節「時代区分の提唱」で記したとおり、中華人民共和国の建国から 1989 年までの間の中国博物館学を、「変革期（第三次発展期 1949～65 年）」「迷走期（1966～77 年）」「中興期（第四次発展期 1978～89 年）」さらに、「充実期（1989～現在）」の 4 期に分類した。

さらに、変革期には、中国博物館学がソ連の博物館学を学び始めた。迷走期には、文化大革命によって、中国博物館学は一定程度の阻害を受けた。中興期には、中国博物館学会は中華人民共和国において初めての博物館に関する専門組織として、ICOM に加盟した。充実期には、中華人民共和国で初めての ICOM である第 22 回 ICOM 上海大会が開催された。これらの博物館学活動は、中国博物館学にとって、画期的な意義があった。

なかでも、博物館が急激に増加した 1989 年以降の詳細は、極めて多岐に亙るところから筆者自身のライフワークと把握し、継続して纏め続ける計画である。

附録 中国博物館学史の年表（本文論及）（1840 - 1949）

時間	事件
1840～ 42年	アヘン戦争
1841年	林則徐及び幕僚ら・『四洲志』
1842年	魏源・『海国図誌』
1848年	徐繼畬・『瀛寰志略』
1849年	林鍼・『西海紀游草』
1856～ 60年	アロー戦争
1861～ 95年	洋務運動
1862年	京師同文館開校
1863年	郭連成・『西游筆略』
1868年	王韜・『漫遊随録』
1866年	斌椿・『乗槎筆記』
	張德彝・『航海述奇』
1867年	志剛・『初使泰西記』
1869年	丁韞良・『 <i>A Cycle of Cathay or China, South and North with Personal Reminiscences</i> 』
1871年	『日清修好条規』
1872年	「日本開博物院」・『上海新報』4月4日
	「論東洋博物院事」・『申江新報』6月13日
1875年	「勸捐建博物館戲屋説」・『申江新報』9月23日
	「創設博物院」・『申江新報』11月4日
1876年	李圭・『環遊地球新録』
	『 <i>JAPAN AT THE CENTENNIAL EXHIBITION.</i> 』・『字林西報』2月1日
	上海格致書院開校
	『格致匯編』創刊
	John Fryer・「上海格致書院」『格致匯編』
1877年	郭嵩燾・『使西紀程』
	『 <i>OPENING OF THE UYENO EXHIBITION BY THE EMPEROR AND EMPRESS OF JAPAN.</i> 』・『字林西報』9月15日
	John Fryer・「上海格致書院擬設鉄嵌玻璃房為博物館説」『格致匯編』
	『 <i>CLOSING OF THE NATIONAL EXHIBITION AT UYENO, BY THE EMPEROR AND EMPRESS.</i> 』・『字林西報』12月15日
1878年	郭嵩燾・『倫敦與巴黎日記』
1879年	黄遵憲・『日本雜事詩』
	王韜・『扶桑遊記』

	王之春・『談瀛錄』
1883年	王韜・『弢園文錄外編』
1885年	康有為・条約『実理公法全書』
1887年	黄遵憲・『日本国志』
1888年	「擬創設博物院小引」・『申江新報』8月19日
	康有為・『上清帝第一書』
1890年	王韜・『漫遊隨錄』
1894～ 95年	日清戦争
1895年	鄭觀応・「考試篇」『盛世危言增訂新編』
	「下関条約」4月17日
	康有為・『上今上皇帝書』5月2日
	強学会成立
	康有為ら・「上海強学会章程」
1896年	梁啓超・「論学会」
	李端棻・「請推广学校摺」
	梁啓超・『学校総論』
	孫家鼐・『官書局奏定章程疏』
1897年	康有為・『日本書目志』
	張謇・「農工商標本急策」
1898年	康有為・『応詔統籌全局折』1月29日
	戊戌の変法
	康有為・『大同書』
	康有為・「請開学校摺」
	京師大学堂開校7月3日
	「続録振興工芸給獎章程」・『申江新報』7月29日
	梁啓超・『代總理衙門奏擬京師大学堂章程』
	「続録振興工芸給獎章程」
	康有為・『日本変政考』
	康有為・『意大利游記』
	「郴州学会稟（附章程）」
1900年	庚子事変
	漢口商務公所開館
1901年	羅振玉・「教育私議」
	光緒新政
	京師同文館開校
	雲南府博物館開館？
	張謇・「変法平議」

1902年	「欽定學堂章程（壬寅學制）」
	古越藏書樓公開
	徐樹蘭・『古越藏書樓章程』
	嚴修・『壬寅東遊日記』
1903年	周學熙・「東遊日記」
	張謇・『癸卯東遊日記』
	周學熙・「聘請塩田真為天津考工廠芸長合同」
1904年	「奏定學堂章程（癸卯學制）」
	「奏定優級師範學堂章程」
	天津教育品陳列場開催
	「中外近事・本埠・文明盛事」・『大公報』2月5日
	「中外近事・本埠・文明盛事統志」・『大公報』2月8日
	「創設湖南図書館兼教育博物館募捐啓」・『湖南官報』3月15日
	湖南図書館兼教育博物館開館
	夏瑞芳・「教育：各省學堂滙誌」『東方雜誌』
	嚴修・『第二次東遊日記』
	周學熙・「工芸總局稟酌擬創設考工廠弁法四條」
	周學熙・「工芸總局詳報考工廠開弁情形文並批」
	天津考工廠開館9月10日
	周學熙・「天津考工廠試弁章程」
	周學熙・「天津考工廠各項規則」
	周學熙・「直隶工芸總局酌擬教育品陳列館試弁章程並約估經費詳文並批」
	周學熙・「直隶工芸總局酌擬教育品陳列館試弁章程」
1905年	第二次天津教育品陳列場開催
	「中外近事・本埠・開弁第二次教育品陳列場」・『大公報』1月22日
	張謇・「上南皮相國請京師建設帝國博覽館議」
	張謇・「上學部請設博覽館議」
	陳宝泉・「天津教育品陳列館議紳陳宝泉上周總弁意見書」『教育雜誌(天津)』
	夏瑞芳・「教育：各省教育滙誌」『東方雜誌』
	天津教育品陳列館開館
	河北省國貨陳列所開館
1906年	南通博物苑設立
	泰安博物館開館
	「各省新聞・泰安開設博物館」・『北洋官報』第1050期
	「本省新聞・泰安開設博物館」・『山東官報』第61期
1907年	河北省國貨陳列館開館
	周學熙・「督弁條論節抄」
	江寧江南商品陳列所開館



	北平市農事試驗場開館
	「教育：各省教育滙誌」『東方雜誌』
1908年	張謇・「通州博物館敬征通屬先輩詩文集書畫及所藏金石古器啓」
1909年	山東金石保存所開館
1911年	辛亥革命
	雲南圖書館兼博物館開館
1912年	中華民國建國
	蔡元培・「對於新教育之意見」『民立報』2月8日
	國立北京大學開校
	北平市國貨陳列館開館
	國立歷史博物館籌備處設立
1913年	張謇・「國家博物院圖書館規劃條議」
	周樹人・「擬播布美術意見書」『教育部編纂處月刊』
	康有為・「保存中國名跡古器說」『不忍』
	全國兒童藝術博覽會開催
	安徽省圖書館開館
	交通大學北平鐵道管理學院博物館開館
1914年	北平古物陳列所開館
	張謇・『南通博物苑品目』
1915～ 23年	新文化運動
1915年	Georges Cordier 『 <i>Le Musée de Yunnan-fou</i> 』 Bulletin de l' École française d' Extrême-Orient
	南京古物保存所開館
	北平市衛生陳列所及商品陳列所開館
	嚴智怡編・『巴拿馬賽會直隸觀會叢編』
1916年	天津博物院籌備處設立
	南京地質調查所鈹物資源陳列館開館
	保定教育博物院開館
1917年	天民・「學校博物館之設施」『教育雜誌』
	『天津博物院陳列品說明書（天然部）』
	『天津博物院陳列品說明書（歷史部）』
1918年	天津博物院開館
	「本埠瑣聞・開展覽會」・『大公報天津版』1月22日
	「天津博物院成立展覽會特別廣告」・『大公報天津版』5月25日
	「天津博物院成立展覽會特別廣告」・『大公報天津版』5月26日
	「天津博物院成立展覽會臨時日刊」
	「博物院開會誌盛」・『大公報天津版』6月2日
	「人為萬物之靈」・『大公報天津版』6月4日

	香・「六月二日遊覽商品列所及博物院記事」・『大公報天津版』6月4日
	「人為万物之靈（続）」・『大公報天津版』6月5日
	「展覧会之奇観」・『大公報天津版』6月6日
	「古楽之一線伝」・『大公報天津版』6月17日
	「演奏古楽之确期」・『大公報天津版』6月19日
	「請看大幻術」・『大公報天津版』6月20日
	「博物院之崑弋戲」・『大公報天津版』6月26日
	河北省立博物館開館
1920年	蔡元培・「何謂文化」
1921年	北平鉄道管理学院博物館開館
1922年	蔡元培・「市民對於教育之義務」
	蔡元培・「美育實施的方法」
	Georges Cordier 『 <i>Note additionnelle sur le Musée de Yun-nan fou</i> 』 Bulletin de l' École française d' Extrême-Orient
	沈兼士・沈士遠・単不庵・馬裕藻・朱希祖・馬衡・錢玄同・周作人・ 「為清室盜壳四庫全書敬告国人速起交涉啓」『北京大学日刊』
1924年	王国維・「筹建皇室博物館奏折」
	湖南博物館開館
	弁理清室善后委員会成立
1925年	楊鐘健・「論陳列館」『学生雜誌』
	天津博物院・『兒童動植物図譜』
	故宮博物院開館
1926年	国立歴史博物館開館
	『国立歴史博物館叢刊』発刊
	孫逸園・『社会教育施設法』
1927年	中央研究院の自然史博物館開館
1928年	天津博物院は「河北第一博物院」と改称
1929年	『故宮週刊』発刊
	清室善后委員会編・『故宮物品点査報告』
	『国立北平故宮博物院工作報告』発刊
	『国立中央研究院自然歴史博物館特刊』発刊
	北平天然博物院開館
	西湖博物館開館
広州市立博物館開館	
1930年	中央研究院自然歴史博物館開館
1931年	『河北第一博物院半月刊』発刊
	満州事変・9月18日
	北平研究院博物館開館
1932年	故宮博物院・『故宮博物院古物館概覧』

	『故宮』（故宮博物院設立七周年記念特刊）
1933年	『西湖博物館館刊』發刊
	『北平故宮博物院古物館南遷物品清冊』
1934年	陳礼江・『民衆教育』
	『古物陳列所記念專刊』（北平古物陳列所二十周年）
	『河南博物館自然科学匯報』發刊
	『廣西省博物館二十三年度年報』
	胡肇椿 訳・『考古發掘方法論』
1935年	中国博物館協會結成
	『中国博物館協會會報』發刊
	李瑞年・「歐美博物館及美術館陳列方法之演進」『中国博物館協會會報』
	『古物保管委員會工作匯報』
	『參加倫敦中国芸術國際展覽會出品目錄』
1936年	楊鐘健・「關於陳列館的意見」『科学』
	L.C. Everard 著 李永增訳・「博物館與陳列館」『中国博物館協會會報』
	章新民訳・『図書館博物館美術館的關係』
	Clarence S. Stein 著 趙儒珍訳 1936「現代博物館之形式與功用」『中国博物館協會會報』
	楊成志・「現代博物館学」『国立北平政務院院務匯報』
	費畊雨 費鴻年・『博物館学概論』
	陳端志・『博物館学通論』
	王幼僑・「博物館與民族復興」『中国博物館協會會報』
	荊三林・「地方博物館之目的與組織」『中国博物館協會會報』
	荊三林・「科学館之工作及其組織問題」『中国博物館協會會報』
	『河南博物館館刊』發刊
	中国博物館協會・『中国博物館一覽』
	『參加倫敦中国芸術國際展覽會出品圖說』
	『赴英參加倫敦中国芸術國際展覽會記』
	『中国芸術國際展覽會參觀記』
	『北平故宮博物院年刊』
	『西北文物展覽會目錄』
	『西北文物展覽會特刊』
	傅振倫・『英国博物館參觀記略』『中国博物館協會會報』
	劉衍淮・『独国自然科学及工芸博物館遊紀』『中国博物館協會會報』
1937年	陳端志・『博物館』
1937～ 45年	日中戦争
1941年	荊三林・『博物館学大綱』
1942年	国立社会教育学院・図書館博物館学系

1943年	曾昭燏 李濟・『博物館』
1946年	蔣大沂・「博物館與學術研究」『中央日報』
	『華西大學博物館抽印叢刊』
1947年	北京大學・博物館專修科
	韓壽萱・「中國博物館的展望」『教育雜誌』
	『國立沈陽博物院準備委員會匯刊』
	古物陳列所と故宮博物院とを併合
1949年	中華人民共和國建國